仙台市文化財調査報告書第238集

陸奥国分尼寺跡ほか

発掘調査報告書

1999年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第238集

陸奥国分尼寺跡ほか

発掘調査報告書

1999年3月

仙台市教育委員会

序　　文

仙台市には約700ケ所の遺跡が存在し、年間にそれらの遺跡に関係する開発や建築は280件以上あります。それらの行為に対して、文化財保護法の定めにより、それぞれの工事内容を審査したうえで、立会調査や発掘調査の対応をすることになっております。

本調査には時間がかかり、調査着手を待っておられる申請者も多い状況にありますが、当仙台市教育委員会文化財課では一日でも早く調査に着手できるよう、また一件でも多く調査が終了するよう努めておりますので、今後ともご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成10年度は45遺跡75ケ所の確認調査、本調査を実施いたしましたが、前段で触れましたように、調査の効率化を図るための調査体制の見直しを行ったうえでの実施となりました。具体的には小規模調査は別に調査班を組んで機動的に対応できるようにしたものであり、相当の成果を上げたものと考えております。

その小規模調査班の担当した遺跡のうち、８件をまとめてここに報告することになりました。

ここで報告できなかったものも含め、仙台市の各区で確認調査、小規模な本調査を実施しました折り、多くの皆様のご協力、ご指導を賜りましたことに対しまして、心より感謝申し上げます。

小規模調査を中心とした報告ではございますが、各地域の情報を提供しておりますので、ぜひ参考資料としてご活用いただければ幸いです。

1999年３月

仙台市教育委員会

教育長　小　松　弥　生

例　　言

1　本書は、民間開発事業に関わる陸奥国分尼寺跡（第８次調査）・王ノ壇遺跡（第３次・４次調査）・山田条里遺跡（第２次調査）・富沢遺跡（第110次調査）・北目城跡（第２次調査）・北屋敷遺跡（第２次調査）の発掘調査報告書と、仙台市関連事業に関わる山田条里遺跡（第３次調査）の発掘調査報告書である。

2　本書の編集は、仙台市教育委員会文化財課　佐藤　洋・主浜光朗・竹田幸司・伊東真文が担当し、本文の執筆等については、下記のとおり分担した。

本文執筆　　陸奥国分尼寺跡・山田条里遺跡……主浜光朗

王ノ壇遺跡……３次調査　佐藤　洋　　４次調査　竹田幸司

富沢遺跡・北目城跡・北屋敷遺跡……１・２・３　伊東真文　　４・５・６　竹田幸司

遺構図・遺物図作成……伊東真文・佐藤　洋・主浜光朗・竹田幸司・豊村幸宏

遺物写真撮影……豊村幸宏

3　本書に関わる整理作業に下記の方々の参加を得た。

相沢美佐子　石川カツ子　及川のり子　熊谷きぬ子　小泉幸子　小林由美　小山つるよ　斎藤喜恵子　佐藤悦子　佐藤とき子　　佐藤洋子　　佐藤優子　　高橋弘子　　森谷愛子　　若生洋子　渡辺まき子

4　発掘調査・報告書作成にあたり次の方々のご指導、ご助言、ご協力を賜った。（敬称略・順不同）

手塚　均　及川　規（東北歴史資料館）　　佐藤和彦（多賀城跡調査研究所）

5　本書に関わる図面・写真・遺物、及び小規模調査に関する資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．本書中の土色については「新版標準土色帳」（小山・竹原：1976）を使用した。

2．本書に使用した地形図は国土地理院発行の１：50,000「仙台」の一部を転載した。

3．本書で使用している方位は磁北で統一している。

4．本書中の遺構略号は以下のとおりに表している。

ＳＤ：溝　　跡　　ＳＩ：竪穴住居跡・竪穴遺構　　ＳＫ：土　　坑

ＳＦ：道路跡　　ＳＸ：その他の遺構

5．本書中の遺物略号は以下のとおりに表している。

Ｃ：ロクロ不使用の土師器　　Ｄ：ロクロ使用の土師器・赤焼土器　　Ｅ：須恵器　　Ｆ：丸瓦

Ｇ：軒平瓦・平瓦　　Ｎ：金属製品

目　　次

序　文
例　言
凡　例

Ⅰ　陸奥国分尼寺跡（第８次調査）

1　調査要項……1
2　調査方法と基本層序……1
3　発見遺構と出土遺物……2
4　まとめ……18

Ⅱ　王ノ壇遺跡（第３次調査）

1　調査要項……26
2　遺跡の位置と環境……26
3　調査の方法……27
4　基本層序……27
5　発見遺構と出土遺物……31
（１）３層上面検出遺構……31　（２）４層上面検出遺構……31
（３）５層上面検出遺構……32　（４）6a 層上面検出遺構……32
（５）８層上面検出遺構……38　（６）基本層出土遺物……40
6　まとめ……45

Ⅲ　王ノ壇遺跡（第４次調査）

1　調査要項……50
2　当調査区の近隣の中世の状況……50
3　調査の方法……50
4　基本層序……52
5　発見遺構と出土遺物……52
（１）Ⅲ層上面検出遺構……52　（２）Ⅴ層上面検出遺構……60
6　調査成果のまとめと考察……63
（１）道路跡について……63　（２）まとめ……64

Ⅳ　山田条里遺跡（第２次・第３次調査）

1　調査要項……69
2　遺跡の位置と環境……70
3　第２次調査……71
（１）調査方法……71　（２）基本層序……71
（３）発見遺構と出土遺物……71　（４）まとめ……75
4　第３次調査……76

（1）調査方法……76　（2）基本層序……76
（3）発見遺構と出土遺物……77　（4）まとめ……80

V　富沢遺跡（第110次調査）

1　調査要項……84
2　調査の経過と方法……84
3　基本層序……84
4　まとめ……85

VI　北目城跡（第２次調査）

1　調査要項……86
2　遺跡の位置と環境……86
3　調査方法……86
4　基本層序……86
5　発見遺構と出土遺物……87
6　調査のまとめ……88
（1）ＳＤ－１堀跡の変遷……88　（2）ＳＤ－１堀跡の形態……88
（3）まとめ……88

VII　北屋敷遺跡（第２次調査）

1　調査要項……90
2　遺跡の位置と環境……90
3　調査方法……91
4　基本層序……91
5　発見遺構と出土遺物……92
（1）Ａ期……92　（2）Ｂ期……93
6　調査のまとめ……95
（1）遺構の切り合いと年代について……95　（2）溝跡の性格について……104
（3）ＳＤ－２「しがらみ」について……104　（4）近世陶磁器について……104
（5）漆器・木製品について……104

Ⅰ　陸奥国分尼寺跡（第８次調査）

1　調査要項

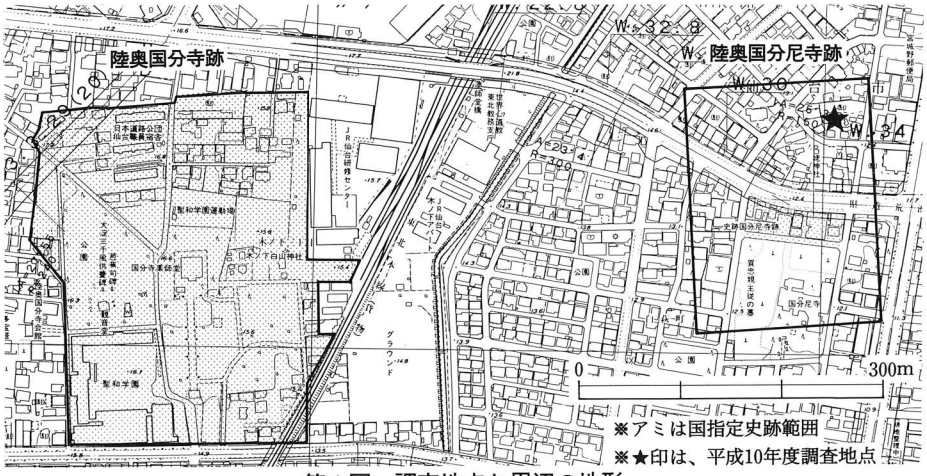
遺　跡　名	陸奥国分尼寺跡（宮城県遺跡番号　01020）
調 査 地 点	仙台市宮城野区宮千代一丁目３番９号
調 査 原 因	RC ８階建共同住宅建設
調査対象面積	615㎡
調 査 面 積	120㎡
調 査 期 間	確認調査　平成９年11月26日～11月27日、平成10年３月９日 本 調 査　平成10年７月17日～８月10日
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育委員会文化財課
担 当 職 員	篠原信彦　主浜光朗　竹田幸司　根本光一　松本知彦　伊東真文
調査参加者	伊藤清子　内田節子　加嶋みえ子　小山つるよ　佐藤優子　庄子弘子　高橋弘子　森谷愛子 吉田やよえ　渡辺まき子
申　請　者	狭間苑枝
調 査 協 力	三協土地建物株式会社　有限会社アーバンプロット　狭間善一郎

2　調査方法と基本層序

遺跡の位置と環境については、これまでに刊行されている発掘調査報告書と重複するため割愛する。それらを参照していただきたい。

平成９年９月22日付で仙台市宮城野区宮千代一丁目３－９にRC造８階建共同住宅建設に伴う発掘届が提出された。この場所は、陸奥国分尼寺跡の推定寺域の北東部に位置し、江戸時代後期（天保年間）桜田権太夫（ 膽斎）が構えた「桜田屋敷」と地元の人々に呼ばれる聚勝園という屋敷地の西端付近と考えられる場所であることから、仙台市教育委員会では、申請者と協議の上、共同住宅建設予定地域内において発掘調査を行うこととした。

調査にあたっては、平成９年度に２度にわたって、共同住宅建設部分を対象に調査区を設定して確認調査を実施した。その結果、聚勝園に係わる遺構、遺物は検出されなかったが、古代の竪穴住居跡・土坑が検出され、軒瓦・土師器・須恵器などが出土したため本調査が必要と判断された。それをうけて平成10年７月より本調査をおこなうことになった。本調査では、確認調査で遺構が検出された部分を中心に調査区を設定し、重機で表土を排除した後、人力で遺構の検出、精査を行った。



第１図　調査地点と周辺の地形

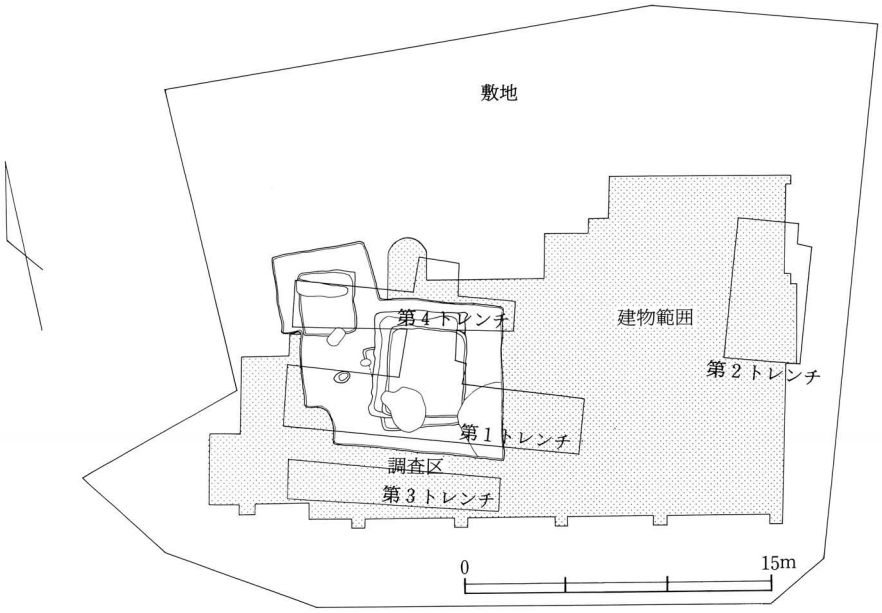
基本層は２層認められた。１層は暗褐色シルトで表土であるが、更地にする際の攪乱が著しい。層の厚さは30～40cmである。２層は明黄褐色シルト・粘土質シルトの地山で、この層の上面が遺構確認面となっている。攪乱坑の壁面では、砂層及び砂礫層が観察される部分も見られ、２層上面に砂礫層

が現れている部分も見られる。

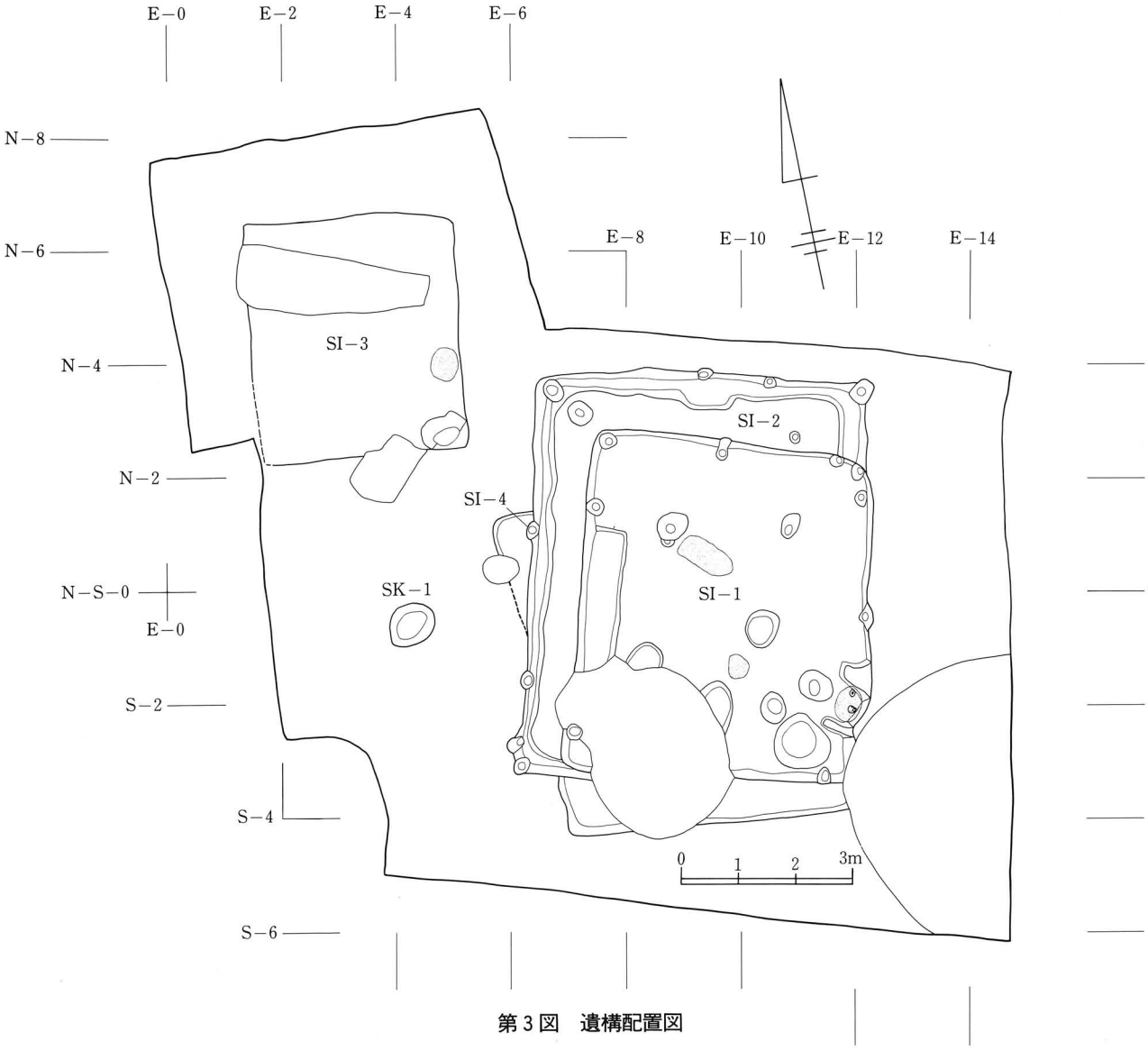
3　発見遺構と出土遺物

検出遺構には、竪穴住居跡４軒・土坑１基があり、このうち３軒の竪穴住居跡は重複している。

SI－１竪穴住居跡　調査区南側中央部の２層上面で確認され、SI－２・４竪穴住居跡と重複関係にあり、本住居跡がそれぞれを切っていることから本住居跡が最も新しい。また、住居跡南西部及び、南東コーナーは後世の攪乱により確認できなかった。平面形は南北6.06～5.7m、東西5.2mの北東

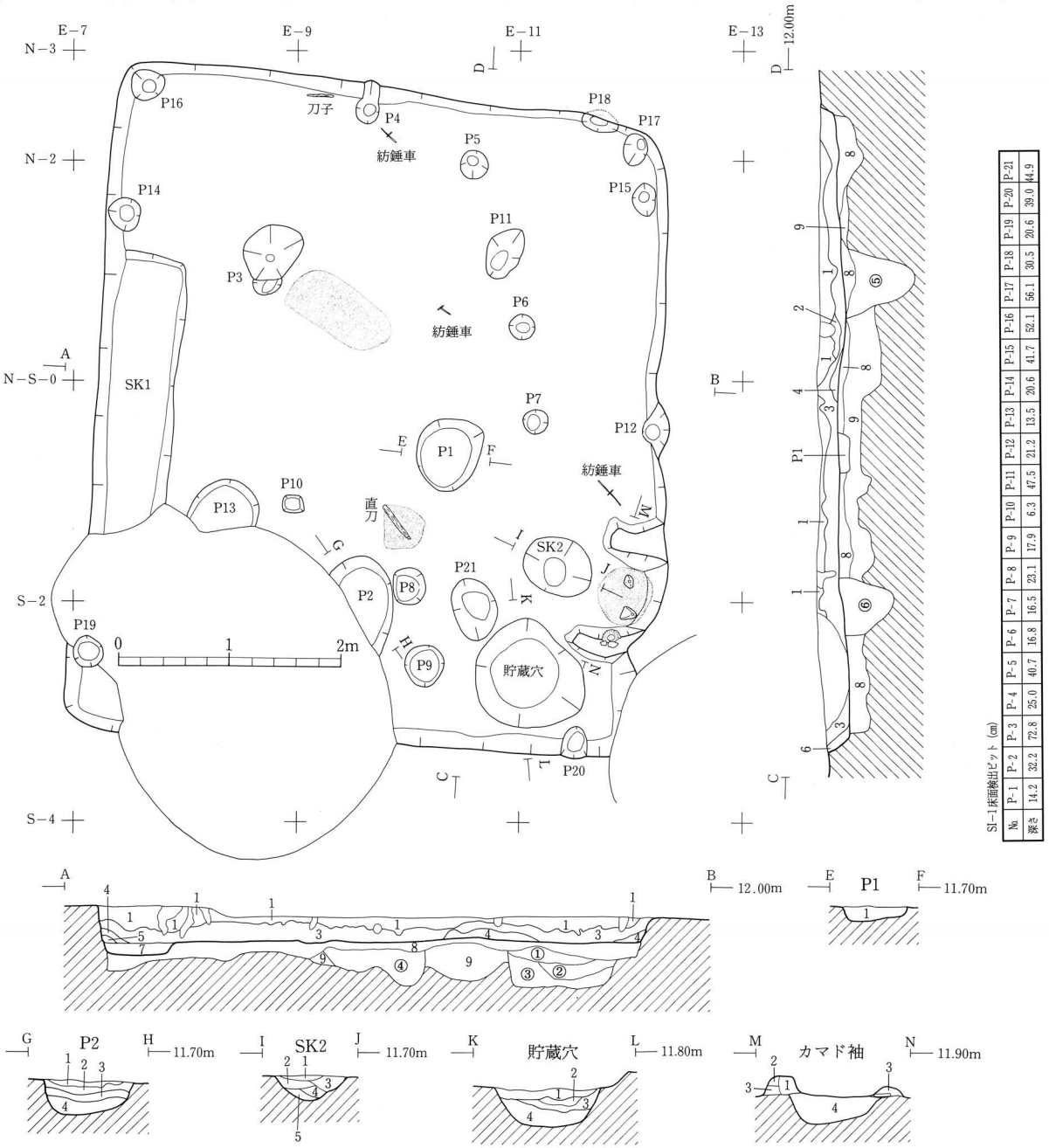


第２図　調査区配置図



第３図　遺構配置図

コーナーがやや丸みをもつ長方形で、カマド部分が若干膨らんでいる。西壁を基準とする主軸方向はＮ－14°－Ｅである。堆積土は６層に分けられ、大部分の床面を覆う３層に多量の炭化物や、焼土が含まれており、４～６層は部分的に確認されるのみである。壁は最も保存の良い西壁の北側で37.5cmあり、床面から急角度で立ち上がる。床面は掘り方埋土の上面から成っている。小さな凸凹はあるが、ほぼ平坦で傾斜は見られない。床面上の数カ所に焼け

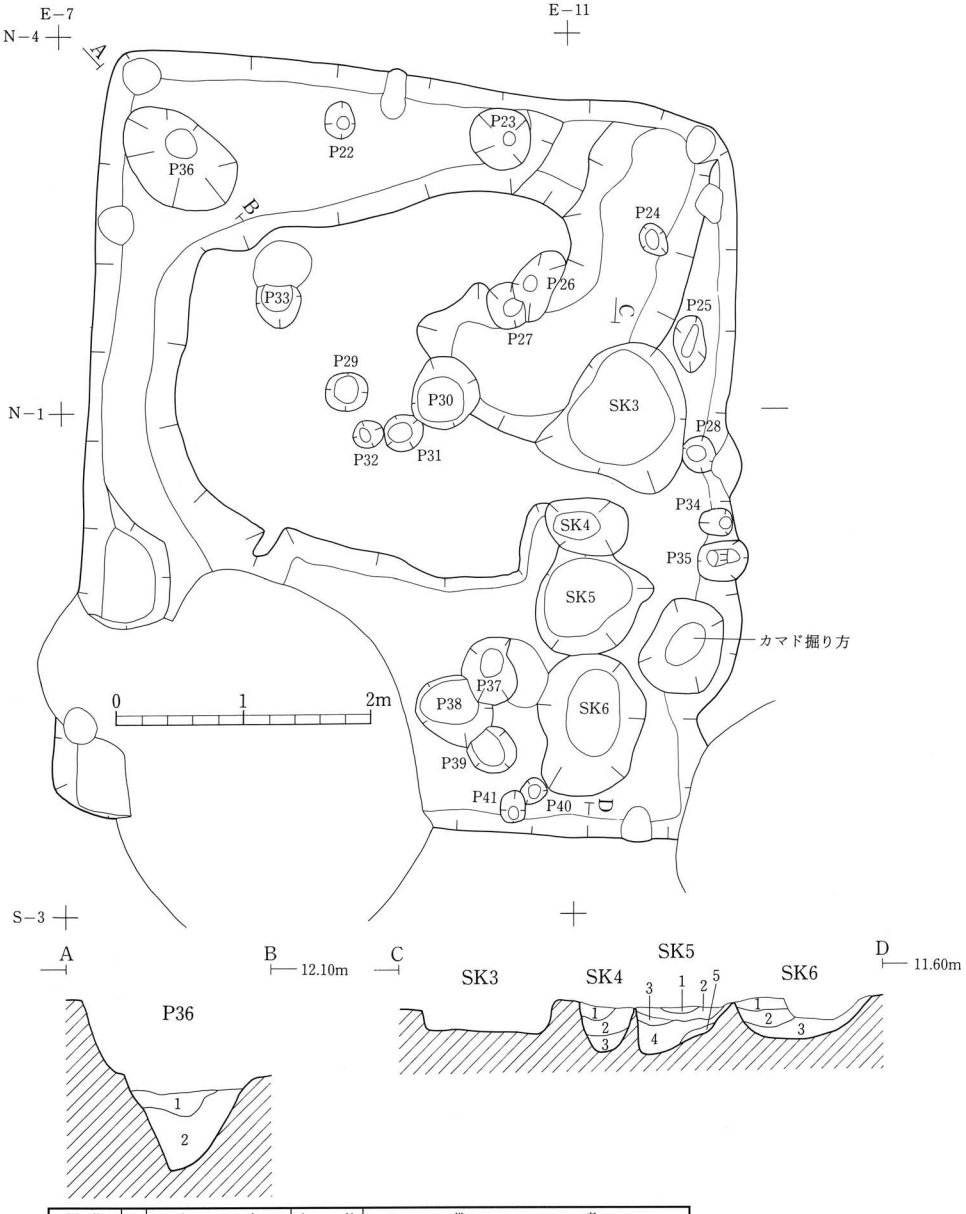


層位	№	土色	土性	備考
住居跡堆積土	1	10YR4/4 褐色	シルト	炭化物、小礫を含む。
	2	7.5YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	10YR4/6 シルトを霜降り状に含む。
	3	7.5YR2/2 黒褐色	シルト	多量の炭化物、焼土ブロック、10YR5/6シルト質粘土ブロックを含む。
	4	7.5YR4/3 褐色	粘土質シルト	層下部に層状に炭化物を含む部分有り。
	5	10YR2/2 黒褐色	シルト	焼土、10YR5/6 シルト質粘土ブロックを含む。
	6	5YR3/1 黒褐色	砂質粘土	10YR5/6 シルト質粘土ブロックを含む。
SK－1	7	10YR3/3 暗褐色 10YR5/6 黄褐色	シルト 粘土質シルト	炭化物を含む。
掘り方埋土	8	10YR4/6 褐色 7.5YR4/4 褐色	粘土質シルト シルト	層下部に焼土層が見られる部分有り。炭化物、焼土を含み、掘り方中央部に小礫が多量に詰め込まれている。
	9	10YR4/6 褐色 10YR4/4 褐色	粘土質シルト シルト	7.5YR2/2、10YR5/8 シルトの互層部分、小礫が多量に詰め込まれる部分有り。
SK－3	①	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物、焼土を含む。
	②	10YR6/6 明黄褐色	シルト	5YR4/6 シルトブロック、焼土、小礫を含む。
	③	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR4/6粘土質シルトを霜降り状に含む。炭化物を若干含む。
P－30	④	10YR2/3 黒褐色	シルト	東側の土色は、徐々に7.5YR4/3 シルトに変わっていく。10YR5/6 粘土質シルト小ブロック、小礫ブロック、炭化物、焼土粒を含む。
P－26	⑤	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR5/6粘土質シルトブロック、小礫ブロック、炭化物、焼土粒を含む。
P－21	⑥	7.5YR4/3 褐色	シルト	炭化物、焼土を含む。

層位	№	土色	土性	備考
貯蔵穴	1	7.5YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物、焼土粒を含む。
	2	2.5YR5/6 黄褐色	シルト	炭化物を少量含む。
	3	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物、焼土粒を少量含む。
	4	10YR3/3 暗褐色	シルト	10YR5/6 粘土質シルト霜降り状に含む。
SK－2	1	7.5YR2/3 極暗褐色	シルト	炭化物を多量に含む。
	2	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物、焼土粒を含む。
	3	10YR3/4 暗褐色	シルト	10YR4/6シルトを霜降り状に含む。炭化物、焼土を含む。
	4	10YR2/3 黒褐色	シルト	炭化物を多量と、焼土を含む。
	5	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物、焼土粒を含む。
P－1	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	10YR5/6粘土質シルトを霜降り状に含む。炭化物、焼土粒を多量に含む。
P－2	1	5YR4/4 にぶい赤褐色	シルト	炭化物、焼土を含む。
	2	7.5YR4/4 褐色	シルト	炭化物、焼土粒を少量含む。
	3	10YR6/6 明黄褐色 10YR5/8 黄褐色	シルト 粘土質シルト	炭化物、焼土粒を少量含む。
	4	5YR4/4 にぶい赤褐色	粘土質シルト	5YR4/3 粘土質シルトを霜降り状に含む。
カマド断面	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	10YR5/6 シルトブロック、炭化物、焼土を含む。
	2	10YR5/6 黄褐色	シルト	
	3	7.5YR4/4 褐色	シルト	
	4	10YR3/4 暗褐色	シルト	10YR4/6粘土質シルトを斑に含む。若干の炭化物、焼土を含む。

第４図　SI－１住居跡（床面）

面が見られ、炭化物がほぼ床面全体に散乱しており、なかには材の形態を残しているもの、炭化した種子が窪みの中に詰まっているものも見られた。周溝は検出されなかった。床面で13個のピットが検出されているが、その全てに柱痕跡は確認されなかった。柱穴はP3・11・21の３個のピットが主柱穴と考えられるが、住居跡南東部では攪乱によりピットは検出されなかった。また、P4・12・14・15・16・17・18・19・20は壁柱穴であると考えられる。掘り方底面では20個のピットが検出されているが、SI－２竪穴住居跡の柱穴が含まれている可能性がある。東壁の南寄りにカマドが付設されており、燃焼部が検出された。煙道部、煙出しピットは検出されなかった。燃焼部は奥行き0.7m、幅1.4mで底面、奥壁、側壁内面は加熱により赤変している。底面に２個の礫が立てられており、赤変していることから支脚として用いられていたものと思われる。側壁上部で土師器坏、下面に平瓦が出土している。カマド南脇に貯蔵穴が検出された。長軸１ｍ、単軸0.9m、深さ35cm、不正な円形である。その他の施設として、土坑が床面で２基検出された。SK－１は住居西壁際中央部で検出され、長さ2.5m以上、幅55cm、深さ16cmの長方形を基調とした平面形であるが攪乱による削平のため正確な規模は不明である。SK－２はカマド手前で検出され、長さ65cm、幅50cm、深さ20cmの楕円形で堆積土中には多量の炭化物や焼土、灰が含まれている。本住居跡の掘り方は壁際が中央部より深く、中央部が一段高くなっている。掘り方埋土は２層に分けられるが、下層のものはSI－２竪穴住居跡の掘り方埋土と考えられる。掘り方底面で４基の土坑が検出された。SK－３は中央部の東側で検出され、長さ1.2m、幅1m、深さ25cmの不整な楕円形である。SK－４は長さ66cm、



層位	No.	土色	土性	備考
P－36	1	10YR4/4 褐色	シルト	炭化物、小礫を含む。
	2	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	小礫１層より大径のものを多量に含む。
SK－4	1	7.5YR5/4 にぶい褐色	シルト	10YR5/6粘土質シルトを霜降り状に含む。焼土を含む。
	2	7.5YR4/4 褐色	シルト	10YR5/6粘土質シルトを霜降り状に含む。炭化物を含む。
	3	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	若干の炭化物、焼土を含む。
SK－5	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	10YR5/6粘土質シルトを霜降り状に含む。炭化物、灰を含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR5/6粘土質シルトを若干と、炭化物、灰を含む。
	3	10YR3/4 灰黄褐色	シルト	10YR5/6粘土質シルトを２層よりも多く霜降り状に含む。若干の炭化物、焼土を含む。
	4	7.5YR4/4 褐色	粘土質シルト	10YR5/6粘土質シルトを若干霜降り状に含む。炭化物、焼土粒を含む。
	5	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	若干の炭化物、焼土粒を含む。
SK－6	1	2.5YR4/4 オリーブ褐色	シルト	炭化物粒、焼土、小～大礫を多量に含む。
	2	10YR4/4 褐色	シルト	10YR5/6粘土質シルトを小ブロック状に含む。炭化物、小礫を含む。
	3	2.5YR5/3 黄褐色 2.5YR6/6 明黄褐色	粘土質シルト 粘土質シルト	炭化物、小礫を含む。

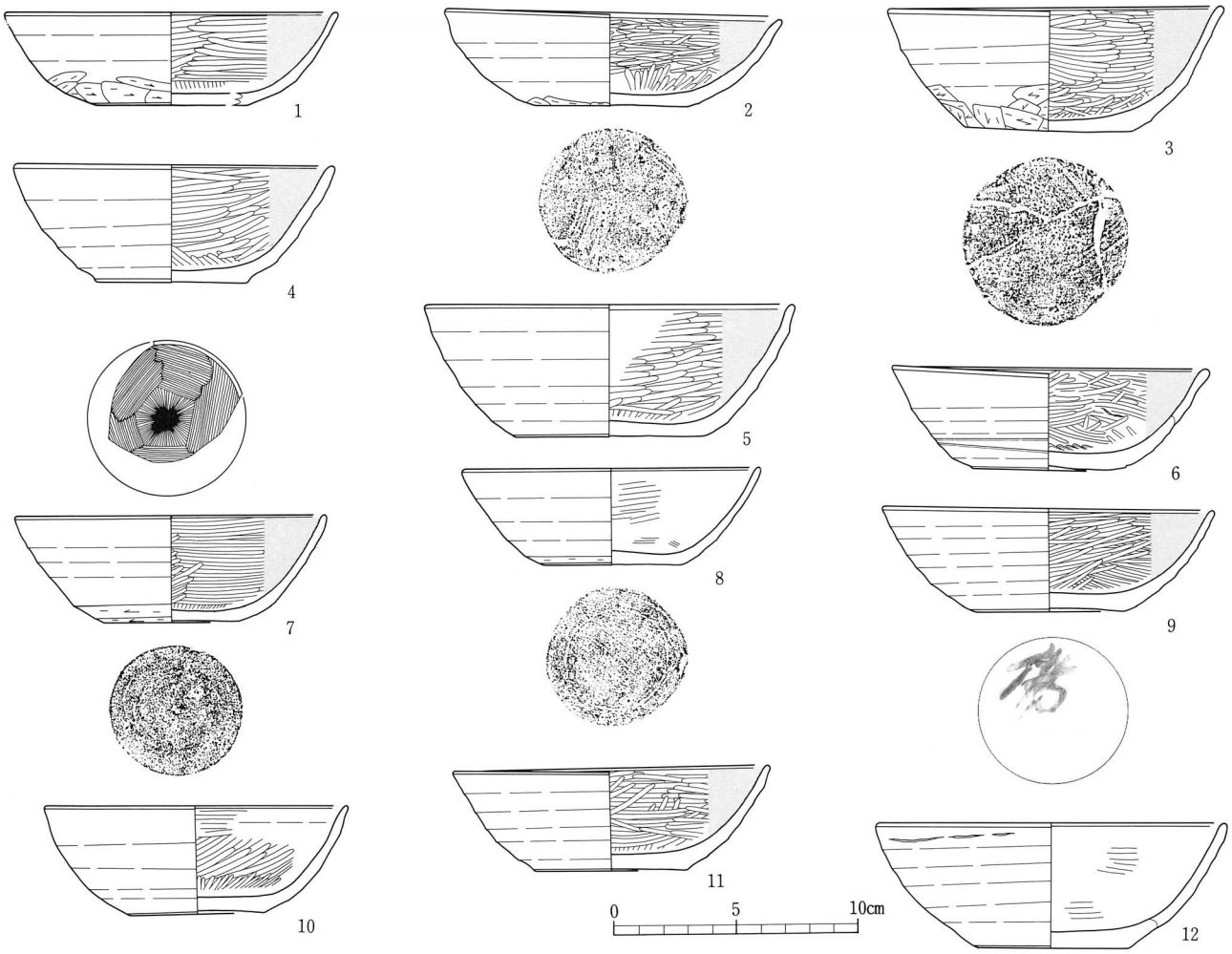
SI－１掘り方検出ピット（cm）

No.	P-22	P-23	P-24	P-25	P-26	P-27	P-28	P-29	P-30	P-31
深さ	23.1	70.0	17.5	38.5	63.0	45.5	31.5	25.4	32.9	10.6
No.	P-32	P-33	P-34	P-35	P-36	P-37	P-38	P-39	P-40	P-41
深さ	20.5	30.5	15.4	24.0	73.5	58.8	24.2	7.8	16.5	21.0

第５図　SI－１住居跡掘り方底面

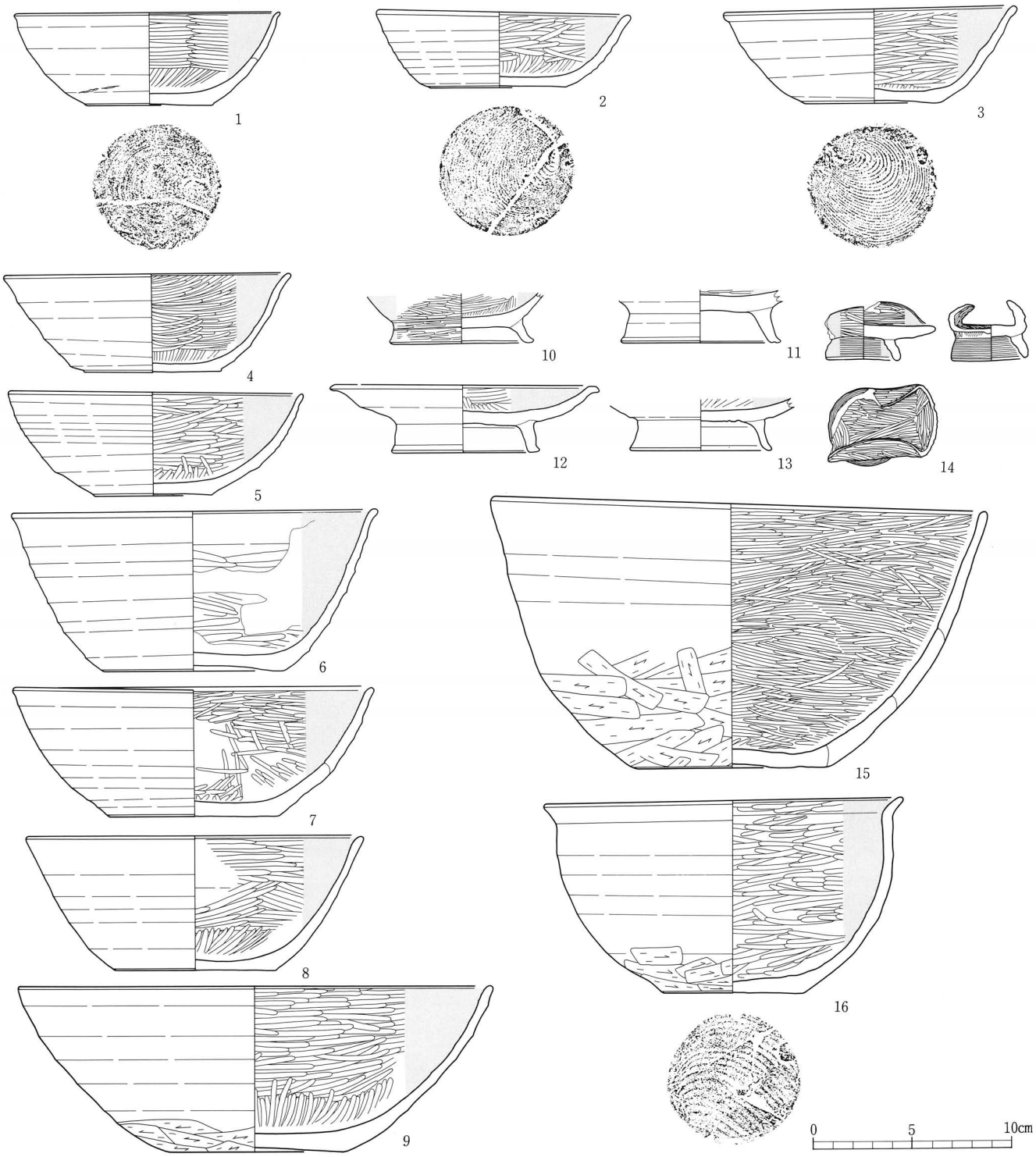
幅46cm、深さ39cmの楕円形である。SK－５は径80cm、深さ37cmの不整な円形で南側が浅くなっている。SK－６は長さ1.12m、幅84cm、深さ32cmの不整な楕円形で、それぞれの堆積土中には多量の焼土や炭化物が含まれている。掘り方底面で検出されたもののなかにはピット同様SI－２竪穴住居跡の施設が含まれている可能性がある。

出土遺物には土師器、須恵器、瓦、鉄製品がある。このうち図示したものは土師器坏21点、高台付坏４点、甕10点、鉢 2点、須恵器坏４点、壺３点、広口瓶２点、甕７点、平瓦４点、丸瓦２点、直刀１振、刀子５挺、鉄鏃５点、鉄製紡錘車４点である。土師器坏１点に墨書が認められる。その他に復元できなかった須恵器大甕が１点ある。



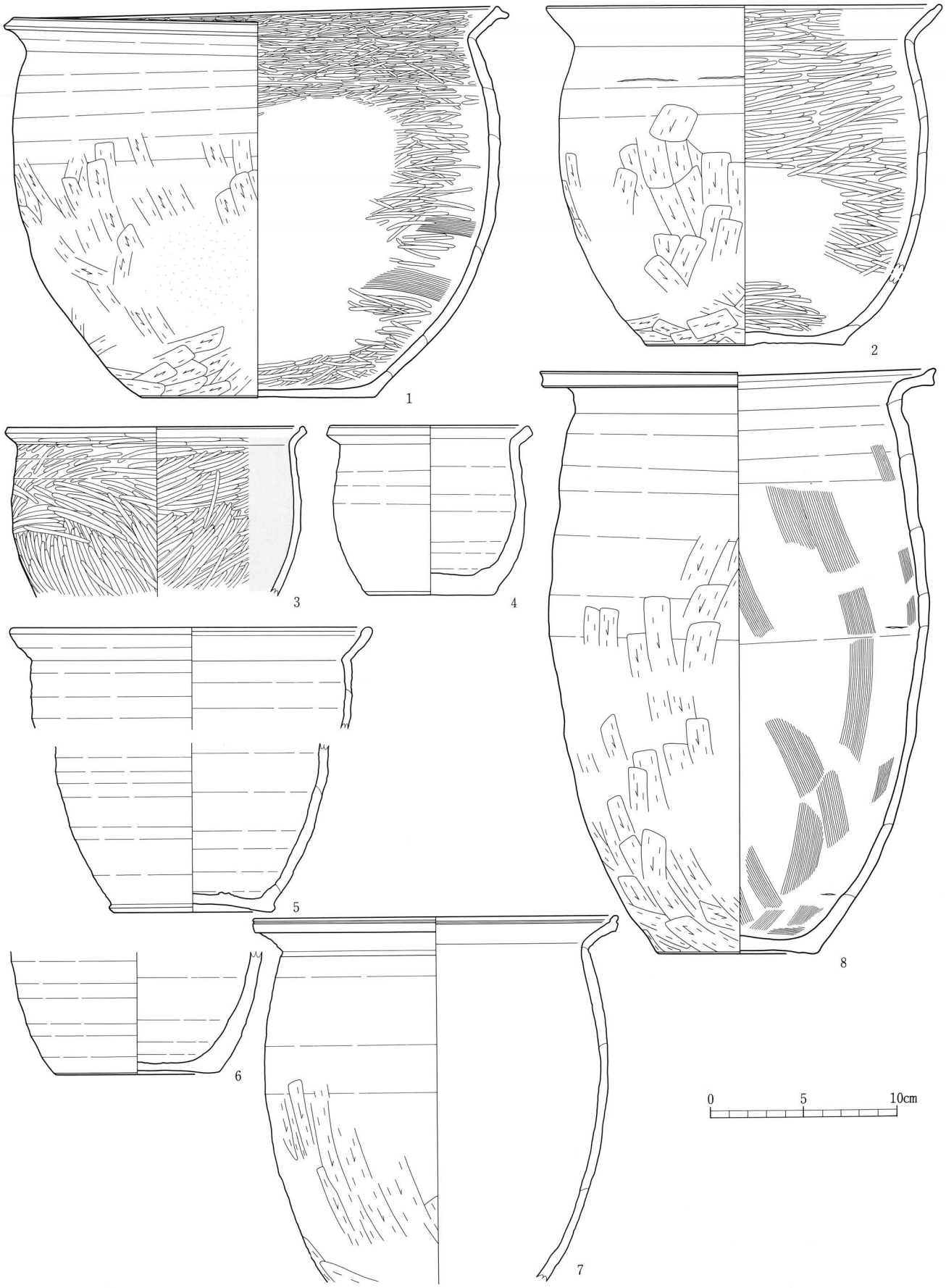
No.	登録番号	種　別	器　種	層　位	外　　面	内　　面	底　　部	備　　考	写真図版
1	D－５	土師器	坏	２　層	ロクロ調整→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	手持ちヘラケズリ		
2	D－15	土師器	坏	掘り方埋土	ロクロ調整→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	手持ちヘラケズリ		15－１
3	D－９	土師器	坏	床　面	ロクロ調整→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	手持ちヘラケズリ		15－２
4	D－４	土師器	坏	２　層	ロクロ調整	ヘラミガキ→黒色処理	手持ちヘラケズリ		15－３
5	D－14	土師器	坏	掘り方埋土	ロクロ調整	ヘラミガキ→黒色処理	手持ちヘラケズリ		
6	D－18	土師器	坏	貯蔵穴底面	ロクロ調整	ヘラミガキ→黒色処理	手持ちヘラケズリ		15－５
7	D－16	土師器	坏	カマド	ロクロ調整→回転ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	回転ヘラケズリ		
8	D－３	土師器	坏	２　層	ロクロ調整→回転ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	静止糸切り→回転ヘラケズリ		
9	D－20	土師器	坏	p－11 埋土	ロクロ調整	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切り無調整	底面に墨書銘「佛」	15－４
10	D－11	土師器	坏	床　面	ロクロ調整	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切り無調整		15－６
11	D－６	土師器	坏	２　層	ロクロ調整	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切り無調整		15－７
12	D－10	土師器	坏	床　面	ロクロ調整	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切り無調整		15－８

第６図　SI－１竪穴住居跡出土遺物（１）



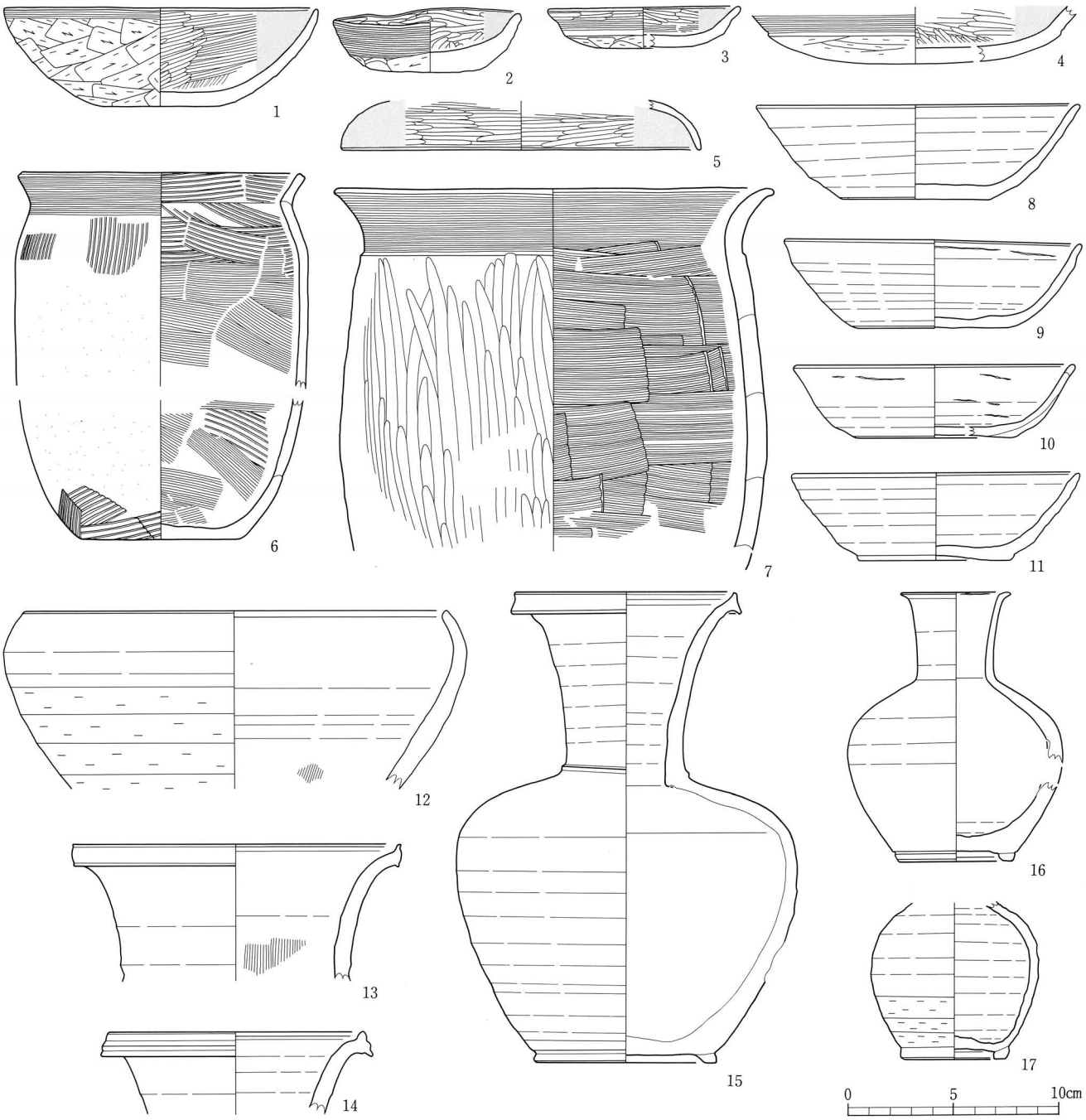
No.	登録番号	種　別	器　種	層　位	外　　面	内　　面	底　　部	備　　考	写真図版
1	D－12	土師器	坏	床　面	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り無調整		15－9
2	D－19	土師器	坏	床　面	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り無調整		15－10
3	D－1	土師器	坏	2　層	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り無調整		15－11
4	D－7	土師器	坏	2　層	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り無調整		
5	D－2	土師器	坏	2　層	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り無調整		15－14
6	D－13	土師器	坏	床　面	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り無調整		15－12
7	D－17	土師器	坏	カマド	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り無調整	体部下半に沈線状のロクロ調整痕。	15－13
8	D－38	土師器	坏	床　面	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り無調整		
9	D－8	土師器	坏	2　層	ロクロ調整→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	手持ちヘラケズリ		15－15
10	D－22	土師器	高台付坏	2　層	ロクロ調整→ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ・黒色処理	ナ　デ		
11	D－23	土師器	高台付坏	床　面	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り→ナデ		
12	D－24	土師器	高台付坏	カマド	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	ナ　デ		15－16
13	D－21	土師器	高台付坏	検出面	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り無調整		
14	D－51	土師器	高台付耳皿	2　層	ロクロ調整→ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ・黒色処理	ナ　デ		15－17
15	D－35	土師器	鉢	2　層	ロクロ調整→ヘラケズリ	ヘラミガキ	ナ　デ	焼けて黒色処理が消えている	15－19
16	D－36	土師器	甕	2　層	ロクロ調整→ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り無調整		15－20

第７図　SI－１竪穴住居跡出土遺物（２）



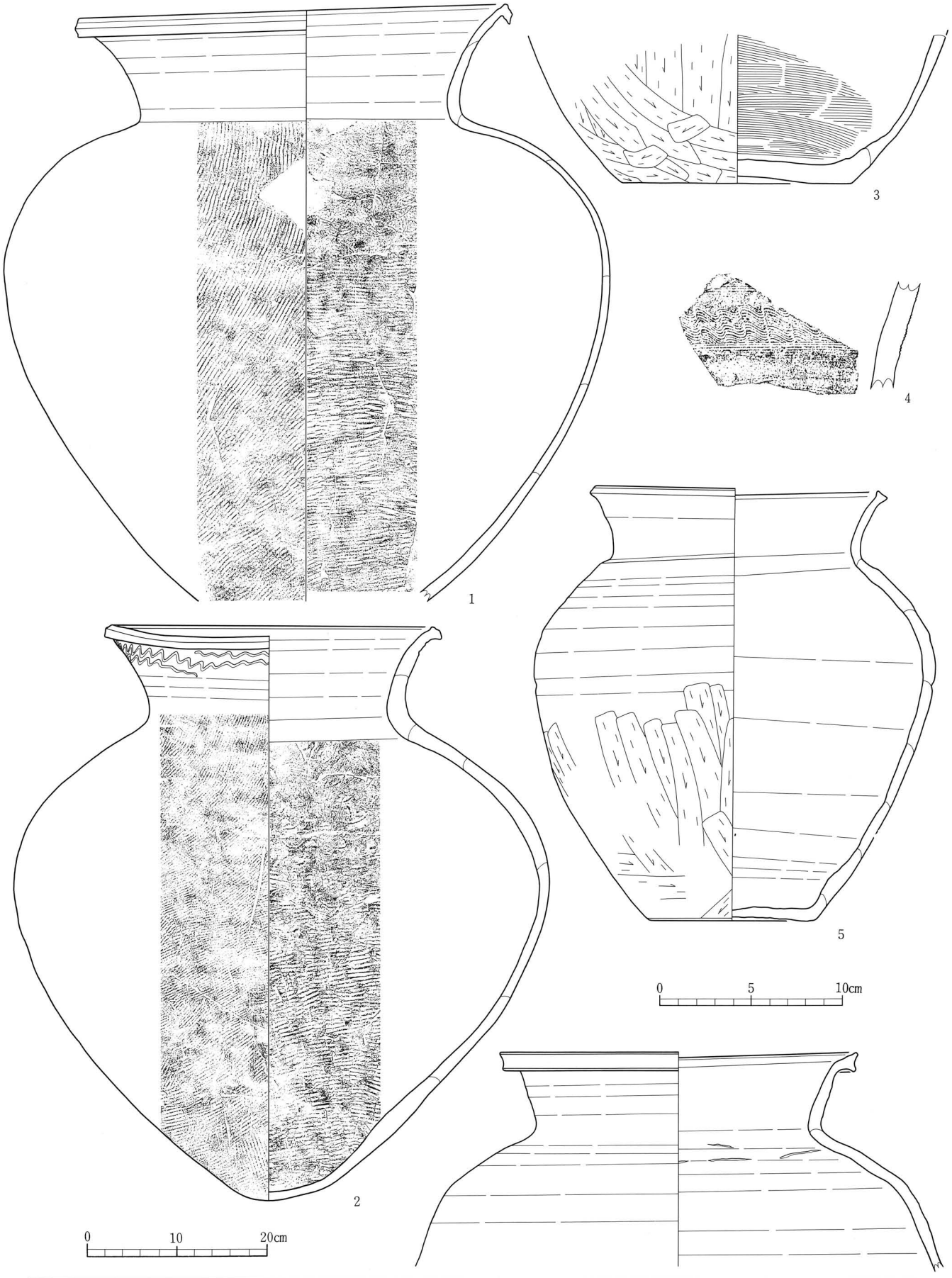
No.	登録番号	種　別	器　種	層　位	外　　面	内　　面	底　　部	備　　考	写真図版
1	D－26	土師器	甕	2　層	ロクロ調整→ヘラケズリ	ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ	焼けて黒色処理が消えている	15－18
2	D－27	土師器	甕	2　層	ロクロ調整→ヘラケズリ	ヘラミガキ	ナ　デ		16－1
3	D－33	土師器	甕	P－2 埋土	ロクロ調整→ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	－		
4	D－25	土師器	甕	1　層	ロクロ調整	ロクロナデ	回転糸切り無調整		16－2
5	D－30	土師器	甕	カマド	ロクロ調整	ロクロナデ	静止糸切り無調整		
6	D－34	土師器	甕	カマド	ロクロ調整	ロクロナデ	回転糸切り無調整		
7	D－32	土師器	甕	SK 6 埋土	ロクロ調整→ヘラケズリ	（不　明）	－		
8	D－31	土師器	甕	床　面	ロクロ調整→ヘラケズリ	ヘラナデ	ナ　デ		16－3

第８図　SI－１竪穴住居跡出土遺物（３）



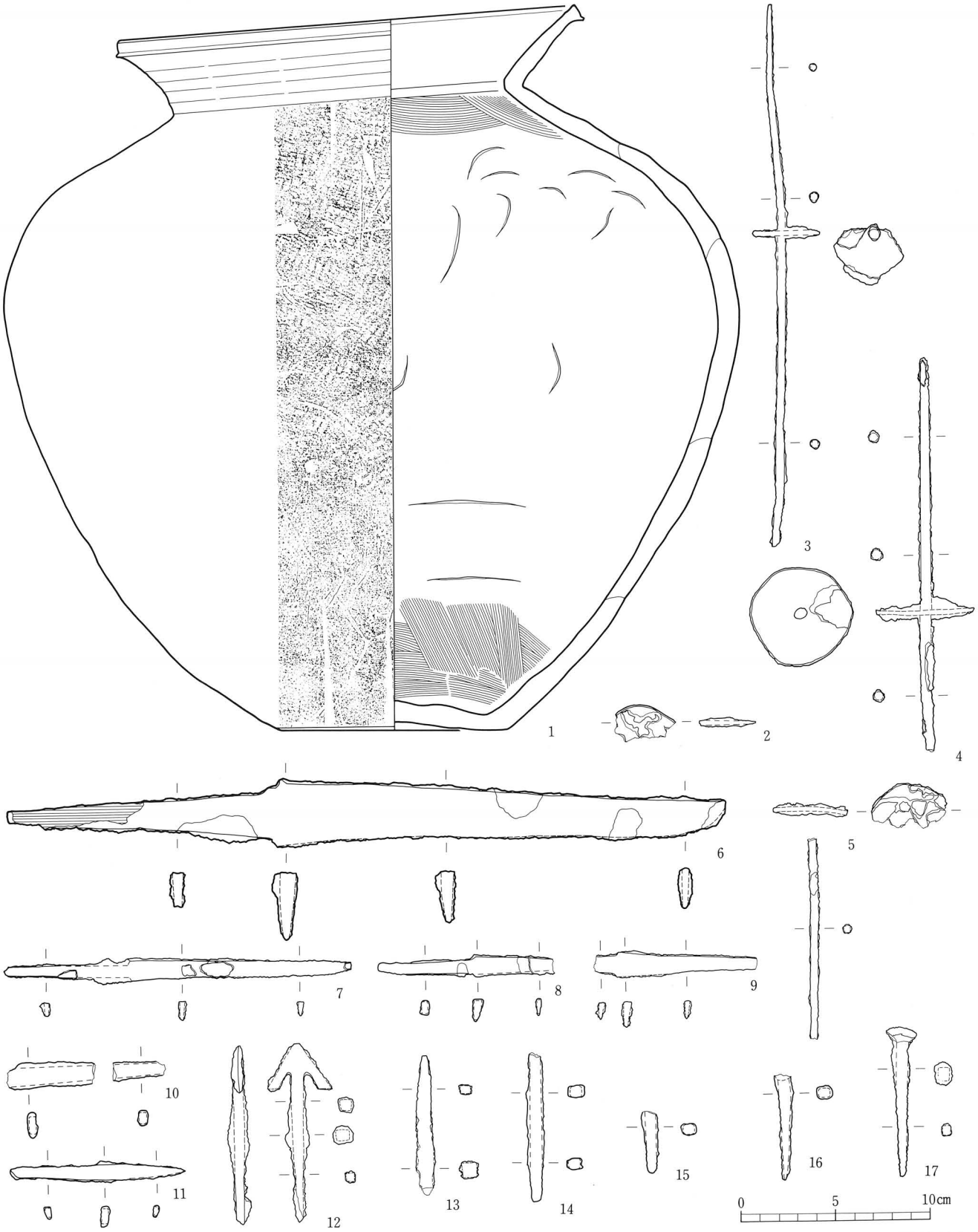
No.	登録番号	種別	器種	層位	外面	内面	底部	備考	写真図版
1	C－4	土師器	坏	掘り方埋土	口縁部ヨコナデ、体部－ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理			
2	C－5	土師器	坏	掘り方埋土	口縁部ヨコナデ、体部－ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理		煤付着	16－4
3	C－3	土師器	坏	P－20 埋土	口縁部ヨコナデ、体部－ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理		厚底、灯明皿、口縁部に煤付着	
4	C－6	土師器	坏	1　層	口縁部ヨコナデ、体部－ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理			
5	C－1	土師器	蓋	掘り方埋土	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ・黒色処理			
6	D－28	土師器	甕	床　面	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	ハケメ、ヘラナデ	網代痕		
7	D－29	土師器	甕	掘り方埋土	ロクロ調整	口縁部－ヘラナデ 体部ハケメ様のヘラナデ			16－5
8	E－1	須恵器	坏	2　層	ロクロ調整	ロクロ調整	回転糸切り無調整		16－6
9	E－2	須恵器	坏	2　層	ロクロ調整	ロクロ調整	回転糸切り無調整		16－7
10	E－3	須恵器	坏	床　面	ロクロ調整	ロクロ調整	回転糸切り無調整		
11	E－4	須恵器	坏	P－1 埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	回転糸切り無調整		
12	E－5	須恵器	鉢	掘り方埋土	ロクロ調整→回転ヘラケズリ	ロクロ調整	－		
13	E－10	須恵器	広口瓶	P－11 埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	－		
14	E－9	須恵器	広口瓶	カマド	ロクロ調整	ロクロ調整	－		16－8
15	E－8	須恵器	長頸壺	P－11 埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	ナデ	体部と頸部の境に突帯	16－9
16	E－7	須恵器	長頸壺	2　層	ロクロ調整	ロクロ調整	ナデ		16－10
17	E－6	須恵器	長頸壺	2　層	ロクロ調整→回転ヘラケズリ	ロクロ調整	ナデ		16－11

第９図　SI－１竪穴住居跡出土遺物（４）



No.	登録番号	種　別	器　種	層　位	外　　面	内　　面	底　部	備　　考	写真図版
1	E−12	須恵器	甕	床　面	口縁部−ロクロ調整、体部−平行タタキ	口縁部−ロクロ調整、体部−当て具痕	−		16−12
2	E−11	須恵器	甕	床　面	口縁部−ロクロ調整、体部−平行タタキ	口縁部−ロクロ調整、体部−当て具痕	丸底	頸部に波状沈線文	16−13
3	E−15	須恵器	甕	検出面	ヘラケズリ	ロクロ調整→ヘラナデ	ヘラナデ		
4	E−19	須恵器	甕	周溝埋土	頸部に波状沈線文	ロクロ調整	−		
5	E−14	須恵器	甕	2　層	ロクロ調整、ヘラケズリ	ロクロ調整	ナデ		16−14
6	E−13	須恵器	甕	2　層	ロクロ調整	ロクロ調整	−		16−15

第10図　SI−１竪穴住居跡出土遺物（５）

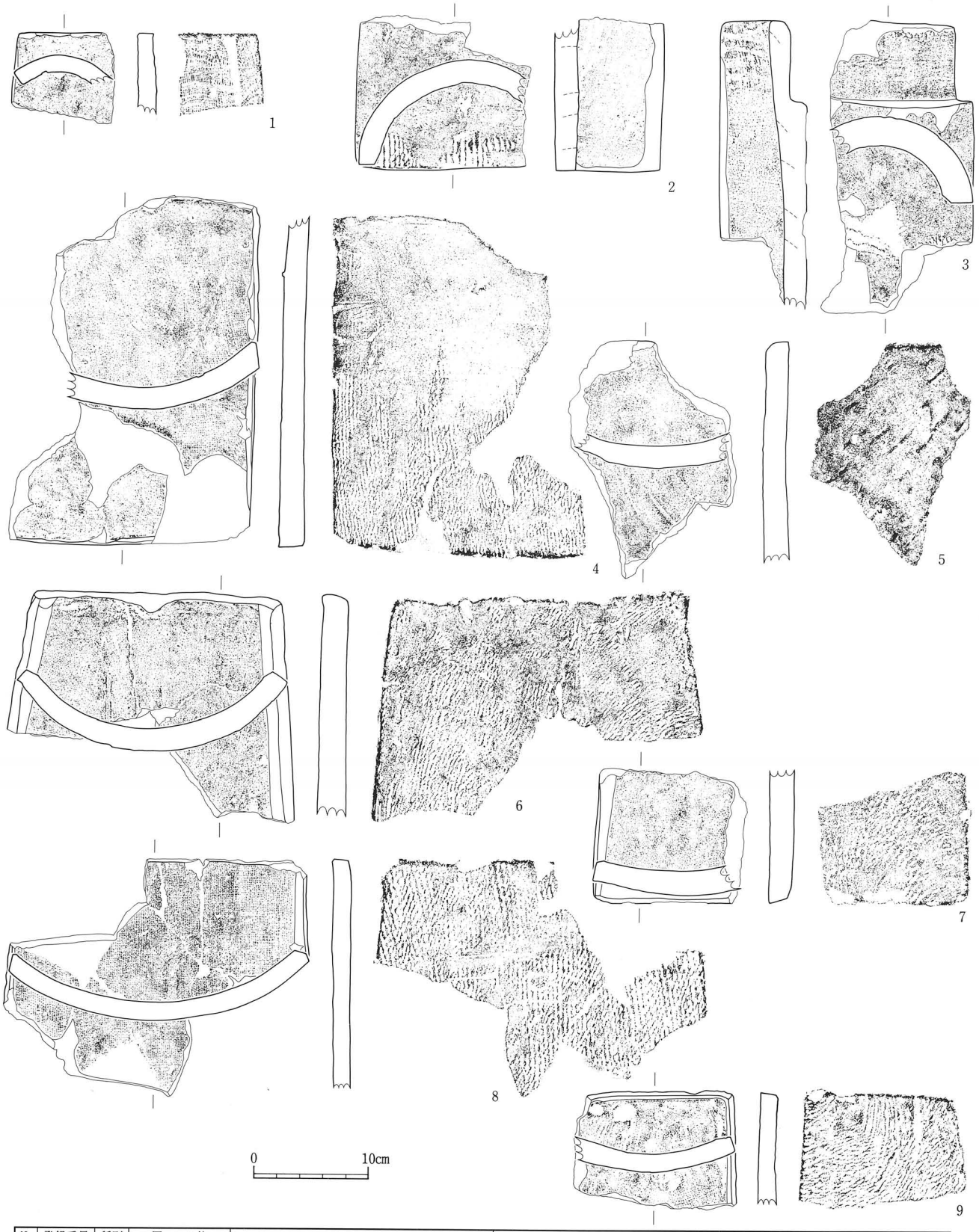


No.	登録番号	種別	器種	層位	外面	内面	底部	備考	写真図版
1	E－16	須恵器	甕	貯蔵穴埋土	口縁部－ロクロ調整、体部－平行タタキ	口縁部－ロクロ調整、体部－ヘラナデ、当て具痕	ヘラケズリ		16－16

No.	登録番号	種別	層位	長さcm	重量g	写真
2	N－1	紡錘車	2層	(3.15)	18.2	17－1
3	N－2	紡錘車	2層	28.9	39.8	17－2
4	N－3	紡錘車	2層	(21.0)	4.8	17－4
5	N－4	紡錘車	2層	(10.7)	3.5	17－3
6	N－17	直刀	床面	38.0	203.8	17－5
7	N－8	刀子	床面	(18.4)	17.6	17－6
8	N－5	刀子	1層	(9.4)	7.5	17－7
9	N－7	刀子	2層	(8.6)	9.1	17－8

No.	登録番号	種別	層位	長さcm	重量g	写真
10	N－6	刀子	2層	(7.5)	7.0	17－9
11	N－9	刀子	掘り方埋土	9.3	6.1	17－10
12	N－15	鏃	カマド	9.5	14.5	17－11
13	N－13	鏃	床面	(7.42)	10.7	17－12
14	N－11	鏃	1層	(7.9)	11.2	17－13
15	N－14	鏃	掘り方埋土	(3.3)	3.7	17－14
16	N－12	鏃	2層	(5.6)	6.4	17－15
17	N－18	釘	2層	8.0	9.7	

第11図　SI－1 竪穴住居跡出土遺物(6)



No.	登録番号	種別	層　位	凹　面	凸　面	備　考	写真図版
1	F－1	丸瓦	掘り方埋土	粘土紐痕　布目　布綴じ痕	ナデ　自然釉		
2	F－2	丸瓦	掘り方埋土	粘土紐痕　布目　布綴じ痕　側面付近ヘラケズリ	縄叩き(縦)→ナデ　横位の沈線		
3	F－3	丸瓦	掘り方埋土	布目　側面付近ヘラケズリ	縄叩き(縦)→ナデ→側面付近ヘラケズリ		17－16
4	G－7	平瓦	床　面	布目	縄叩き(縦)→無文叩き	軒平瓦の平瓦部	
5	G－8	平瓦	床　面	布目→ナデ	縄叩き(縦)→格子叩き	二次的な被熱が認められる。	
6	G－5	平瓦	2　層	布目→ナデ→側面付近ヘラケズリ	縄叩き(斜、潰れ)	凹面台圧痕	17－17
7	G－14	平瓦	P2埋土	布目　側面付近ヘラケズリ	縄叩き(斜)→無文叩き		
8	G－13	平瓦	SK－4、5埋土	布目　側面付近ヘラケズリ	縄叩き(縦)→無文叩き		
9	G－11	平瓦	カマド	布目？(磨滅)	縄叩き(横→斜)		

第12図　SI－1 竪穴住居跡出土遺物（7）

No.	登録番号	種別	層　位	凹　面	凸　面	備　考	写真図版
1	G－12	平瓦	貯蔵穴埋土	布目　ナデ→側面付近へラケズリ	縄叩き（縦）→無文叩き	凹面台圧痕　二次的な被熱が認められる。	
2	G－10	平瓦	掘り方埋土	布目→小口と側面付近へラケズリ　自然釉	縄叩き（縦）→無文叩き		
3	G－15	平瓦	P－9埋土	模骨痕？　糸切り痕　布目　布よれ痕	縄叩き（縦・潰れ）→縄叩き（斜）		
4	G－6	平瓦	床面	布目　ナデ→側面付近へラケズリ	縄叩き（縦）	二次的な被熱が認められる。	
5	G－9	平瓦	掘り方埋土	糸切り痕　布目→側面付近へラケズリ	縄叩き（斜→横）→無文叩き		

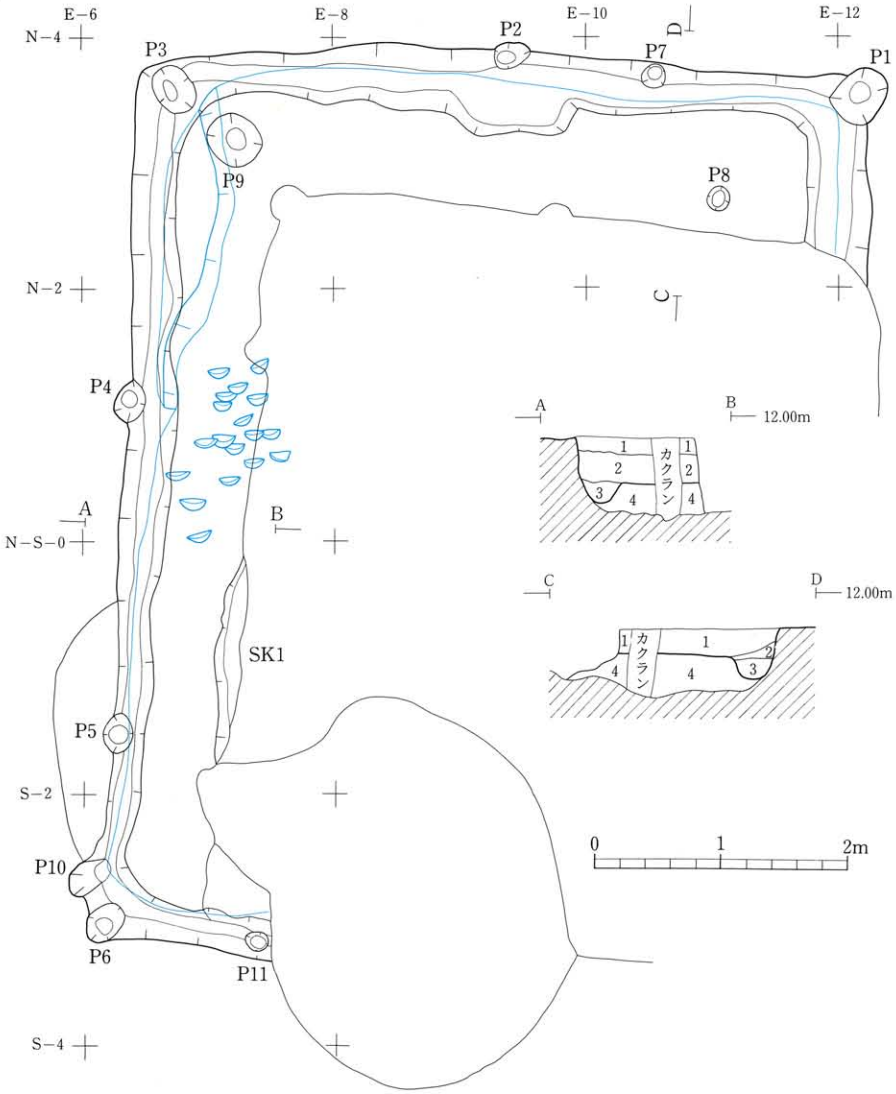
第13図　SI－1竪穴住居跡出土遺物（8）

SI－2竪穴住居跡　SI－1・4竪穴住居跡と重複関係にありSI－1竪穴住居跡に切られ、SI－4竪穴住居跡を切っていることから、本住居跡がSI－1竪穴住居跡より古くSI－4竪穴住居跡より新しい。

SI－1竪穴住居跡及び後世の攪乱により住居跡南東側の大部分は削平されているが、北辺及び西辺が確認された。平面形は南北7.2m、東西5.85mの長方形を基調としたものであると思われる。西壁を基準とする主軸方向はN－14°－EでSI－1竪穴住居跡とほぼ同様である。堆積土は3層に分けられ、3層は周溝内の堆積土である。壁は最も保存の良い東壁の北側で57.5cmあり、床面から急角度で立ち上がる。床面は掘り方埋土の上面から成っている。ほぼ平坦であるが、若干南側へ傾斜している。周溝が検出され、住居跡残存部では全周している。幅は23～50cmと東側で幅が広くなっている。また、北側中央部では長さ1mにわたって幅が70cmと広くなっている部分がある。床面及び周溝内で11個のピットが検出されているがその全てに柱痕跡は確認されなかった。周溝内で検出されたP1・2・3・4・5・6・7・10・11は壁柱穴であると考えられる。また、SI－1竪穴住居跡掘り方底面検出ピットの

中で配置関係、深さなどからＰ－23・36・37が本住居跡の主柱穴、Ｐ－34・35・41が壁柱穴である可能性がある。カマドはSI－１竪穴住居跡による削平のため検出されなかった。貯蔵穴についても柱穴と同様にSI－１竪穴住居跡の掘り方底面検出のSK－６が可能性として考えられる。床面の南西部で土坑が１基検出された、SK－１はSI－１竪穴住居跡の削平により詳細は不明であるが、168cm×20cm以上で深さは11cm以上、平面形は不明である、堆積土は単層で、黒褐色（7.5YR3/2）粘土質シルトで粘性があり、黄褐色（10YR5/6）粘土質シルト及び、炭化物を含んでいる。本住居跡の掘り方は床面残存部分では全体に確認されているが、SI－１竪穴住居跡の掘り方埋土の下層部分は本住居跡の掘り方埋土であると考えられ、底面のレベルに大きな差異はなさそうであるが、西壁際北半部で一段高くなっている部分が見られる。また、西側中央から北西隅付近の底面に1.5m×1mの範囲で長さ15cm～20cm、幅10cm、深さ数cmの半円形の工具痕が検出された。

出土遺物には土師器、須恵器、瓦、金属製品がある。このうち図示したものは土師器坏５点、須恵器坏、甕各１点、平瓦、丸瓦各１点、刀子、鉄鏃各１点である。土師器坏３点、須恵器坏１点に墨書が認められた。

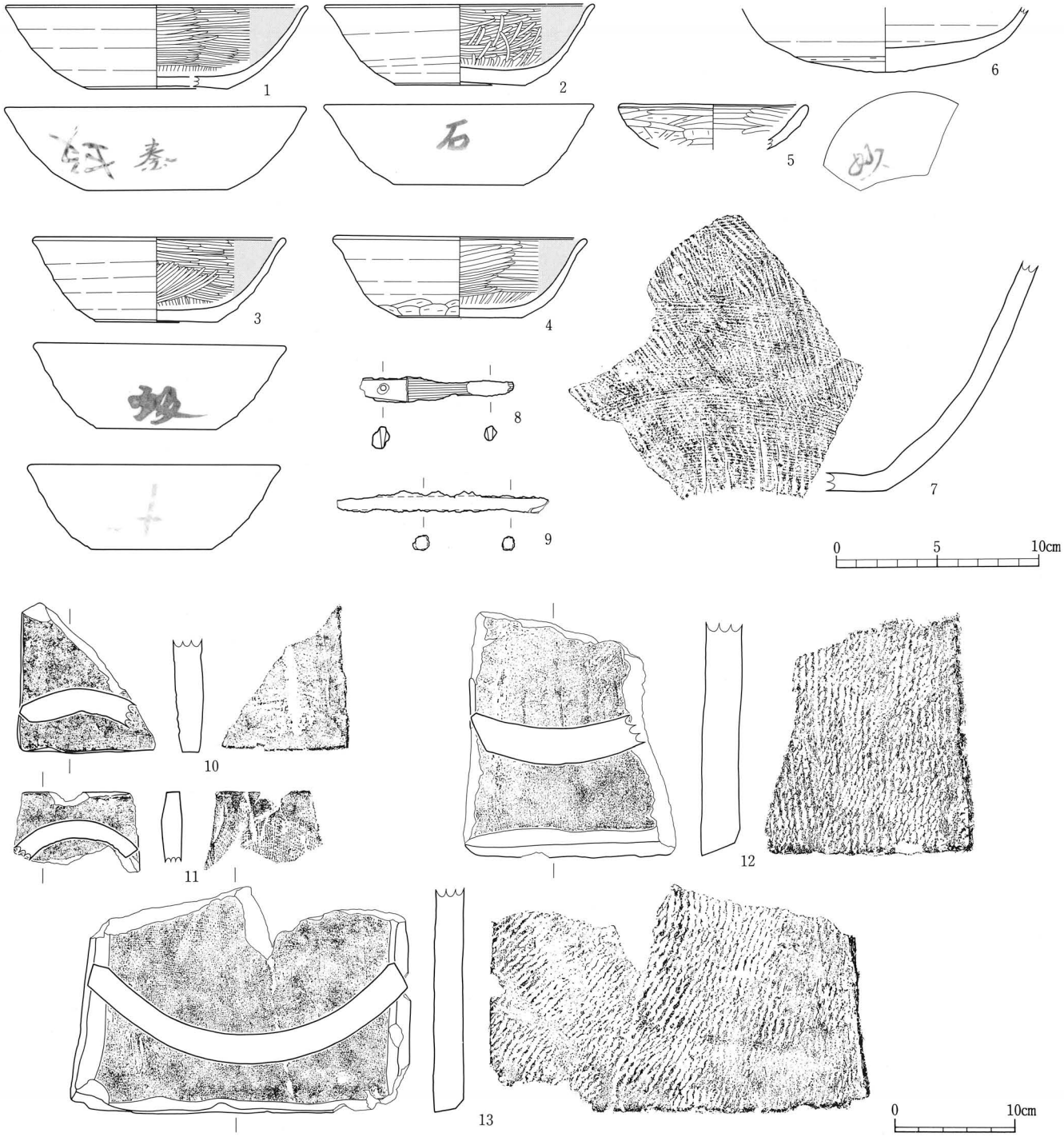


層　位	No.	土　色	土　性	備　考
住居跡	1	7.5YR4/4 褐色	シルト	10YR5/6 粘土質シルトを部分的に霜降り状に含む。炭化物、小礫を含む。
堆積土	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	10YR5/6 粘土質シルトブロック、炭化物、小礫を含む。
周溝埋土	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR5/6 粘土質シルトを霜降り状に含む。
掘り方埋土	4	10YR4/4 褐色	シルト	10YR5/4 シルトを霜降り状に含む。炭化物、焼土、小礫を含む。

SI－2 ピット（cm）

No.	P-1	P-2	P-3	P-4	P-5	P-6	P-7	P-8	P-9	P-10	P-11
深さ	70.5	32.5	59.5	43.5	33.7	45.0	23.5	30.0	16.5	23.8	49.5

第14図　SI－２竪穴住居跡



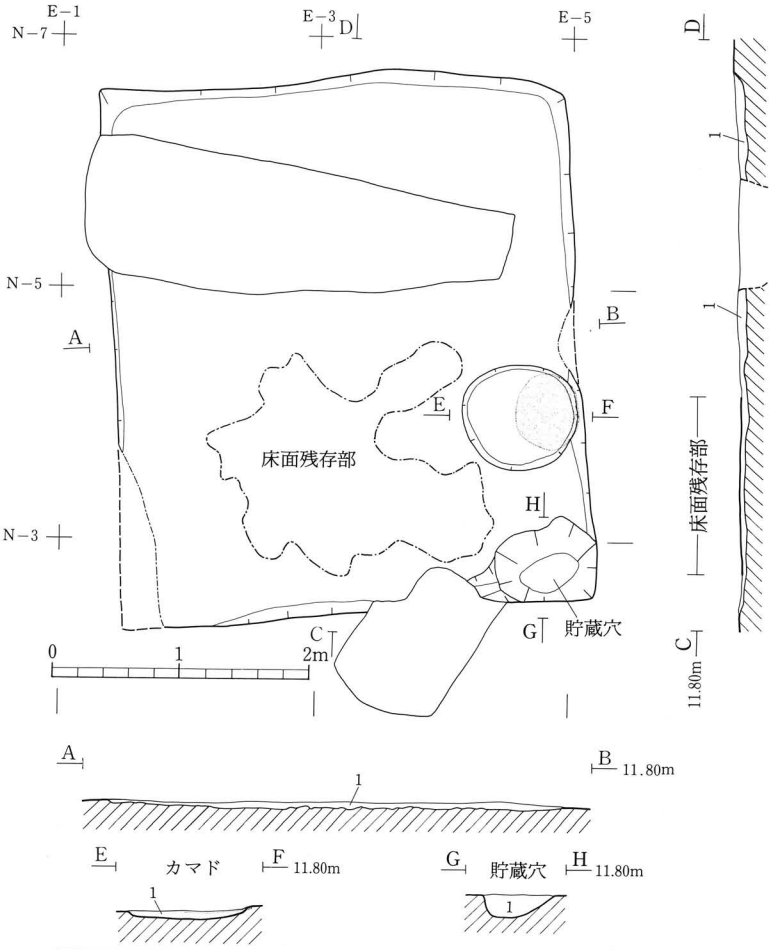
No.	登録番号	種　別	器　種	層　位	外　　面	内　　面	底　　部	備　　考	写真図版
1	D－39	土師器	坏	掘り方埋土	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り無調整	体部に墨書銘「秦」「坂」	17－18
2	D－37	土師器	坏	床　面	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り無調整	体部に墨書銘「石」	17－19
3	D－40	土師器	坏	周溝埋土	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り無調整	体部に墨書銘「坂」「十」	17－20
4	D－41	土師器	坏	（不明）	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	手持ちヘラケズリ		
5	C－7	土師器	坏	掘り方埋土	口縁部－ヨコナデ　体部ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理		灯明皿。口縁部付近煤付着。	
6	E－17	須恵器	坏	周溝埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	手持ちヘラケズリ	体部に墨書銘「妙」	17－21
7	E－18	須恵器	甕	周溝埋土	平行タタキ→ロクロ調整	ロクロ調整	－	内面に当て具痕→ナデ	
10	F－4	丸　瓦		2層	布目　袋綴痕　小口付近ヘラケズリ	ナデ			
11	F－5	丸　瓦		床面	布目　袋綴痕　小口付近ヘラケズリ	縄叩き			
12	G－17	平　瓦		2層	模骨痕？　布目　小口・側面付近ヘラケズリ	縄叩き（縦）→無文叩き	凹面台圧痕		18－7
13	G－16	平　瓦		1層	布目　小口・側面付近ヘラケズリ	縄叩き（斜）→無文叩き			

No.	登録番号	層位	種別	長　cm	重量g	写　真
8	N－10	床面	刀子	（7.6）	7.1	17－22
9	N－16	床面	鉄鏃	（10.5）	11.9	17－23

第15図　SI－2 竪穴住居跡出土遺物

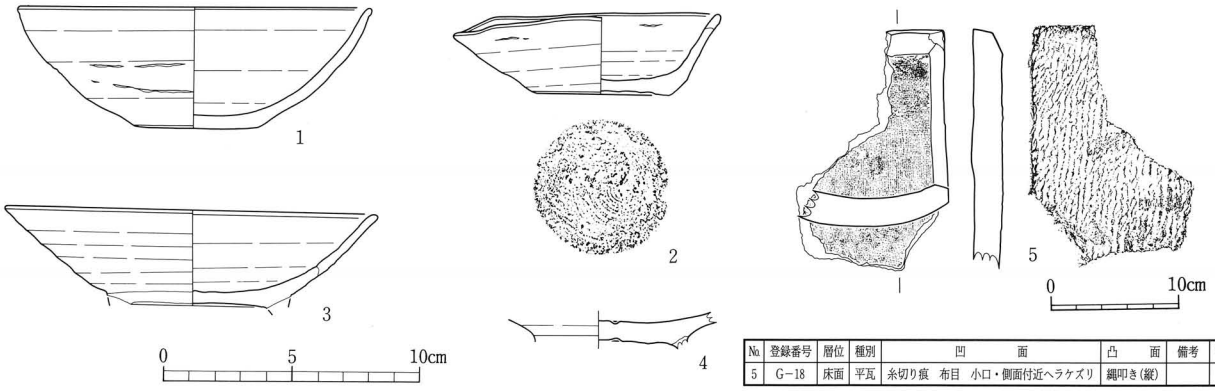
SI－３竪穴住居跡　調査区北西部の２層上面で確認された。後世の耕作及び更地にする際の攪乱による削平をうけており、住居の掘り方及び床面の一部とカマドの掘り方、貯蔵穴のみが検出された。住居跡北寄りの西壁から東壁近くまでと南壁の東寄りで更に深い攪乱によって削平されている。平面形は南北4.3m、東西 3.75m の長方形を基調としたものである。西壁を基準とする主軸方向はＮ－10°－Ｅである。床面は住居中央の南寄りに残存し、掘り方埋め土上面から成る。凸凹はなく平坦である。ピット、周溝は検出されなかった。東壁中央やや南寄りに上面が焼けている土坑が検出された。長さ92cm、幅82cm、深さ７cmの楕円形で上面に60cm×46cmの焼け面がみられ、カマドの上部構造は削平されて検出されなかったが、カマド底面の焼け面とカマドの掘り方であると考えられる。また、南東コーナーに長さ80cm、幅60cm、深さ20cmの不整な楕円形の土坑が検出され、貯蔵穴と考えられる。南壁際に溝が付いているが攪乱のため、どのようなものか不明である。本住居跡の掘り方は、下層の砂礫層の上面に底面が達している部分もありその部分では底面のレベルが変化している。

出土遺物には土師器、須恵器、瓦がある。このうち図示したものは土師器坏１点、高台付坏２点、平瓦１点である。



層　位	No.	土　色	土　性	備　考
掘り方埋土	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	10YR6/8 シルトブロック、炭化物、小礫を含む。
カマド掘り方	1	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物、焼土、小礫を含む。
貯　蔵　穴	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	若干の炭化物を含む。

第16図　SI－３竪穴住居跡

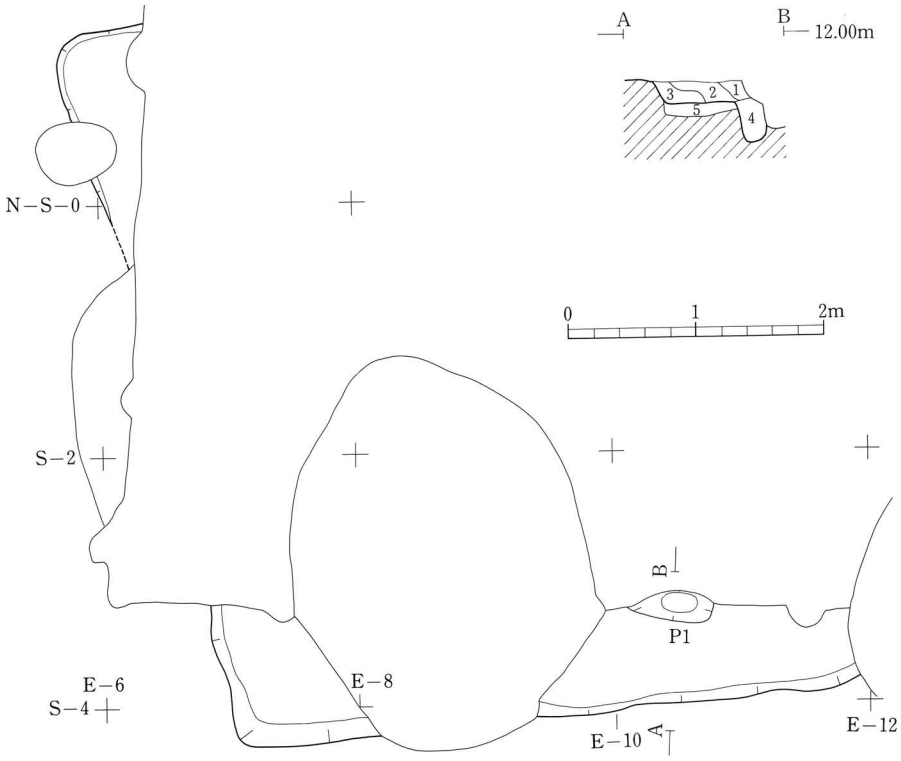


No.	登録番号	層位	種別	凹　面	凸　面	備考	写真図版
5	G－18	床面	平瓦	糸切り痕　布目　小口・側面付近ヘラケズリ	縄叩き(縦)		

No.	登録番号	種　別	器　種	層　位	外　面	内　面	底　部	備　考	写真図版
1	D－42	土師器	坏	床面	ロクロ調整	ロクロ調整	回転糸切り無調整		
2	D－43	土師器	坏	貯蔵穴埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	回転糸切り無調整	底厚。灯明皿。内面全体と外面の一部に煤付着。	18－３
3	D－45	赤焼土器	高台付坏	床　面	ロクロ調整	ロクロ調整	回転糸切り無調整	高台剝落	18－２
4	D－44	赤焼土器	高台付坏	床　面	ロクロ調整	ロクロ調整	ナデ調整	底部に穿穴を中断した痕跡あり。	18－１

第17図　SI－３出土遺物

SI－４竪穴住居跡　SI－１・２竪穴住居跡と重複関係にあり、いずれにも切られていることから、本住居跡が最も古い。SI－１・２竪穴住居跡及び後世の攪乱により住居跡の大部分は削平され、残存するのは北西、南西コーナー及び南辺が確認された。平面形は南北5.9m、東西4.9m以上の方形を基調としたものであると思われる。西壁を基準とする主軸方向はN－10°－Wである。堆積土は３層に分けられる。壁は最も保存の良い南西隅付近で27cmあり、大部分床面から急角度で立ち上がるが、壁の角度が緩やかな部分もみられる。床面は掘り方埋め土の上面から成っている。ほぼ平坦であるが、若干南西側に傾斜している。ピットが１個検出されたが、周溝、柱穴、カマド、貯蔵穴等の施設は検出されなかった。SI－２竪穴住居跡と同様にSI－１竪穴住居跡掘り方底面で検出されたピット、土坑のなかに本住居跡の施設が含まれている可能性がある。本住居跡の掘り方は床面残存部分では全体に確認されているが、住居跡南側が深く、北西コーナー部ではやや浅くなっている。



層位	No.	土色	土性	備考
住居跡堆積土	1	10YR3/4 暗褐色 10YR4/6 褐色	シルト 粘土質シルト	炭化物、焼土を含む。
	2	7.5YR4/4 褐色	シルト	少量の炭化物を含む。
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR5/6粘土質シルトブロックを含む。
P1	4	10YR3/4 暗褐色	シルト	小礫を含む。
掘り方埋土	5	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	小礫を含む。

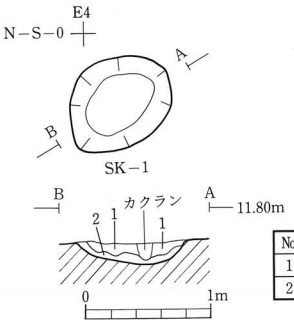
SI－4ピット(cm)

No.	P－1
深さ	32.0

第18図　SI－４竪穴住居跡

出土遺物には土師器、須恵器、瓦があるが、小片のみであり、図示しなかった。

SK－１土坑　調査区南西部中央付近の２層上面で確認された。平面形は長軸0.95m、単軸0.75mの楕円形で、深さは23cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は２層に分けられる。底面はほぼ平坦で、北東側にやや傾斜している。出土遺物には土師器、須恵器、瓦があるが、小片のみであり、図示しなかった。



No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化物、焼土を含む。10YR5/6 にぶい黄褐小ブロックを含む。
2	10YR4/3 褐色	シルト質粘土	炭化物、焼土粒を含む。10YR5/6 粘土粒を霜降り状に含む。

第19図　SK－１土坑

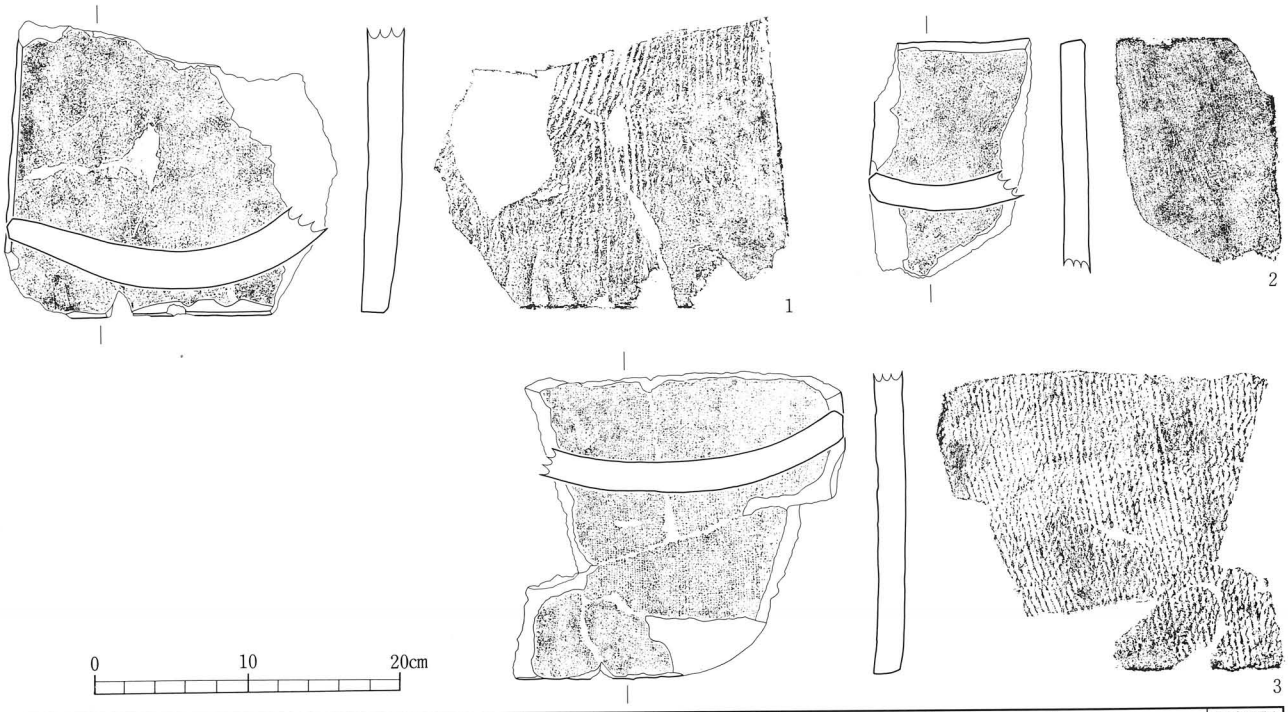
遺構外出土遺物　試掘トレンチ及び、表土、攪乱層からの出土遺物として、土師器、須恵器、瓦、鉄製品がある。そのうち図示したものは、土師器坏５点、軒平瓦４点、平瓦５点、丸瓦２点である。土師器坏３点に墨書が、丸瓦１点に刻印が認められた。

No.	登録番号	種別	器種	出土地点　層位	外面	内面	底部	備考	写真図版
1	D－49	土師器	坏	試掘トレンチ　検出面	ロクロ調整→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	手持ちヘラケズリ		
2	D－46	土師器	坏	カクラン	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り無調整	体部下部に沈線（３条）状のロクロ調整痕あり。	
3	D－48	土師器	坏	表土	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	回転ヘラケズリ	体部下部に墨書（横線１条）、段状のロクロ調整痕あり。	
4	D－50	土師器	坏	試掘トレンチ　検出面	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	手持ちヘラケズリ	体部に絵画的墨書痕有り（内容不明）	
5	D－47	土師器	坏	カクラン	ロクロ調整	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り無調整	底部に墨書銘「坂」カ。 体部下部に沈線状のロクロ調整痕あり。	18－４

No.	登録番号	種別	出土地点　層位	凹面	凸面	備考	写真図版
6	F－７	刻印丸瓦	表土	布目　布綴じ痕	ナデ「尺」字刻印		18－５
7	F－６	丸瓦	試掘トレンチ　検出面	布目　布綴じ痕　ナデ→小口・側面付近ヘラケズリ	縄叩き→ナデ		
8	G－４	軒平瓦	表土	ナデ→小口・側面付近ヘラケズリ	平行叩き→ナデ→側面付近ヘラケズリ	偏行唐草文Ⅱ類	
9	G－１	軒平瓦	試掘トレンチ　検出面	布目　ナデ→小口・側面付近ヘラケズリ	平行叩き→ナデ	偏行唐草文Ⅱ類	18－８
10	G－３	軒平瓦	表土	ナデ→側面付近ヘラケズリ	平行叩き→ナデ	偏行唐草文Ⅱ類	18－９
11	G－２	軒平瓦	試掘トレンチ　検出面	糸切り痕　ナデ→側面付近ヘラケズリ	平行叩き→ナデ	偏行唐草文Ⅱ類	18－10
12	G－22	平瓦	試掘	模骨痕？　布目	縄目（斜）		
13	G－19	平瓦	試掘トレンチ　検出面	ナデ	縄目（横→縦）→縦位の沈線（文字？）	二次的な被熱が認められる。	18－６

※瓦の分類は伊東信雄編「陸奥国分寺跡」1961による。

第20図　遺構外出土遺物（１）



No.	登録番号	種別	出土地点　層　位	凹　　面	凸　　面	備　　考	写真図版
1	G－20	平瓦	試掘トレンチ・検出面	布目　ナデ→側面付近へラケズリ	縄目(縦→斜)→無文叩き	凹面台圧痕、胎土は緻密で砂粒を含まず明らかに他と異なる。	
2	G－23	平瓦	試掘トレンチ・検出面	ナデ→小口付近へラケズリ	平行叩き→無文叩き		
3	G－21	平瓦	試掘トレンチ・検出面	布目	縄目(斜)→無文叩き		

第21図　遺構外出土遺物（２）

4　まとめ

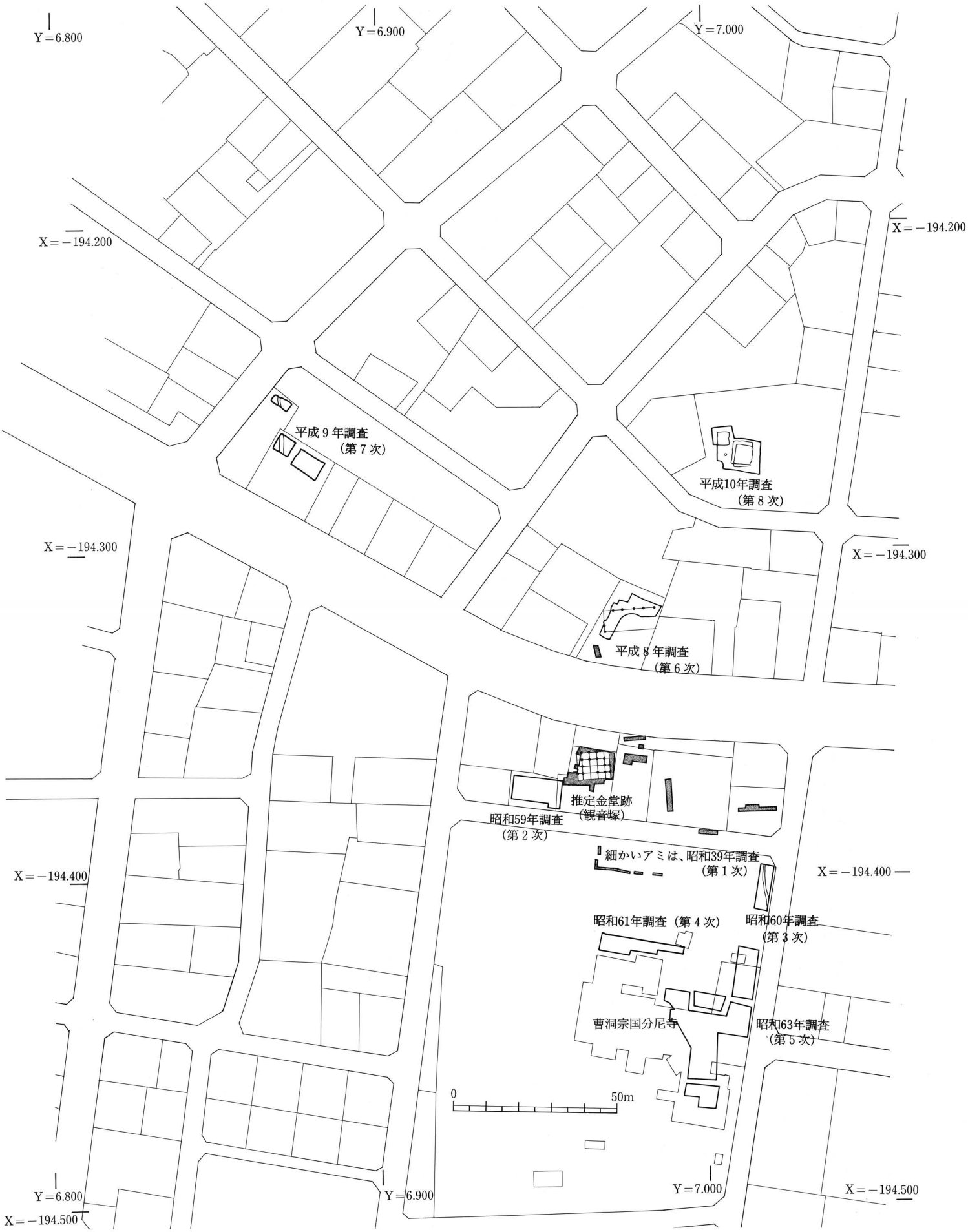
1．今回の調査は、陸奥国分尼寺の推定寺域の北東部で行われた。

2．今回の調査で発見された遺構は竪穴住居跡４軒、土坑１基であり、陸奥国分尼寺に係わる施設と考えられるものは検出されなかった。このうち、SI－１竪穴住居跡は堆積土中の焼土や炭化物の状況や、出土した遺物の多くが二次的に火熱を受けた痕跡が認められること、床面に炭化材が散見されることなどから火災住居であると思われる。また、極めて大型の須恵器の甕が３個体の他、鉄製品が直刀１点、刀子５点、鉄鏃５点、紡錘車４点の計10点出土しており、一般の集落の住居とは異なった性格を伺わせる。

3．出土遺物は、土師器、須恵器、鉄製品、瓦など、整理用平箱で20箱程である。大部分がSI－１竪穴住居跡の出土遺物である。土師器は成形の際にロクロを使用したものと使用しないものがある。ロクロ使用のもので、SI－１、２竪穴住居跡出土のものは、坏、高台付坏において全て内面にミガキ調整、黒色処理が施されており、外面の体部下半にケズリ調整が施されているものがある。SI－３竪穴住居出土のものは内、外面共にロクロ調整のみで、内面の黒色処理はない。SI－１、２出土のものは平安時代でも前半の時期である９～10世紀初めの年代が考えられ、SI－３出土のものは平安時代後半以降年代と考えられる。ロクロ不使用のものは主にSI－１、２竪穴住居跡の掘り方埋土から出土しており９世紀頃のものであると考えられる。須恵器については土師器と同様の年代が考えられる。また、墨書銘の土器が土師器７点、須恵器１点の計８点認められ、「佛」、「妙」など仏教との係わりを伺わせるものがあり興味深い。

4．これまでの調査では、陸奥国分尼寺の伽藍配置はもとより、寺域範囲についても明らかになっていない。これらを今後の課題として著しい都市化によって発掘調査の実施が困難になりつつある本遺跡周辺地区においては、計画的に調査を進めて行くことが急務であると考えられる。

参考文献　仙台市教育委員会(1969)：『史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書』仙台市文化財調査報告書第４集
根本光一（1998）：「Ⅲ　陸奥国分尼寺跡（第７次調査）」『神明社窯跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第232集



第22図　陸奥国分尼寺跡調査地点と建物配置図

写真１　調査区完掘全景（西→）

写真２　SI- 1.2.4 検出状況（西→）

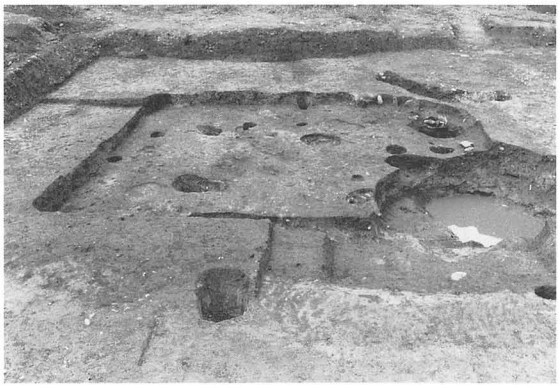


写真３　SI-1 床面の状況（西→）

写真４　SI-1 カマド付近（西→）

写真５　SI-1 貯蔵穴検出状況（北西→）

写真６　SI-1 貯蔵穴中の須恵器の状況（北西→）

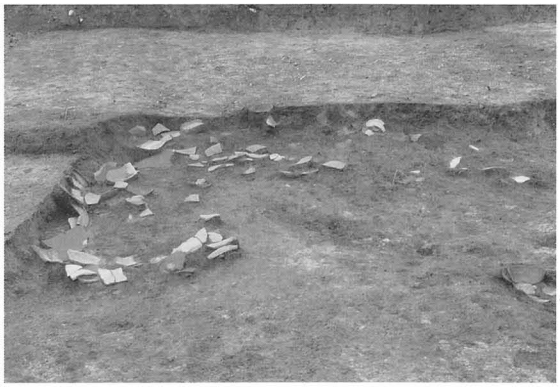


写真７　ＳＩ－１遺物出土状況（西→）

写真 8　SI-1 直刀出土状況（南西→）

写真 9　SI-1 紡錘車出土状況（南西→）

写真 10　SI-2 遺物出土状況（西→）

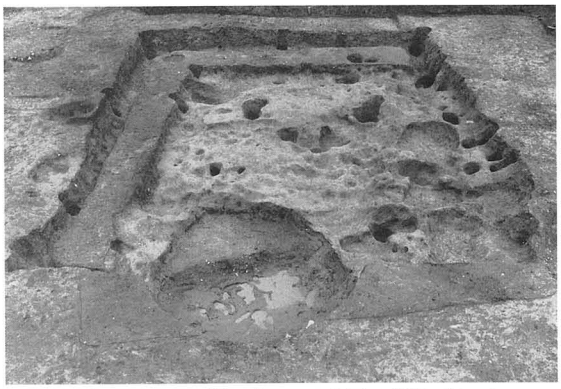


写真 11　SI-1 掘り方. SI-2 床面の状況（南→）

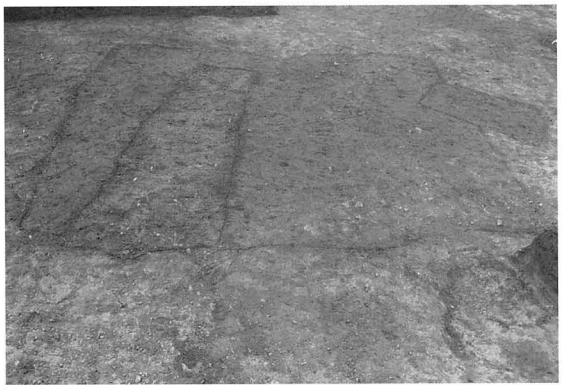


写真 12　SI-3 検出（床面）状況（西→）

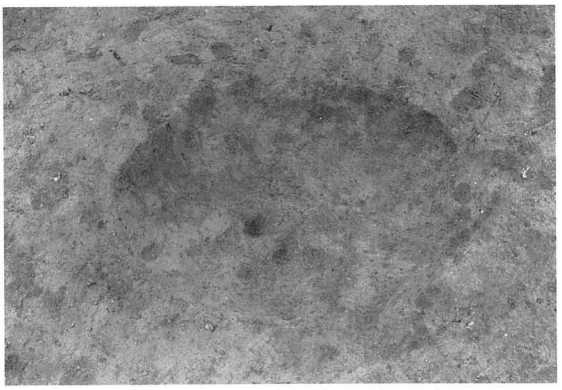


写真 13　SK-1 完掘状況（北西→）

写真 14　出土遺物（1）SI-1 竪穴住居跡出土土器

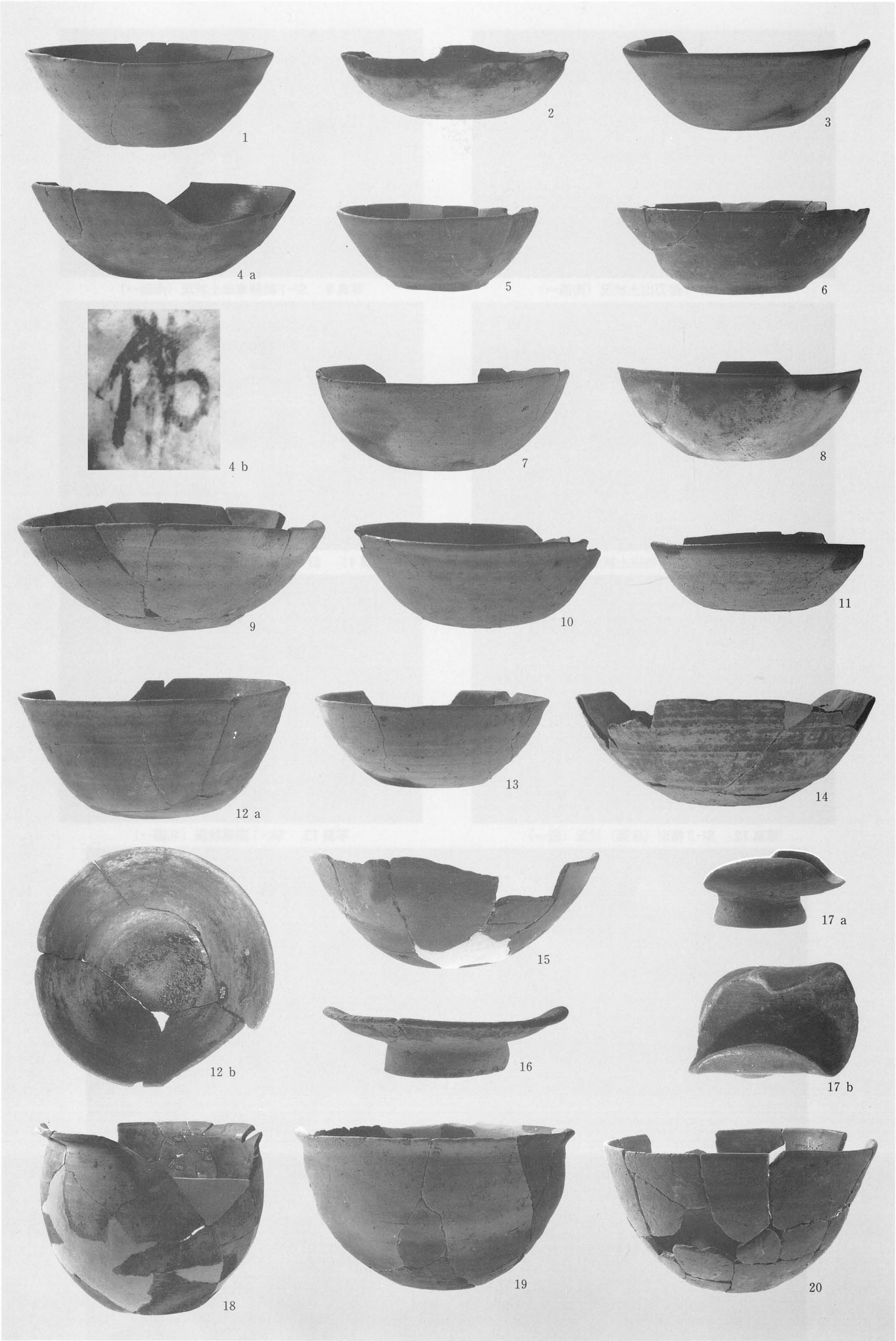


写真15　出土遺物（2）

写真16　出土遺物（3）

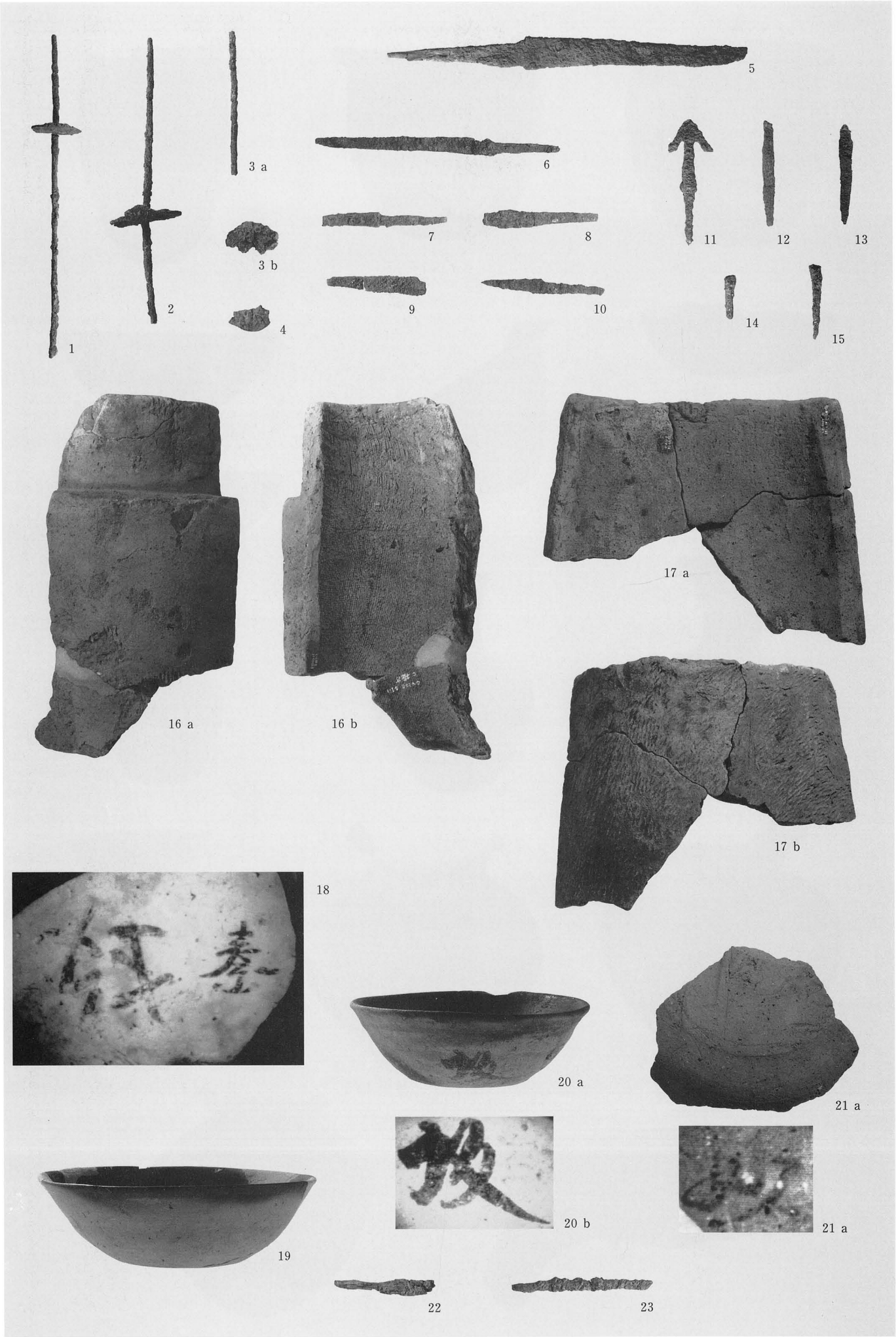
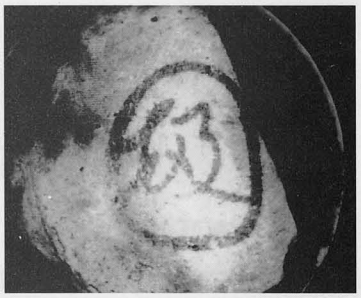

1
2
3 a
3 b
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16 a
16 b
17 a
17 b
18
19
20 a
20 b
21 a
21 a
22
23

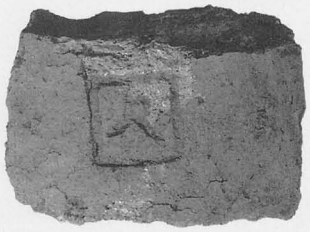
写真 17　出土遺物（4）

1

2

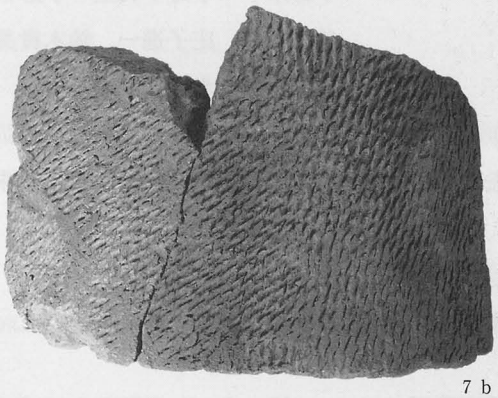
3


4


5

7 a

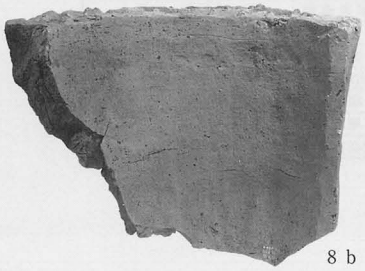
6

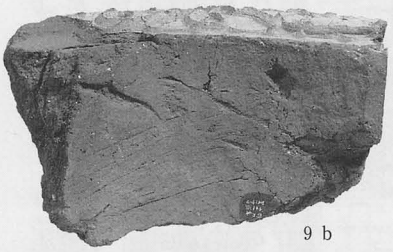

7 b

8 a

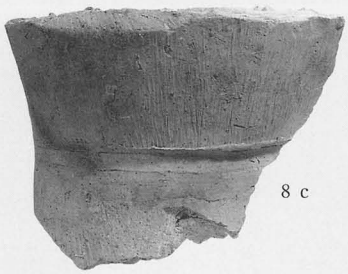
9 a

10 a


8 b


9 b

10 b


8 c

9 c

10 c

写真18　出土遺物（5）

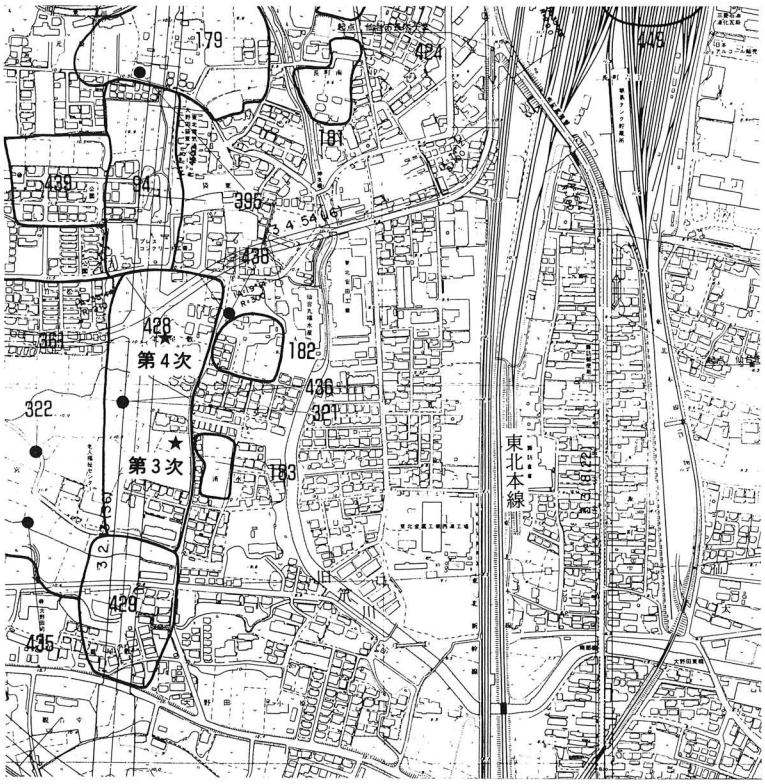
II　王ノ壇遺跡（第３次調査）

1　調査要項

遺　跡　名	王ノ壇遺跡（宮城県遺跡番号　01428）
調査原因	マンション建設
所　在　地	仙台市太白区大野田字王ノ檀13－２
調査対象面積	317㎡
調査面積	約205㎡
調査期間	平成10年４月13日～６月９日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	佐藤　洋・五十嵐康洋
調査参加者	赤間淳子　飯塚　稔　伊東恵美子　遠藤清子　大内孝子　大友泰子　奥山妙子　奥山祐子　小野栄子　小野早央里　小野さよ子　柿沼幸子　菊地和江　小林篤夫　酒井正雄　篠原良子　柴田徳郎　庄子進一　鈴木貴美子　曽根ちよ子　種田ふくよ　永野くみ子　針生せつ子　依田光子　米澤俊子
整理作業参加者	相沢美佐子　佐藤悦子　高橋弘子　小泉幸子　若生洋子
調査協力	福仙興業株式会社　住研工業株式会社

2　遺跡の位置と環境

王ノ壇遺跡は仙台市地下鉄富沢駅より東へ約0.8kmの太白区大野田に位置し、広瀬川と名取川に挟まれた郡山低地

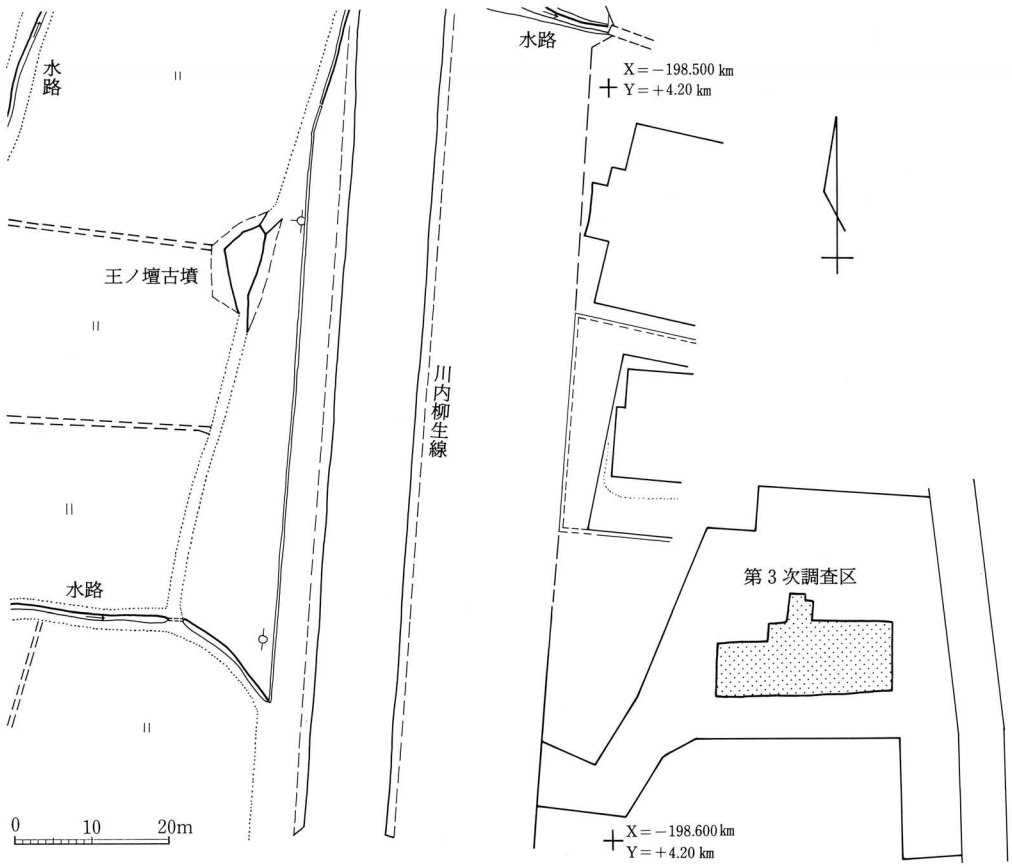


遺跡名	地図番号	時　代
王ノ壇遺跡	428	縄文～中世
皿屋敷遺跡	429	古代・中世
大野田古墳群	361	古墳
大野田遺跡	94	縄文～古代
袋前遺跡	439	縄文・古代
元袋遺跡	179	弥生、古代～近世
新田遺跡	181	古代
北屋敷遺跡	182	古代
長町清水遺跡	183	古墳
長町南遺跡	424	古代
長町駅東遺跡	449	弥生～古代
元袋古碑群	395	中世
北屋敷古碑	438	中世
王ノ壇古墳古碑群	436	中世
王ノ壇古墳	321	古墳
鳥居塚古墳	322	古墳
王ノ壇42古碑群	435	中世

第１図　調査位置と周辺の遺跡（★は第３・４次調査地点）

と呼ばれる沖積地上にのる。この低地は扇状地性で、自然堤防や後背湿地等から成っている。遺跡は、低地を流れる笊川（名取川の支流）右岸の自然堤防に立地している。遺跡内や周辺では水田が広がっていたが、最近は急速に宅地化が進行している。遺跡は、東側（笊川方面）に下がる緩斜面となっており、標高は10～11m である。

本遺跡では、都市計画道路建設に伴って昭和63年度より平成５年度まで調査が行われ、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明した。また、平成６年度より土地区画整理事業の一環として、遺跡の西辺部の調査（第２次）を行った。周辺には、多数の古墳や中世の道路跡が発見された大野田古墳群、多量の土器や土偶が出土した大野田遺跡、北には富沢遺跡、北東には郡山遺跡や北目城跡等がある。４次調査区は、北へ140m にある。



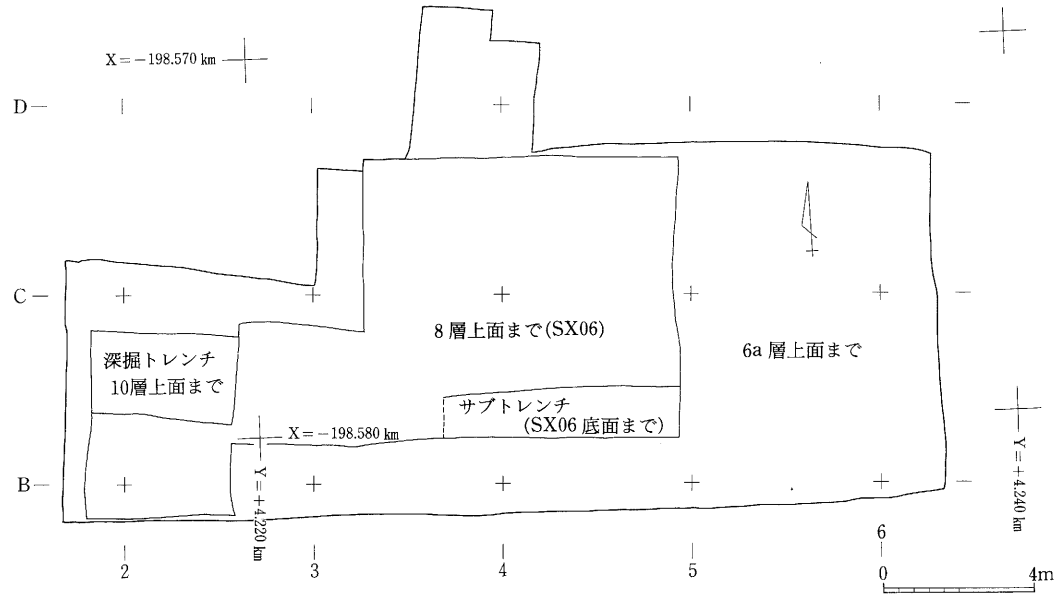
第２図　調査区配置図

3　調査に至る経過と調査方法

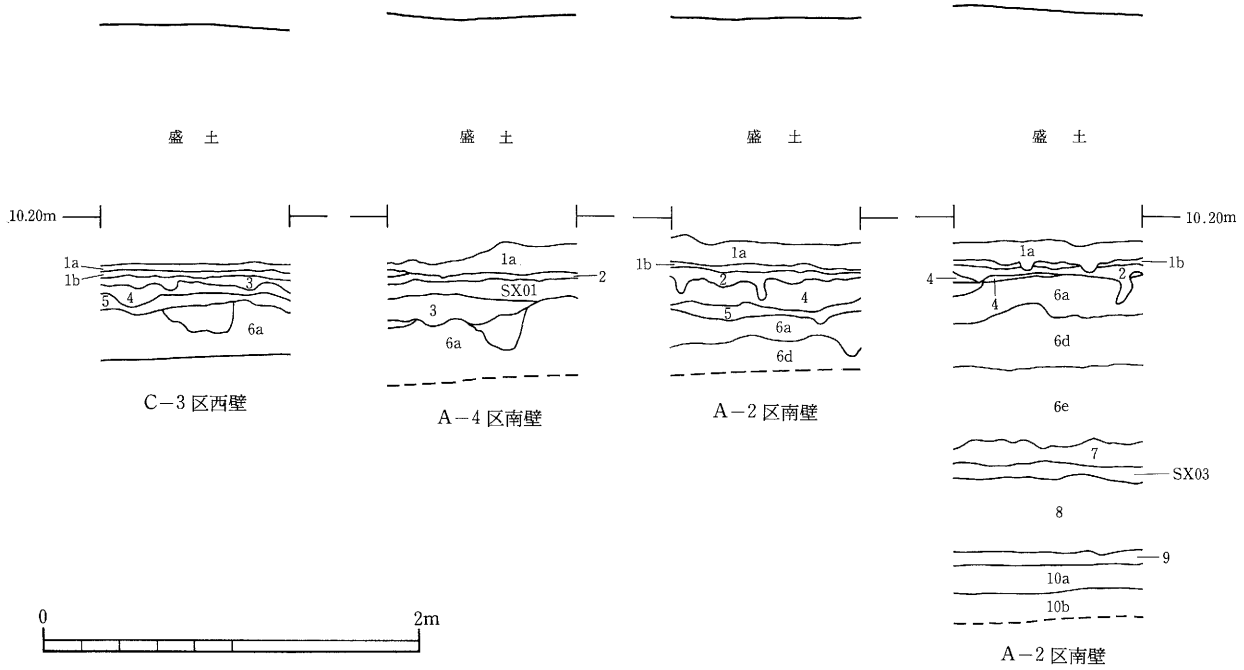
平成８年９月30日付で、仙台市太白区大野田字王ノ檀８－３　小林利男氏より仙台市太白区大野田字王ノ檀13－2にマンション建設の発掘届が提出された。この場所は、本遺跡中央部東辺に位置し、過去の調査では縄文時代から中世の遺構群が発見されている。このため、申請者と協議の上、建物部分について事前に発掘調査を行うこととした。平成10年４月13日より、建物予定地に約200m²の調査区を設定し、まず盛土を重機によって除去した。ちなみに、盛土以前は水田として利用されていた。その後は、人力による精査を行った。

4　基本層序

今回の調査では、盛土（層厚1.2～1.5m）下に大別10層、細別では18層の層序を確認した（第４図）。１層は最近の盛土以前の水田耕作土、２～５層は粘土質シルト～シルト質粘土、6a～6f 層は粘土層主体であるが、砂が混じるようになる。７層は粘土層であり、８～10層は砂層主体へ変化している。



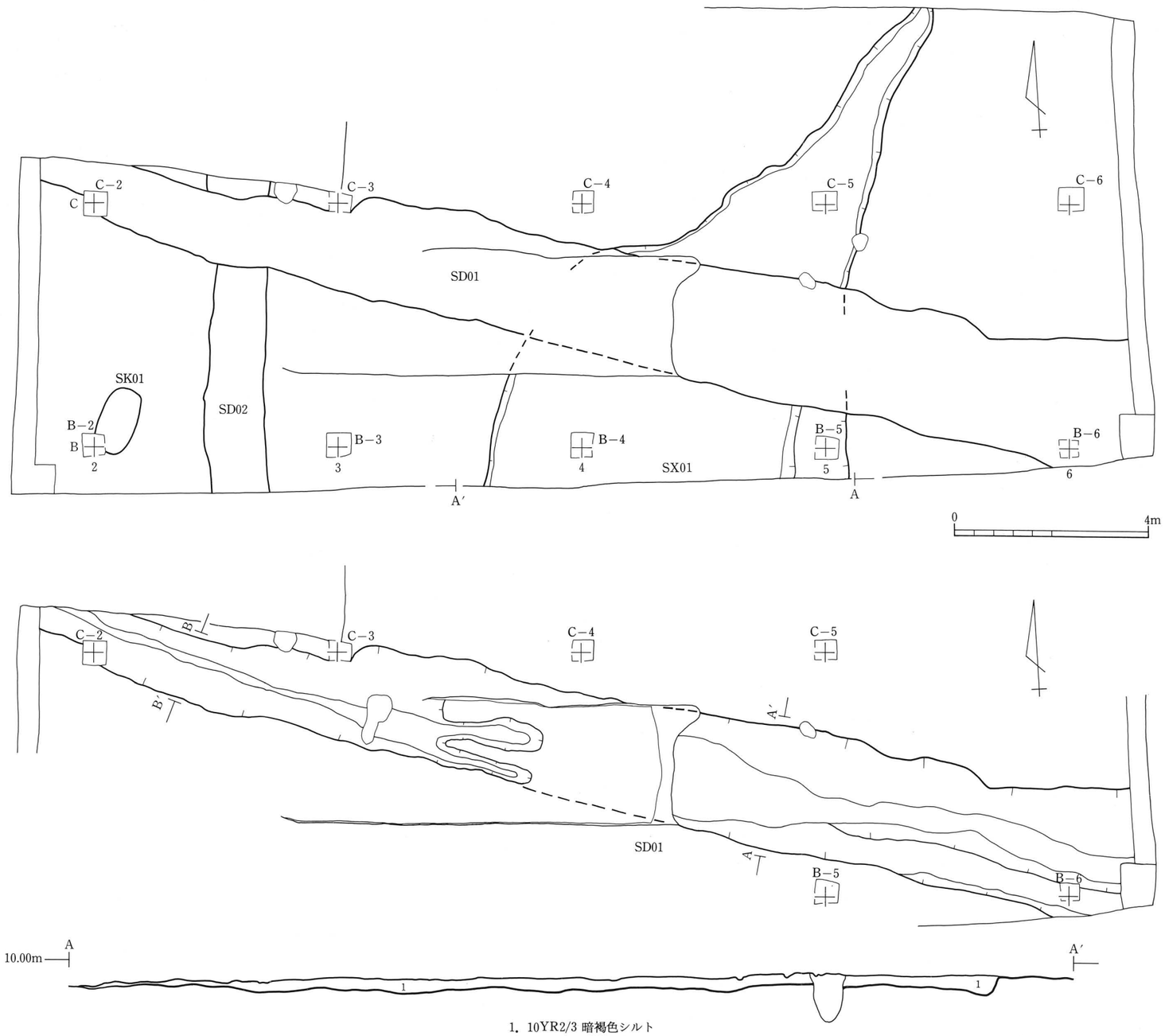
第３図　グリット配置図（調査状況図）



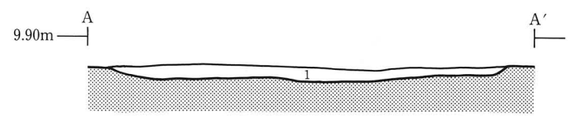
層名	特　　徴	備　　考	層名	特　　徴	備　　考
1a	2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト	旧水田	6f	10YR 3/3 暗褐色粘土	炭化物含む。土器出土
1b	7.5YR 3/4 暗褐色シルト質粘土	鉄分集積層	7	10YR 3/4 暗褐色粘土	明確な土器包含層
2	10YR 3/3 暗褐色粘土質シルト	マンガン粒含む	8	10YR 4/4 褐色砂質シルト	
3	10YR 2/2 黒褐色粘土	マンガン粒含む	9	10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルト	
4	10YR 3/2 暗褐色シルト質粘土	火山灰ブロック含む	10a	2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色細砂	
5	10YR 3/4 暗褐色粘土質シルト	マンガン粒・白色粒含む	10b	10YR 4/3 にぶい黄褐色細砂	
6a	10YR 4/4 褐色粘土				
6b	10YR 4/4 褐色砂質シルト	砂を含む	bc′	10YR 3/4 暗褐色シルト質粘土	砂含む
6c	10YR 4/4 褐色シルト		ア	2.5Y 5/4 黄褐色粘土	(樹根跡か)
6d	10YR 3/4 暗褐色シルト	一部	イ	10YR 4/3 にぶい黄褐色粘土	砂多量に含む
6e	7.5YR 黒褐色シルト				

第４図　基本土層図

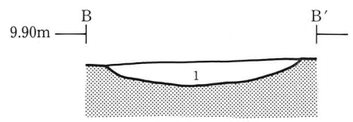
このうち、３層は調査区中央から南東部にかけて、４・５層は主に調査区中央部に分布している。４層には、ブロック状の灰白色火山灰が認められる。６層は７層に細分したが、これらの層は凹地（SX06）を中心に分布してい



1．10YR2/3 暗褐色シルト



1．10YR3/3 暗褐色粘土質シルト



1．10YR3/4 暗褐色シルト

0　2m

第５図　３層・４層上面遺構平面・断面図

る。７層は、調査区西部（SX06 の西側）に限られるようで、縄文時代後期の遺物包含層である。第１次調査（都市計画道路）の８層に相当するものと予想される。８層以下は砂質となり、９層以下では無遺物層となる。

5　発見遺構と出土遺物

（１）３層上面検出遺構（第５図）

３層上面で、溝跡１条、性格不明の落ち込み１基を検出した。なお、西部では４層上面となっている。

SD01（第５・６図）

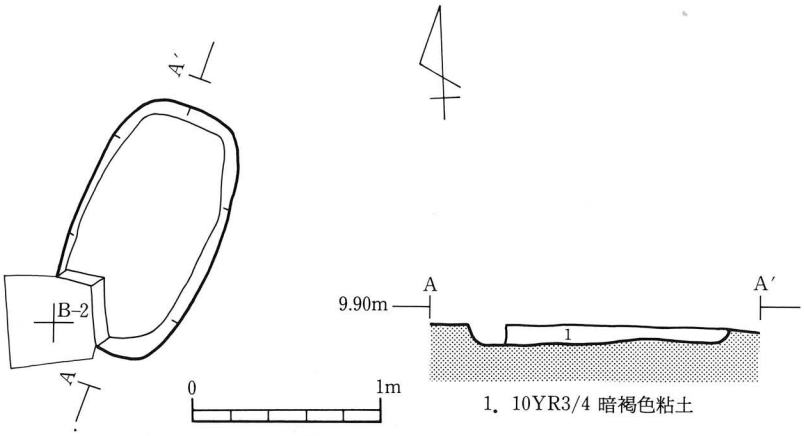
調査区南寄りに位置し、調査区を東西に横切る。規模は検出長22.96m、幅2.72m　深さ15cmで、方向はＮ－76°－Ｗで直線的である。SX01 と重複するが、これより新しい。溝断面は皿に近いが、溝底中央が高い部分や、壁面に軽く段の付くところもある。出土遺物は、瓦質擂鉢（第11図２）、中世陶器甕（在地・第11図１）、壁土片がある。瓦質土器の出土から、戦国期以降の時期が推定できる。

SX01（第５図）

調査区中央部東寄りに位置し、SD01 に切られ、小溝状遺構を切っている。形状は不定形で、北部は溝状になる落ち込みである。西辺の壁は直立するが、東辺の壁は立ち上がりが緩く不明瞭である。底面は、概ね平坦である。規模は長軸約13m、短軸最大約7.1m、深さ16cmで、方向はＮ－31.5°－Ｅである。出土遺物は、土師器細片が１点だけである。内部には黒い土が堆積しており、SD01 や02と類似していることから、中世の時期が予想される。

（２）４層上面検出遺構（第５図）

４層上面で、土坑１基、溝跡１条を検出した。ただし、これらの遺構は、基本層３層の分布していない地点にあり、注意が必要である。



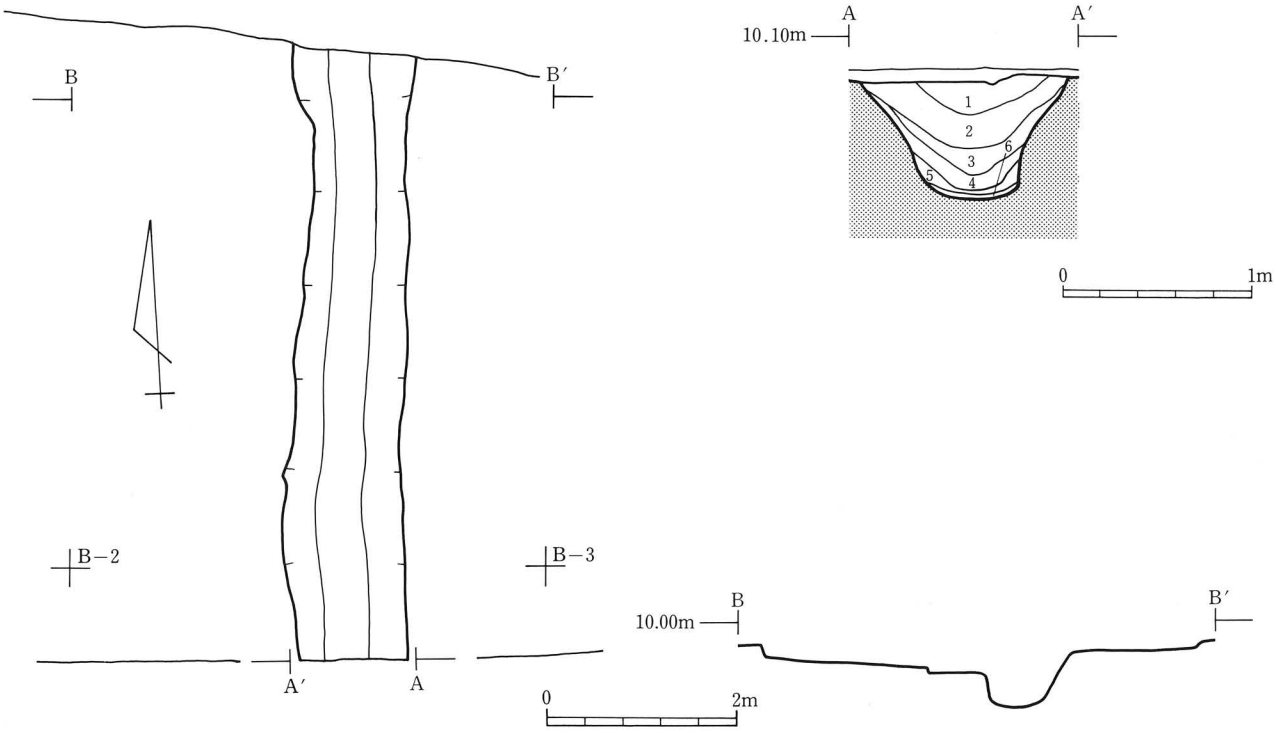
第６図　SK01 平面図

SK01（第６図）

調査区西部Ｂ－２区に位置し、他の遺構との重複はない。平面形は楕円形を呈し、底面は平坦である。規模は、1.36m×0.76m、深さ11cmで、方向は長軸がＮ－26.5°－Ｅである。遺物は出土していない。（旧名称 SK02）

SD02（第７図）

調査区西部Ｂ－２区を中心に位置する南北方向の溝跡である。規模は検出長6.52m、幅1.3m、深さ64cmで、断面形は逆台形に近い形状である。方向はほぼ真北を示す。出土遺物は、僅かに２層より土師質土器皿とみられる細片が１点ある。中世の溝と考えられる。



層名	特　　徴	備　考	層名	特　　徴	備　考
1	10YR 2/1 黒色シルト	黄褐色土ブロック含む	4	10YR 4/3 にぶい黄褐色粘土	黄褐色土ブロック含む
2	10YR 2/2 黒褐色シルト	黄褐色土ブロック含む	5	10YR 3/3 暗褐色粘土質シルト	砂・炭化物含む
3	10YR 3/2 黒褐色粘土質シルト	黄褐色土ブロック含む	6	10YR 3/1 黒褐色粘土	

第７図　SD02 平面・断面図

（３）５層上面検出遺構

SX02（第８図）

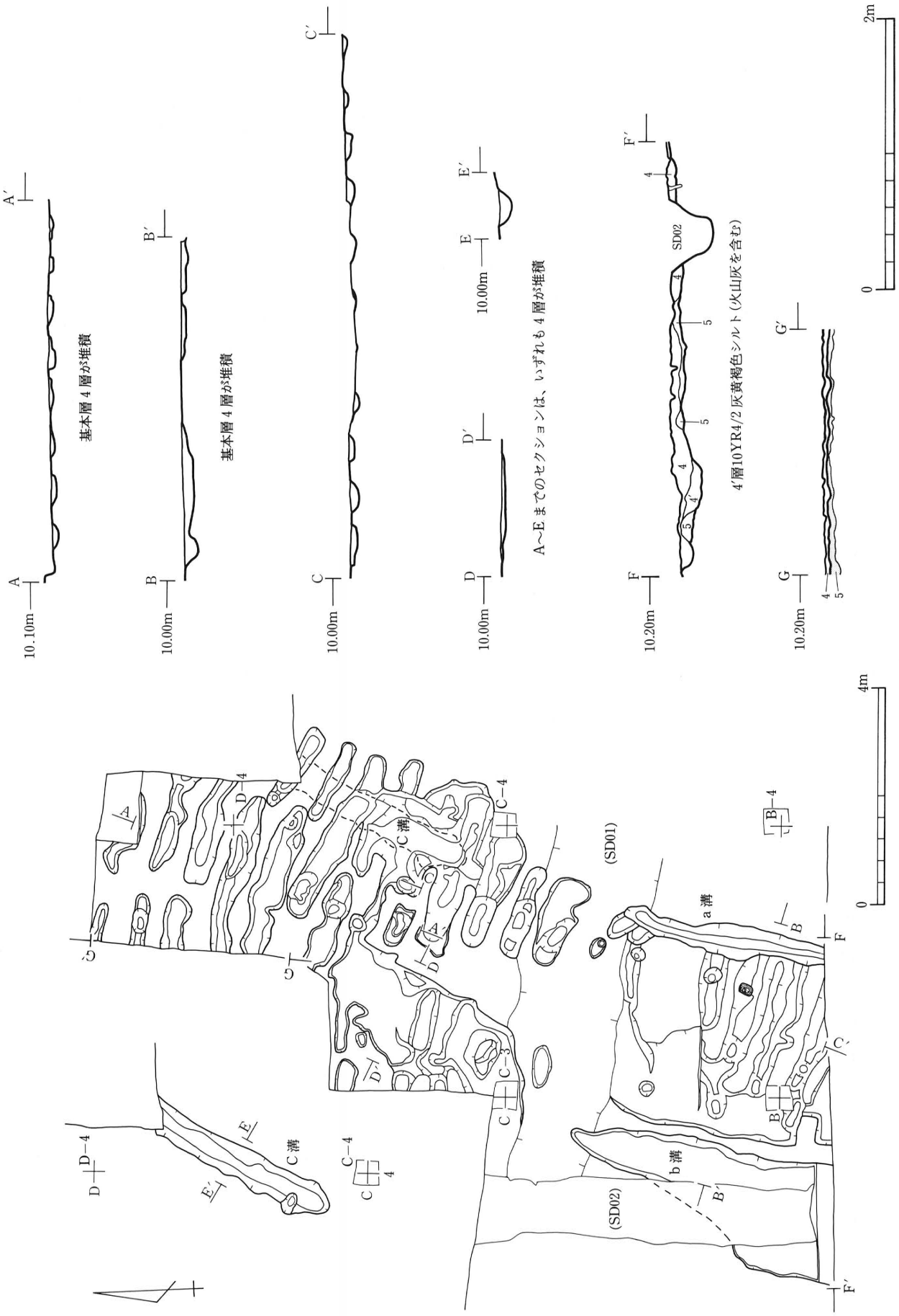
この遺構は、溝状、土坑状の落ち込みの集合体で、およそ南北に帯状に連なる。SD01・02 に切られている。規模は、全体として長さ約14.8m、幅約3m である。深さは平均10cm前後であるが、土坑状に深くなる所では30cmを越す所もある。このような深い部分を主体に、この遺構を覆った土層中（４層）に火山灰ブロックが、多量に含まれる部分（中央〜南部）がある。また、南半部と北半部では形状が少し異なっている。南半部は、東西方向の溝部の両サイドを南北方向の溝 a・b が区切るような形状である。北半部は全体の幅が広がるようで、南北方向の溝の集合体が、東西に３〜４列並列しているようにみえる。また、東辺部では、集合する溝群の直下で溝 C が検出された。この溝 C にも、火山灰ブロックが含まれている。こうした特徴から、北半部は２時期以上の変遷が予想される。溝 b の東側には、畦状の高まりがある。また、溝の間の凸部に火山灰ブロックが乗っている所もある。基本層５層として扱った土層は、この遺構の範囲とおよそ重なる。遺構全体の方向は、およそ N−19°−E である。

遺物は、溝部より赤焼土器高台付坏、ロクロ使用土師器（坏・甕）、須恵器（坏・瓶類）などが出土している。また、基本層５層中では、土師器甕？、須恵器（坏・瓶類）が出土している。このうち、溝部と５層の瓶類どおしが接合し、長頸瓶（第11図６）であることが判明した。口頸部内面には、茶色の漆が付着している。

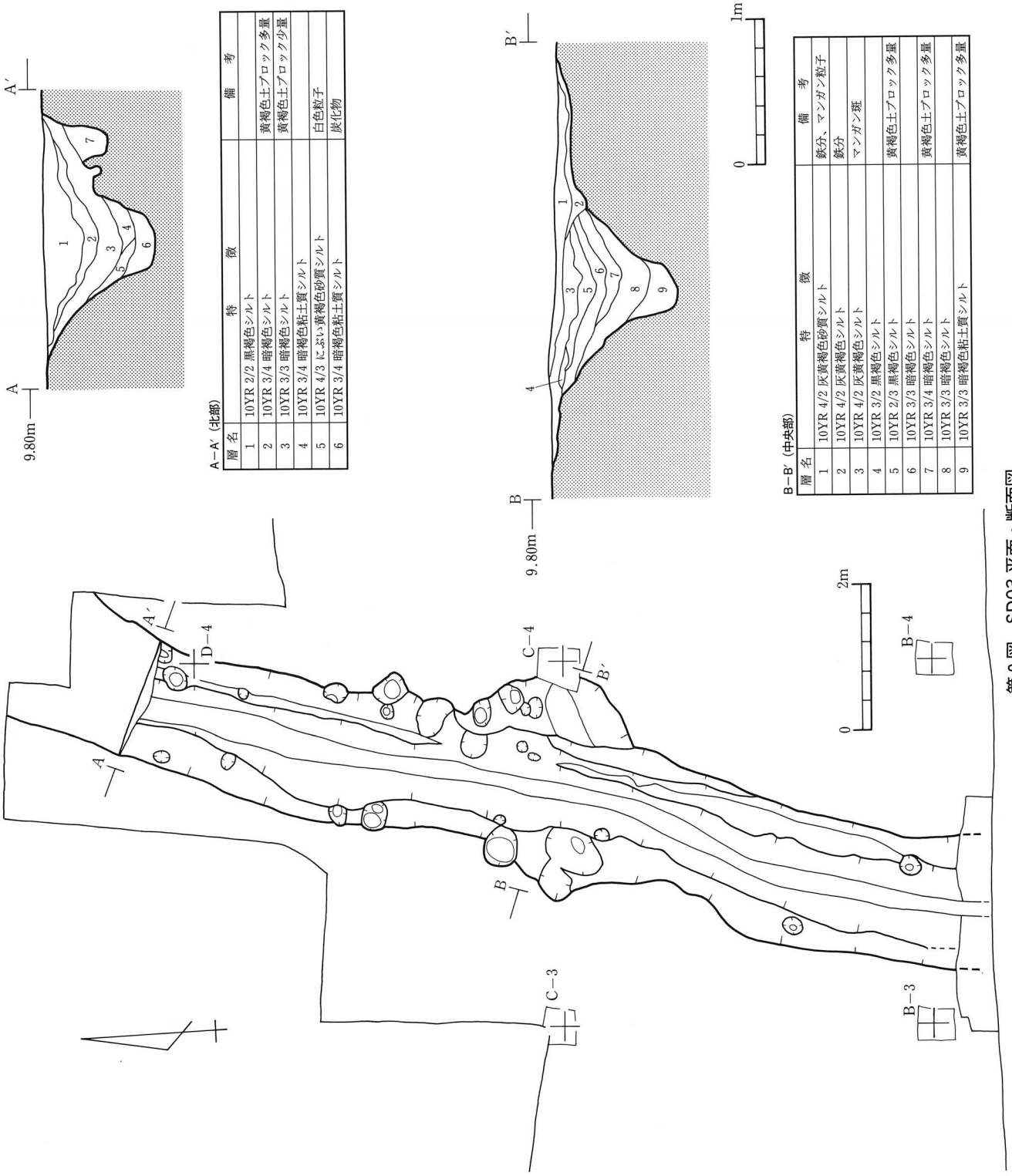
（４）6a 層上面検出遺構（第10図）

6a 層上面で、溝１条、小溝状遺構群６基、ピット153個を検出した。

SD03（第９図）



第８図　SX02 平面・断面図（５層上面）



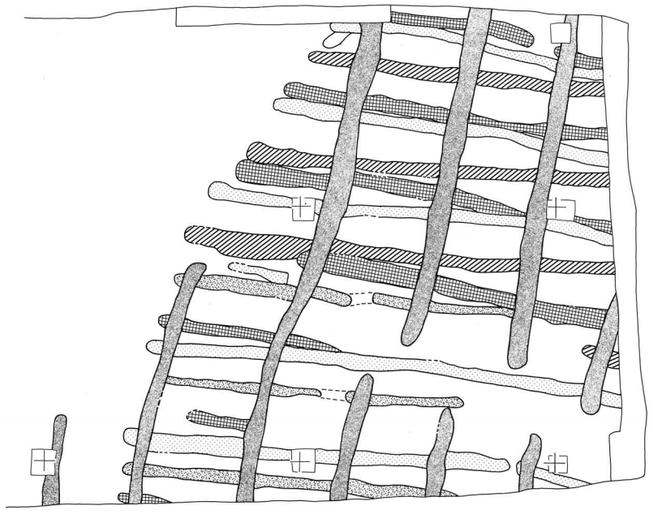
層名	特徴	備考
1	10YR 2/2 黒褐色シルト	
2	10YR 3/4 暗褐色シルト	黄褐色土ブロック多量
3	10YR 3/3 暗褐色シルト	黄褐色土ブロック少量
4	10YR 3/4 暗褐色粘土質シルト	
5	10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルト	白色粒子
6	10YR 3/4 暗褐色粘土質シルト	炭化物

層名	特徴	備考
1	10YR 4/2 灰黄褐色砂質シルト	鉄分、マンガン粒子
2	10YR 4/2 灰黄褐色シルト	鉄分
3	10YR 4/2 灰黄褐色シルト	マンガン斑
4	10YR 3/2 黒褐色シルト	
5	10YR 2/3 黒褐色シルト	黄褐色土ブロック多量
6	10YR 3/3 暗褐色シルト	
7	10YR 3/4 暗褐色シルト	黄褐色土ブロック多量
8	10YR 3/3 暗褐色シルト	
9	10YR 3/3 暗褐色粘土質シルト	黄褐色土ブロック多量

第９図　SD03 平面・断面図

調査区中央部 B〜D－３区に位置するおよそ南北方向を示す溝跡である。規模は検出長13.68m、幅1.88m、深さ89cmで、断面は逆台形に近い形状である。方向は、N－15.5°－E である。溝中央部には、東側へ張り出すように落ち込みがある。多数のピットと重複しているが、溝より古いものと新しいものの両方が認められる。一方、後述する小溝状遺構群とは重複がない。位置関係をみると、むしろ重複しないように距離を保っているように見え、有機的関連があるかもしれない。出土遺物は、上層でロクロ土師器坏、非ロクロ土師器甕（底部木葉痕）、須恵器坏などの

第10図　6a 層平面図（小溝断面図）



A群　B群　C群　D群　E群　小溝状遺構群別模式図

A-A′ F群

層名	特　　徴	備　考	層名	特　　徴	備　考
1	10YR 2/2 黒褐色粘土質シルト				
2	10YR 3/3 暗褐色粘土				
3	10YR 4/6 褐色粘土質シルト				

C-C′ D-D′　共通

層名	特　　徴	備　考	層名	特　　徴	備　考
1	10YR 3/4 暗褐色シルト質粘土				
2	10YR 4/6 褐色シルト質粘土				
3	10YR 3/3 暗褐色粘土質シルト				

B-B′ E-E′　共通

層名	特　　徴	備　考	層名	特　　徴	備　考
1	10YR 3/1 黒褐色シルト		4	10YR 2/3 黒褐色シルト	
2	10YR 2/2 黒褐色シルト		5	10YR 2/1 黒色シルト	
3	10YR 3/2 黒褐色シルト				

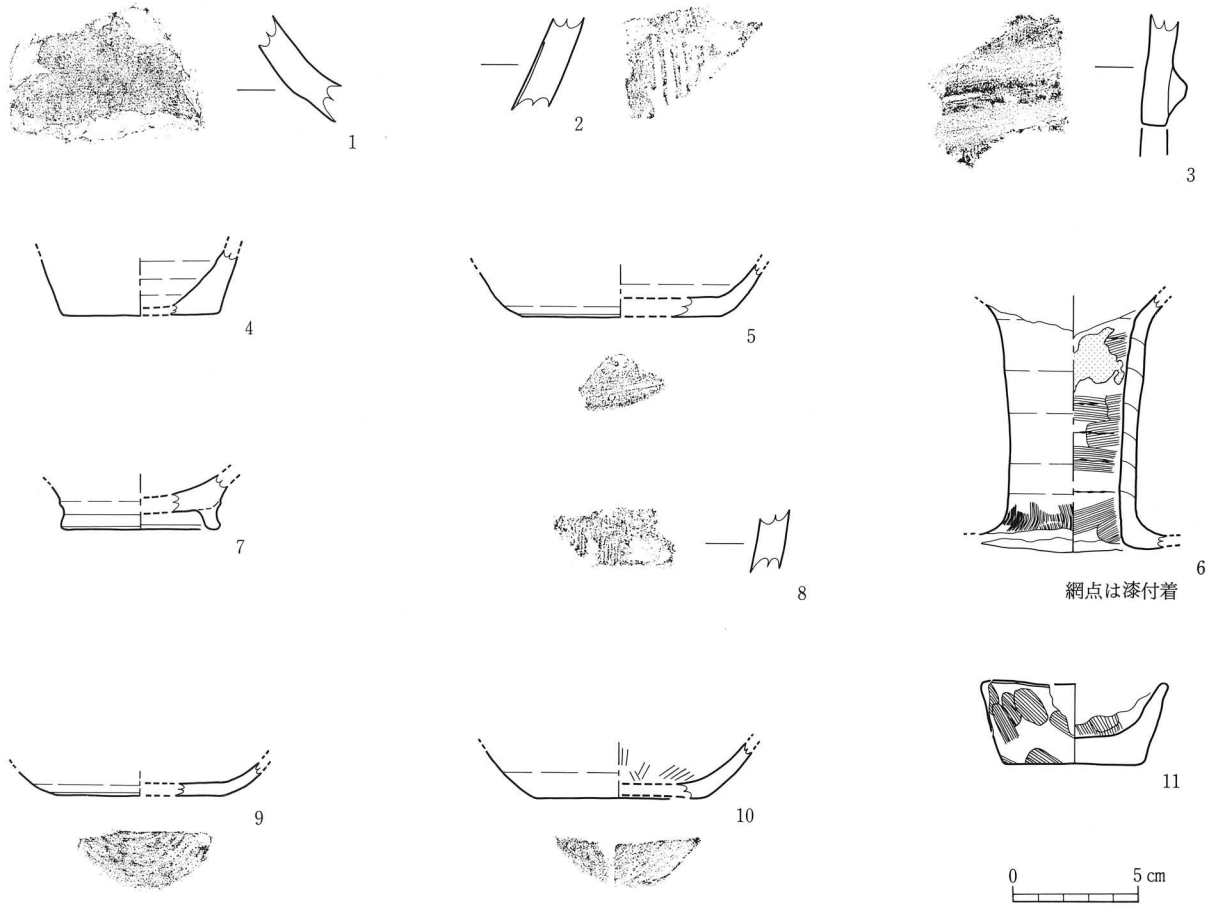
細片が、中層では埴輪片（第11図３）が１点ある。下層から底にかけては、遺物は出土していない。古墳時代より平安時代の遺物が出土しているが、数量も少なく時期決定が難しい。

小溝状遺構群（第10図）

小溝状遺構群は、SD03 を介在させてその東西に位置している。このうち、東部のものは方向や重複関係から５つのグループに分けた。グルーピングに際しては、小溝の方向や形状の類似そして等間隔に近いもので選別した（第10図）。

＜A群＞調査区東部に位置し、南北方向の溝９条以上で構成される。ただし、溝が途切れた部分でグループ分けすることも可能だが、ここでは一連のものとして扱っておく。A 群は B～E 群を切り SD01・SX01 に切られる。溝は上幅が20～50cm、深さ12～31cmで、溝間の間隔は1.8～1.9m（平均1.87m）である。方向は n－8.5°～16°－E とやや不揃いである。遺物は出土していない。

＜B群＞調査区東部に位置し、東西方向の溝６条以上で構成される。B 群は A 群・SD01・SX01 に切られ、C 群を切る。溝は上幅18～42cm、深さ８～12cmで、溝の間隔は1.6～1.7m（平均1.66m）である。方向は、N－81～86°－W



番号	遺物番号	地区・遺構	層位	種類・器種		特徴	写真
1	12	B-2 区　SD1	埋１層	中世陶器	甕	常滑	17－１
2	15	B-6 区　SD1	埋１層	瓦質土器	擂鉢	16～17c	17－２
3	61	A-3 区　SD3	埋土	埴輪		凸帯・スカシ孔（円？）タテハケ、内面ナデ調整	17－３
4	1	中央部	２層	瓦質土器	小型鉢	中世 or 近世、底径6.2cm、器高2.6cm	17－４
5	44	B-3 区　SX02 上	４層？	須恵器	坏	底部切り離し不明、回転ヘラ削り、底径7.8cm、器高2.1cm	17－６
6	36・24等	C-4 区 B-2 区　SX02 上	４層	須恵器	長頸瓶	外面、ハケメ→ロクロ調整、内面ナデ調整（粘土紐積み上げ痕）漆付着、器高10.2cm	17－８
7	19	SX02 上	４層	赤焼土器	高台坏	ロクロ調整、底径6.3cm、器高2.2cm	17－７
8	39	C-4 区	５層？	埴輪		タテハケ	17－９
9	48	B-4 区	５層	須恵器	坏	ロクロ調整、底部回転糸切り、底径6.6cm、器高1.4cm	17－11
10	48	B-4 区	５層	土師器	坏	外面ロクロ調整、内面ミガキ黒色処理、底径6.6cm、器高2.2cm	17－10
11	63	C-3 区	5or6 層	ミニチュア	小型鉢	手づくね、内外指ナデ、底径7.6cm、器高3.3cm	17－12

第11図　古代～中世出土遺物

である。遺物は出土していない。

＜Ｃ群＞調査区東部に位置し、東西方向の溝７条以上で構成される。Ｃ群はＡ群・Ｂ群・SD01・SX01に切られ、Ｄ群・Ｅ群を切っている。溝は上幅20～42cm、深さ８～12cmで、溝の間隔は1.7～1.8m（平均1.75m）である。方向は、Ｎ－79～83°－Ｗである。遺物は出土していない。

＜Ｄ群＞調査区東部に位置し、東西方向の溝４条以上で構成される。Ｄ群はＡ～Ｃ群・SX01に切られる。溝は上幅20～50cm、深さ７～10cmで、溝間は約1.7mでほぼ揃っている。方向もＮ－84・85°－Ｗで揃っている。遺物は出土していない。

＜Ｅ群＞調査区東部に位置し、東西方向の溝３条以上で構成される。Ｅ群はＡ～Ｃ群・SD01・SX01に切られる。溝は上幅14～32cm、深さ６～10cmで、溝間は1.8～1.9m（平均1.85m）である。方向はＮ－84・85°－Ｗで、ほぼ揃っている。遺物は出土していない。

＜Ｆ群＞調査区西部に位置し、およそ東西方向を示す溝９条以上で構成される。Ｆ群はSD02に切られるが、小溝どうしの重複はみられない。溝は上幅24～40cm、深さ18～32cmで、溝間は狭く0.5～1.1m（平均0.9m）である。方向はＮ－68～75°－Ｗである。遺物は、溝内より非ロクロ土師器甕の細片が４点出土しているが、時期決定資料にはならないようである。

Ａ～Ｅ群とＦ群の対応関係は不明だが、SD３と共伴して、一つの生活面を構成していたものと考えている。また、これらの遺構付近には多数のピット（153個）が検出されたが、建物になる柱穴があるか明らかではない。さらに、小溝群やSD３と比較して古いものや新しいものの両者があって、ピットも２～３時期の変遷が予想される。この6ａ層上面の遺構群は時期を特定できないが、およそ古墳時代～平安時代（火山灰降下以前）の間の所産と考えられる。

（５）８層上面検出遺構（第12図）

８層上面では、性格不明遺構５基検出した。

SX03（第13図）

調査区西部Ａ－２区に位置し、他の遺構との重複はない。平面形は楕円形を呈し、底面はほぼ平坦である。規模は、2.27m×0.85m以上、深さ８cmである。出土遺物は縄文土器があり、Ａ－２区７層と接合した小型深鉢（第14図１）、SX05・07と基本層７層と接合した深鉢（第14図４）がある。時期は、縄文時代後期中葉であろう。

SX04（第13図）

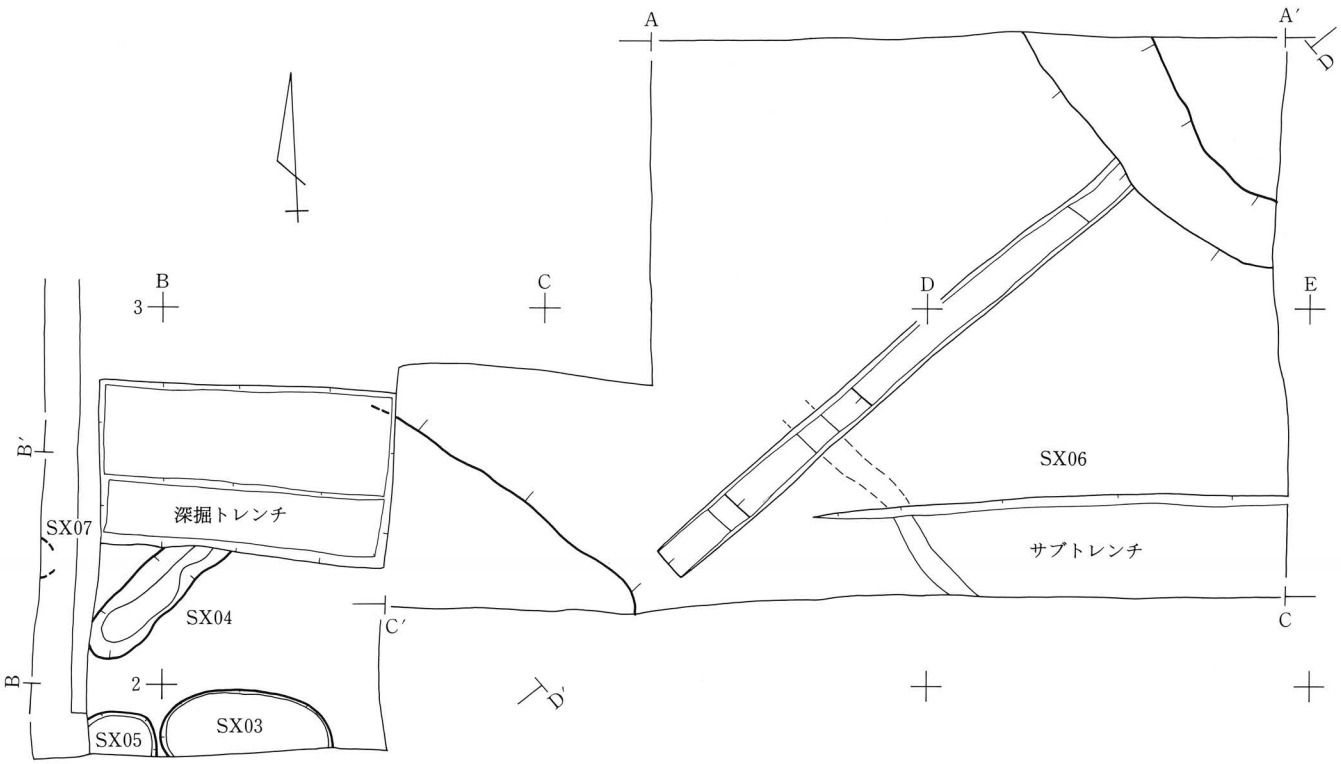
調査区西部Ｂ－１・２区に位置し、他の遺構とは重複していない。平面形は溝状に細長く、断面は「U」字形に近い。規模は2.25m以上×0.7m、深さ27cmで、長軸方向はＮ－47°－Ｅである。出土遺物は、SX07・Ｂ－１区７層と接合した深鉢（第14図７）と土製円板（第14図２）がある。時期は、縄文時代後期中葉であろう。

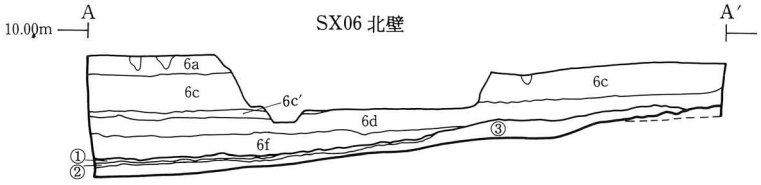
SX05（第13図）

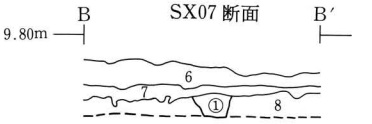
調査区西部Ａ－１区に位置し、他の遺構とは重複していない。平面形は円形とみられ、底面は平坦である。規模は、1.22m×0.55m以上、深さ９cmである。出土遺物は縄文土器片が少量あり、そのうちの１点がSX03・07などと接合している（第14図４）。縄文時代後期中葉であろう。

SX06（第12図）

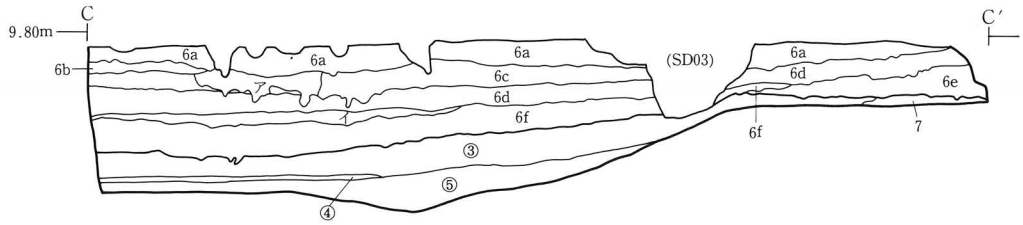
調査区中央部で検出した、溝状の凹地である。他の遺構とは重複していない。規模は、長さ4.5m以上、幅約10m前後、深さ1.33mで、方向はおよそＮ－48°－Ｗ前後である。最深部は中央よりが西側にあり、底面で鉄分集積層がみられる。内部には６層が厚く堆積して細分が可能であるが、下部ではSX06独自の堆積層がある。堆積層は総じて、西側が粘性が強く、東側は砂質である。明確な砂層の形成は希薄のようである。西壁寄りで縄文土器が少量、炭化物の集中個所が１ケ所ある。東側では遺物は出土していない。第14図６はSX06内6f層出土の深鉢口縁部破片である。初期の段階では流路であったものが、やがて湿地帯に変化したものと予想している。時期は底部で遺物は出土

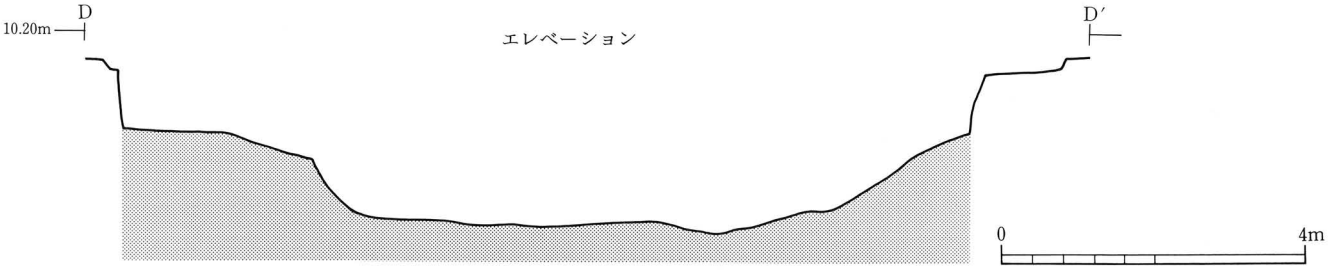






① 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト

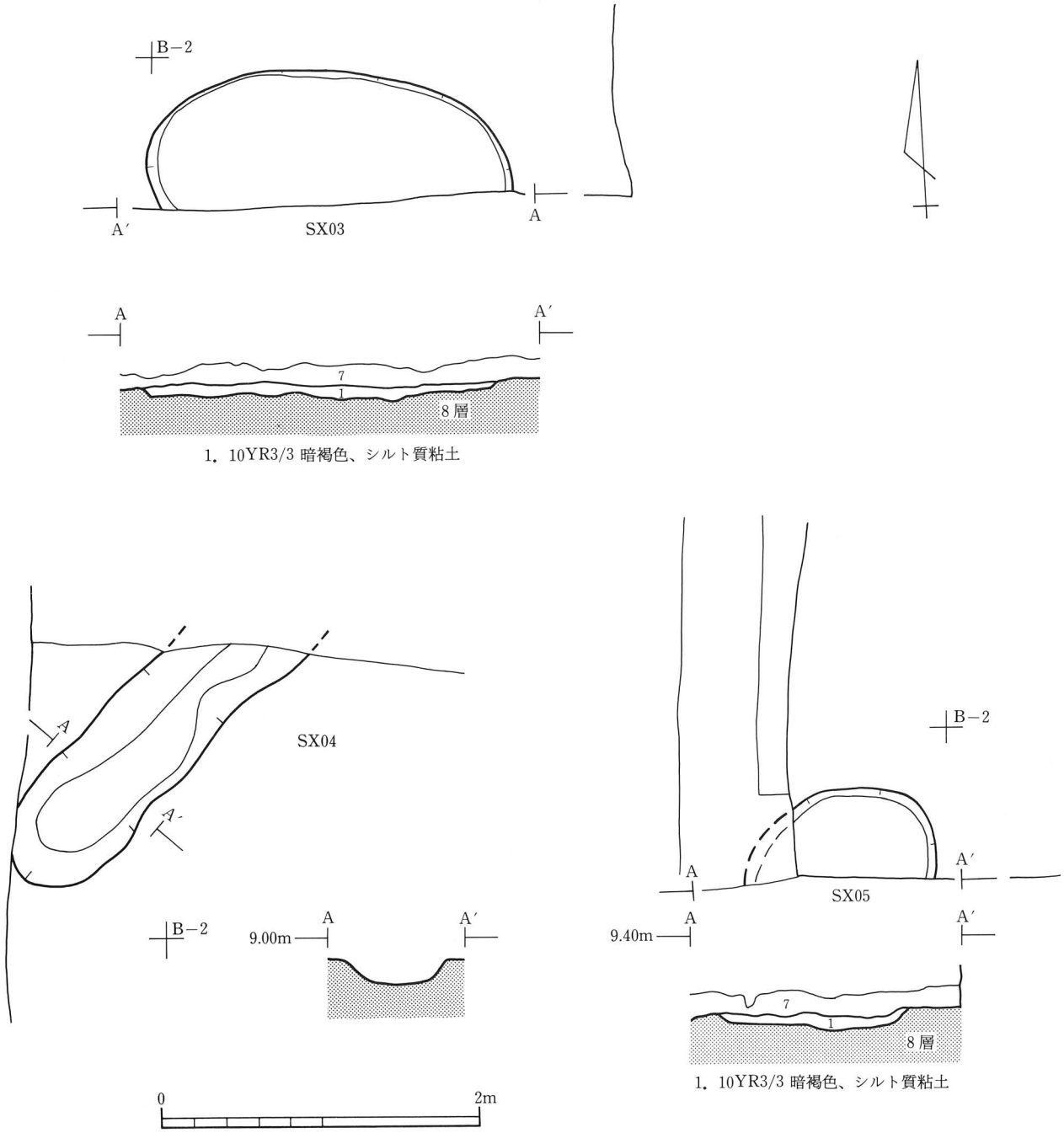




SX06 注記表

層名	特　　徴	備　考	層名	特　　徴	備　考
①	10YR 3/4 暗褐色シルト質粘土	北、砂を含む	④	10YR 3/4 暗褐色粘土	南
②	10YR 3/4 暗褐色粘土	北	⑤	10YR 3/4 にぶい黄褐色粘土	南、炭化物
③	10YR 3/4 暗褐色粘土質シルト	南・北、砂を含む			

第12図　8層上面遺構図



第13図　性格不明遺構平面・断面図

していないが、他の遺構と同じ縄文時代後期頃のものであろう。

SX07（第12図）

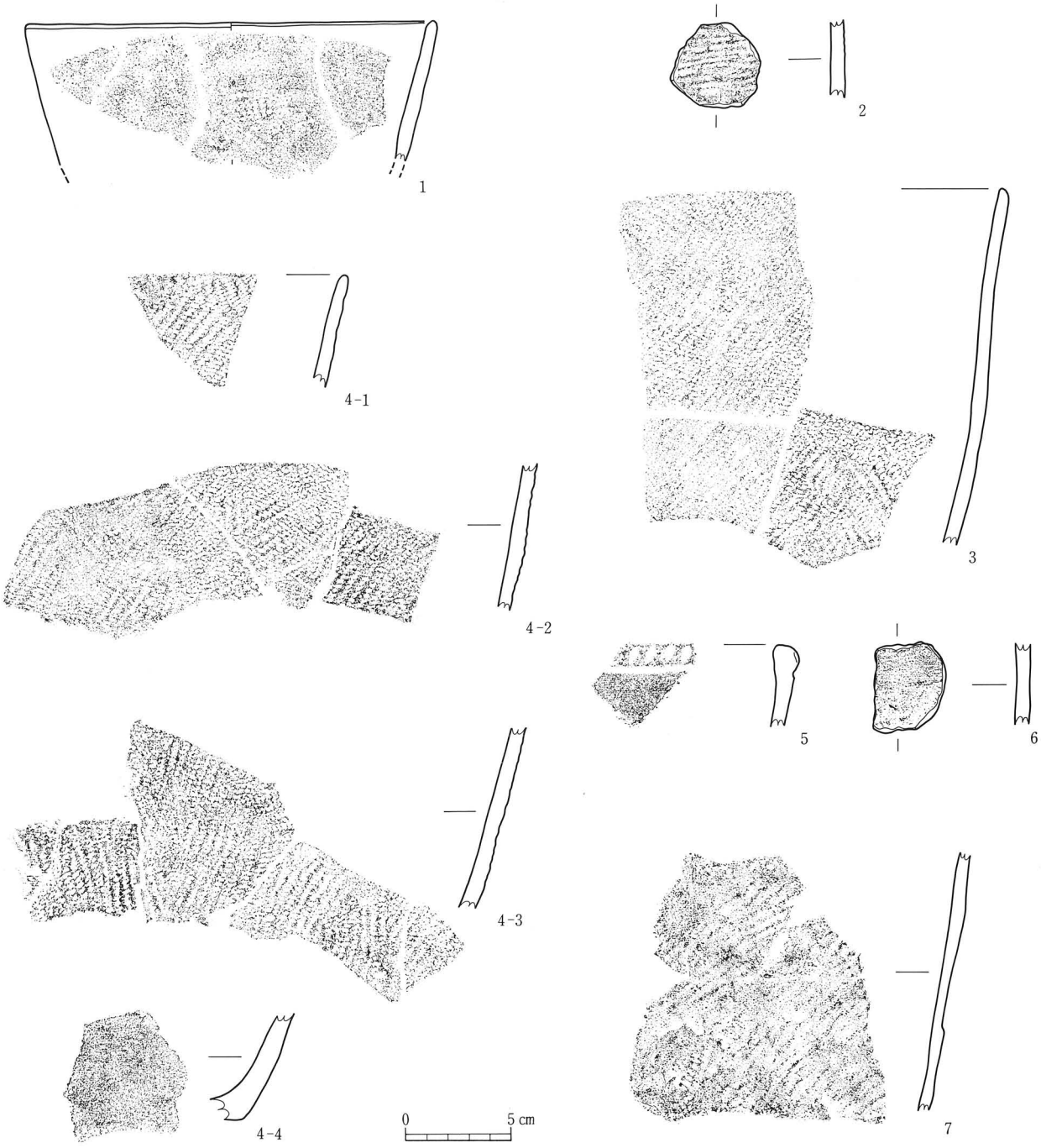
調査区西部Ａ−２区に位置し、調査区西壁断面で確認した遺構である。規模は明確でないが、西壁面では上幅53cm、深さ28cmである。ピットあるいは土坑の可能性がある。出土遺物には縄文土器があり、SX03･05などと接合する深鉢（第14図４）がある。他に図示できたのは、第14図７の深鉢体部片がある。時期は、縄文時代後期中葉であろう。

（６）基本層出土遺物

ここでは遺構以外の基本層出土遺物について、層位別に述べる。

＜２層＞（第11図４）

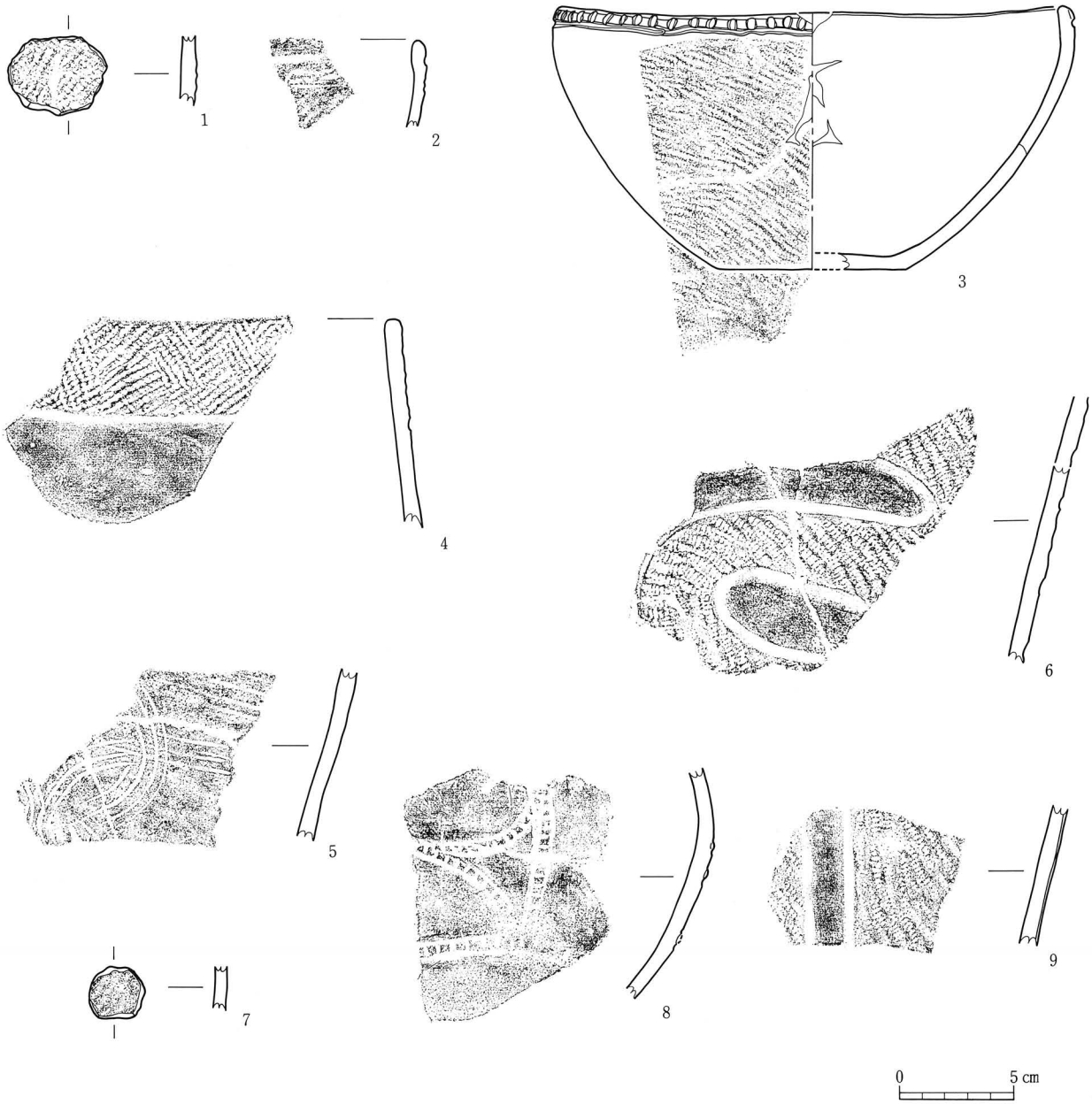
２層では陶磁器・鉄片が出土している。陶器には、志野皿？、瀬戸・美濃灰釉端反皿（大窯期）、小野相馬窯の可



番号	遺物番号	地区・遺構	層位	種類・器種	特徴	写真
1	90・92	SX03	埋１層	縄文土器　深鉢	小型、LR 縄文？　A-2 区７層と接合、口径19.2cm、器高6.6cm	18－４
2	94	SX04	埋１層	土製品　円板状土製品	土器転用、無節縄文か、重さ14.7g	17－16
3	66・93・100	B-1 区　SX04	埋１層	縄文土器　深鉢	RL 縄文（０段多条）、異方向縄文、SX07 や B-1 区（７層）と接合	18－９
4	92・94・100	SX03・05・07	埋土	縄文土器　深鉢	A-1 区（64）・A-2 区（90）とも接合、のちに第14図３と同一個体と判明	18－８
5	95	SX06	③層	縄文土器　深鉢？	口縁部肥厚、沈線、刻文帯	18－７
6	99	SX06 内	6f 層	土製品　円板状土製品	未成品？、無文帯部を転用、重さ12.5g	17－17
7	100	SX07	埋１層	縄文土器　深鉢	LR 縄文か、器面荒れている	18－３

第14図　縄文時代出土遺物(1)

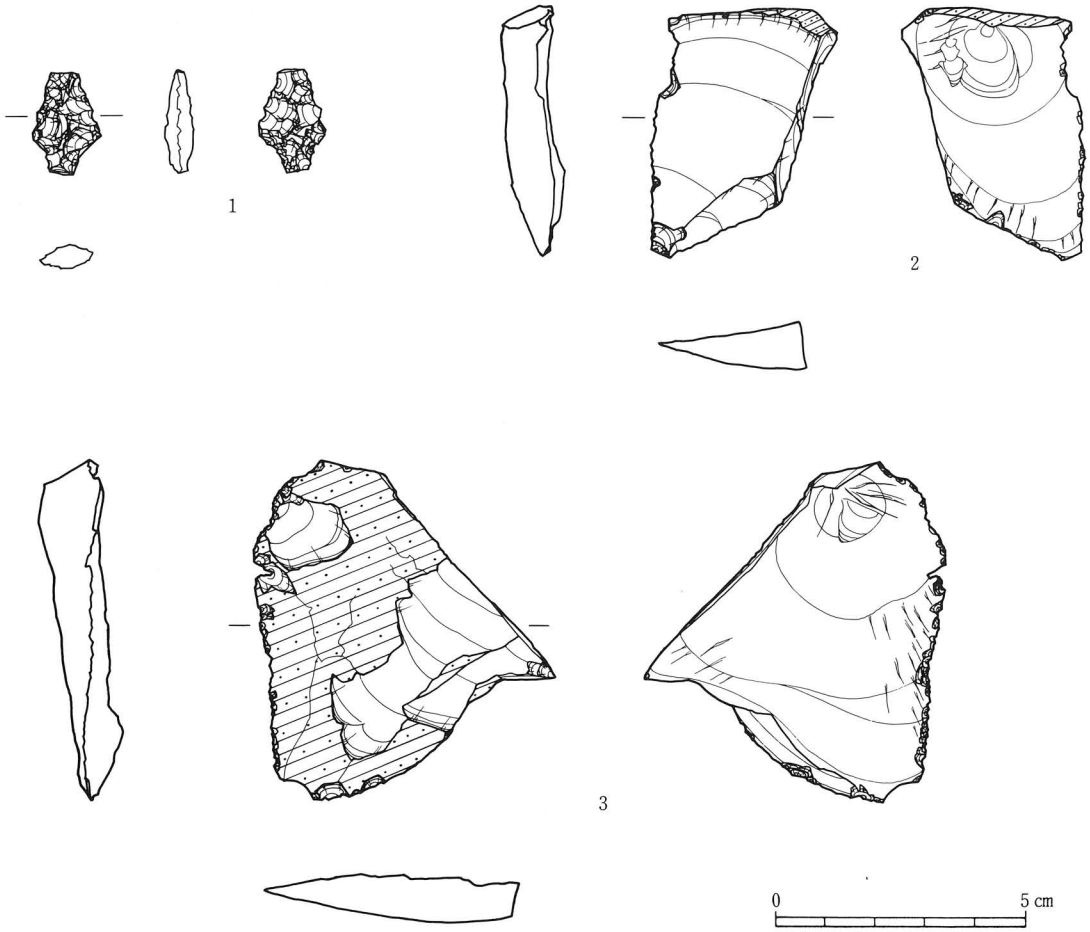
能性のある碗、産地不明の擂鉢（無釉？）などがある。磁器では、肥前の染付皿・中国青磁端反皿などが出土している。これらの陶磁器は、中世～近世の時期のものであるが、小片のため図示できない(写真17)。図示できたものは、第11図４の瓦質土器で小型鉢と考えられる。他に、少量の土師器、須恵器片がある。鉄製品は、鉄滓？と角柱



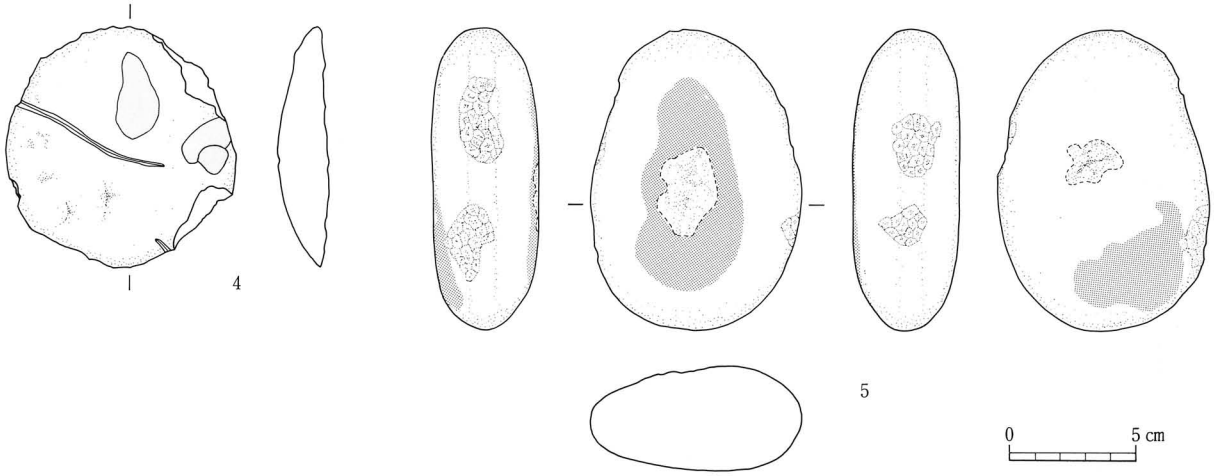
番号	遺物番号	地　区・遺　構	層位	種　類・器　種	特　　徴	写　真
1	90	A-2 区	7 層	土製品　円板状土製品	土器転用、重さ9.8g LR 縄文	17－18
2	75	B-1 区	7 層	縄文土器　深鉢	平行沈線、単節縄文か	17－15
3	75	B-1 区	7 層	縄文土器　浅鉢	口縁部に刻文帯、RL 縄文（０段多条）、口径22.6cm、器高11.8cm	18－１
4	66	B-1 区	7 層	縄文土器　壺	RL 縄文（磨消縄文帯）、異方向縄文	17－13
5	78	B-2 区	7 層	縄文土器　深鉢	櫛歯状文	17－14
6	78	B-2 区	7 層	縄文土器　深鉢	入組文？　LR 充塡縄文（０段多条）	18－２
7	80	B-2 区	7 下部	土製品　円板状土製品	土器転用、小型、重さ4.2g　単節	17－19
8	82	B-2 区	8 上面	縄文土器　深鉢？	刻文帯、地文なし	18－５
9	98	B-3 区	8 上面	縄文土器　深鉢	垂下する無文帯、LR 縄文（０段多条）	18－６

第15図　縄文時代出土遺物(2)

状のもの（釘？）の２点がある。また、２層か３層か帰属が不明確の鉄製品（刀物類？）が１点ある。

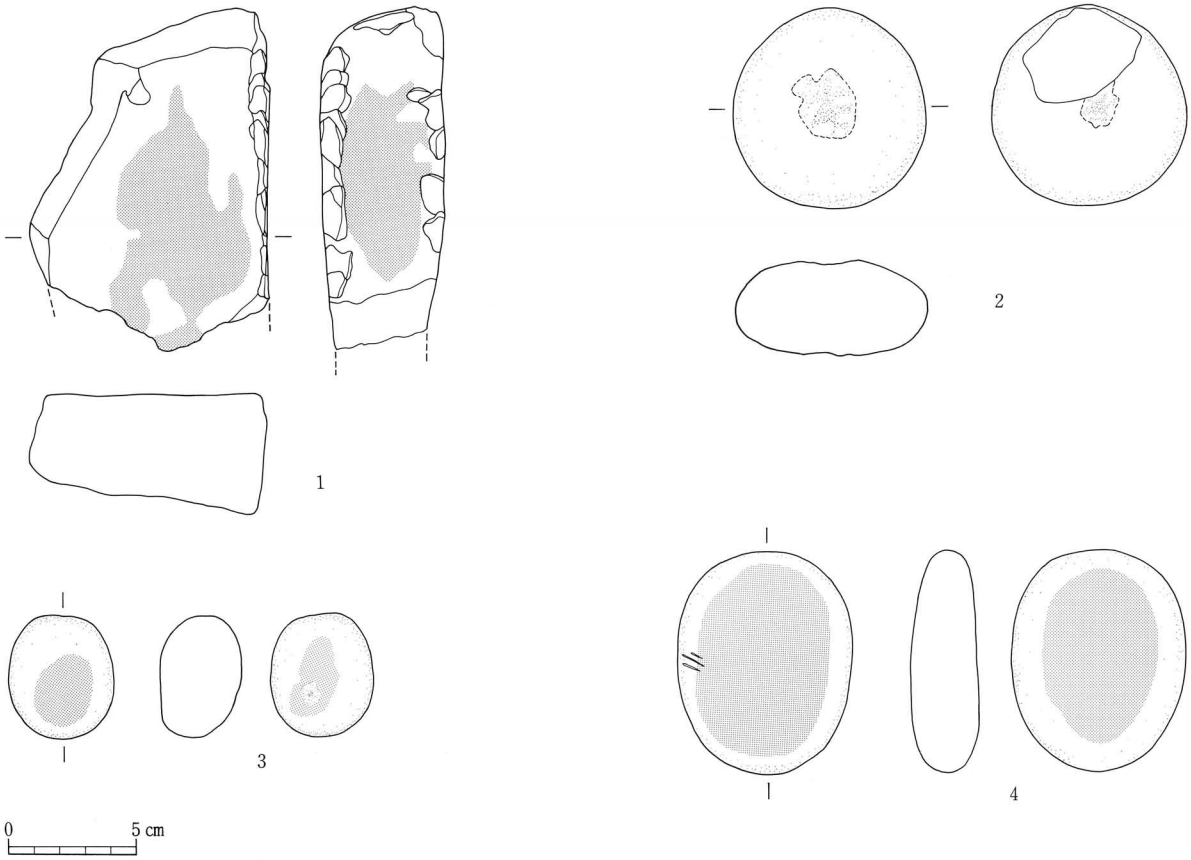


番号	遺物番号	地　区	層位	種　類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備　考	写　真
1	26	C-3 区	4 層	石　鏃	20.0	13.5	5.2	1.2	有茎、欠損（SX02 上）	18－16
2	2	A-1 区　側溝	7 層	微細剥離のある剥片	52.0	31.0	11.0	15.2		18－17
3	2	A-1 区　側溝	7 層	微細剥離のある剥片	66.5	57.0	9.8	34.4	折れ	18－18



番号	遺物番号	地　区・遺　構	層位	種　類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備　考	写　真
4	62	B-3 区　SD03	埋土	線刻礫	9.5	9.0	2.0	164.0	削り痕？　3ヶ所あり	18－13
5	47	C-4 区	5 層	凹石＋磨石＋高支石	12.0	8.2	4.2	520.3		18－14

第16図　縄文時代出土遺物(3)



番号	遺物番号	地区・遺構	層位	種類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考	写真
1	87	C-4区	6a層	砥石	13.6	9.4	4.8	882.2	欠損、２面使用	18−15
2	91	A-2区	7層	凹石	8.0	7.6	3.7	235.9	多孔質	18−11
3	91	A-2区	7層	磨石	4.9	4.1	3.2	82.0	小型	18−10
4	85	B-2区	7下部	磨石	8.8	6.9	2.6	248.9	擦痕あり	18−12

第17図　縄文時代出土遺物(4)

＜３層＞

３層では、土師器片が少数出土したに過ぎない。

＜４層＞（第12図５～７）

４層では、土師器・須恵器・赤焼土器・石器が出土している。小片ばかりであるが、上下の層に比べ、遺物の量は多い。図示できたものは、第11図５の須恵器坏、同図６の須恵器長頸瓶(内面に茶色漆付着)、同図７の赤焼土器高台坏がある。前述の長頸瓶は、漆容器だった可能性がある。この他、有茎の石鏃が１点出土している(第12図１)。これらの遺物は、いずれもSX02上で出土したものである。

＜５層＞（第11図８～11）

５層では、土師器・須恵器・埴輪・石器が出土している。第11図８は埴輪片で、タテハケ調整が観察される。層の帰属が不明確だが、５層と思われる。同図９は須恵器坏、10は土師器坏でいずれも底部回転糸切りである。また、同図11はミニチュアの鉢（手づくね）であるが、５層か6a層か帰属が明確でない。

＜６層＞（第14図６・第17図１）

６層は７層に細分されるが、遺物が出土したのは6a層･6f層に限られる。6a層では微細剥離のある剥片１点、敲石１点、砥石１点、6f層では土製品１点が出土した。他に遺物は出土していない。第14図６は縄文土器の無文部を転用した円板状土製品であり、その未成品と考えられる（SX06内)。第17図１は板状の石を利用した砥石である。２面を使用している。

＜７層＞（第15図１～７）、（第16図２・３）

７層は明瞭な縄文時代後期の遺物包含層である。本層では縄文土器のほか、土製品２点、凹石１点、磨石２点、敲石１点、凹石＋磨石＋敲石１点、フレーク２点が出土している。これらは、いずれも調査区西端（SX06 西側）より出土したものである。第15図１・７は円板状土製品である。同図２の深鉢は、不明瞭な平行沈線文がみられ、下半には縄文が施文されている。３は、口縁部に刻目帯をもつ浅鉢である。４は、口縁部が内傾する壺と考えられる。地文は方向を変えて、羽状風の効果を持たせている。５は櫛歯状文の深鉢で、平行と孤状の組み合わせで文様を描いている。６は、入組文をもつ深鉢土器と考えられる。図示しなかったものは、地文のみの破片が多い。

＜８層＞（第15図８・９）

８層上面で、縄文土器が２点出土している。層中からは、遺物が出土していない。第15図８は壺の破片とみられ、体部には直線と曲線を組み合わせた刻目文様が巡ぐるようである。地文は見られない。同図９は、地文に垂下する無文帯がみられるものである。時期的に少し古いものかもしれない。

６　ま　と　め

１．３層上面（西部では４層上面）で検出した SD01･SD02･SX01 は、内部に黒褐色土が堆積している点で共通し、SD01 と SD02 では少ないながら中世の遺物が出土している。したがって、これらの遺構は中世の時期と考えられる。最も新しい SD01 に関しては、瓦質土器が出土していることから戦国期以降と予想される。

２．５層上面の SX02、6a 層上面の小溝状遺構群は、畑の耕作と関連する遺構の可能性がある。SX02 については平安時代で、灰白色火山灰降下以前の時期に比定できる。小溝状遺構とこれと関連するとみられる SD03 については、出土遺物から古墳時代から平安時代の間の時期になるが、特定できない。

３．７層は、明確な縄文時代後期の遺物包含層であることが判明した。８層上面検出の SX03～07 も包含層と同じ時期の遺構と考えられる。遺物の詳細な時期は７層の出土土器から考えると、入組文・刻目文様・異方向縄文・０段多条縄文等の特徴から後期中葉とみなすことができよう。近接する遺跡で後期中葉に属する遺跡には太白区伊古田遺跡があるが、文様に大きな特徴の差があって本遺跡より古い（渡部紀：1995）。７層出土土器と類似した内容をもつ例として、気仙沼市田柄貝塚第III群土器（手塚他：1986年）が指摘できよう。また、後出の瘤の付く土器はみられないことから、単一時期とみられる。前述の田柄貝塚第三群土器は、宝ケ峯式（伊東：1957）に属し、関東地方の加曽利ＢII式におよそ併行すると考えられている。従って、７層出土土器や８層上面検出の遺構の時期も、同時期と考えてよいであろう。

引用・参考文献

伊東信雄：「古代史－縄文式文化の変遷」『宮城県史』１　宮城県史刊会　1957年
手塚　均他：『田柄貝塚Ⅰ　遺構・土器』宮城県教育委員会（宮文報第111集）　1986年
渡部　紀他：『伊古田遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書III－』　仙台市教育委員会　1995年

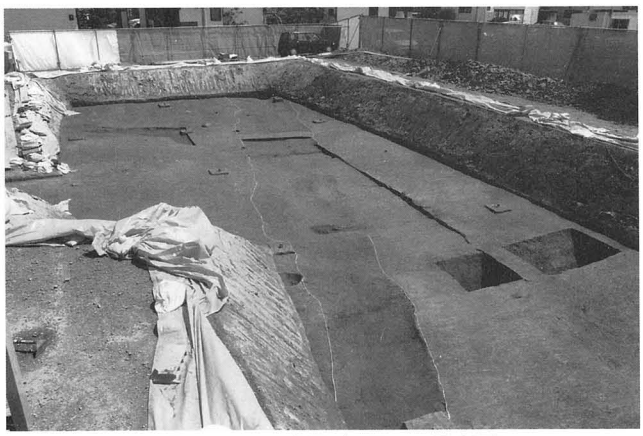


写真１　SD01 全景（３層・４層上面）

写真２　SX01 全景

写真３　SK01 全景

写真４　SD02 全景

写真５　SX02 確認状況（南部）

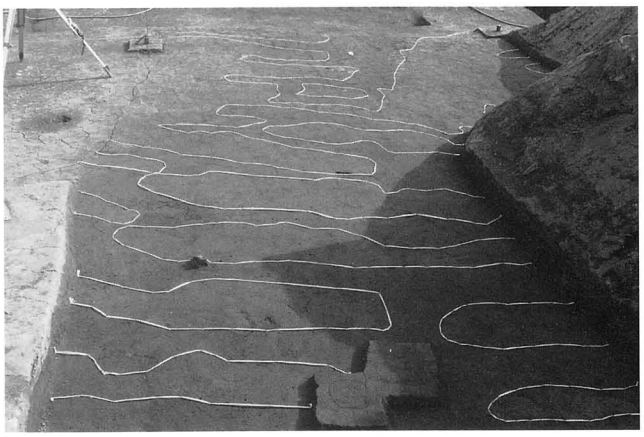


写真６　SX02 確認状況（北部）

写真７　SX02 全景

写真８　６ａ層上面の調査

写真９　SD03 全景

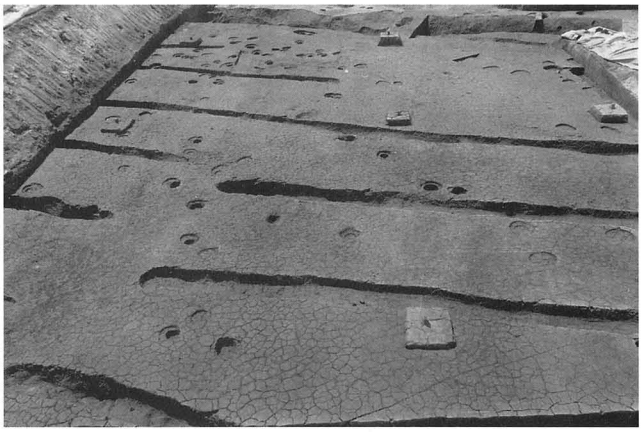


写真10　小溝状遺構（Ａ群）

写真 11　小溝状遺構（Ａ～Ｅ群）

写真 12　小溝状遺構（Ｆ群）

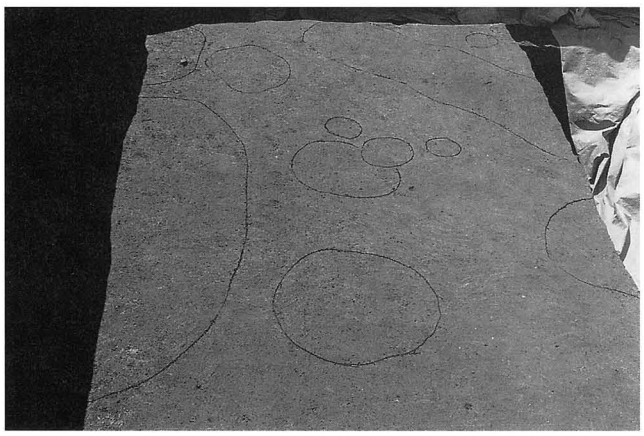


写真 13　SX03～05 確認状況（８層上面）

写真 14　SX06 全景

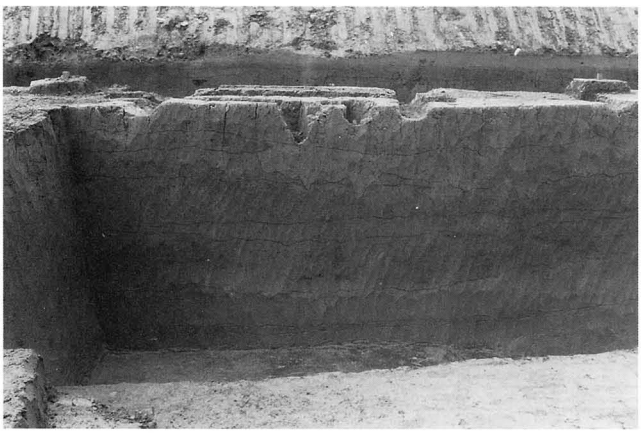
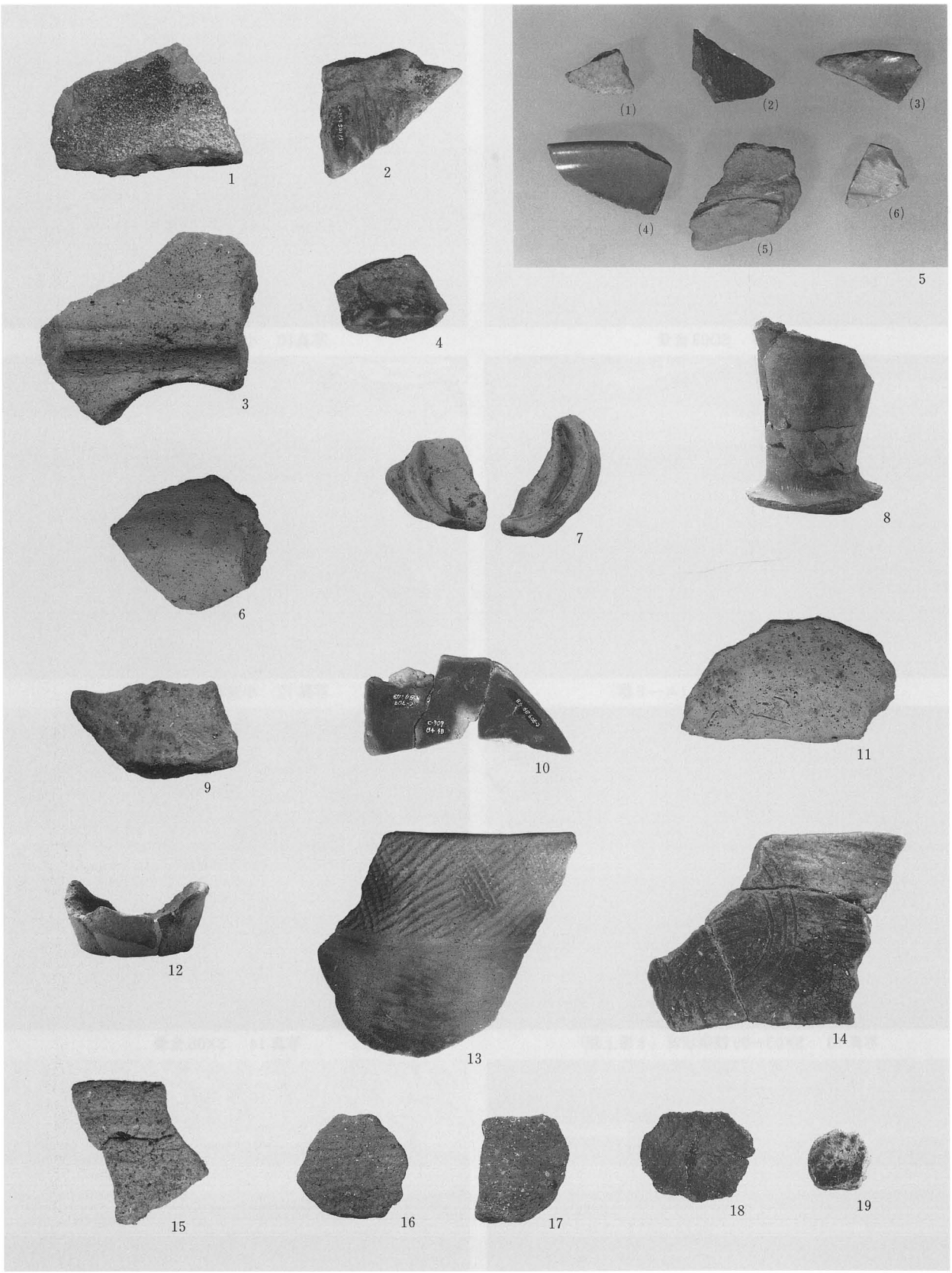


写真 15　深掘区南壁基本層と SX06

写真 16　遺物包含（７層）・SX07 断面



番　号	遺物番号	出土地・層位	種　類	器　種	産　地	特　　徴	時　期
5－(1)	4	北部　2層	陶器	皿？	美　濃	志野（長石釉）	16C末～17C初
5－(2)	6	北部　2層	陶器	擂鉢	不　明	無釉、おろし目6条？	近世
5－(3)	5	北部　2層	陶器	端反皿	瀬戸・美濃	灰釉、大窯Ⅰ期か	16C
5－(4)	6	北部　2層	磁器	碗	中　国	青磁、無文、端反	14～15C
5－(5)	6	北部　2層	陶器	碗？	小野相馬？	釉色は白濁色～淡青色	18C？
5－(6)	5	北部　2層	磁器	碗？	肥　前	染付	近世

写真17　出土遺物（1）

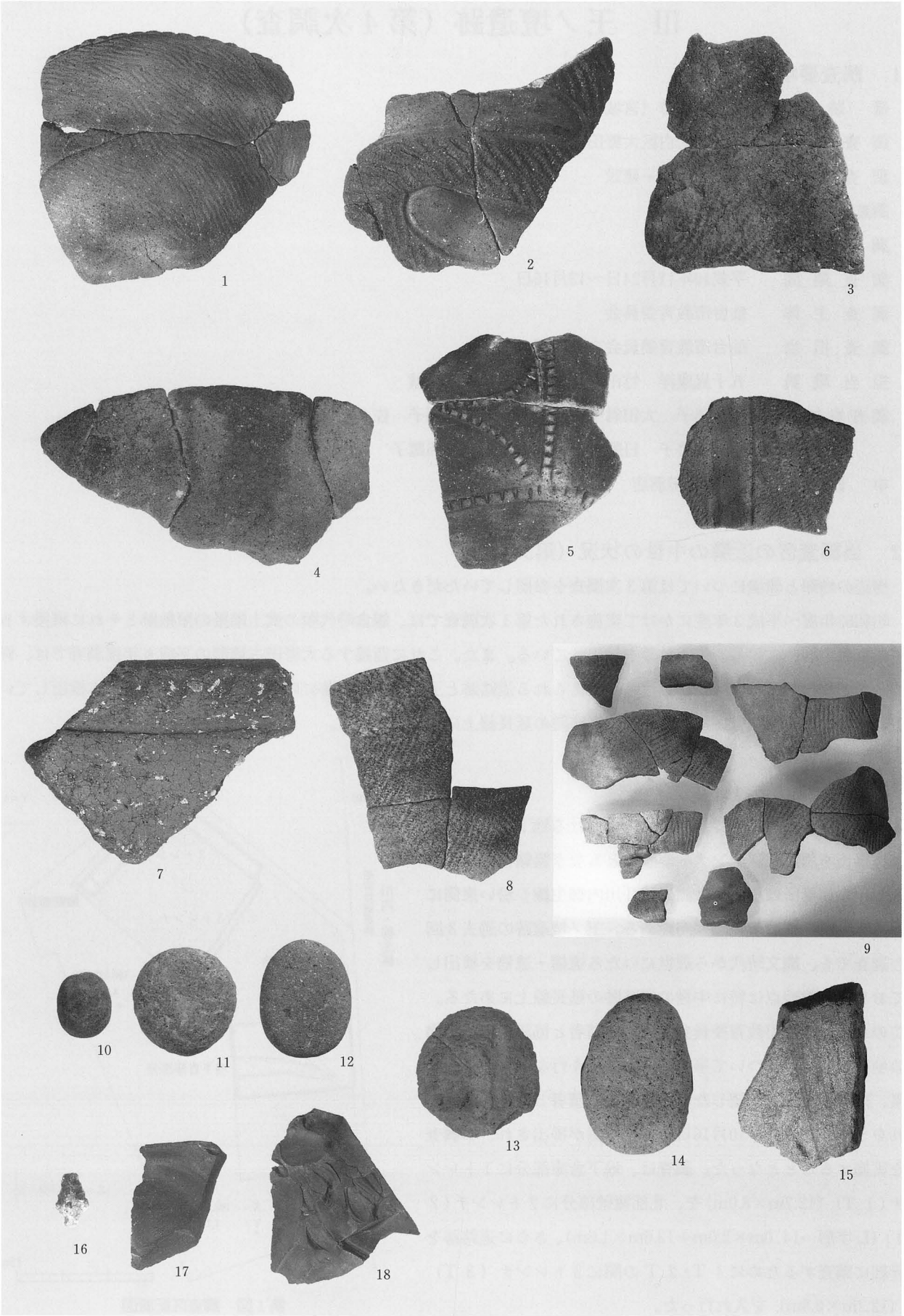


写真18　出土遺物（2）

Ⅲ　王ノ壇遺跡（第４次調査）

１　調査要項

遺　跡　名	王ノ壇遺跡（宮城県遺跡番号　01428）
調 査 地 点	仙台市太白区大野田字北屋敷17－１，18－１
調 査 原 因	配送センター建設
調査対象面積	747m²
調 査 面 積	160m²
調 査 期 間	平成10年11月24日～12月16日
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育委員会文化財課
担 当 職 員	五十嵐康洋　竹田幸司　篠原信彦　渡邊誠
調査参加者	阿部洋子　太田君子　小野辰夫　小林国子　佐々木志津子　菅井君子　鈴木みよ子 原田由美子　日野きみ子　本郷正　渡部麗子
申　請　者	（合）吉田酒店

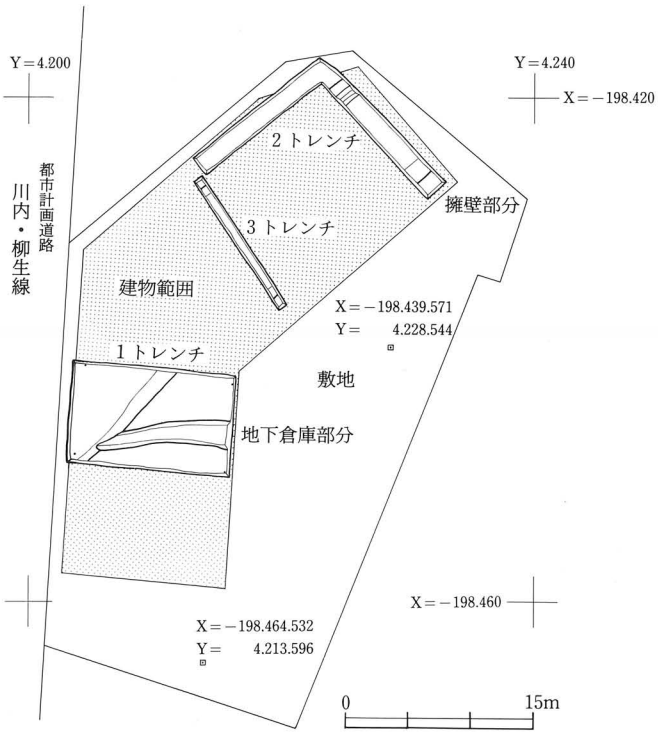
２　当調査区の近隣の中世の状況（第21図）

周辺の地形と環境については第３次調査を参照していただきたい。

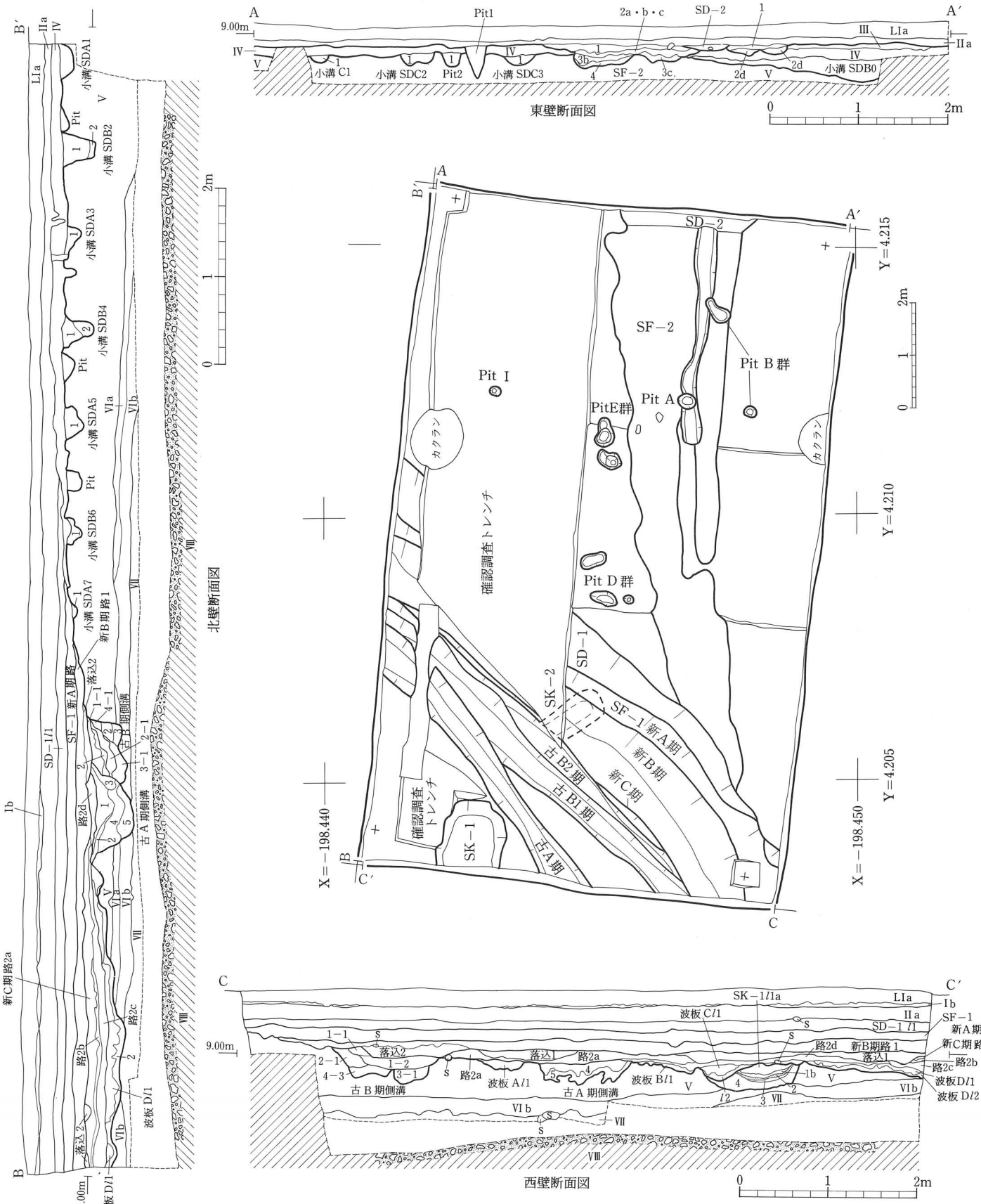
昭和63年度～平成３年度にかけて実施された第１次調査では、鎌倉時代頃の武士階級の屋敷跡とそれに隣接する宗教施設の跡、火葬墓、道路跡等を検出している。また、これに西接する大野田古墳群の平成９年度調査では、両側側溝と波板状凹凸をもつ幹線道路と考えられる道路跡と王ノ壇の屋敷跡に向かって延びる枝道を２本検出している。今回の第４次調査区は、この幹線道路跡の延長線上に位置している。

３　調査の方法（第１図）

平成10年７月１日付で、上記地内における地下１階地上２階建事務所酒類配送センター建設にともなう協議書が提出された。この場所は、都市計画道路「川内柳生線」沿い東側に位置し、王ノ壇遺跡の範囲内である。王ノ壇遺跡の過去３回の調査でも、縄文時代から近世にいたる遺構・遺物を検出しており、建設地点は特に中世の道路跡の延長線上にあたる。このため、仙台市教育委員会では、申請者と協議の上、建物の地下倉庫部分について事前に確認調査を行なった。その結果、道路跡などを確認したので、再度申請者と協議した。それをうけ、平成10年10月16日付で発掘届が提出され、本調査を実施することとなった。調査は、地下倉庫部分に１トレンチ（１Ｔ）（12.7m×8.0m）を、北部擁壁部分に２トレンチ（２Ｔ）（Ｌ字形…14.0m×2.0m＋12.6m×1.6m）、さらに道路跡を詳細に調査するために１Ｔ・２Ｔの間に３トレンチ（３Ｔ）（12.2m×0.8m）を入れ行った。



第１図　調査区配置図



第２図　1T Ⅲ層上面遺構配置図及び断面図

表１
１トレンチ　北・西・東壁　土層註記

遺構	層位	土色		土性	備考
基本層	Ⅰa	5Y4/2	灰オリーブ色	粘土	現代の水田作土
	Ⅰb	5Y4/2	灰オリーブ色	粘土	現代の水田作土床土 酸化鉄の集積
	Ⅱa	5Y5/1	灰色	シルト質粘土	酸化鉄の斑文・マンガン粒・φ1～2㎜の小礫を含む 底面に酸化鉄の集積 旧耕作土
	Ⅱb	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質粘土	酸化鉄の斑文・マンガン粒・φ1～2㎜の小礫を含む 底面に酸化鉄の集積 旧耕作土
	Ⅲ	10YR5/1	灰褐色	粘土質シルト	酸化鉄の斑文あり 1Tで確認 耕作土？SF－1・2道路跡などの検出面
	Ⅳ	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	マンガン粒を多く含む 1Tで確認
	Ⅴ	10YR5/4	にぶい黄灰色	粘土質シルト	マンガン粒多く含む 下部は黄色味がかり2.5Y6/4にぶい黄色になる 小溝状遺構群などの検出面
	Ⅵ	10YR3/4	暗褐色	粘土	1・2次調査の縄文時代(後期中葉)の包含層 2層に分けられ、Ⅵb層がやや色が暗い
	Ⅶ	10YR4/4	褐色	砂	部分的に黄色味がかり2.5Y5/1黄灰色になる
SD－1	1	2.5Y5/1	黄灰色	シルト質粘土	酸化鉄の斑文・マンガン粒・φ1～2㎜の小礫を含む 底面に酸化鉄の集積 底面の一部に砂層あり 自然堆積
SD－2	1	2.5Y5/2	暗灰黄色	粘土質シルト	Ⅱ層を主体 φ1～2㎜の小礫を多く含む Ⅱ層段階の耕作に関わる土

SF－１ 土層註記

時期	遺構	層位	土色		土性	備考
新A期	路層		2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	にぶい黄色砂(新C期路２層と同じ)・Ⅴ層・φ1～2㎜の小礫を粒状に含む しまりあり 人為堆積(路盤敷設)
新B期	路層	1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	Ⅴ層・にぶい黄色砂(新C期路２層と同じ)をブロック状に含む しまりあり 人為堆積(路盤敷設)
新C期	東落込１	1	10YR5/2	灰黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄色砂(新C期路２層と同じ)を縞状に含む しまりあり 人為堆積(路面の補修跡)
	東落込２	2	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	Ⅳ層ブロック・路2aの粒を含む 崩落土あるいは埋め戻し土
	路層	2a	2.5Y6/4	にぶい黄色	砂	黄灰色粘土質シルト(中央部は荒砂)との版築状の互層 しまり極めてあり 底面に酸化鉄の集積 人為堆積(路盤敷設)
		2b	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質砂	しまりあり 人為堆積(路盤敷設)？
		2c	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂	酸化鉄の帯が縞状に観察される 他の路層に比べて軟らかくサクサクしている 人為堆積(路盤敷設)
		2d	2.5Y5/1	黄灰色	砂	黄灰色荒砂との版築状の互層 しまり極めてあり 人為堆積(路盤敷設)
	波板B	1	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	黄褐色荒砂・Ⅴ層と波状に混じる 底面に酸化鉄・マンガン粒の集積あり しまり極めてあり 底面は極めて硬い
	波板C	1	2.5Y6/2	灰黄色	砂	黄褐色荒砂・黒色粘土(SK－1埋土) 波状に混じる しまり極めてあり
		2	2.5Y2/1	黒色	粘土	SK－1埋土主体 灰黄色砂を粒状に含む 底面に酸化鉄・マンガン粒の集積あり しまりあり 底面は極めて硬い
	波板D	1	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂	黄灰色荒砂(Ⅴ層)と波状に混じる しまり極めてあり
		2	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	Ⅵ層を粒状に含む しまりあり 底面は極めて硬い
		3	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	Ⅵ層主体 2.5Y5/2暗灰黄砂を粒状に含む 底面に酸化鉄・マンガン粒の集積あり しまりあり 底面は極めて硬い
古A期	側溝	1	10YR6/2	灰黄褐色	荒砂	褐灰色粘土と波状に混じる 人為堆積(埋め戻しの土)
		2	10YR4/1	褐灰色	粘土	灰黄褐色砂を粒状に含む しまりなし 崩落土
		3	2.5Y5/2	暗灰黄色	粘土	Ⅳ・Ⅴ層・黄灰砂をブロック状に含む 崩落土
		4	2.5Y5/1	黄灰色	シルト質砂	黄褐色砂を下面に合わせて波状に含む 自然堆積？
		5	10YR4/4	褐色	粘土	Ⅳ・Ⅴ層をブロック状に含む 崩落土
古B期	波板A	1	2.5Y7/4	浅黄色	砂質シルト	Ⅴ層・暗灰黄色シルト質粘土・にぶい黄色砂と波状に混じる しまり極めてあり 底面に酸化鉄・マンガン粒の集積あり 極めて硬い
	１期側溝	1	10Y4/1	褐灰色	粘土	Ⅴ層・にぶい黄色粘土・黒褐色荒砂をブロック状に含む 人為堆積
		2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	にぶい黄色砂を層状に含む 水成堆積(水流の影響あり)
	２期側溝	1	10YR3/1	黒褐色	シルト質粘土	Ⅳ層主体 Ⅴ層を粒状に含む 崩落土 しまりあり
	３期側溝	1	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂	黄灰荒砂をブロック状に含む 人為堆積(埋め戻し土)しまりなし
	４期側溝	1	10YR3/1	黒褐色	シルト質粘土	Ⅳ層主体 Ⅴ層を粒状に含む 崩落土
		2	10YR3/2	黒褐色	荒砂	暗灰黄砂と互層 水成堆積(水流の影響あり)
		3	10YR4/3	にぶい黄橙色	粘土	Ⅴ層主体 褐灰砂質シルトをブロック状に含む 人為堆積(埋め戻し)

４　基本層序（第２図）

Ⅰ層は現代の耕作土、Ⅱ層は旧耕作土、Ⅲ層は道路跡等の遺構検出面、Ⅳ層は小溝状遺構群と一連のものととらえられる。Ⅴ層は小溝状遺構群等の遺構検出面、Ⅵ層は第１次調査の縄文後期中葉（宝ケ峯期）の遺物包含層と対応する層、Ⅶ層は第１次調査の縄文時代の遺構検出面、Ⅷ層は砂礫層である。Ⅱ層より須恵器片（写真28－６・底部回転糸切りの坏他１点)、土師器片、埴輪片が、Ⅵ層より縄文土器（第18図－４）が出土している。

５　発見遺構と出土遺物（第２図）

主な検出遺構としては第１次調査及び大野田古墳群で検出した道路跡の延長部分（SF－１）とそれに取り付く枝道（SF－２）の他、溝跡２条（SD－１・２)、土坑２基（SK－１・２)、小溝状遺構群（SD－A・B・C群)、ピット等がある。この他古墳の周溝を確認しており、大野田古墳群の続き番号で27号墳とした。

（１）Ⅲ層上面検出遺構　近現代の盛土・耕作土（Ⅰ～Ⅱ層）を除去後検出

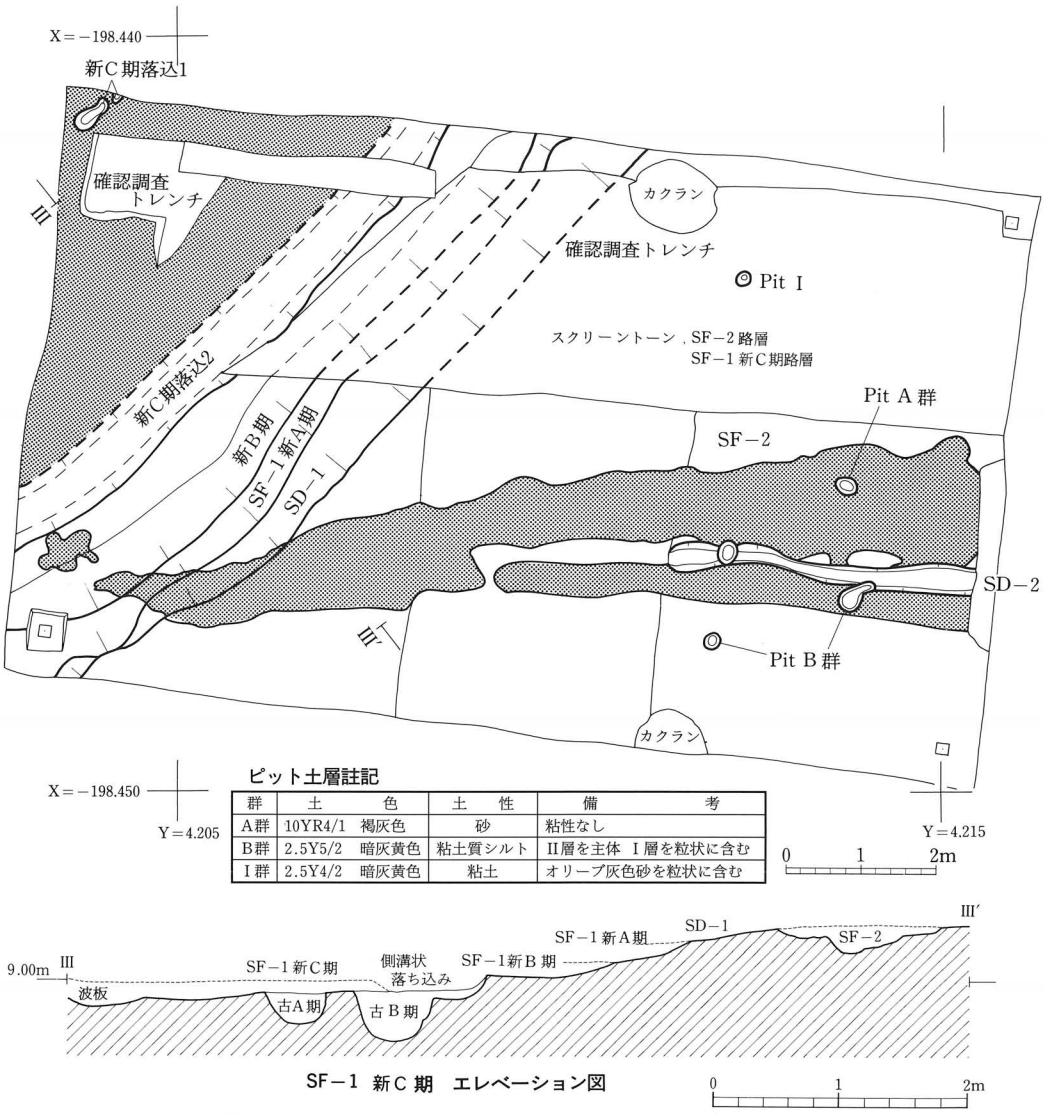
１Ｔ

SD－１溝跡（第３図）

調査区を南西から北東方向に延びる。SF－１新Ａ期路面上で検出した。SF－２を切る。方向はＮ－53°－Ｅで、SF－２を切る辺りで湾曲するように膨らむ。西側の立上がりが調査区外になるため全体の規模は分からないが深さ12cm～15cmを計る。底面はほぼ平坦で北に向かって傾斜している。断面形はⅢ形である。堆積土は、１層で自然堆積である。堆積土中に埴輪片・須恵器片（底部回転ヘラケズリ)・土師器片が出土している。

SD－２溝跡（第３図）

東側で検出した溝跡で、長さ4.3m分を確認した。SF－２を切る。調査区を東から西へ延び調査区中央でとぎれる。方向はW－４°－Nである。上幅15cm～40cm・底面幅５cm～10cm・深さ５cm～15cmを計る。底面は凹凸がある。断面形は底面の丸いＶ字形である。堆積土は、基本層II層を主体にした単一層で底面に拳大の礫を含む。堆積状況からII層時耕作に伴うと考えられる。



ピット土層註記

群	土　色	土　性	備　考
A群	10YR4/1　褐灰色	砂	粘性なし
B群	2.5Y5/2　暗灰黄色	粘土質シルト	II層を主体　I層を粒状に含む
I群	2.5Y4/2　暗灰黄色	粘土	オリーブ灰色砂を粒状に含む

SF－1　新C期　エレベーション図

第３図　SD－１・２、SF－１新A期～新C期平面図

SF－１道路跡

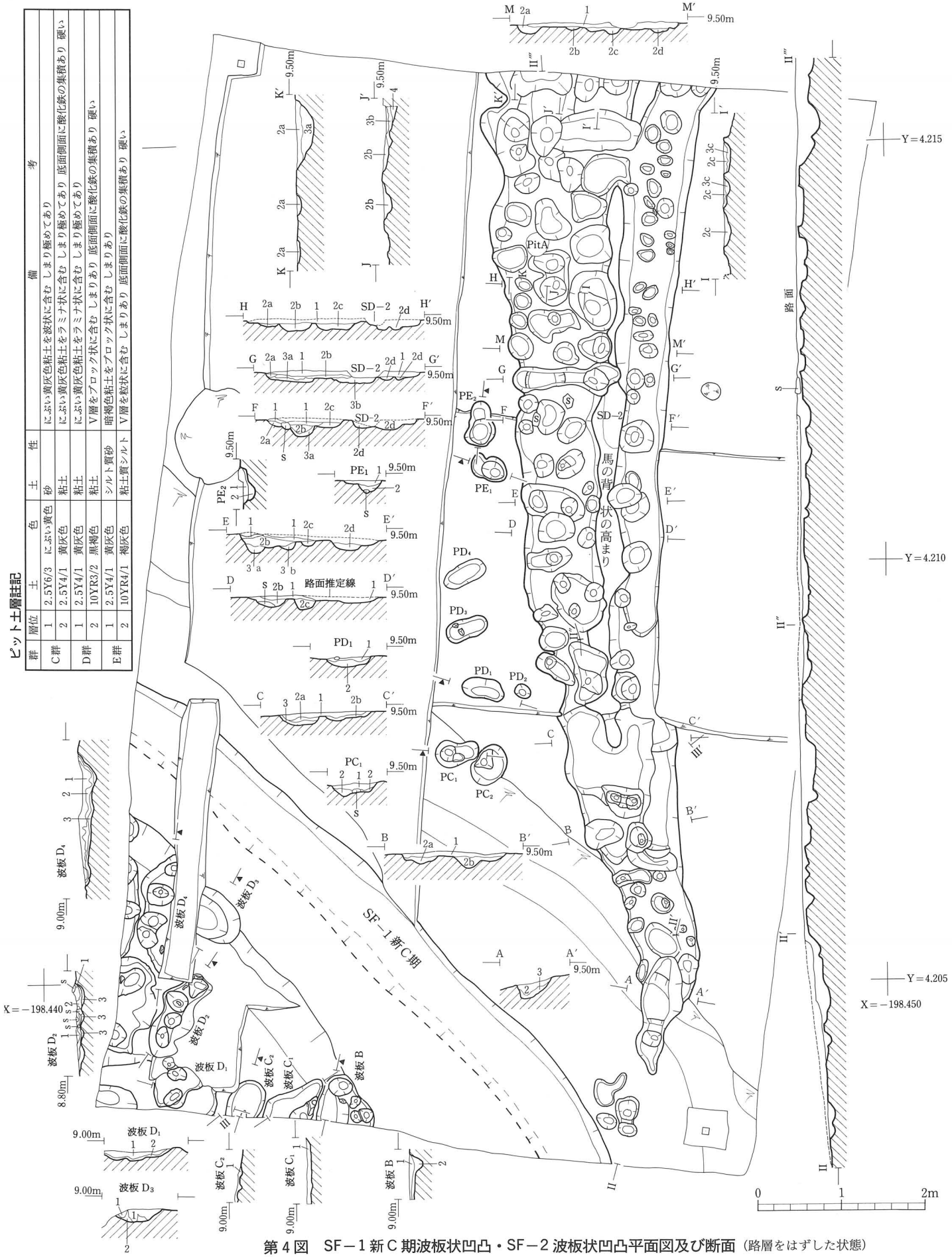
第１次調査及び大野田古墳群で検出した道路跡と一連のものである。調査区を南西から北東に延びる。SD１の埋土に覆われて、SK－１・２・小溝状遺構群を切っている。大きく五時期の変遷がとらえられた。新しいほうから新A期・新B期・新C期・古A期・古B期とした。西側が調査区外になるため路面（註１）幅などが不明である。方向は古B４期がN－48°－Eで、古B３～１期がN－45°－Eで、それ以後はN－50°－Eである。ただし、SF－２との交点付近で新C～新A期段階は膨らむように湾曲し、古A期段階は内側に抉られるように屈曲する。

（新A期段階）（第３図）

SD－１の下面で検出された。新B期の路面上面に粘土質シルトを主体とした砂混じりの厚さ10cmの路層（盛土）を施している。路面は遺構検出面より15cm低く、標高約9.3mである。平坦であり、やや南から北への傾斜がある。路層より中世陶器（写真28－３）・青磁（写真28－１）・埴輪片・土師器片が出土している。

（新B期段階）（第３図）

新A期路層の下面で検出された。新C期の路面上面に砂と基本層をブロック状にした厚さ10cmの路１層（盛土）を施してある。遺構検出面より30cm低く、標高約9.15mである。平坦であり、やや南から北への傾斜がある。路１層より土師器片が出土している。



ピット土層註記

群	層位	土色	土性	備考
C群	1	2.5Y6/3 にぶい黄色	砂	にぶい黄灰色粘土を波状に含む しまり極めてあり
	2	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	にぶい黄灰色粘土をラミナ状に含む しまり極めてあり 底面側面に酸化鉄の集積あり 硬い
D群	1	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	にぶい黄灰色粘土をラミナ状に含む しまり極めてあり
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	V層をブロック状に含む しまりあり 底面側面に酸化鉄の集積あり 硬い
E群	1	2.5Y4/1 黄灰色	シルト質砂	暗褐色粘土をブロック状に含む しまりあり
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	V層を粒状に含む しまりあり 底面側面に酸化鉄の集積あり 硬い

第４図　SF－１新Ｃ期波板状凹凸・SF－２波板状凹凸平面図及び断面（路層をはずした状態）

（新Ｃ期段階）（第３・４図）

新Ｂ期路１層の下面で検出された。基本層Ｖ層上面及び古Ａ期側溝上面に凹凸（波板状凹凸Ｂ～Ｄ群）（註２）があり、凹部に砂混じりの粘土が貼ってありその上に砂が充塡されている。さらにその上面に厚さ10～30cmに叩き締められた砂（路２層）が施してある。路２層の上面は遺構検出面より40cm低く、標高約9.05m である。東側に上幅70cm・下幅40cm・深さ13cmで逆台形を呈する側溝状の落ち込みを有する。堆積土は、ブロック状の崩落土あるいは埋め戻しの土（落込２）である。また、路面上に道路の補修の跡と思われる長楕円形のピット状の落ち込み（落込１）がある。波板状凹凸Ｂ～Ｄ群は平面形が70～200cm長楕円形で断面がＵ字形を呈し、底面に数個のピット状の落ち込みが並ぶ。底面及びピット状の落ち込み面は酸化鉄が集積し、硬く締まっている。石を横位に敷いているものもある。波板状凹凸埋土より埴輪片・土師器片が出土している。

ＳＦ－２道路跡（切り合い関係からＳＦ－１古期よりも前に記述する）（第３・４図）

ＳＦ－１から東に伸びる砂敷の道路跡である。Ｖ層上面で検出され、ＳＦ－１古Ｂ２期側溝を切り、ＳＦ－１新Ｂ期の路１層に切られる。ＳＦ－１古Ｂ１期から新Ｃ期との関係は不明である。幅130cm～200cmの範囲に厚さ５～10cmの砂が非常に硬く締まった状態で堆積（１層）し、路面を形成している。路面は中央部がやや高く蒲鉾状を呈する。その層を剝がすと中央よりやや南側が馬の背状の高まりとして残る。その馬の背の北側には波板状凹凸が、南側は工具痕とみられる小ピットが検出された。それぞれの凹部には砂を主体とする埋土が硬く締まった状態で充塡されている。波板状凹凸の底面は酸化鉄の集積があり、硬く締まっている。一部拳大の石が横位で詰まっている。１層から土師器（第18図２）・埴輪片が出土している。道路の方向はＷ－１°－Ｎである。

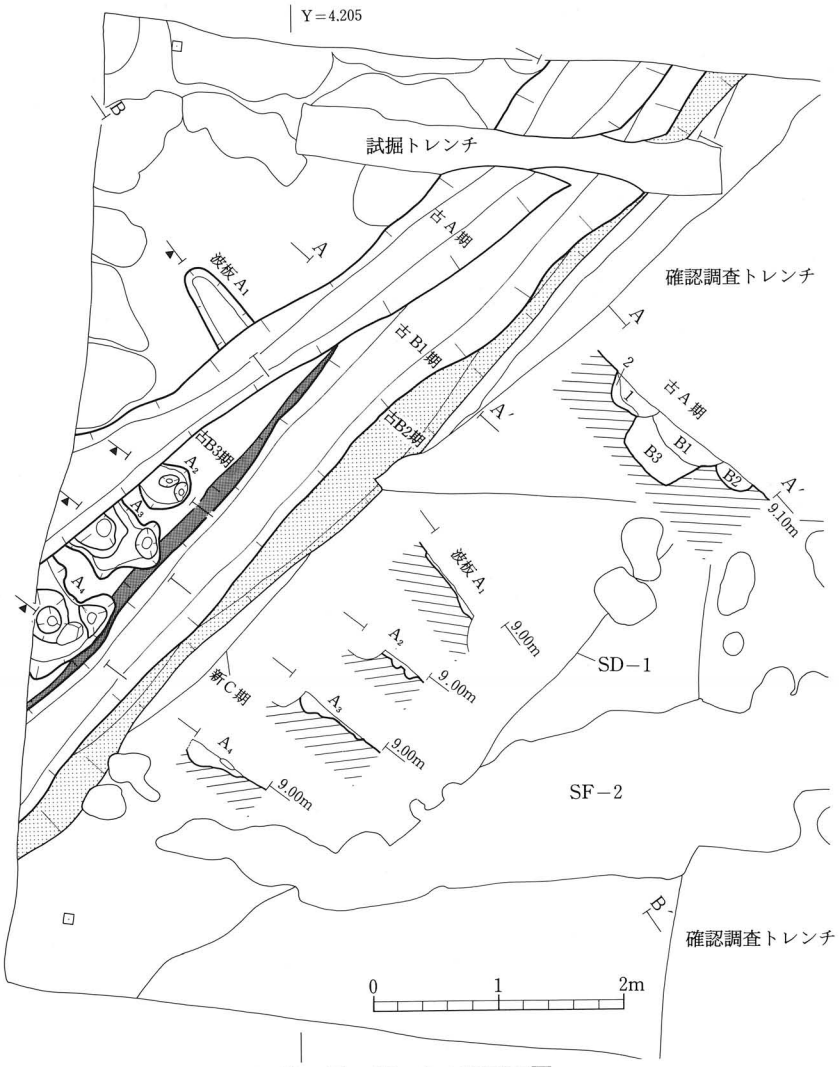
波板状凹凸は東側は進行方向に添ってピット列が３列（Ｇ～Ｋセクション）中央部は２列（Ｄ～Ｇセクション）並んでいる。西側（Ａ～Ｃセクション）は小ピットや長楕円形ピットが不規則に並んでいる。

Pit Ａ～Ｅ・Ｉ群（第３・４図）

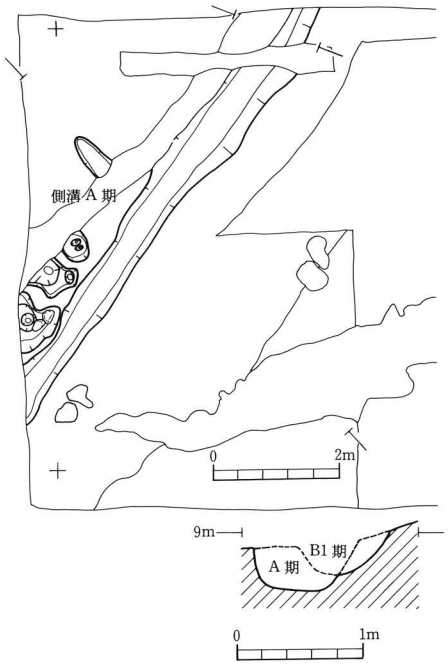
Ｃ～Ｅ群はＳＦ２に沿って並ぶ。形態・堆積土などＳＦ２の路層下の波板状凹凸に類似する。ピットＡ・Ｂ・Ｉ群は基本層Ⅰ・Ⅱ層に伴うものである。ピットＥ群から土師器片・埴輪片が出土している。

ＳＦ－２　土層註記

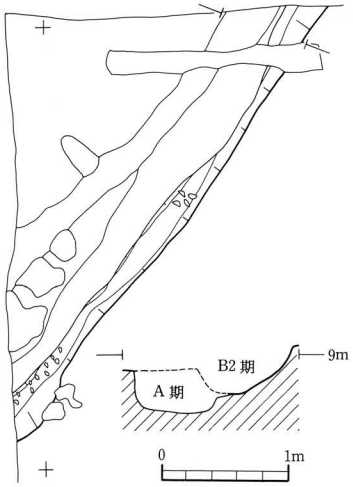
セクション	層位	土　　色	土　性	備　　考
路　層	1	2.5Y6/3　にぶい黄色	砂	基本層Ｖ・Ⅵ層を粒状に含む マンガン粒・酸化鉄の粒を多量に含むしまり極めてあり 上面は硬い 硬化層
Ａセク	2	2.5Y6/3　にぶい黄色	砂	しまりあり
		2.5Y3/1　黒色（基本層Ⅳ層）	粘土	ブロック状に混じる マンガン粒・酸化鉄の粒を含む
		2.5Y4/2　暗灰黄色（基本層Ｖ層）	粘土	
	3	2.5Y4/3　にぶい黄褐色	粘土	Ｖ層を粒状に含む 底面に酸化鉄の集積あり １～３層 人為堆積
Ｂ・Ｃセク	2a	2.5Y6/3　にぶい黄色	シルト質砂	2.5Y3/1 黒褐色粘土(Ⅳ層)をラミナ状に含む しまりあり
	2b	2.5Y5/3　黄褐色	砂	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土(Ｖ層)をラミナ状に含む しまりあり
	3	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	2.5Y5/3 黄褐色砂(Ⅶ層)をラミナ状に含む 底面は硬い
Ｄ・Ｅ Ｆ・Ｇセク	2a	2.5Y5/2　暗灰黄色	砂	マンガン粒を多く含む
	2b	2.5Y5/2　暗灰黄色	砂	にぶい黄色砂・Ⅳ層を波状に堆積 にぶい黄色砂の回りに酸化鉄付着 しまり極めてあり
	2c	2.5Y5/2　暗灰黄色	砂	2.5Y6/3 にぶい黄色砂をラミナ状に含む
	2d	2.5Y5/1　黄灰色	砂	灰黄褐色粘土の粒・マンガン粒を含む
	3a	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘土	褐灰色粘土をラミナ状に含む Ｅは3a・3b 混在
	3b	2.5Y4/2　暗灰黄色	粘土	にぶい黄色砂を粒状に含む 底面は硬い
Ｈ・Ｉ Ｊ・Ｋセク	2a	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	灰黄褐色粘土の粒・マンガン粒を多く含む しまりあり
	2b	2.5Y6/4　にぶい黄色	砂	にぶい黄褐色粘土質シルト(Ｖ層)を波状に堆積 しまり極めてあり
	2c	2.5Y5/2　暗灰黄色	シルト質砂	にぶい黄色砂と波状に混じる しまりあり
	2d	2.5Y5/1　黄灰色	砂	灰黄褐色粘土の粒・マンガン粒を含む
	3a	10YR3/3　暗褐色	粘土	暗灰黄色砂を粒状に含む しまりあり
	3b	2.5Y5/2　黄灰色	粘土	しまりあり 底面は硬い
	3c	10YR4/1　褐灰色	シルト質砂	にぶい黄色砂・Ⅳ層と波状に混じる しまり極めてあり
	4	2.5Y4/1　黄灰色	粘土	Ｖ層を粒状に含む しまりあり



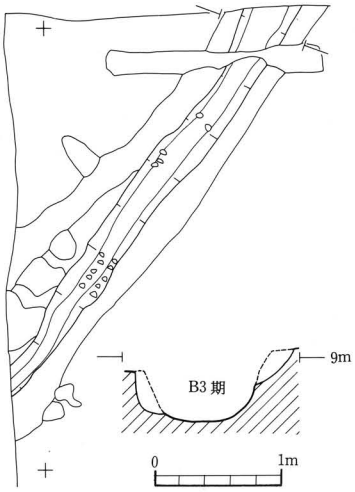
第５図　SF－１古期平面図



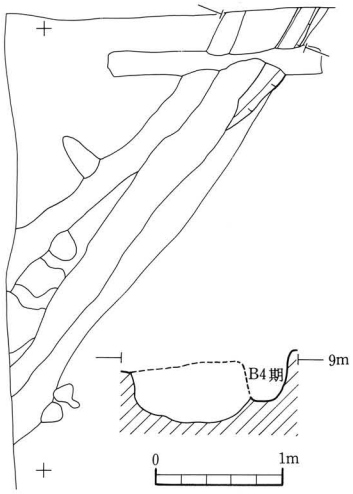
第６図　SF－１古B1期平面図波板A群



第７図　古B2期側溝平面図



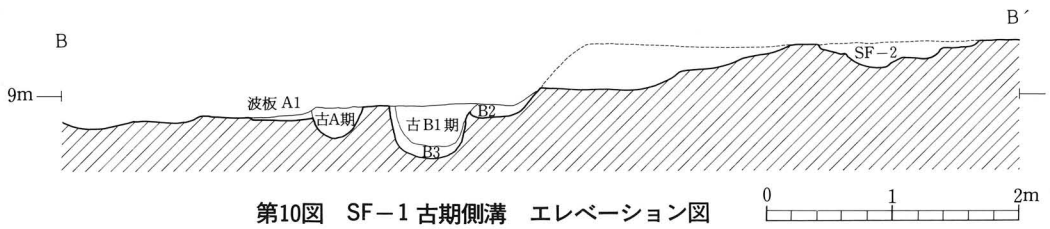
第８図　古B3期側溝平面図



第９図　古B4期側溝平面図

SF－１道路跡（古A期）（第５図）

新B期の下面・基本層Ⅴ層上面で検出された。古B期側溝及び波板状凹凸A群を切る。この時期での路層は検出されず、側溝のみの検出である。側溝は上幅40～80cm・底面幅10～45cm・深さ15～40cmを計る。底面はほぼ平坦で北に向かって傾斜している。特に南端は検出面から10cmと浅くなっている。断面形は逆台形である。堆積土は、５層に分けられ下部は崩落土、中位は自然堆積、上部は埋め戻し土あるい崩落土である。堆積土中から青磁（写真28－２）が出土している。



第10図　SF－１古期側溝　エレベーション図

（古Ｂ期）（第６・７・８・９図）

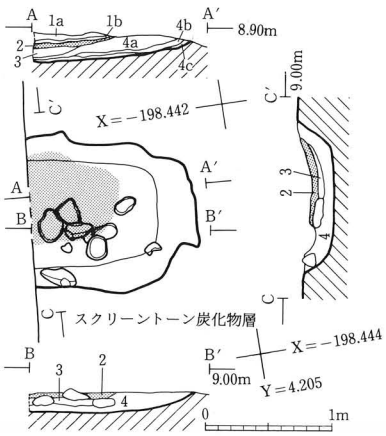
新Ｂ期道路跡の下面・基本層Ｖ層上面で検出された。側溝の切り合いから４時期（Ｂ１、Ｂ２、Ｂ３、Ｂ４）の変遷がとらえられた。路層は検出されなかったが、波板状凹凸Ａ群が検出されている。どの時期も北に向かって傾斜している。Ｂ１期側溝は、上幅40～90cm・底面幅20～50cm・深さ15～55cmを計る。底面は平坦である。断面形は偏平なＵ字形である。堆積土は、２層に分けられ下部は自然堆積、上部は人為堆積である。Ｂ２期側溝は、上幅推定40～60cm・底面幅15～35cm・深さ15～35cmを計る。底面には10～20cm間隔の工具痕が２列並んでいる。断面形は偏平なＵ字形である。堆積土は、１層で崩落土である。Ｂ３期側溝は、上幅推定50～70cm・底面幅20～50cm・深さ40～60cmを計る。断面形はＵ字形である。底面は、５～15cm間隔の工具痕が２列並んでいる。堆積土は、１層で埋め戻し土である。Ｂ４期側溝は、上幅推定30～40cm・底面幅15～20cm・深さ45～50cmを計る。底面はほぼ平坦である。断面形はＵ字形である。堆積土は、３層に分けられ下部は人為堆積で、中位は自然堆積、上部は崩落土である。堆積土中より埴輪片が出土している。

波板状凹凸Ａ群（第５図）

古Ａ期側溝に切られて古Ｂ３期側溝を切る。古Ｂ１・２期側溝との切り合い関係は不明であるがＢ１期側溝が波板状凹凸Ａを避けるように掘られており、Ｂ１期側溝より古いことが窺える。平面形が70～200cm長楕円形で断面が皿形を呈し、底面に数個のピット状の落ち込みが並ぶ。底面及びピット状の落ち込み面は硬く締まっている。堆積土は硬く締まった砂が波状に充填されている。堆積土より土師器片が出土している。

ＳＫ－１土坑（第11図）

調査区西端のＳＦ－１新Ｃ期路層下面で検出した土坑である。長軸方向はＥ－10°－Ｎである。全体の規模西側が調査区外に伸びるため不明だが、長軸方向で5.5m以上、短軸方向で1.0m、深さ70cmを計る。断面形は逆台形である。堆積土は、大別４層細別７層に分けられる。下から４層は基本層ブロック及び砂・スサ入り粘土を含む埋め戻しの土、３層は粘性の強い粘土、２層は炭化物の層、１層はブロック状に堆積した埋め戻しの土である。４層上面に20～30cmの石が並べてある。４層中から土師器片が１点、各層より炭化物に混じり魚類・鳥類などの動物の骨、イネ・コムギ等の植物の種子が炭化したものが出土している。性格はゴミ穴・野外炉・祭祀施設等考えられるが不明である。



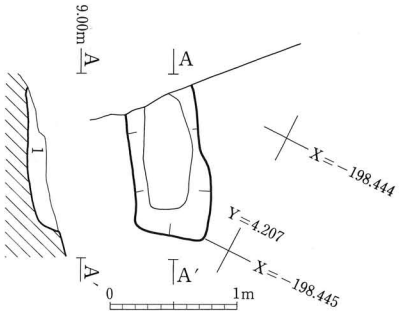
層位	土　　色	土　性	備　　考
1a	10YR3/2　暗褐色	粘土	φ1～3㎜の小礫・Ｖ層のブロック・炭化物を多量に含む
1b	2.5Y3/3　暗オリーブ褐色	粘土	粘性極めてあり
2	2.5Y2/1　黒色	炭化物	暗オリーブ褐色粘土（３層）を層状に含む
3	2.5Y3/3　暗オリーブ褐色	シルト質粘土	φ1～3㎜の小礫を含む。管状の酸化鉄を含む
4a	10YR3/3　暗褐色	粘土	φ1～3㎜の小礫・基本層Ⅵ・Ⅶ層の粒を含む。マンガン粒多く含む　スサ入り粘土を多く含む
4b	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	粘性極めてあり
4c	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	基本層Ⅴ・Ⅵ層を粒状に含む　人為堆積（埋め戻し土）

第11図　ＳＫ－１平面・断面図

ＳＫ－２土坑（第12図）

ＳＦ－１古Ｂ４期側溝に切られるため全体の規模は不明だが、長軸方向で5.5m以上、短軸方向で1.0m、深さ70cmを計る。長軸方向はＥ－10°－Ｎである。断面形は逆台形で、堆積土は１層で基本層ブロック及び砂のブロックを含む人為堆積である。出土遺物はない。性格は不明である。

ＳＫ－１・２とも時期は限定できず古墳時代以降中世以前の時間幅としかとらえられない。



層位	土　　色	土　性	備　　考
1	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	しまりあり
	2.5Y5/3　黄褐色	粘土	基本層Ⅶ層をブロック状に含む
	2.5Y4/1　黄灰色	粘土	（一部波状に堆積）

第12図　ＳＫ－２平面・断面図

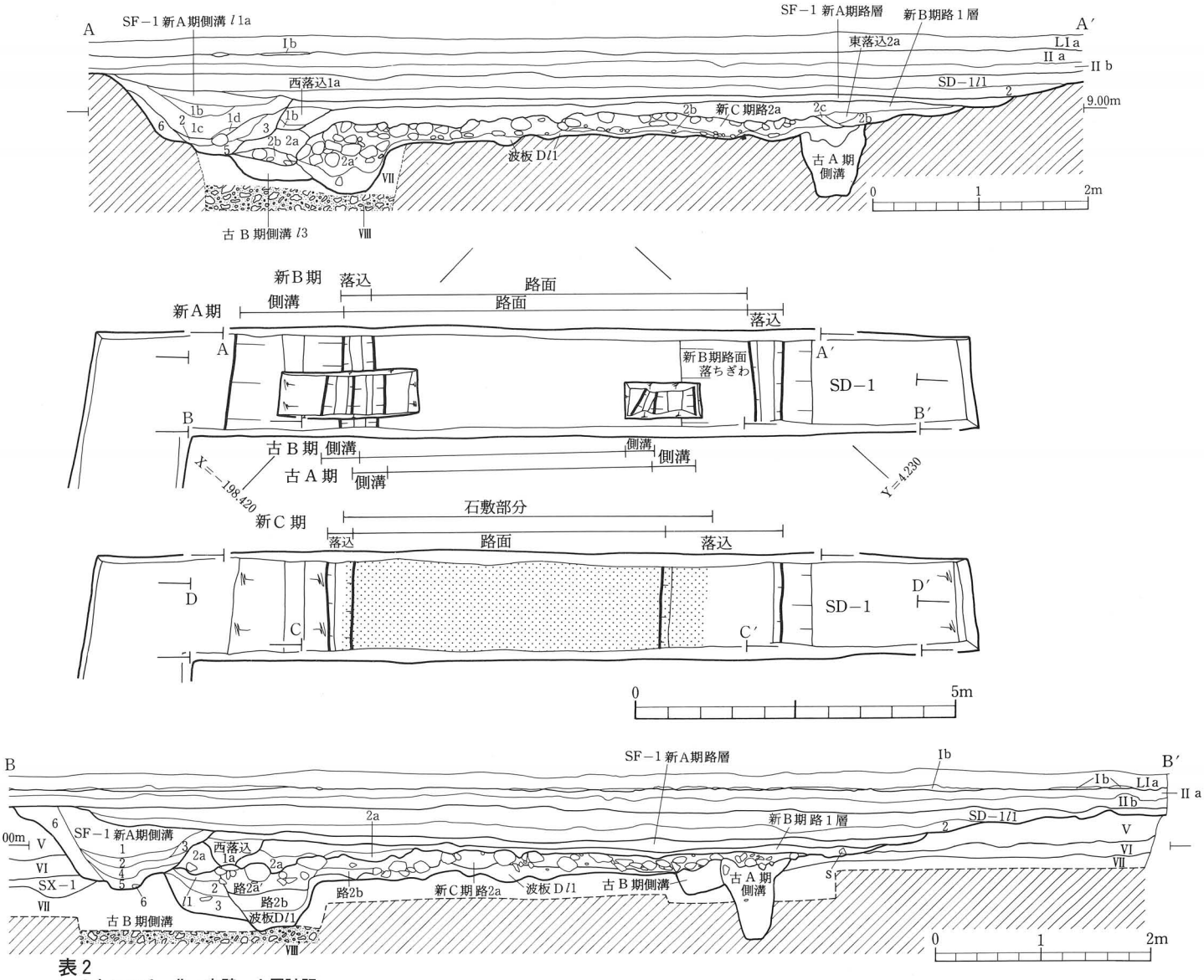
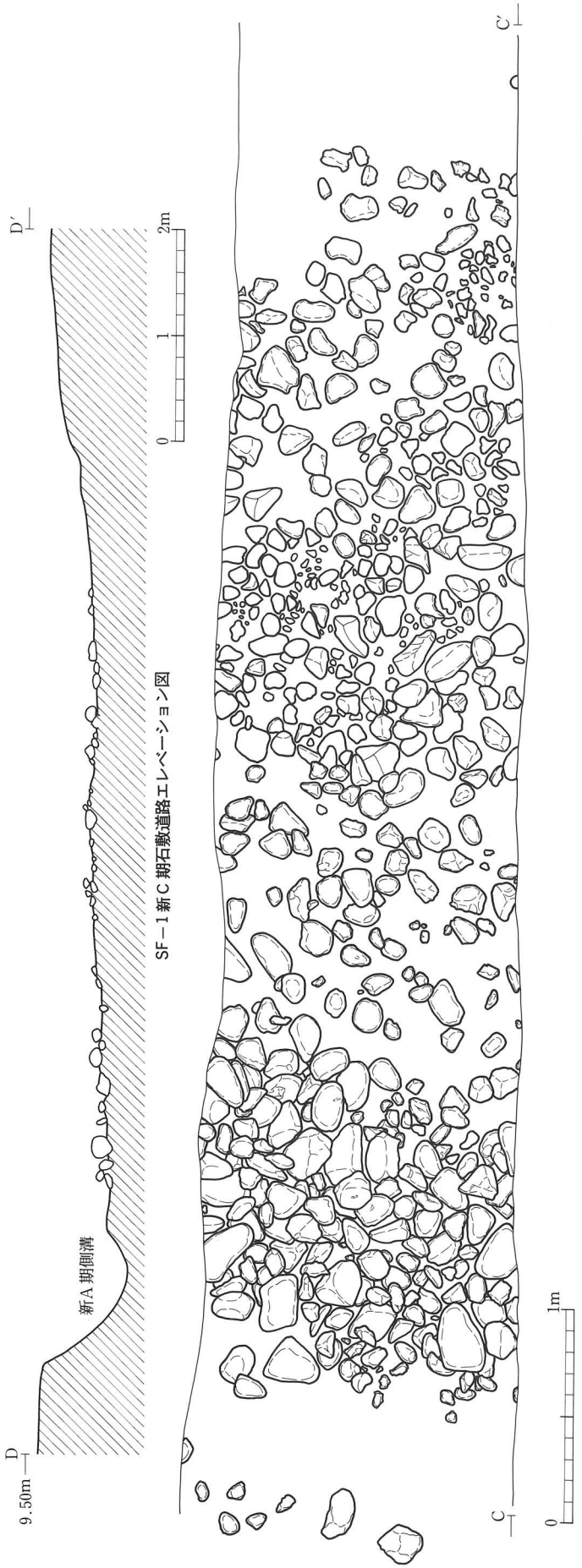


表２
２トレンチ　北・南壁　土層註記

時期	遺構	層位	土色	土性	備考
	基本層	Ⅱb	5Y5/1　灰色	シルト質粘土	酸化鉄の斑文・マンガン粒・φ1～2㎜の小礫を含む 底面に酸化鉄の集積 旧耕作土
SD－1		1	2.5Y5/1　黄灰色	シルト質粘土	酸化鉄の斑文・マンガン粒・φ1～2㎜の小礫を含む 底面に酸化鉄の集積 底面の一部に砂層あり 自然堆積
		2	2.5Y5/1　黄灰色	シルト質粘土	酸化鉄の斑文・マンガン粒・炭化物・φ1～2㎜の小礫を含む 底面に酸化鉄の集積 底面の一部に砂層あり 自然堆積
SF－1 新A期	西側溝	1	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	底面にⅤ層・10YR7/1 灰白火山灰を粒状に含む 自然堆積 色調の明暗で４層に分層される
		2	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	灰白火山灰を層状に含む しまりなし 自然堆積
		3	2.5Y4/2　暗灰黄色	砂質シルト	路層の崩落土
		4	2.5Y4/1　黄灰色	粘土	にぶい黄橙色砂を層状に含む 粘性極めてあり 水成堆積
		5	10YR6/2　灰黄褐色	粘土	Ⅴ・Ⅵ層をブロック状に含む 底面に横位の礫あり 崩落あるいは埋め戻しの土
		6	10YR4/1　褐灰色	粘土	Ⅴ層主体 Ⅵ層の粒・マンガン粒を含む 西壁崩落土
	路層		2.5Y4/2　暗灰黄色	シルト	にぶい黄色砂(新Ｃ期路２層と同じ)・Ⅴ層の粒・φ1～2㎜の小礫を含む しまりあり 人為堆積(路盤敷設)
新B期	西落込	1a b	10YR4/2　灰黄褐色	砂質粘土	底面にいくほど粘性が強い 水成堆積 b の方がやや暗い 水成堆積 新Ｂ期使用時に自然に溜まった土
	路層	1	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	Ⅴ層及びにぶい黄色砂(旧期路２層と同じ)をブロック状に含む しまりあり 人為堆積(路盤敷設)
新C期	西落込	2a	2.5Y5/2　暗灰黄色	砂質シルト	にぶい黄色砂(新Ｃ期路２層と同じ)をブロック状に含む しまりあり 人為堆積(埋め戻しの土)新Ｂ期の構築時のもの
		2b	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	Ⅴ層主体 黒褐色粘土・灰黄褐色砂質シルトをブロック状に含む 礫が底面に転がっている 崩落土
	東落込	2a	2.5Y5/2　暗灰黄色	砂質シルト	にぶい黄色砂(新Ｃ期路２層と同じ)をブロック状に含む しまりあり 人為堆積(埋め戻しの土)新Ｂ期の構築時のもの？
		2b	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	Ⅴ層主体 黒褐色粘土・灰黄褐色砂質シルトをブロック状に含む 礫が底面に転がっている 東側立上がりの崩落土
		2c	2.5Y4/2　暗灰黄色	砂質シルト	暗灰黄Ⅴ層ブロック・にぶい黄色砂粒(新Ｃ期路２層)を多く含む 路面の崩落土
	路層	2a	2.5Y6/3　にぶい黄色	砂	Ⅴ層・Ⅶ層・暗灰黄荒砂を層状に含む 層上面及び層中に５～30cmの河原石を横位に敷いてある しまり極めてあり 底面に酸化鉄の集積あり 人為堆積(路盤敷設)
		2a′	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	５～30cmの河原石を横位に密集させて敷いている 石と石の間に楔状に埋め込んでいる石もある 底面に暗褐色荒砂が敷かれている しまりきわめてあり 西側古期側溝上面のみに敷設 人為堆積(路盤敷設)
		2b	5YR5/2　灰オリーブ色	砂	Ⅶ層主体 Ⅴ層・暗灰黄色砂をブロック状に含む しまりあり 人為堆積(路盤敷設)
	波板D	1	2.5Y5/2　暗灰黄色	砂質シルト	Ⅵ層を粒状に含む しまりあり 底面に酸化鉄の集積があり極めて硬い 古Ａ期西側溝の底面及び東側溝埋土上面にも敷設されている 人為堆積(路床敷設)
古A期	西側溝				新Ｃ期段階で掘り直されたため堆積土は観察されなかった
	東側溝	上部	7.5YR3/3 暗褐色	粗砂	Ⅶ層をブロック状に含む 人為堆積(埋め戻しの土)
		下部	5YR5/2　灰オリーブ色	砂	Ⅷ層主体 Ⅴ層・暗灰黄色砂をブロック状に含む しまりあり
古B期	西側溝	1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	底面に褐色砂を層状に含む 水成堆積(水流の影響あり)
		2	10YR4/1　褐灰色	粘土	単一層 粘性極めてあり 水成堆積(止水)
		3	10YR5/2　灰黄褐色	粘土	にぶい黄褐色荒砂・黄褐色砂・黄灰色粘土を層状に含む 水成堆積(水流の影響あり)
	東側溝	1	2.5Y5/2　暗灰黄色	粘土	Ⅶ層を粒状に含む 水成体積(止水)
SX－1		1	10YR3/3　暗褐色	粘土	Ⅵ層主体 Ⅷ層・暗灰黄砂のブロックを含む 自然堆積

第13図　２TSF－１平面図・断面図



第14図　SF－１新Ｃ期石敷路面実測図

２Ｔ・３Ｔ

SD－１溝跡（第13図）

２Ｔでは上幅12m・底面幅8.7m・深さ25～30cmを計る。底面標高は約9.1mである。３Ｔでは上幅11m・底面幅9.8m・深さ13～20cmを計る。方向は１Ｔから２ＴまでＮ－54°－Ｅである。堆積土は、３Ｔで１層２Ｔで２層に分けられ自然堆積である。２Ｔで分層によって立上がりが階段上になる。堆積土中より中世陶器（第18図１）、須恵器（写真28－４）・埴輪片・土師器片が出土している。

SF－１道路跡

道路の方向はどの時期も１Ｔ北側の延長でおよそＮ－50°－Ｅであるが、古Ａ期段階は３Ｔで幅を狭める。

（新Ａ期）（第13図）

路面幅は２Ｔで７ｍ、３Ｔで7.2mを計る。路面は遺構検出面より30～35cm低く標高約9.1mで、厚さ10cmの路層である。西側で側溝を検出した。２Ｔで上幅180cm・下幅30cm・深さ70cm、３Ｔで上幅100cmを計る。底面はほぼ平坦である。断面形はＵ字形である。堆積土は、３Ｔで３層、２Ｔで６層に分けられ、下部は石混じりの自然堆積、中位の東側は路面の崩落土、上位は自然堆積である。路層・側溝埋土より埴輪片・土師器片・須恵器片が出土している。

（新Ｂ期）（第13図）

路面幅は２Ｔで5.9m、３Ｔで6.5mを計る。路面は遺構検出面より30～40cm低く、標高約9.0mで、厚さ10cmの路層である。２Ｔでは路面の両側に側溝状の落ち込みを検出した。西側で上幅60cm・下幅30cm・深さ10cm、東側は上幅40cm・下幅30cm・深さ10cmを計る。底面はほぼ平坦である。断面形は皿形である。堆積土は、両側とも単層でブロック状の崩落土あるいは埋め戻しの土である。路１層より埴輪片が出土している。

（新Ｃ期）（第13・14図）

石敷の道路跡である。５～30cmの丸みのある偏平な石が横位に敷かれ、石と石の間に砂（路２層）が堅く詰められている。特に、古Ａ期西側溝の部分は石が厚く密に施してあり、楔状に埋め込んでいる石もある。路２層の下面から１Ｔ同様波板状凹凸が確認された。路面幅は２Ｔで4.8m、３Ｔで4.2m を計る。遺構検出面より50cm低く、標高約8.9mである。また、路面中央部が高く蒲鉾状を呈し、両側に側溝状の落ち込みを有する。西側の落ち込みは上幅40cm・下幅30cm・深さ13cmで逆台形を呈する。東側は上幅70～200cm・下幅40～160cm・深さ13cmで逆台形を呈する。堆積土は、下部がブロック状の崩落土あるいは埋め戻しの土、上部が水成堆積である。路層・側溝埋土より埴輪片の出土の他、敷石のなかに礫石器（図18－５・６・７）等の縄文時代の遺物や板状に加工された安山岩質の石材（写真28－11）が含まれている（註４）。

（古Ａ期）（第13図）

東側溝は上幅65cm・底面幅15cm・深さ60cmを計る。断面形は壁が急角度で立ち上がる逆台形である。堆積土は、３Ｔが３層、２Ｔが１層で、下部は自然堆積で上部は人為堆積である。西側溝は上幅40cm・底面幅35cm・深さ45cmを計る。断面形は逆台形である。堆積土は、２Ｔで２層に分けられ下部は新Ｃ期の波板状凹凸の２層で上部は砂で人為堆積である。３Ｔでは、１層で自然堆積である。側溝間は3.8m で、心心間は4.5m である。出土遺物はない。

（古Ｂ期）（第13図）

東側溝は上幅50cm・底面幅40cm・深さ25cmを計る。断面形は逆台形である。堆積土は、３Ｔで３層、２Ｔで１層で、自然堆積である。西側溝は上幅推定100cm・底面幅70cm・深さ35cmを計る。断面形は逆台形である。堆積土は、２Ｔで１層、３Ｔで３層に分けられる。すべて自然堆積である。側溝間は推定3.7mで、心心間は4.5m である。出土遺物はない。

（２）Ｖ層上面検出遺構

小溝状遺構群（第16・17図）

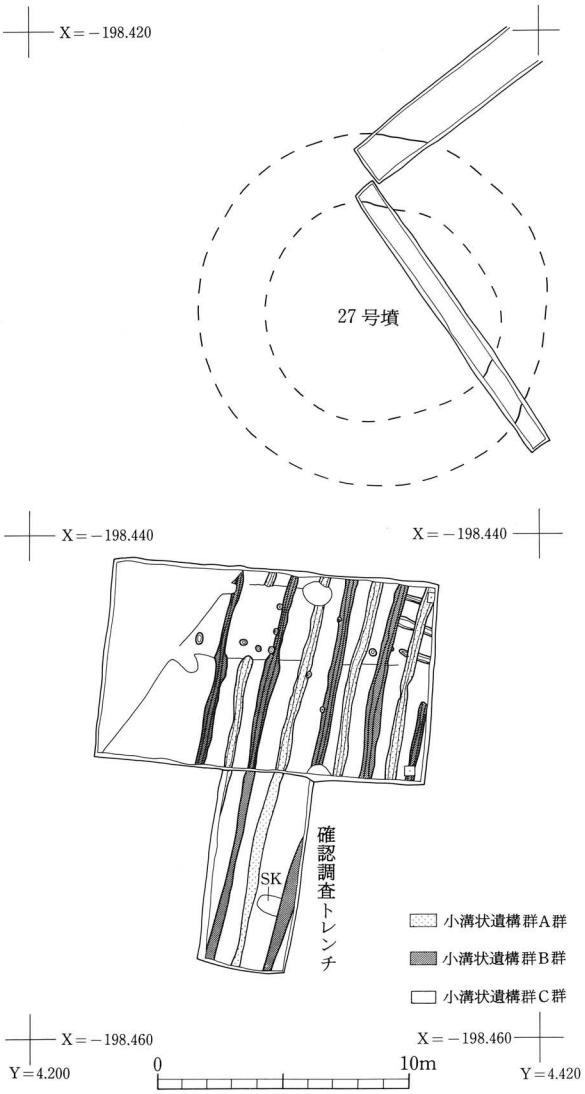
東西方向と南北方向がある。南北方向が東西方向を切る。南北方向は浅い溝と深い溝に分けられる。切り合いは不明であるので、便宜的に浅い方をＡ群・深い方をＢ群とした。東西方向はＣ群とした。

Ａ群

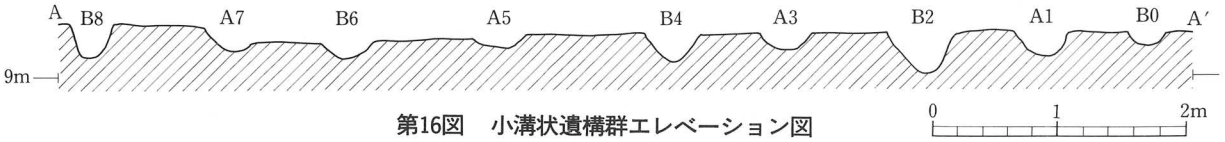
上幅30～50cm・底面幅７～18cm、深さ14～21cmを計る。底面には幅10～20cm間隔の工具痕があり、北に向かって傾斜している。断面形はＵ字形である。堆積土は、２層に分けられ下部は基本層Ｖ層をブロック状に多量に含み、上部は基本層Ｖ層を粒状に少量含む。Ａ群同士の溝間は154～190cm（心心間200～230cm）であり、Ｂ群との溝間は27～105cm（心心間70～140cm）である。Ａ７の１層から須恵器（写真28－５）Ａ５の１層から埴輪片が出土している。方向はＮ－10～12°－Ｅである。

Ｂ群

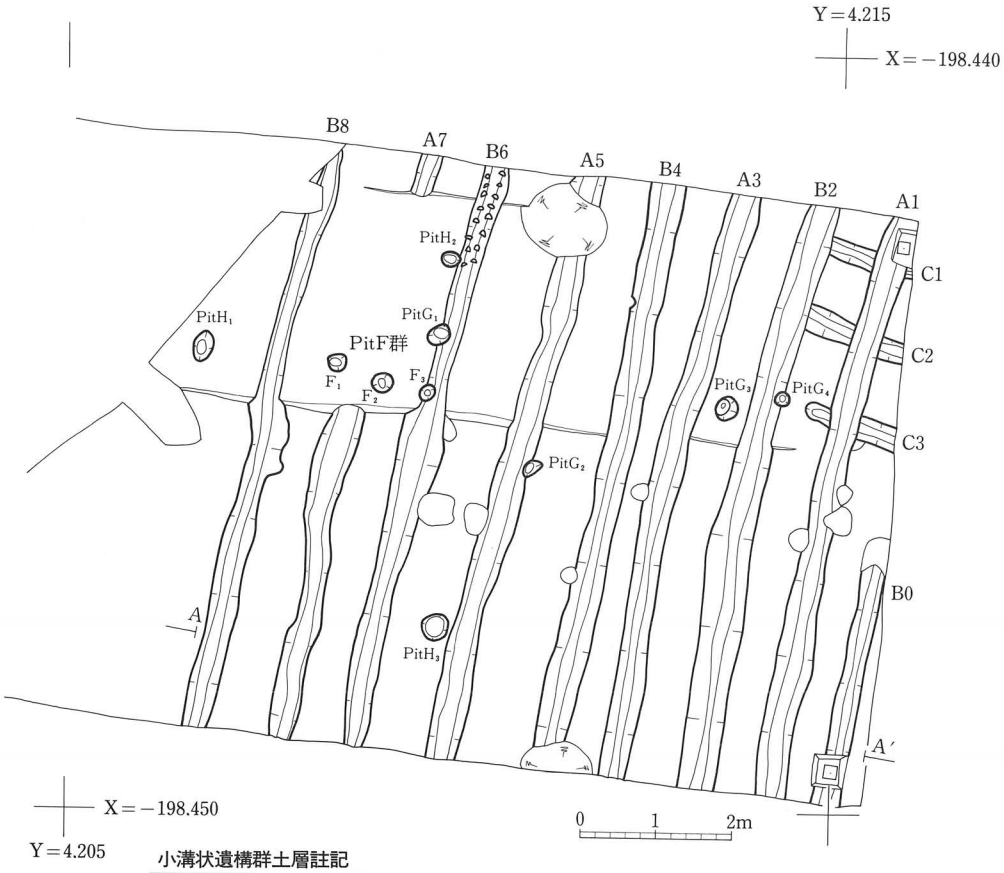
上幅20～58cm・底面幅８～25cm、深さ5.5～37cmを計る。底面には幅10～15cm間隔の工具痕があり北に向かって傾斜している。断面形はＵ字形である。堆積土は２層に分けられ下部は基



第15図　Ｖ層上面遺構配置図



第16図　小溝状遺構群エレベーション図



小溝状遺構群土層註記

遺　構	層位	土　　色	土　　性	備　　考
小溝Ａ群	1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	Ⅳ層主体 底面付近にⅤ層をブロック状に含む
小溝Ｂ群	1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	Ⅳ層主体 底面付近にⅤ層を粒状に含む
	2	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	Ⅳ層主体 Ⅴ層をブロック状に多量に含む
小溝Ｃ群	1	10YR3/2　暗褐色	シルト質粘土	Ⅳ層主体 底面付近にⅤ層をブロック状に含む

ピット土層註記

群	土　　色	土　　性	備　　考
Ｆ群	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘　土	Ⅴ層主体 灰白色火山灰をブロック状に含む
Ｇ群	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	Ⅳ層主体 Ⅴ層をブロック状に含む
Ｈ群	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	Ⅴ層主体 Ⅳ層を粒状に含む

第17図　小溝状遺構群平面図

本層Ⅴ層をブロック状に多量に含み、上部は基本層Ⅴ層を粒状に少量含む。Ｂ群同士の溝間は、124～ 227cm（心心間180～260cm）である。Ｂ４の１層から埴輪片が出土している。方向はＮ－11～14°－Ｅである。

Ｃ群

上幅15～31cm・底面幅４～15cm・深さ2.6～14cmを計る。底面はほぼ平坦で東に向かって傾斜している。断面形は皿形である。堆積土は、１層で基本層Ⅵ層を粒状に少量含む。溝間は70～80cmである。出土遺物なし。方向はＷ－17～19°－Ｎである。

Pit Ｆ・Ｇ・Ｈ（第17図）

埋土に灰白色火山灰を含むＦ群は一列に並ぶ。角度はＮ－72°－Ｗでピット間は50cmである。灰白色火山灰から平安時代以降中世以前の年代が考えられる。

埋土がⅣ層を主体としたものをＧ群とし、埋土がⅤ層を主体としたものをＨ群とした。両群とも小溝に切られる。柱穴は検出されず性格は不明である。

大野田27号墳（第15図）

３Ｔで周溝を部分的に確認した。直径が推定で周溝の内径8.7m・外径14mであると考えられる。周溝確認面から埴輪（図18－３）が出土している。

他に調査区内から埴輪片が出土している。おおよそ図18－３と同じ調整をしている。

土師器片は磨滅が激しく調整がわからないものが多い。調整のわかるものは、ロクロ調整されている。

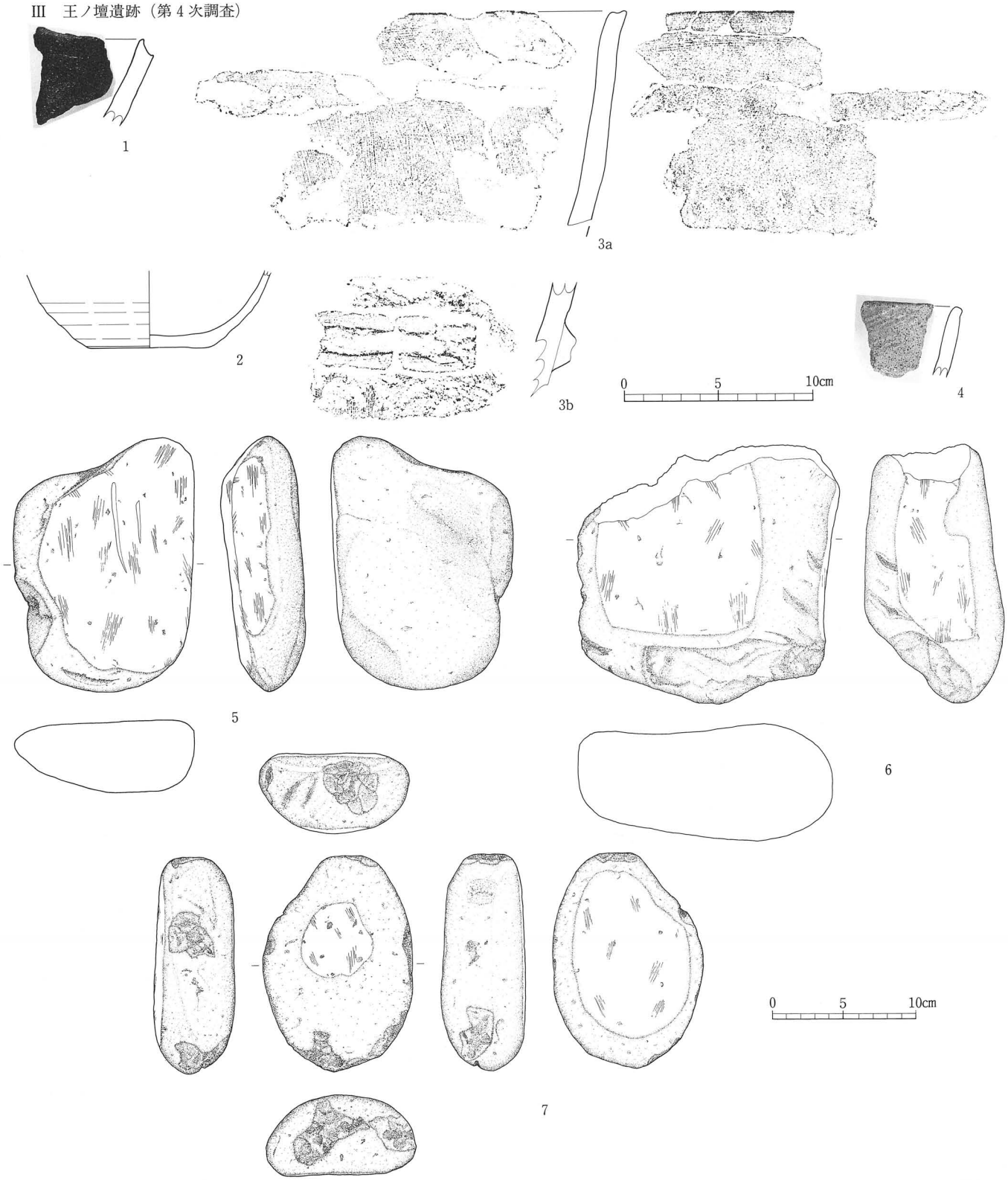


図	写真	種類	器種	遺構	層位	産地	時期	備考
	28－2	青磁	碗	1TSF1	古A期側溝１層	中国	12c 後半～13c	無文？釉は朽葉色(5Y6/3 オリーブ黄)
	28－1	青磁	碗	1TSF1	新A期路層	龍泉窯系	12c 後半	片切彫り 飛雲文 釉は空色(7.5Y6/2 灰オリーブ)
	28－3	陶器	甕	1TSF1	新A期路層	白石窯	13c 後半～14c 前半	胎土(2.5YR5/4 にぶい赤褐)に長石を含み、焼成良好
18－1		陶器	片口鉢	2TSD1	１層	常滑	13～14c	口縁部端部内側が突出している 器面調整が雑である
	28－4	須恵器	甕？	2TSD1	１層		古代	外面－平行タタキ木目直交 内面－ロクロのち同心円のアテ具痕 胎土は、白っぽく微粒緻密である 在地以外のもの？
	28－5	須恵器	甕？	1T 小溝	A71 層		古代(古墳後期も含む)	外面－平行タタキ 内面－同心円状のアテ具痕
	28－6	須恵器	甕？	1T 基本層	II層		古代	外面に自然釉
18－2		土師器	坏	1TSF2	路層１層		平安	摩滅が激しい
18－3	25－7	埴輪	円筒	3T27 号墳周溝上			5c 末～6c 前半	外タテハケメのち口縁付近ヨコナデ 内ヨコハケメのち縦方向のナデ 口縁付近ヨコナデ 凸帯 M 字形上・側・下面ともナデ 口縁部はシャープにつくりだし端部は窪む
18－4		縄文土器	鉢	2T 基本層	VI層		縄文後期中葉	LR 横位 口縁部丸くなる
18－5	25－9	礫石器		2TSF1	新C期路２層		縄文	磨１面 線条痕
18－6	25－8	礫石器		2TSF1	新C期路２層		縄文	磨２面 線条痕
18－7	25－10	礫石器		2TSF1	新C期路２層		縄文	敲両端・側面 磨２面 線条痕
	28－11	板状の石材		2TSF1	新C期路２層			安山岩 板状に加工されている 古墳の石棺の石材？

第18図　出土遺物実測図

第19図　道路跡全体図

6　調査のまとめと考察

（１）道路跡について

①以前の調査区との関係

前の調査と合わせて、全長350mに渡って確認したことになる。南から現代の通路に沿って湾曲しながら北に進み、大野田古墳群３Ｄ区からＮ－30°－Ｅの方向で直線的に進み、４ＴでＮ－50°－Ｅに屈曲して当調査区に至る。さらに延長すると旧笊川へ向かう。路面は南から北へ傾斜している。道路全体でみると旧笊川への排水を考慮していることが窺える。構造は当遺跡第１次調査とほぼ同じであるが、第１次調査では新Ａ期段階の側溝は検出されていない。大野田古墳群とも検出面と路面との高低差の違いを除けば類似している。SF－２の先には現代の水路が存在する。屋敷跡全体の区画溝の延長線上にあたり、屋敷跡の存在が想定される。屋敷跡に向かう枝道が前の調査からも発見されており、SF－２の性格も屋敷跡へ向かう枝道ととらえることができる。（註５）

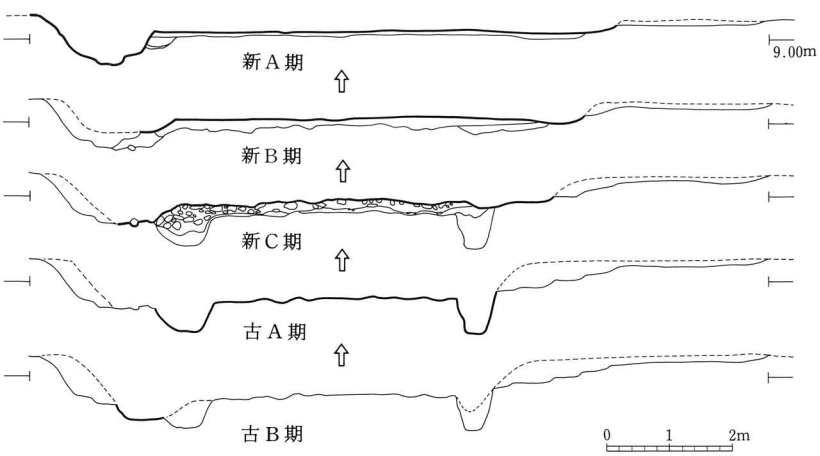
②道路跡の年代

遺物はSF１古Ａ期側溝の１層から12世紀後半～13世紀の中国産の青磁、新Ａ期路層から12世紀後半の龍泉窯系の青磁と13世紀後半～14世紀前半の白石窯系の甕？、SD－１の１層から13世紀～14世紀の常滑産の片口鉢が出土している。また、これまでの調査から道路跡の年代は13世紀～14世紀前半を中心にとらえている（渡邊誠1997他）。遺物が少ないため、今回も同様の年代幅でとらえたい。ただ、新Ｂ･Ｃ期は側溝状の落ち込みを作り出すという点で違いが見られ、時期差がある可能性もある。それぞれの時期の細かい年代については周辺の屋敷跡の年代や前の調査での道路跡からの遺物を検討してとらえたい。（註５）

③波板状凹凸について

波板状凹凸は古代から近世までの道路跡でみられるもので、道路の基礎事業の跡とする説（註６）、重量物を運搬した際にもちいられたコロやテコあるいは枕木として丸太の路面に残された圧痕とする説（註７）、そのことをふまえて迅速に物資を輸送するために道路面に作った踏張足場･梃子（テコ）穴の痕跡とする説（註８）、それらの説を総合的にとらえ同じ道路でも場所によってその敷設理由が違うという説（註９）などがある。今回SF－２で検出した波板状凹凸は、凹部に充塡されている砂とその上面の路層の砂が類似し、南側の路盤では工具痕が検出されている。また、中央部の馬の背状の高まりが、現代の道路などにも見られる轍の凸部にも類似しており使用頻度が少ない部分ととらえられ、砂敷道路以前に使用されていたことが示唆される。以上のことから、砂敷道路以前に道路としての機能があり、その時の路面の荒れを改修し路床・路盤の強化のために波板状凹凸を施したととらえたい（註２）。一方、丸太やコロの跡とするには深さや形態的に無理があるが、規則的に並ぶこと、SF－１側の斜面部分が深いこと、道路の延長上に屋敷跡の存在が想定されることから、重量物を運搬した際にできたテコやテコ穴の痕跡と

もとれる。しかし、テコの跡・テコ穴の痕跡とすると長軸方向が進行方向と一致したり、断面形がレ字形になると思われる。よって、この場合でも砂敷道路構築の際、テコの跡・テコ穴をさらに掘り窪めて波板状凹凸にして底面を突き固め路盤の強化・補強しているととらえられる（註10）。Pit C・D・E群及び全体像はつかめなかったがSF－１の波板状凹凸B・C・D群も同様のものと考えたい。波板状凹凸Ａ群は、道路の進行方向に直交する長楕円形のピットが等間隔に並ぶものでコロや丸太の痕跡とも考えられる。しかし、ここでは、凹部の堆積状況や底面の硬さなどから、道路の荒れを改修した痕跡あるいは構築時の基礎事業の跡ととらえておきたい。



第20図　道路跡変遷図（2Ｔ北壁断面）

④２Ｔの石敷道路跡について

大野田古墳群の道路跡を含めて２Ｔの路面の標高が一番低くなり、水の影響を受けやすかったと推定される。このことが、新Ｃ期の路面が１・３Ｔでは砂敷で、２Ｔでは石敷になる理由なのかもしれない。また、屋敷跡との関連で２Ｔ付近が重要であるために、特に強固に丁寧に作ったとも考えられる。

西側の石がぎっしり詰まっている部分の下面は古Ａ期側溝を掘り直して波板状凹凸と同じような工法で埋め戻している。このようにした理由は部分的な検出のため不明である。だが、暗渠的な働きをもたすためのものとか（註11）、ただ単に側溝にたまった土を浚い波板状凹凸と一連の工事をしたもの等の理由があげられる。

⑤SF－１とSF－２の関係について

切り合い関係から古Ｂ２期～新Ｃ期段階にSF ２道路跡が設置されたことが分かる。その中で、SF－１の古Ａ期段階の側溝がSF－２に規制されるよう作られており、古Ｂ１期段階にSF－２は道路として機能していたととらえられる。波板状凹凸Ａ群もこの時のものと考えられる。そして、③の見解から、この時SF－２はまだ砂敷の道路ではなかったと考えられ、SF－２と新Ｃ期段階の道路構築方法が類似することと合わせて考えると、新Ｃ期段階構築時にSF－２も改修し砂敷の道路にしたととらえられる。後の段階はSF－２を意識するよう湾曲するようにSF－１は構築されており、SF－２も機能していたことが想定される。

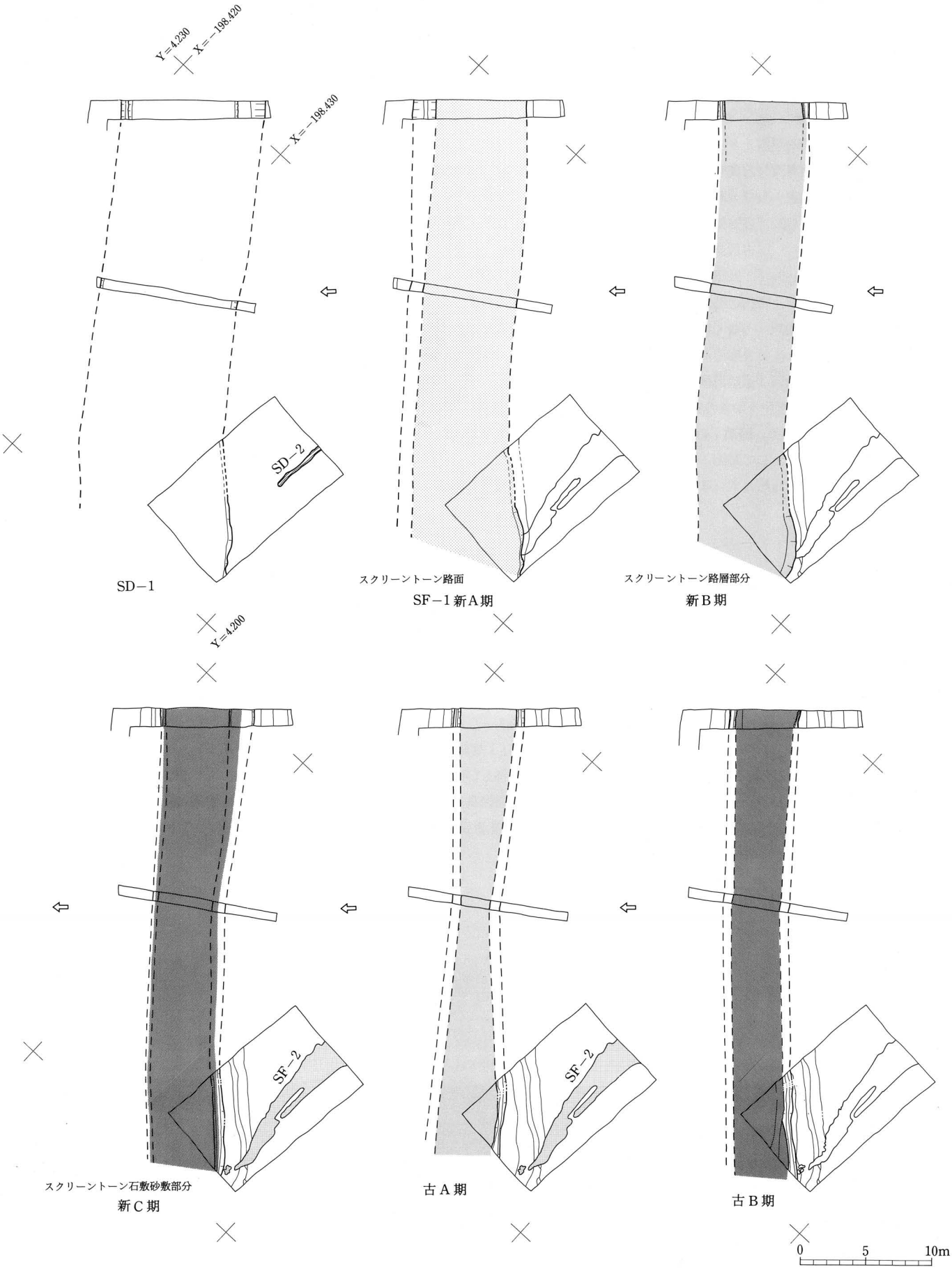
以上のことから、古期段階を経て、新Ｃ期段階で大規模に道路を改修し、その後は新Ｃ期段階の路層を路床にして凹凸をなくすように路層を敷くだけの改修となることが想定される。

（２）まとめ

- 第１次調査検出の道路跡の延長部分とそこから派生する枝道を検出した。道路跡は５時期ある。特に新Ｃ期段階の路面は石敷・砂敷であり下部構造に波板状凹凸を伴うなど、丁寧な造りになっている。
- 炭化物・骨・スサ入り粘土を堆積土に含む土坑を検出した。
- ３時期の小溝状遺構群が発見された。時期は須恵器の年代とこれまでの調査から古墳時代から奈良時代にかけてととらえられる。
- 大野田27号墳が確認された。

（註１）検出された上面を路面としたが、次の段階の道路構築のために壊されて本来の路面でない可能性はある。

（註２）道路遺構に伴って検出される遺構で、波板状凹凸面・波板状圧痕などと呼ばれているもので第１次調査・大野田古墳群の道路跡でも検出されている。大野田古墳群の調査では、路床・路盤の強化および排水を目的とした、凹部の埋土も含めて道路構築時の痕


Y=4,230
X=−198,420
X=−198,430
SD−2
SD−1
スクリーントーン路面
SF−1 新Ａ期
スクリーントーン路層部分
新Ｂ期
Y=4,200
SF−2
スクリーントーン石敷砂敷部分
新Ｃ期
古Ａ期
古Ｂ期
0
5
10m

第21図　道路跡変遷図

跡あるいは改修工事の痕跡と考え、波板状凹凸面としないで波板状凹凸とした。今回もこの見解を踏襲した。（渡邊誠：1997　竹田・渡邊：1998　田中他：1998）

（註３）路２層は４層に細分される。その各層の上面及び波板状凹凸の上面それぞれが路面として使用された可能性もある。しかし、今回は路2a 層の上面から落ち込みや使用痕跡が検出され、他の層の上面からは検出されなかったことから、波板状凹凸も含めて一連の道路構築事業ととらえた。

（註４）第１次調査及び当調査区から300m 北の大野田遺跡で縄文時代の配石遺構が発見されている（仙台市教育委員会1996他）。

（註５）第１次調査・及び大野田古墳群については、現在整理作業中であり、全体的なことはその報告を待ちたい。

（註６）飯田充晴1993「道路築造方法について－埼玉県所沢市東の上遺跡の道路跡を中心にして－」
『古代交通研究第２号』古代交通研究会
板橋正幸1998「下野国那須郡衙発見の道路遺構」『古代交通研究第８号』古代交通研究会

（註７）早川泉1997「古代道路遺構の虚像と実像－東山道武蔵路の調査を通して－」『古代交通研究第６号』古代交通研究会

（註８）宮田太郎1998「考察・鎌倉街道の輸送工法痕跡－路床に刻まれた踏張足場穴・梃子穴－」
『多摩のあゆみ Vol92』財団法人たましん地域文化財団

（註９）近江俊秀1995「道路遺構の構造－波板状凹凸面を中心として－」『古代文化』第47巻第４号

（註10）波板状凹凸を伴う中世の道路跡は宮城県では他に検出例はないが、古代の多賀城跡の城外の方形地割の道路跡にみられる（千葉他：1997）。また、路面下の基礎事業として、９世紀代であるが、丸太材を密接して敷き並べた例もある（菅原：1997）。古代以来、道路構築方法として路面の下に何らかの事業をする場合があることがわかる。

（註11）時代・場所は離れているが筑後国府周辺の西海道で路面下で暗渠と考えられる溝が検出されている。（久留米市教育委員会：1987）

引用・参考文献

小川淳一　1998　「武士の屋敷跡にみる銅・鉄製品の生産－仙台市王ノ壇遺跡」『季刊　考古学第62号』
久留米市教育委員会　1987　「筑後国府78次調査」『筑後国府』昭和62年度調査概報
主浜光朗　1995　「縄文時代　王ノ壇遺跡」『仙台市史　特別編２考古資料』仙台市史編さん委員会
菅原弘樹　1997　「上代遺跡」『舟場遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第173集
仙台市教育委員会　1996　「縄文人のハート大野田遺跡」仙台市文化財パンフレット第38集
仙台市教育委員会　1992　「仙台市王ノ壇遺跡現地説明会資料」
竹田幸司・渡邊　誠　1998　「仙台市大野田古墳群中世道路跡」『考古学ジャーナル NO430』ニュー・サイエンス社
田中・渡邊・竹田　1998　「仙台市王ノ壇・南小泉遺跡の道路跡」『発掘された中世古道 Part １』　中世みちの研究会
千葉・鈴木・菊池　1997　「山王遺跡Ⅰ－仙塩道路建設に係る発掘調査報告書－」多賀城市文化財調査報告書第45集
渡邊　誠　1997　［大野田古墳群」『宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』宮城県史跡整備市町村協議会

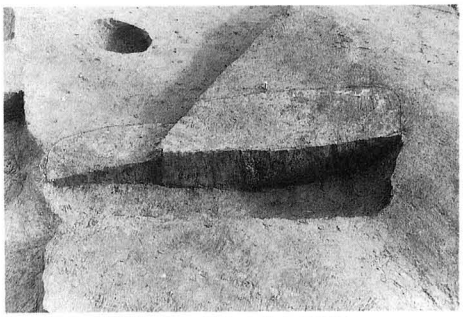


写真１　SK－２土坑断面

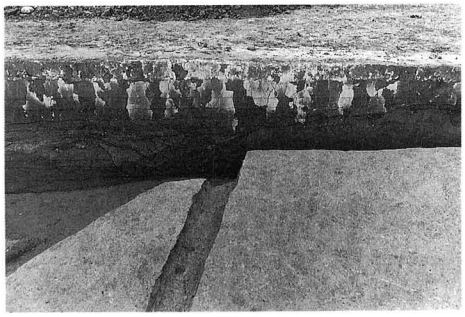


写真２　１Ｔ北壁断面

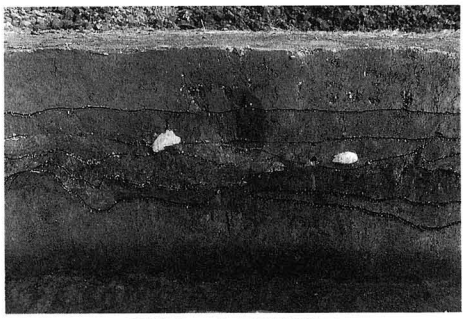


写真３　１Ｔ東壁断面

写真4.SD-1完掘SF-1確認（南西より）

写真５.SF-1 新Ｂ期路面（南西より）

写真6.SF-1新C期路面（南西より）

写真７.ＳＦ－１新Ｃ期路面アップ（南より）

写真８.SF-1 新Ｃ期波板状凹凸Ｄ群（南東より）

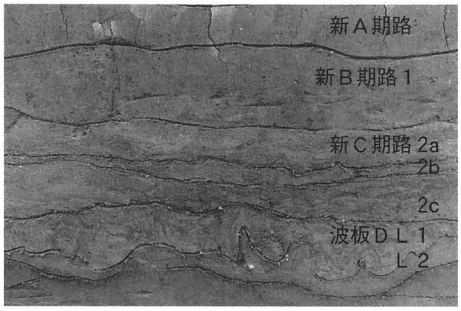


写真９.SF-1 路層北壁断面（南より）

写真10.SF-1 古Ｂ期波板状凹凸Ａ群断面（北東より）

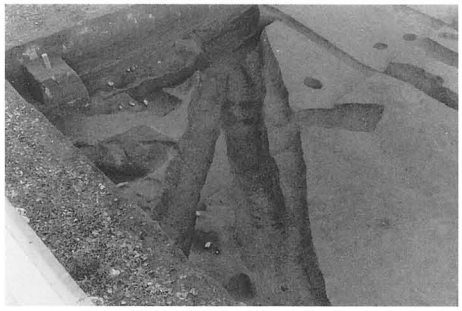


写真11.SF-1 古期側溝完掘（南西より）

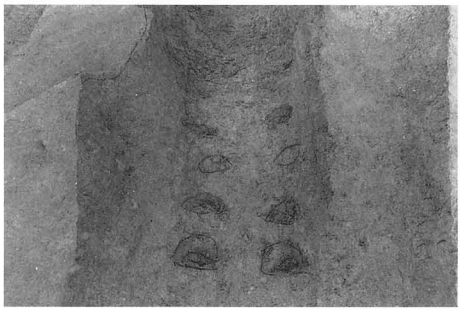


写真12.SF-1古Ｂ３期側溝底面工具痕（南西より）

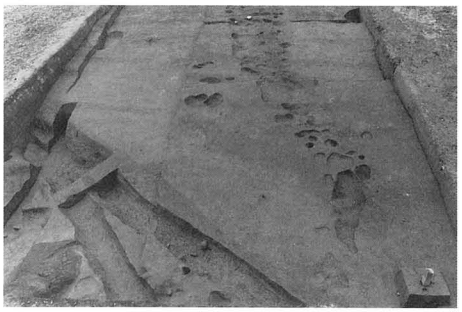


写真13.SF-1　SF-2 全景（西より）

写真14.SF-2 路面（西より）

写真15.SF-2路面アップ（西より）

写真16.SF-2 断面Ｃセクション（東より）

写真17.SF-2 波板状凹凸（東より）

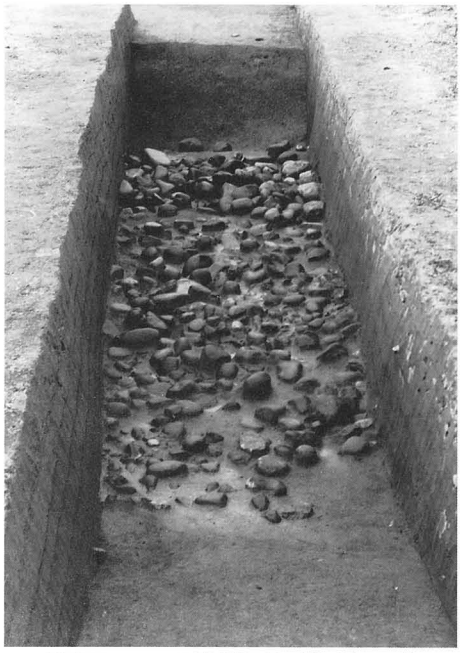


写真18.SF-1 石敷道路新Ｃ期（東より）

写真19.SF-1 西側北壁断面（南より）

写真20.SF-1 東側北壁断面（南より）

写真21.SF-1 石敷道路新Ｃ期西側（北より）

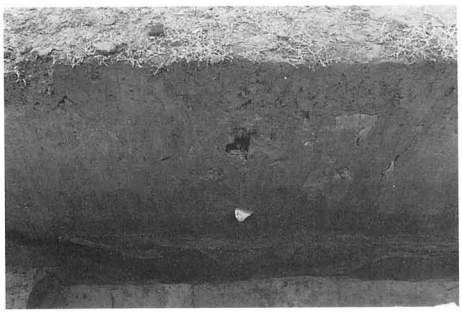


写真22．3T 東側南壁断面（北より）

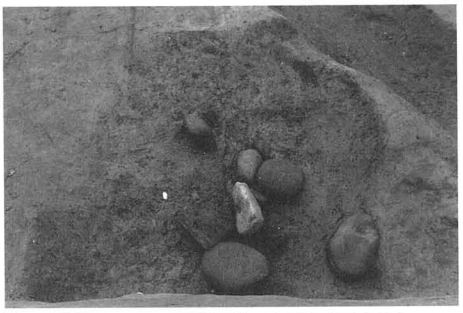


写真23．SK-1 敷石検出状況（西より）

写真24．1 T 西壁断面 SK-1 付近（東より）

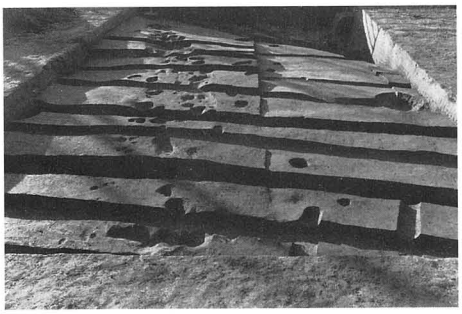


写真25．小溝状遺構群　完掘状況（東より）

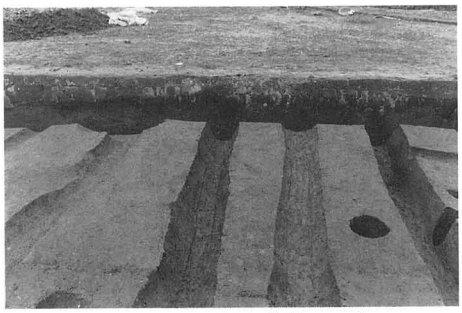
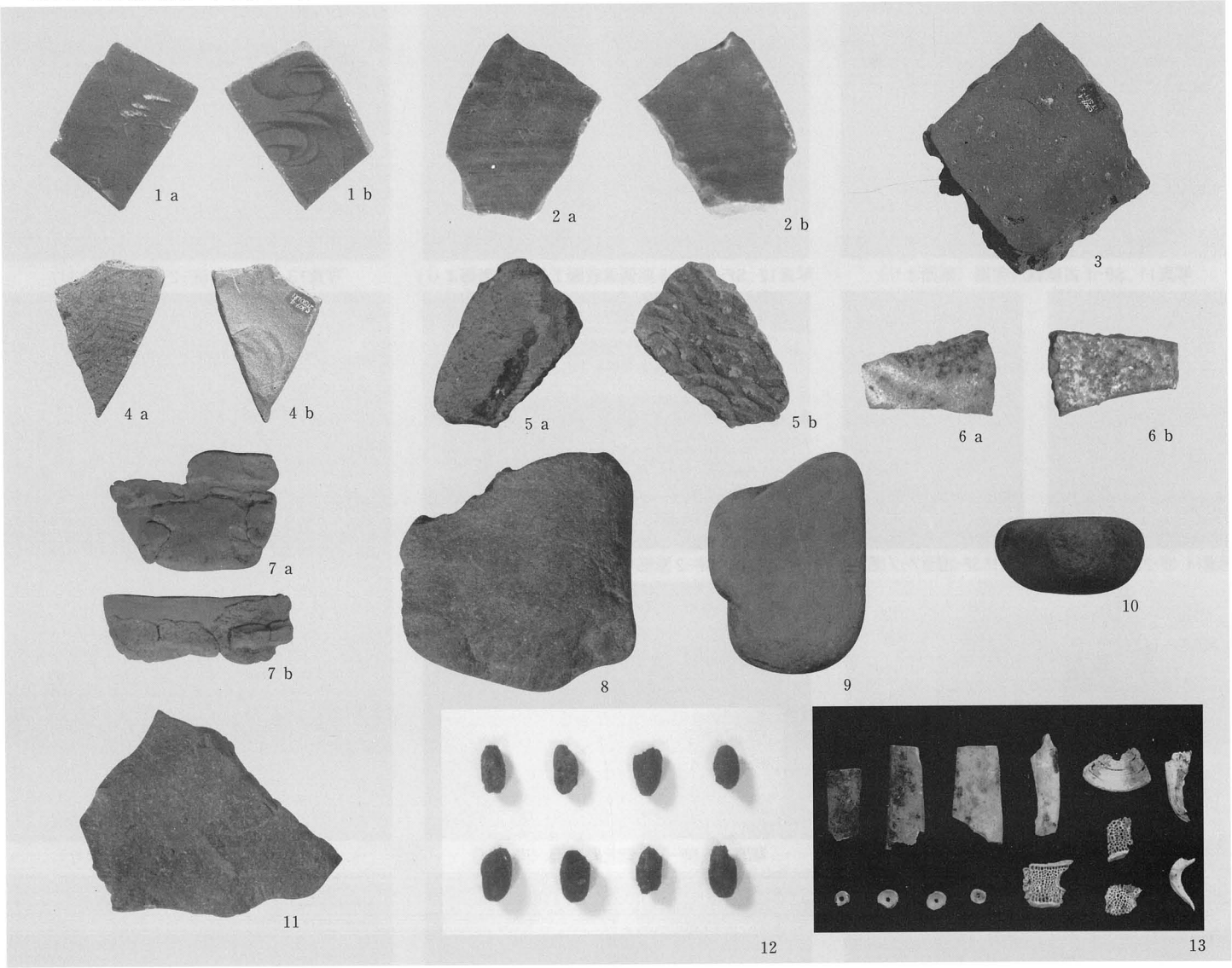


写真26．小溝状遺構群アップ

写真27．27 号墳周溝確認（南西より）



1 青磁碗　（1TSF1・新A期）
2 青磁碗　（1TSF・古A期）
3 陶磁甕　（1TSF1・新A期）
4 須恵器甕（2TSD1・1層）
5 須恵器甕（1T小溝・A 7）
6 須恵器甕（1TⅡ層）
7 円筒埴輪（3T 27号墳周溝 18図 - 3）
8 礫石器　（2TSF1 18図 - 6）
9 礫石器　（2TSF1 18図 - 5）
10 礫石器　（2TSF1 18図 - 7）
11 安山岩質の石材（2TSF1・新C期）
12 炭化米　（SK-1 埋土）
13 骨　（SK-1 埋土）

写真 28

Ⅳ　山田条里遺跡（第２次・３次調査）

Ⅰ　調査要項

遺　跡　名　山田条里遺跡（宮城県遺跡番号01367 、仙台市文化財登録番号Ｃ－294）

調 査 地 点　仙台市太白区山田字田中前、谷地田外

調 査 原 因　仙台市山田鈎取土地区画整理事業（２次調査）

仙台市市道「富田富沢線」建設（３次調査）

調査対象面積　２次　6,000㎡、３次20,800㎡

調 査 面 積　２次　　450㎡、３次 1,835㎡

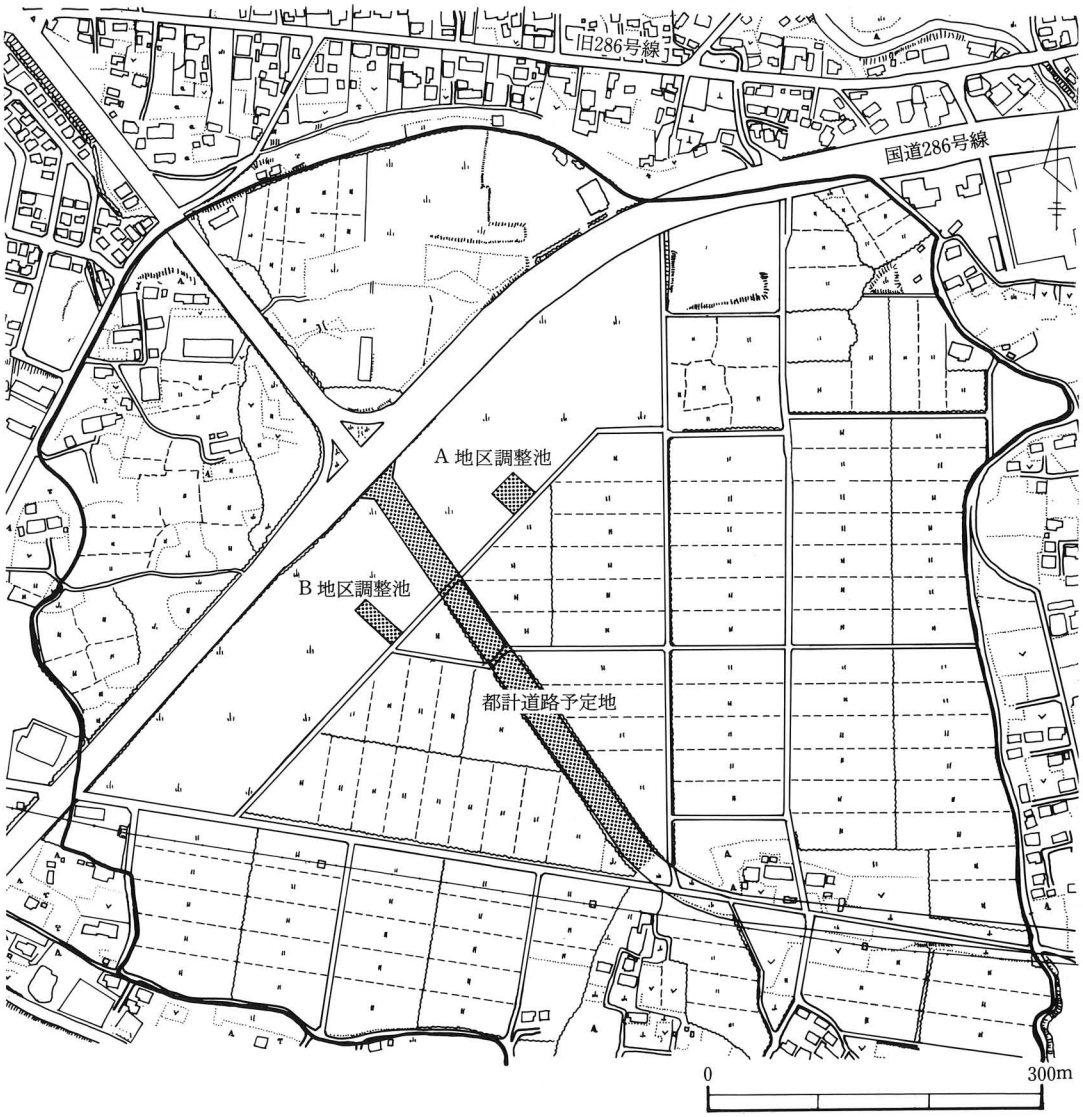
調 査 期 間　２次　平成10年４月14日～６月12日、３次　平成10年４月14日～７月14日

調 査 主 体　仙台市教育委員会

調 査 担 当　仙台市教育委員会文化財課

担 当 職 員　主浜光朗　松本知彦

調査参加者　（２・３次）遠藤いな子　小川良子　金沢沙知子　熊沢とも　小林斎美　佐野たみえ
島崎なつ子　庄子かつえ　関谷栄子　高橋たづよ　三浦たか子　三浦つよの　森　ミヨノ
（３次）阿部八重子　伊藤清子　内田節子　小野紀美子　加嶋みえ子　狩野吉則　菊地富子
佐藤順子　佐藤清治　庄子弘子　菅原　弘　鈴木きぬ子　高橋弘子　渡辺まき子
（３次・整理）小山つるよ　佐藤洋子　佐藤優子　森谷愛子



第１図
調査地点と
周辺の地形

（整理）石川カツ子　及川のり子　熊谷きぬ子　斎藤喜恵子

申　請　者　　２次　仙台市山田鈎取土地区画整理組合　理事長　小島養治

３次　仙台市長　藤井　黎

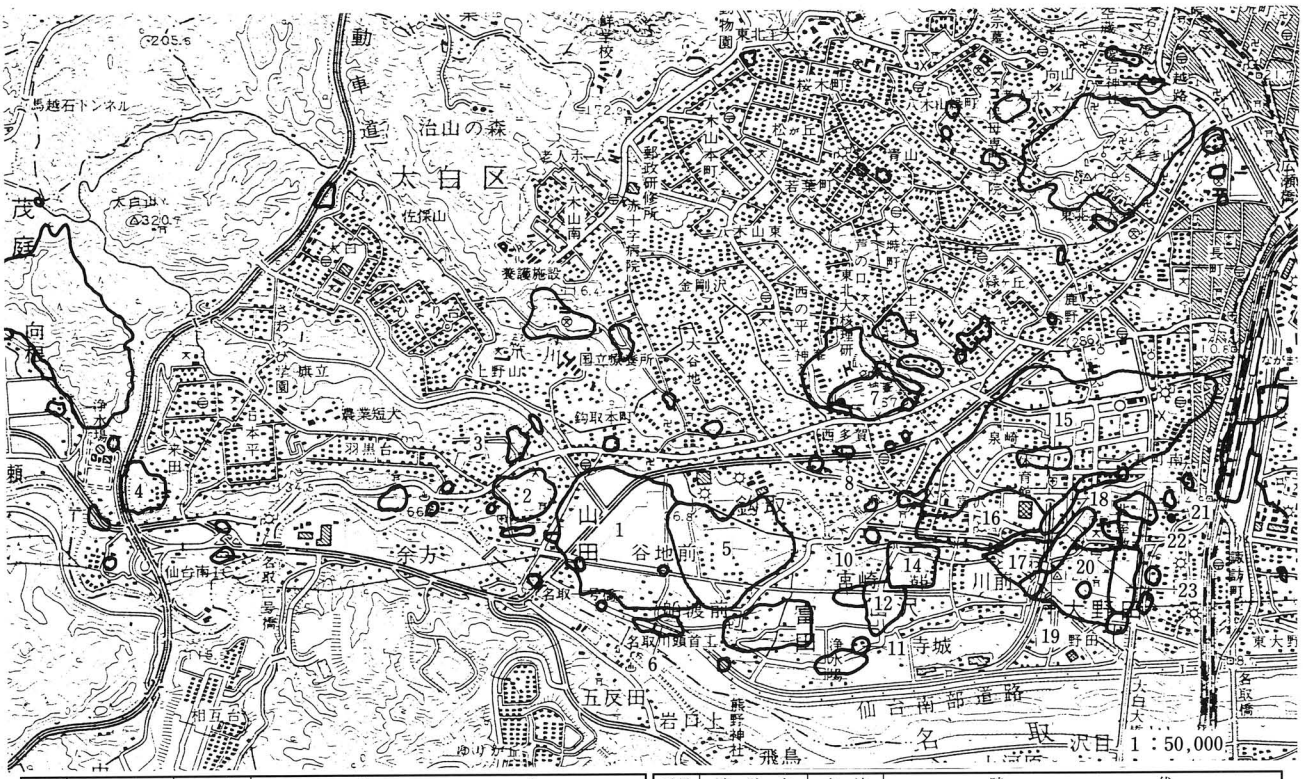
調 査 協 力　　株式会社オオバ東北支店

2　遺跡の位置と環境

山田条里遺跡は仙台市の南西部、JR 長町駅の西方約４㎞の地点、太白区山田・鈎取地区に所在する。遺跡の北方には青葉山丘陵が西から東へ向かって延び、南方には名取川を挟んで高館丘陵が位置している。本遺跡はこの青葉山丘陵と高館丘陵の間に広がる標高24～40m の「名取台地（山田面）」と称される河岸段丘の東端部、名取川に流入する小河川の形成した平坦な扇状地上（標高30～38m）に位置している。基盤となる段丘礫層には粘土まじりの砂、シルトが厚く堆積している。遺跡の範囲は約66万㎡にも及び、現在は水田地帯となっている。

本遺跡周辺には旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良平安の各時代から、中・近世にかけての遺跡が数多く存在しており、仙台市内でも遺跡の密度の高い地域となっている。

本遺跡については、平成元年～平成３年度に実施した発掘調査（第１次調査）終了後の農業基盤総合整備事業によって、以前には良好に見られていた「条里型」の土地割が失われてしまい、景観的に全く見ることが出来なくなってしまった。



番号	遺跡名	立地	時代
1	山田条里	段丘	奈良？・近世
2	山田上ノ台	丘陵	旧石器(前期・後期)・縄文(早期・前期・中期・後期)・奈良・平安・近世
3	北前	段丘	旧石器(前期・後期)・縄文(早期・前期・中期)・平安・近世
4	人来田	丘陵	縄文(中期)・弥生
5	上野	段丘	縄文(中期)・奈良・平安
6	船渡前	段丘	縄文(中期・後期)・弥生・奈良・平安
7	三神峯	丘陵	縄文(前期・中期)・平安
8	原	丘陵麓	弥生・古墳・平安
9	裏町古墳	丘陵麓	古墳
10	鍛冶屋敷Ａ	自然堤防	縄文(後期)・奈良・平安
11	鍛冶屋敷Ｂ	自然堤防	縄文・奈良・平安
12	鍛冶屋敷前	自然堤防	縄文(後期・晩期)・奈良・平安
13	清太原西	段丘	縄文・平安
14	富沢館跡	自然堤防	中世
15	富沢	後背湿地	旧石器(後期)・縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
16	山口	自然堤防 後背湿地	縄文(早期・中期・後期・晩期)・弥生・古墳・奈良・平安・中世
17	下ノ内	自然堤防	縄文(中期・後期・晩期)・弥生・古墳・奈良・平安・中世
18	下ノ内浦	自然堤防	縄文(早期・前期・後期)・弥生・古墳・奈良・平安・中世
19	六反田	自然堤防	縄文(中期・後期・晩期)・弥生・古墳・奈良・平安・中世
20	大野田古墳群	自然堤防	古墳
21	元袋	自然堤防	弥生・奈良・平安・中世・近世
22	大野田	自然堤防	縄文(後期)・弥生・古墳・奈良・平安
23	王ノ壇	自然堤防	縄文(後期)・弥生・古墳・奈良・平安・中世

第２図　山田条里遺跡と周辺の遺跡

３　２次調査

(1)　調査方法

平成10年３月30日付で、仙台市山田鈎取土地区画整理組合理事長より、仙台市太白区山田字田中前外に区画整理事業に伴う発掘届が提出された。この場所は山田条里遺跡のほぼ中央に位置し、１次調査で水路部分を中心とした調査が行われ、水田跡、堀跡を主とした屋敷跡、土坑、石組炉等の遺構や遺物が発見されている。仙台市教育委員会では、申請者と協議の上、工事において掘削を伴う部分について事前に発掘調査を実施することとした。

周辺道路部分については、既に農業基盤整備後に農道として使用されており、今回の区画整理地内の盛土との間が水路として機能している部分もあることから、調整池部分の調査結果から道路部分の調査の実施を検討することとし、当初は調整池部分に調査区を設定した。

１号、２号調整池予定地を、それぞれ区画整理Ａ区、Ｂ区とし、建設予定地内の1.5～２ｍに及ぶ盛土を除去した後、Ａ区については６ｍ×44.5m、Ｂ区については６ｍ×27mの調査区を設定し、重機による掘り下げを行い、人力によって精査を行った。下層の調査は調査区を縮小しながら掘り下げを行い、土層の確認のみを行った。

測量基準については、Ａ区、Ｂ区共に調整池建設地の４隅に杭を設置し、北西隅の杭を基準としてグリットを設定した。

調整池部分の調査結果から、周辺道路部分に調査区を設定して確認が必要な遺構はなく、道路及び水路として機能しており、削平も考えられることから、周辺道路部分の調査は行わないこととした。

(2)　基本層序

調査区が２ヶ所に離れているため、土性、色調等に違いは見られるが、Ⅰ～Ⅴ層まで５枚の層位が確認された。

Ⅰ層はＡ区では５層に細分され、近～現代の水田作土であると考えられる。１層は盛土直前の水田作土である。

Ⅱ層は２層に細分される。上部に灰白色火山灰を小ブロック状、あるいは斑に含んでいる。

Ⅲ層は３層に細分される砂質の土壌である。

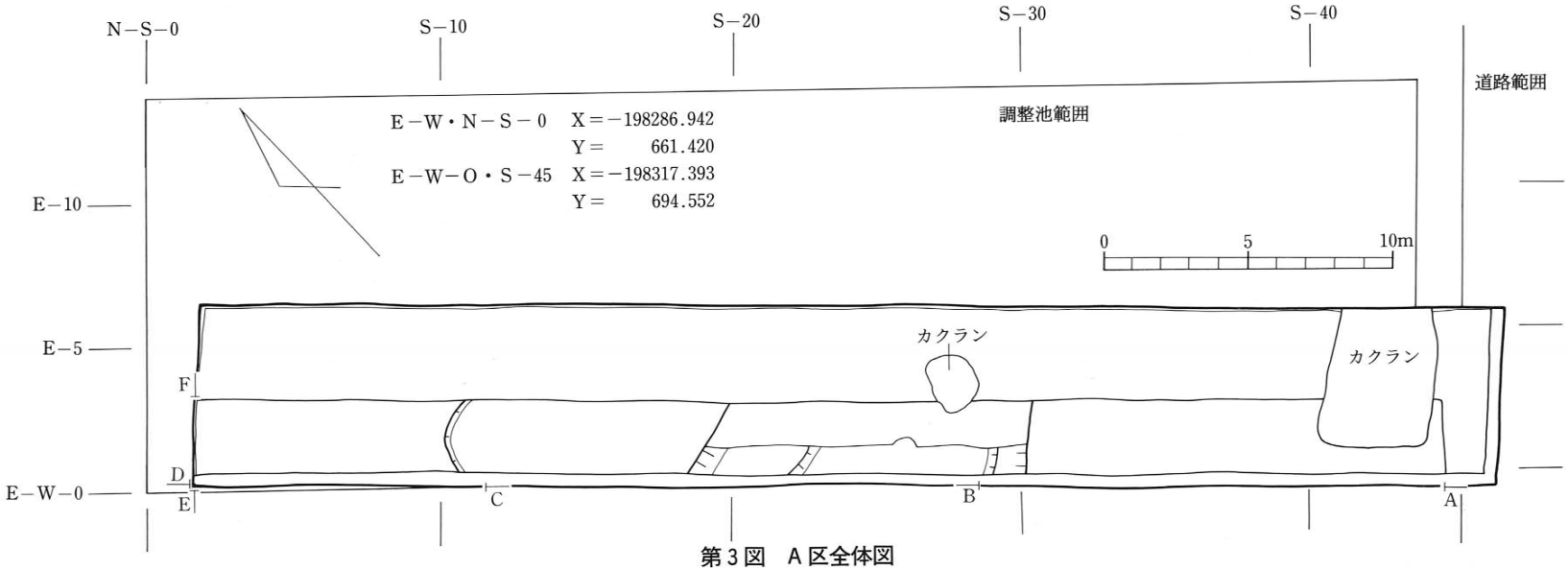
Ⅳ層は黒色系の土壌で、Ａ区では２層に細分される粘土層、Ｂ区では砂質シルト層である。Ｂ区ではⅡ層、Ⅲ層が水田耕作のための削平で既に失われている。Ⅳ層も大部分削平されており、分布が途切れる部分がある。層厚も概ね数cm程度である。

Ⅴ層はＡ区で６層に細分され、粘土質土と砂質土の互層状態になっており、下層では締まりが増大する。Ｂ区では６層に細分され、上部の砂質シルトから下部に向かって徐々に粘土質土に変わり、粘性、締まりが増す。最下層では漸移的に砂層に移行している。

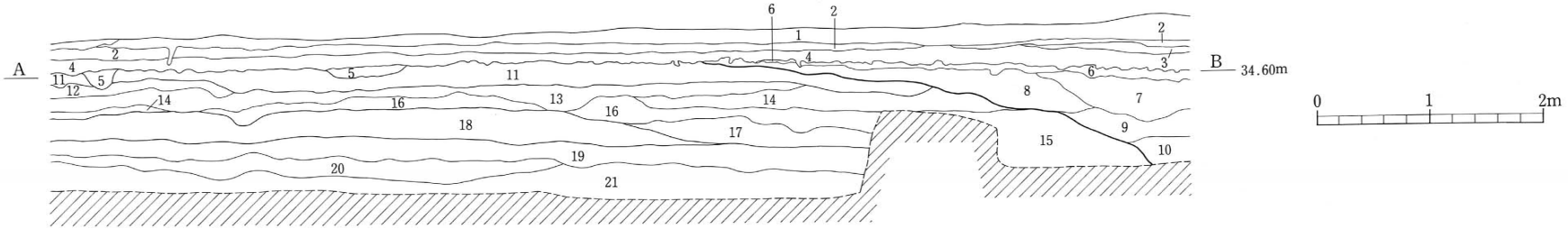
これらの層の１次調査の基本層との対応関係は、Ⅰ層が１次調査の１層、Ⅱ層が３層、Ⅳ層が４層、Ⅴ層が５層に対応するものと考えられ、各層の時期についても同様の対応関係が考えられる。１次調査の２層については、水田耕作のために削平されたものと考えられる。また、今回の調査でのⅢ層は、今回の調査区が１次調査時より北西に外れて、標高も高い部分にあることから、確認されたものであると思われる。最下層のⅤ層の下層の状況にも相違が見られ、今回は下層に砂礫～礫層は確認されなかった。

(3)　発見遺構と出土遺物

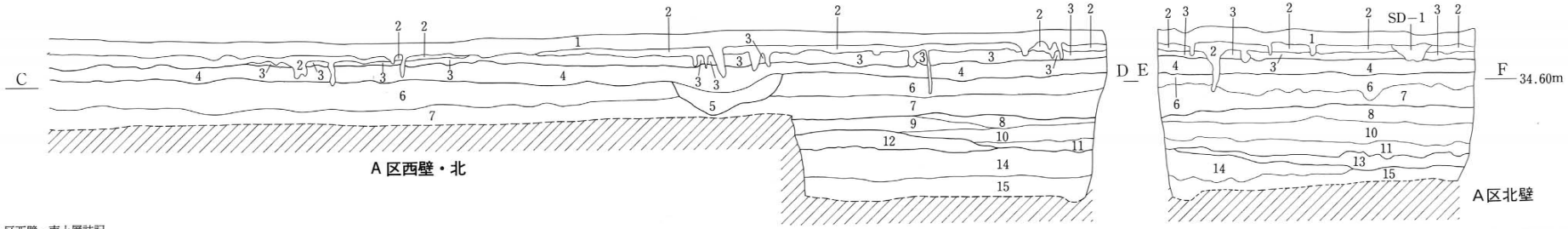
Ａ区　盛土の影響か、全体にグライ化の傾向が見られる。Ⅰ層上面及び層中で検出された遺構については、極めて新しいものと考えられたため記述から除いた。Ⅱ層上面で小河川が検出された。また、Ⅱ層上部は１次調査の成果から水田跡と考えられた。Ⅳ層は調査区中央部では確認されず、南半部と北端部にのみ確認され、縄文時代の遺物は南半部のＳ－33以南からのみ出土した。



第３図　Ａ区全体図



Ａ区西壁・南



Ａ区西壁・北

Ａ区北壁

Ａ区西壁・南土層註記

層　位	No.	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰ	1	10Y3/1　オリーブ黒色	粘土質シルト	南壁には10G5/1の部分有り。現代作土。
	2	2.5Y4/3　オリーブ褐色	シルト質砂	酸化鉄含む。
	3	5Y3/2　オリーブ黒色	シルト	酸化鉄、マンガン、炭化物含む。
	4	7.5Y4/1　灰色	シルト	酸化鉄、マンガンを含む。
	5	5Y4/2　灰オリーブ色 2.5Y3/2　黒褐色	シルト質砂 シルト質粘土	酸化鉄、マンガン含む。
小河川 堆積土	6	7.5Y4/2　灰オリーブ色	砂質シルト	酸化鉄、マンガン、炭化物含む。
	7	5Y3/1　オリーブ黒色	シルト	層下部は色調が明るくなっている。酸化鉄、マンガン、炭化物の細粒が層状に含まれ、灰白色火山灰ブロックを特に層下部に多く含む。

層　位	No.	土　　色	土　性	備　　考
小河川 堆積土	8	5Y4/2　灰オリーブ色	シルト質砂	酸化鉄(集積部分有り)、マンガン、砂礫含む。
	9	5Y4/1　灰色	細砂	層上部に灰白色火山灰粒、砂礫と腐蝕土が互層状になり、枝、木片類を多量に含む。
	10		砂利層	5Y4/1細砂と腐蝕土と互層部分有り。
Ⅱ	11	5Y5/2　灰オリーブ	シルト	酸化鉄、マンガン、7.5Y4/1粘土ブロック、上部に灰白色火山灰小ブロックを含む。水田作土
Ⅲ	12	2.5Y4/2　暗灰黄色 5Y4/4　暗オリーブ色	シルト シルト	酸化鉄、マンガン、炭化物を含む。
	13	7.5Y5/2　灰オリーブ色	シルト質砂	酸化鉄、マンガン(集積部分有)、7.5Y5/2細砂を層状に含む部分有り。
	14	2.5Y3/3　暗オリーブ褐色	細砂	マンガンを多量に含み、細砂を層状に含む部分有り。

層　位	No.	土　　色	土　性	備　　考
Ⅲ	15	2.5GY4/1　暗オリーブ灰色	細砂	層下部は砂礫層になる。
	16	10YR4/2　灰黄褐色	砂質粘土	酸化鉄、マンガン、10YR4/2粘土を層状に含む部分有り。
	17	2.5Y4/2　暗灰黄色	シルト質砂	酸化鉄、マンガン、10YR3/3シルト質砂を層状に含む。
Ⅳ	18	10YR3/1　黒褐色	砂質粘土	酸化鉄、マンガン、10YR4/2粘土を層状に含む部分有り。
Ⅴ	19	2.5GY3/1　暗緑灰色	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン集積(ガリガリする)、風化礫、植物遺体を含む。
	20	10Y5/1　灰色	細砂	植物遺体を含む。
	21	5G5/1　緑灰色	シルト質粘土	マンガン(ガリガリする)、風化礫、10BG4/1粘土を斑に含む部分有り。

第４図　Ａ区土層断面図

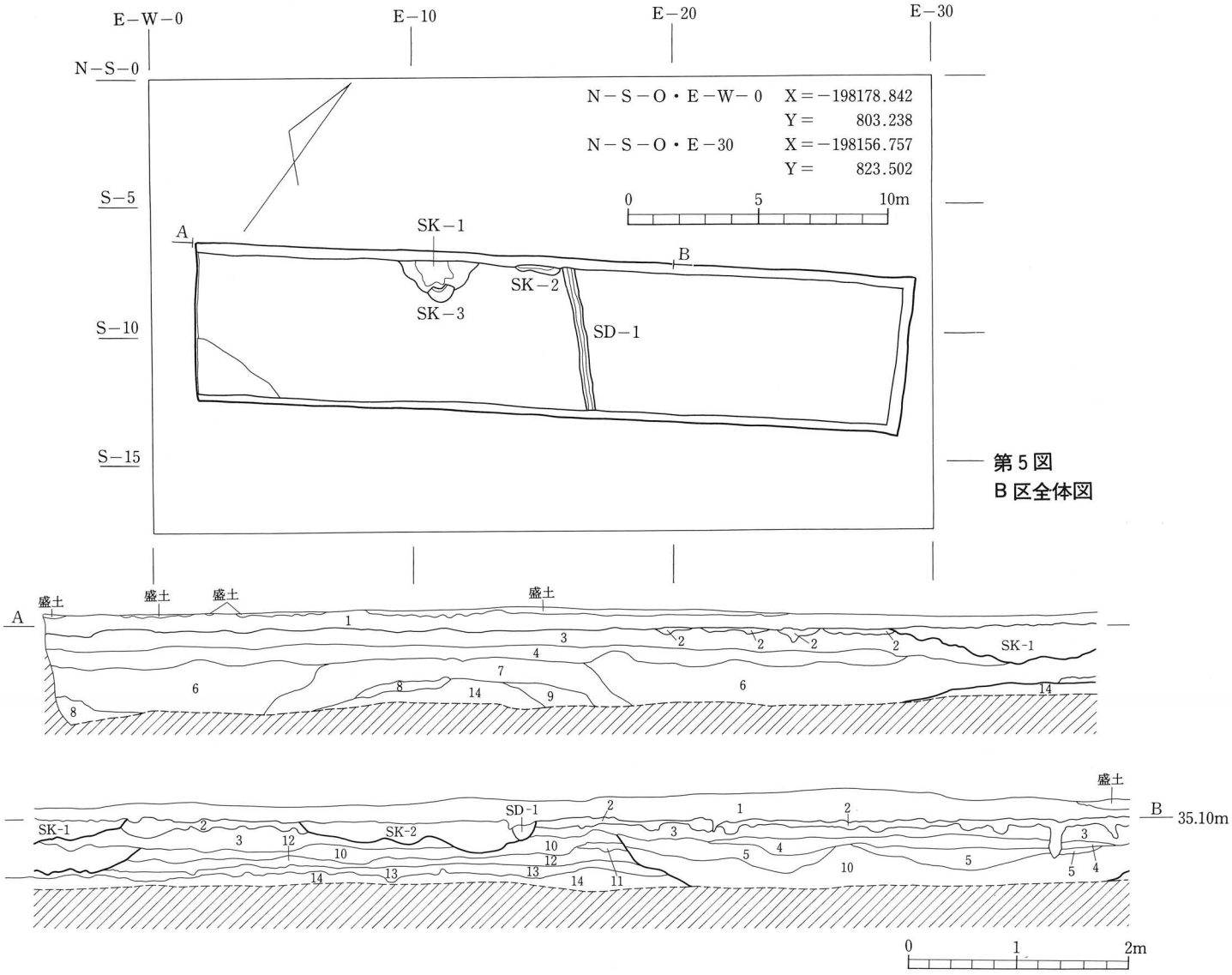
Ⅱ層検出遺構

Ⅱ層水田跡　Ⅰ層がⅡ層を攪拌しており、畦畔等の遺構は検出されなかったが、S－10 ライン付近で弧状の段を検出した。比高差は５cm前後である。Ⅱ層上面の標高は34.5m～34.8m で北西から南東に向かって緩やかに傾斜している。下面の凸凹は顕著ではない。遺物は少量の土師器片がある。

小河川跡　調査区中央部 S－17～33 に位置する。断片的なもので詳細は不明であるが、上幅約11m、東西方向を指

A 区西壁北・北壁土層註記

層　位	No.	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰ	1	10Y3/1　オリーブ黒色	粘土質シルト	南壁には10G5/1 の部分有り。現代作土。
	2	7.5Y4/1　灰色	シルト	酸化鉄、マンガン含む。
	3	2.5Y4/2　暗灰黄色	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン、7.5Y4/1 粘土小ブロックを含む。
Ⅱ	4	5Y5/2　灰オリーブ色	シルト	酸化鉄、マンガン、7.5Y4/1 粘土ブロック、上部に灰白色火山灰小ブロックを含む。水田作土。
Ⅲ	5	10Y5/2　オリーブ灰色	細砂	層下部に酸化鉄集積。
	6	2.5Y4/2　暗灰黄色	シルト質砂	酸化鉄、マンガンを多量に含む。
	7	5Y3/2　オリーブ黒色	シルト質砂	酸化鉄、マンガンを含む。
	8	5GY4/1　灰色	シルト質砂～中砂	風化砂礫、腐蝕土ブロックを若干含む。
	9	5Y4/1　暗オリーブ灰色	粘土	酸化鉄、炭化物小粒多量に含む。
	10	7.5Y3/1 10YR3/1　オリーブ黒色 黒褐色	細砂 シルト質粘土	腐蝕土層を互層状に含む部分有り。
	11	5GY4/1　暗オリーブ灰色	粗砂～小礫	7.5Y3/1 粘土の部分有り。流木有り。
Ⅳ	12	10Y3/2　オリーブ黒色	粘土	酸化鉄、炭化物粒、流木含む。
	13	7.5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	木葉、植物遺体を多量に含む。
Ⅴ	14	5G3/1　暗緑灰色	粘土質シルト	グライした粘土粒、流木(枝)を含む。
	15	5G4/1　暗緑灰色	粘土	5B2/1 粘土小ブロックを含む。



第５図
Ｂ区全体図

層　位	No.	土　　色	土　性	備　　考
Ⅰ	1	2.5G2/1　黒色	シルト	酸化鉄を挟んで下部は5Y3/1 シルト、マンガン含む。現代作土。
Ⅳ	2	10YR2/2　黒褐色	砂質シルト	酸化鉄、マンガン、風化砂粒を含み、2.5Y3/2 粘土質シルトを斑に含む。
Ⅴ	3	2.5Y5/3　黄褐色	砂質シルト	西に向かって漸移的に5Y4/2 に移行する。酸化鉄、マンガン、風化礫、2.5Y2/1 シルトを部分的に縞降り状に含む5Y4/1 細砂を互層状に含む部分有り。
小河川	4	5Y6/2　灰オリーブ色	シルト質粘土 細砂	マンガン、風化砂粒を少量含む。
	5	5Y5/2　灰オリーブ色	細砂	マンガン、風化礫を少量含む。
	6	2.5Y4/3　オリーブ褐色	細砂～砂利	砂利部分は締まり大、細砂部分一部グライ、７層との境に酸化鉄集積、マンガン塊多量に含む。
	7	2.5Y4/1　黄灰色	細砂	層下部は粗砂になり、マンガンを層状に、風化礫少量含む。
小河川	8	10Y4/1　灰色	細砂	風化礫多量に含む。
	9	5GY4/1　暗オリーブ灰色	細砂	マンガン塊、風化礫、5G6/1 粘土粒を含む。
	10	2.5Y4/4　オリーブ褐色	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン、風化砂礫含む部分有り。
Ⅴ	11	5Y4/2 2.5Y6/2　灰オリーブ色 灰黄色	シルト質砂 シルト質砂	マンガン含む。
	12	5Y5/3　灰オリーブ色	粘土	酸化鉄、マンガン、5Y6/4 シルト質粘土を縞降り状に含む部分、風化礫含む部分有り。
	13	N1.5/0　黒色	粘土	N4/1 粘土になる部分有り。酸化鉄、マンガン含む。
	14	5G6/1　緑灰色	粘土	下部に向かって漸移的に5G4/1 細砂に移行する。マンガン塊多量に含む部分有り。

第６図　Ｂ区土層断面図

している。堆積土中に灰白色火山灰をブロック状に大量に含んでおり、砂礫層と腐植土層が互層になっている。遺物には土師器片、須恵器片があり、須恵器の中には墨書が認められるものがある。平安時代以降のものであると思われる。

Ｂ区　Ｉ層直下でⅣ層が確認され、Ⅳ層上面で土坑３基、溝跡１条が検出された。Ⅳ層は遺存状況が悪く、島状に途切れる部分もあるが、縄文土器、石器が出土している。Ⅴ層上面でピット、倒木痕が検出された。ピットは人工的なものとは考えられなかった。Ⅴ層下部で蛇行する小河川跡が確認されている。なお、Ｉ層直下で焼夷弾３本を検出している。

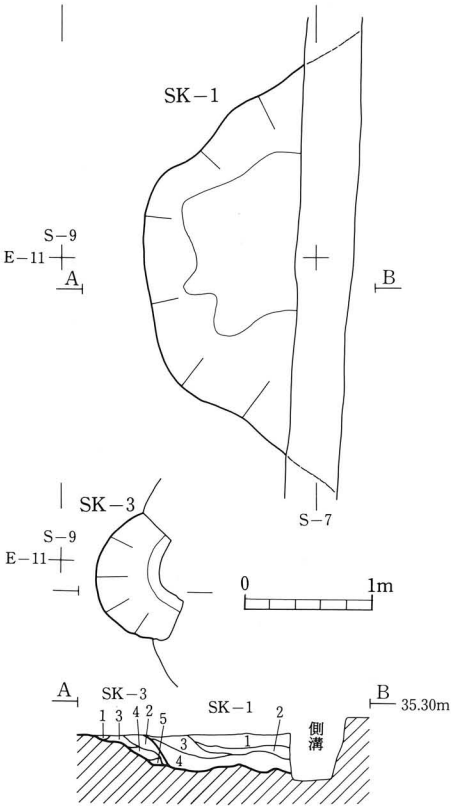
Ⅳ層検出遺構

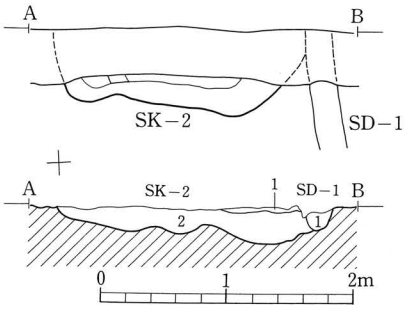
SK－１土坑　調査区西寄り、E－11・S－７付近に位置している。SK－３と重複関係にあり、SK－３を切っている。調査区外へ延びており、正確な規模、平面形は不明であるが、直径３ｍ前後の不整な円形を基調とした平面形と考えられる。壁高は21～28cmあり、底面から緩やかに立ち上がる。底面は小さな凸凹はあるがほぼ平坦である。堆積土は４層に分けられる。遺物は土師器の小破片が出土している。

SK－２土坑　調査区中央、E－15・S－７付近に位置している。SD－１と重複関係にあり、SD－１に切られている。調査区外へ延びており、正確な規模、平面形は不明であるが、長軸２ｍ以上、短軸0.7m以上の不整な楕円形を基調とした平面形と考えられる。壁高は７～16cmで遺存状況は良くない。底面から緩やかに立ち上がる。底面には凸凹があり、西側が一段高くなっている。堆積土は２層に分けられる。遺物はない。

SK－３土坑　調査区西寄り、E－11・S－８付近に位置している。SK－１と重複関係にあり、SK－１に切られており、正確な規模、平面形は不明であるが、直径１ｍ以上の円形あるいは楕円形を基調とした平面形と考えられる。壁高は22～24cmあり、底面から緩やかに立ち上がる。底面は削平のため、ほとんど遺存せず不明である。堆積土は５層に分けられる。遺物はない。

SD－１溝跡　調査区中央部に位置し、調査区を斜めに横切るように延びている。調査区外へ延びており、検出されたのはその一部である。SK－２と重複関係にあり、SK－２を切っている。調査区内での方向は、およそW－35°－Nである。上幅は20～30cm、底面幅は10～15cmである。断面形は「U」字状を呈している。深さは確認面から底面まで20cm前後である。底面にはゆるやかな凸凹が見られ、底面レベルは一定せず、比高差５cm程度でうねっている。





層　位	No.	土　　色	土　性	備　　考
SD－1	1	7.5Y4/1　灰色 5Y2/1　黒色	細砂 粘土質シルト	互層
SK－1	1	2.5YR2/1 赤黒色	粘土質シルト	粘性あり、砂粒、炭化物粒を全体に含む。部分的に褐灰色土7>5YR4/1を含む。
	2	7.5YR2/1 黒色	粘土質シルト	にぶい赤褐色土(2.5YR4/4)を全体的に細かく混入する。
	3	7.5YR2/1 黒色	粘土質シルト	粘性あり。粒状に炭化物を含む。微量ではあるが細かく酸化鉄が混入する。
	4	7.5YR1.7/1　黒色	粘土質シルト	粘性はあるが３より少ない。
SK－2	1	2.5Y3/1　黒褐色	シルト	酸化鉄若干含む。
	2	N1.5/0　黒色	粘土質シルト	層下部に2.5Y5/3砂質シルト含む。
SK－3	1	10YR2/2　黒褐色	砂質シルト	しまりあり。風化礫やマンガン粒を混入する。
	2	10YR2/2　黒褐色	砂質粘土	しまりあり。５より固い。
	3	7.5YR2/3 極暗褐色	砂質粘土	５よりさらに固く風化礫を混入する。
	4	7.5YR2/2 黒褐色	砂質粘土	粘性は７より強い。
	5	7.5YR3/2 黒褐色	砂質粘土	しまりなし。

第７図　ＳＫ１、２、３

堆積土は単層であるが、砂と粘土の互層になっており、自然堆積であると思われる。遺物はない。

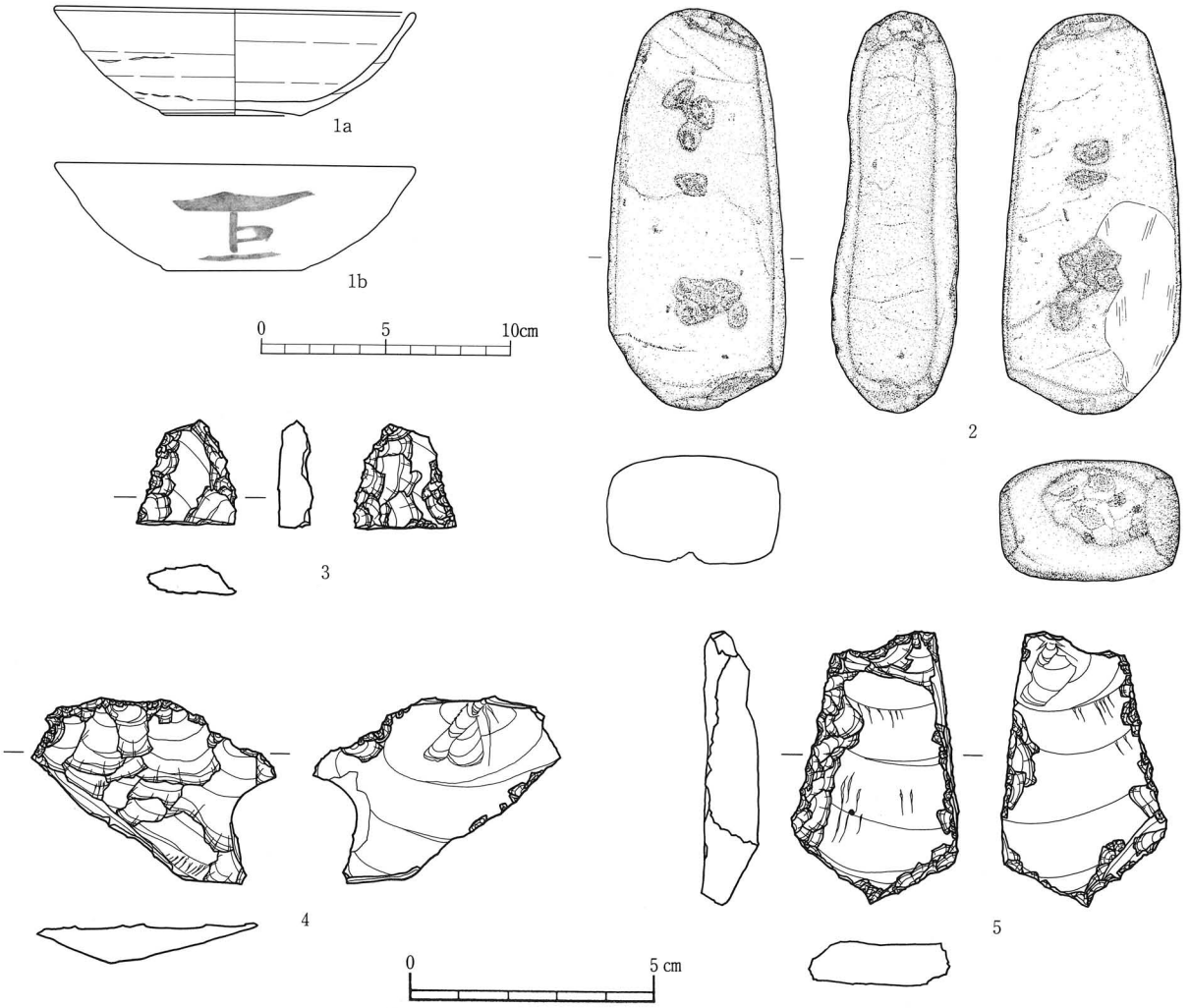
(4)　まとめ

1．今回の調査区は遺跡中央部のやや西寄りに位置しており、標高はＡ区で35m 前後、Ｂ区で35.3m 前後である。

2．Ａ区のⅡ層が水田跡と考えられ、遺跡西部まで水田域が遺存することが確認されたが、畦畔等の遺構は検出されず、下層の巻き上げも顕著ではなく、古代の水田跡については水田範囲の確認にとどまった。また、「条里跡」に関する痕跡も認められなかった。

3．その他の遺構として、土坑、溝跡、小河川跡がある。出土遺物は少量である。中でも遺構内出土の遺物は極めて少ない。陶磁器、土師器、須恵器、縄文土器、石器がある。墨書銘須恵器を除いて時期の判明するものはなかった。

4．遺構の年代は、Ａ区の水田跡、小河川跡は、灰白色火山灰の状況と出土遺物から、平安時代あるいはそれ以降と考えられる。Ｂ区では土坑、溝跡があり、出土遺物が極めて少ないため詳細は不明であるが、Ａ区検出遺構と同様の年代が考えられる。



No.	登録番号	種別	器種	出土地点	層位	外面	内面	底部	備考	写真図版
1	026	須恵器	坏	Ａ区	河川跡	ロクロ調整	ロクロ調整	回転糸切り無調整	体部外面に墨書銘「巨」カ	35－1
No.	登録番号	種別		出土地点	層位	長×幅×厚cm	重量 g	石材	備考	写真図版
2	055	礫石器		Ｂ区	Ⅱ層	15.7×7.2 ×4.8	899.4	安山岩		35－5
3	055	不定形石器		Ｂ区	Ⅱ層	2.15×2.05×0.6	2.8	頁岩		35－2
4	046	剝片		Ｂ区	Ⅱ層	(37.0)×5.0 ×0.82	12.0	頁岩		35－3
5	030	不定形石器		Ｂ区	Ⅱ層	5.6×3.3 ×0.94	22.9	頁岩		35－4

第８図　第２次調査出土遺物

4　３次調査

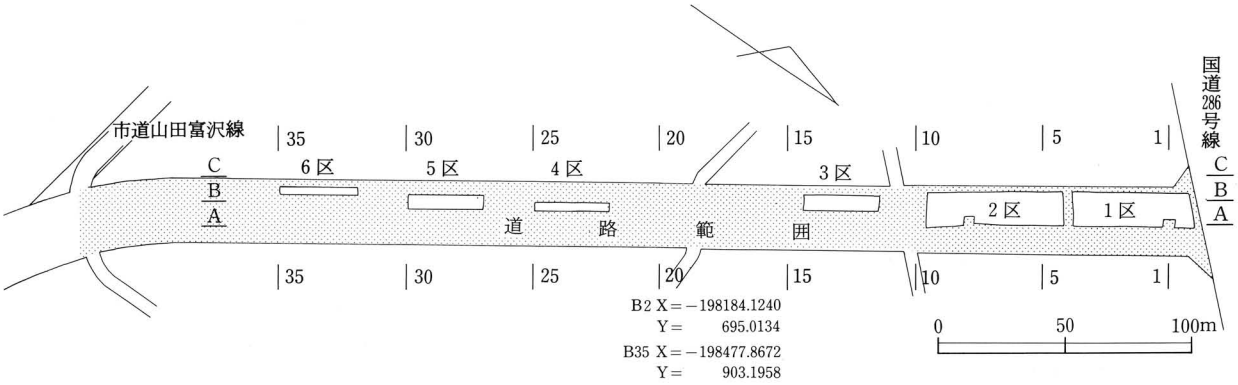
(1)　調査方法

平成10年３月19日付で、仙台市長より仙台市太白区山田字田中前地内における市道「富田富沢線」（富沢～山田地内）建設工事の発掘通知が提出された。この道路は山田条里遺跡中央を北西から南東に貫いており、第１次調査で、中央以南の水路部分の調査が市道予定地の両側で行われており、水田跡、堀跡、土坑、石組炉等の遺構と遺物が発見されている。仙台市教育委員会では、事業主体者と協議の上、事前に発掘調査を実施することとした。当初は区画整理地内の国道286号線から約100m までを調査の対象範囲とし、北西側から１区、２区と２ケ所の調査区を設定して調査する予定で調査に着手した。５月に入り、調査の進捗状況と遺構の検出状況から、更に南側の市道「山田富沢線」との間の区間を調査の対象範囲に拡大することとした。

区画整理地内では、排土を考慮に入れ、１区は13m×48m、２区は13m×54m の範囲で重機を用いて盛土を除去したが、１区では盛土はほとんど見られず、盛土と表土を同時に除去した。その後人力で６ m×45m の範囲を掘り下げて精査し、更に範囲を縮小しながら掘り下げ、下層の確認を行った。２区では１区同様盛土と表土を除去したが、北西から1/3付近で盛土以前の水路が検出され、水路以南では設定した調査区中央に湧水を処理するための溝が掘削され、更に大部分の範囲で砂礫層上面まで攪乱が及んでいた。そのため水路以北では人力で６ m×20m の範囲を精査し、水路以南では攪乱を免れた部分の遺構確認を行い、更に下層の確認のための側溝の掘り下げを調査区の東壁沿いで行った。

南側に拡大した部分では、北西から南東に向かって３～６区までの４ケ所の調査区を、第１次調査時に遺構を検出した部分の近接地で、既存の道路及び湧水処理のために掘削された部分と水田の作業用の通路を除いた場所に設定した。３区、５区は６ m×30m、４区、６区は３ m×30m の調査区を設定し、重機による掘り下げを行い、人力によって精査を行った。下層の精査については側溝を掘り下げ、砂礫層の確認を行った。

測量については、道路の中心杭№122～№104を基準として10m×10m のグリットを設定した。



第９図　調査区配置図

(2)　基本層序

調査区が細長い範囲にわたるため、土性、土色などに違いは見られるが、Ⅰ～Ⅵ層まで６枚の層が確認された。

Ⅰ層は、３層に細分される。削平及び攪乱によって確認されない部分、１あるいは２層のみが確認される部分もある。近現代の水田作土であると考えられる。

Ⅱ層は、灰色系の土壌である。２区南半から４区北端部までは削平のため確認されず、遺存状況の良い部分でも島状に分布しているのみである。

Ⅲ層は、３層に細分される。上層からの削平で確認されない部分も見られるが、灰白色火山灰を小ブロック状あるいは斑に含んでいる。

Ⅳ層は、砂質土壌であり調査区北部の１区から２区北端部にかけてのみ確認された。

Ⅴ層は、黒色系の土壌で、１区南半から４区北半にかけて確認された。２区南半では削平及び攪乱によってほとんど確認されなかった。弥生土器、縄文土器、石器を含んでいる。

Ⅵ層は，概ね砂礫層であるが、２区の中央部には、上部のシルトから細砂を挟んで粘土質土に変わり、粘性、しまりともに増す部分がある。その他では、下部につれて砂礫となり、特に南側の４区南半から５区にかけては、最下層で礫層となっている。

これらの層の１次調査との対応関係は、Ⅰ層が１次調査の１層、Ⅱ層が２層、Ⅲ層が３層、Ⅴ層が４層、Ⅵ層が５層に対応するものと考えられ、各層の時期についても同様の対応関係が考えられる。Ⅳ層については、１次調査の調査区より標高の高い位置でのみ確認されているため、１次調査では検出されなかったものと思われる。

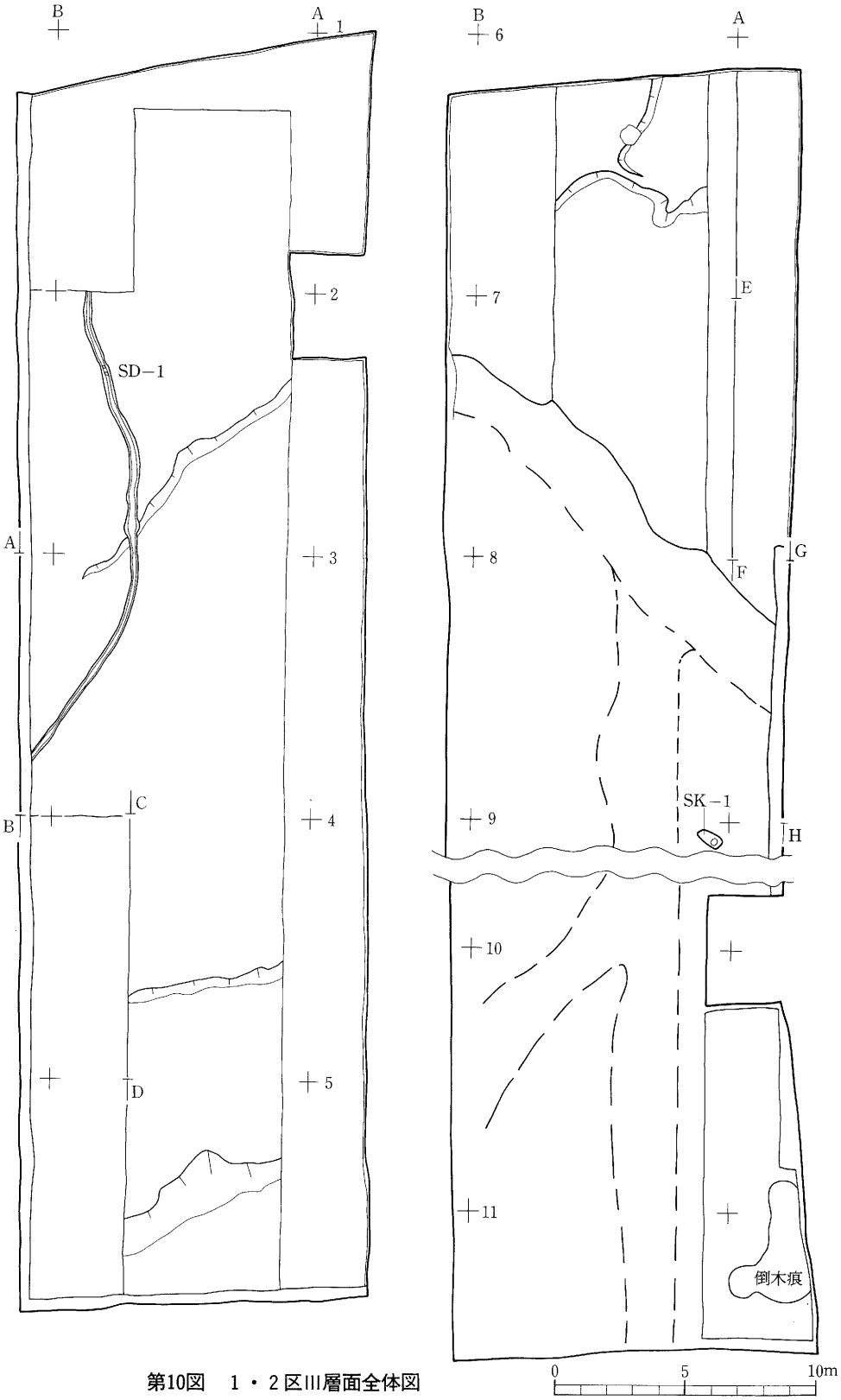
⑶　発見遺構と出土遺物

１・２区　１区のⅡ層上面で溝跡１条が検出された。１次調査の成果より水田土壌と考えられるⅢ層は、１区から２区北部のＡ７グリッドにかけて確認された。１区Ａ３グリッドから２区Ａ７グリッドにかけてⅣ層が確認され、２区のＡ８グリッド以南では、削平と攪乱のため部分的に島状に残存するのみであった。

２区のⅤ層上面で土坑１基が検出された。２区南端の10～11グリッドにかけては、Ⅳ層中及び倒木痕上面で弥生土器が比較的まとまって出土している。

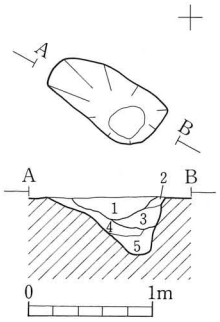
Ⅱ層検出遺構

SD－１溝跡　１区中央西よりに位置し、弧状に延びている。調査区外に延びており検出されたのはその一部である。上幅



第10図　１・２区Ⅲ層面全体図

は20～60cm、底面幅は７～35cm、断面形は「U」字形であるが皿形を呈する部分もある。深さは、確認面から底面まで５～11cmである。底面はほぼ平坦で、底面レベルは地形の傾斜に沿って南に向かって徐々に低くなっている。堆積土は単層であり、自然堆積であると思われる。土師器、須恵器の摩小片が出土している。



No.	土色		土質	備考
1	10YR1.7/1	黒色	シルト	酸化鉄、炭化物、2.5Y4/4 シルトブロックを含む。
2	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	酸化鉄、10YR2/1 シルトを斑に含む。
3	10YR2/2	黒褐色	シルト	炭化物、2.5Y4/2 砂質シルト小ブロックを含む。
4	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	酸化鉄、マンガンを含む。
5	2.5YR3/2	暗赤褐色	砂質シルト	炭化物を粒状に含む。

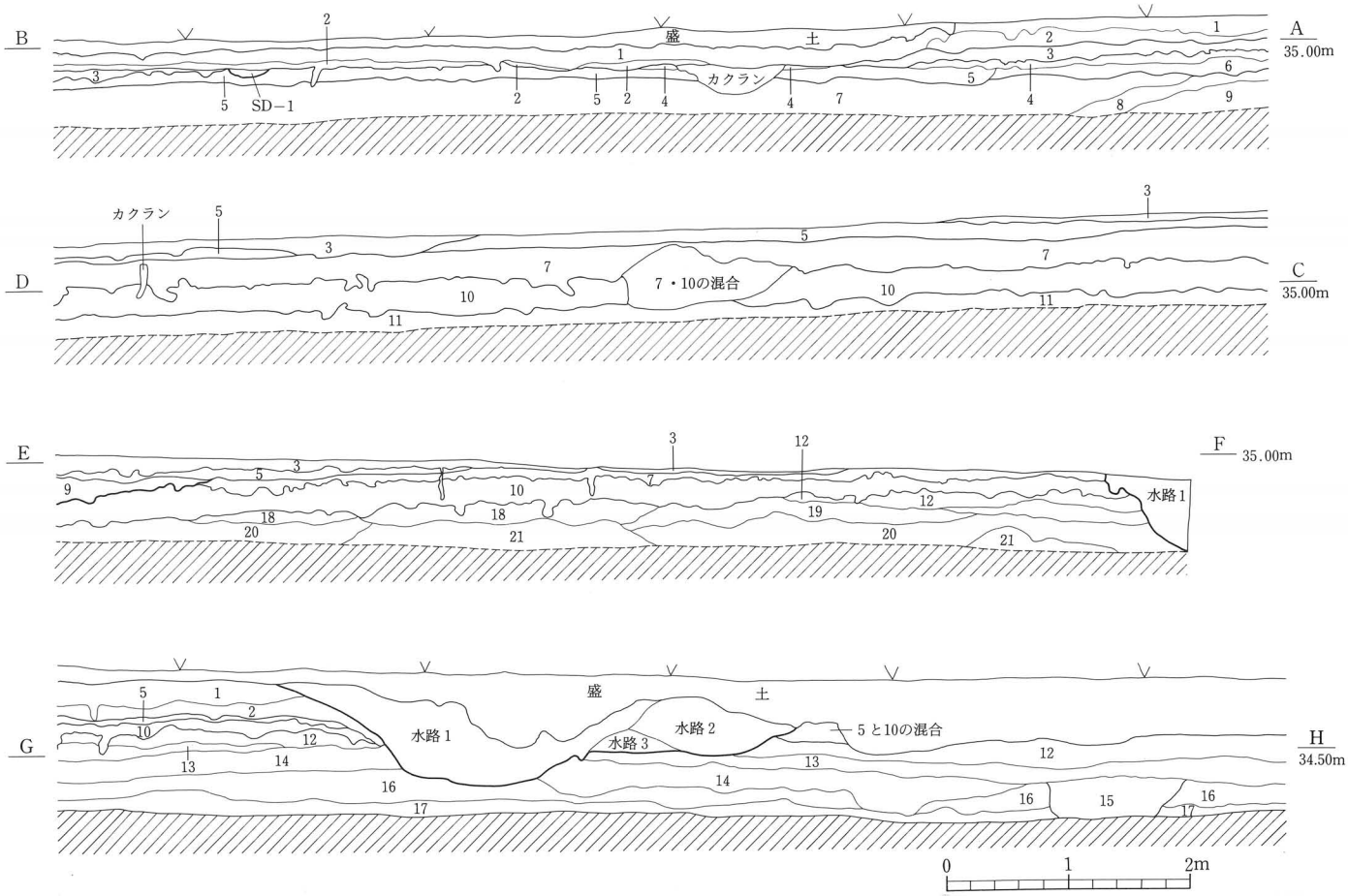
第11図　SK 1

Ⅵ層検出遺構

SK－１土坑　２区中央部東よりに位置している。平坦形は長軸0.95m、短軸0.45mの不整な楕円形で、壁高は46cmあり、概ね底面から急角度で立ち上がるが、西壁は緩やかな角度である、底面は平坦である。堆積土は５層に分けられる。出土遺物はない。**３・４・５・６区**　３区は、１次調査のCトレンチ北端、石組炉が検出された部分の東に隣接して設定した。Ⅰ層直下でⅤ層が確認され、Ⅱ～Ⅳ層は削平され確認されない。

Ⅴ層から、縄文土器、石器が僅かに出土している。Ⅴ層上面で石組炉に関係する遺構は検出されなかった。Ⅵ層は全体にグライしている。

４・５・６区は、水田作業に支障のない場所で、１次調査の際に畦畔が検出された部分に近接した部分に設定し



層位	No.	土色		土性	備考
Ⅰ	1	5Y4/2	灰オリーブ色	シルト	酸化鉄を含み、層下部に集積部分有り。
	2	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト質砂	酸化鉄、マンガン、層状に細砂含む部分有り。
Ⅱ	3	2.5Y4/1	黄灰色	シルト	酸化鉄、マンガン、2.5Y5/2 細砂ブロックを所々に含む。
Ⅲ	4	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン、灰白色火山灰をブロック状に含む。
	5	7.5Y5/2	灰オリーブ色	シルト	酸化鉄、マンガン、灰白色火山灰を小ブロック状に、5Y5/2 粘土質シルトを層状に含む部分有り。
	6	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂質シルト	酸化鉄、マンガン、層上部に灰白色火山灰小ブロックを若干、細砂小ブロック層状に含む。
Ⅳ	7	5Y4/3	暗オリーブ色	細砂	酸化鉄、マンガンを疎に含み、5Y4/1 粘土を小ブロック状に、風化礫を層状に多量に含む部分有り。
	8	7.5Y5/2	灰オリーブ色	中砂	粗砂を層状含む部分有り。
	9	2.5Y4/2	暗灰黄色	細砂～中砂	酸化鉄、マンガン、粗砂を互層状に含む部分有り。
Ⅴ	10	1.5/0	黒色	シルト質粘土	炭化物粒を含む。
Ⅵ	11	2.5GY4/1	暗オリーブ灰色	中砂	植物遺体を含む。
Ⅵ	12	5Y5/2	灰オリーブ色	シルト	酸化鉄、炭化物を含む。
		5Y4/1	灰色	シルト	
	13	5G4/1	暗緑灰色	細砂	風化砂粒、炭化物を層状に、粗砂小ブロックを含む。
	14	5GY3/1	暗オリーブ灰色	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン、植物遺体、10Y4/2 粘土質シルトを斑に含む。
	15	7.5Y2/1	黒色	粘土質シルト	10Y4/1 粘土ブロックを含む。
	16	7.5Y4/3	暗オリーブ色	粘土	10Y5/1 粘土質シルトを斑に含む。
	17	10Y4/1	灰色	粘土	10Y5/1 粘土を斑に含む。
	18	10BG4/1	暗青灰色	中砂～粗砂	風化小礫を含む。
	19	10GY4/1	暗緑灰色	中砂	5Y6/3 粗砂小ブロックを含む。
	20	5GY4/1	暗オリーブ灰色	細砂	
	21		風化砂礫層		
SD－1	1	5Y3/1	オリーブ黒色	シルト	7.5Y5/2 シルト小ブロックを含む。

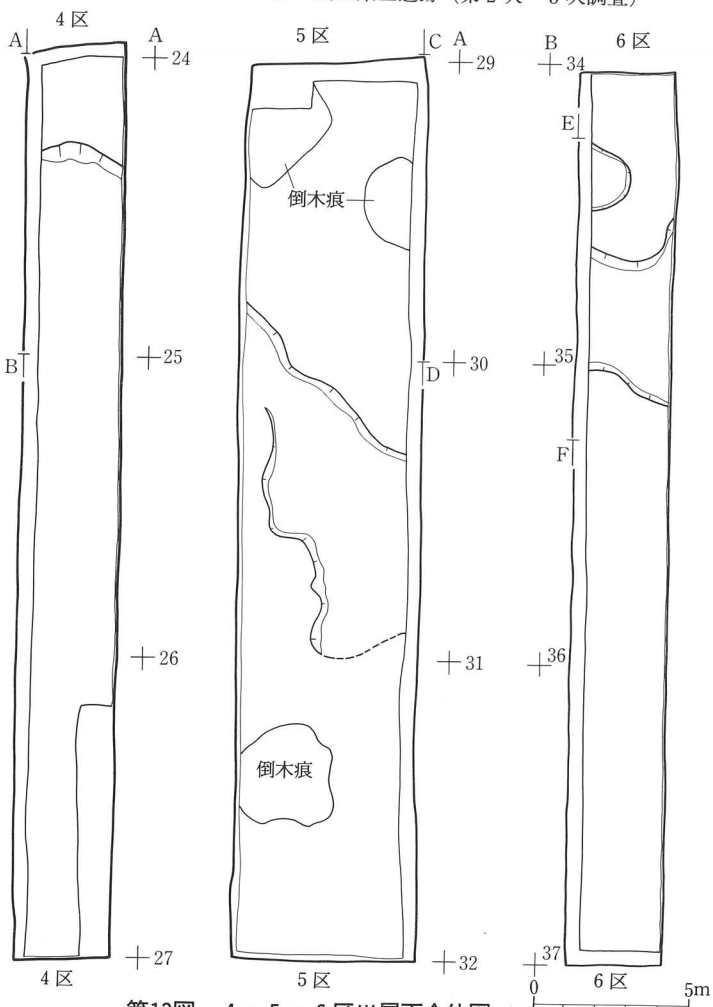
第12図　１・２区土層断面図

た。基本層は、Ⅳ層を除く５層が確認された。Ⅱ層は南に行く程薄くなり、６区北半のB－35グリッド以南では確認されない。Ⅲ層は所々に島状に確認される程度であり、Ⅴ層は４区北半のB－25グリッド以南では確認されない。特に５区は、南西部を除いてグライしている。Ⅲ層では水田跡と溝跡、Ⅳ層で水田跡と溝跡、倒木痕が検出された。

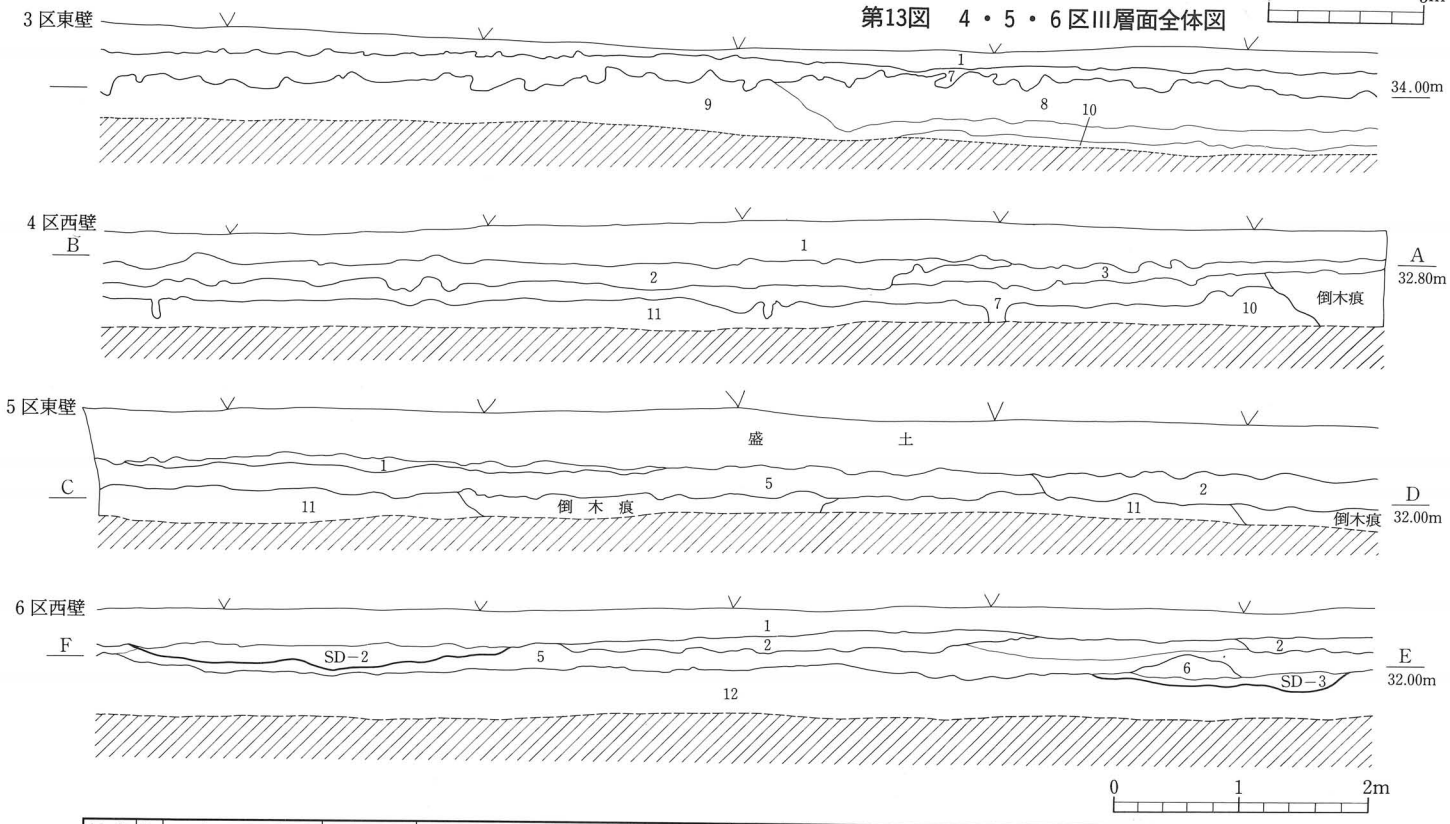
Ⅲ層検出遺構

Ⅱ層水田跡　４区北部、５区中央部、６区北部でそれぞれ段差が確認された。段の方向は、５区のものがN－90°－Eとおよそ東西方向である。他のものは弧状になっている。耕作土は削平を受けている部分も多いが、10～30cm程認められ、下層に凹凸が認められる部分がある。遺物は４区で土師器の小片が出土したのみである。１次調査の２層水田跡と同時期と考えられ、近世～近代の水田跡と思われる。

SD－２溝跡　６区北側B－34グリッドに位置し、調査区を斜めに横切るように延びている。調査区外に延びており、検出されたのはその一部である。調査区内での方向は、N－90°－Eとおよそ東西方向である。上幅



第13図　４・５・６区Ⅲ層面全体図



層位	No.	土色	土性	備考
Ⅰ	1	5Y4/2　灰オリーブ色	シルト	酸化鉄を含み、層下部に集積部分有り。
Ⅱ	2	2.5Y4/1　黄灰黄色	シルト	酸化鉄、マンガン、2.5Y5/2細砂ブロックを所々に含む。
Ⅲ	3	2.5Y3/1　黒褐色	粘土質シルト	灰白色火山灰小ブロック、10YR4/3を斑に、酸化鉄、炭化物を含む。
	4	2.5Y4/2　暗灰黄色	粘土質シルト	灰白色火山灰を若干、5Y3/1粘土粒、マンガン、酸化鉄を含む。
	5	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	灰白色火山灰を若干、礫を少量、木片、マンガン、酸化鉄を含む。
	6	5Y4/1　灰色 10YR4/1　褐灰色	シルト 粘土	上部に、10YR4/1粘土を、酸化鉄を含む。 擬似畦畔と思われる。
Ⅴ	7	1.5/0　黒色	シルト質粘土	炭化物粒を含む。

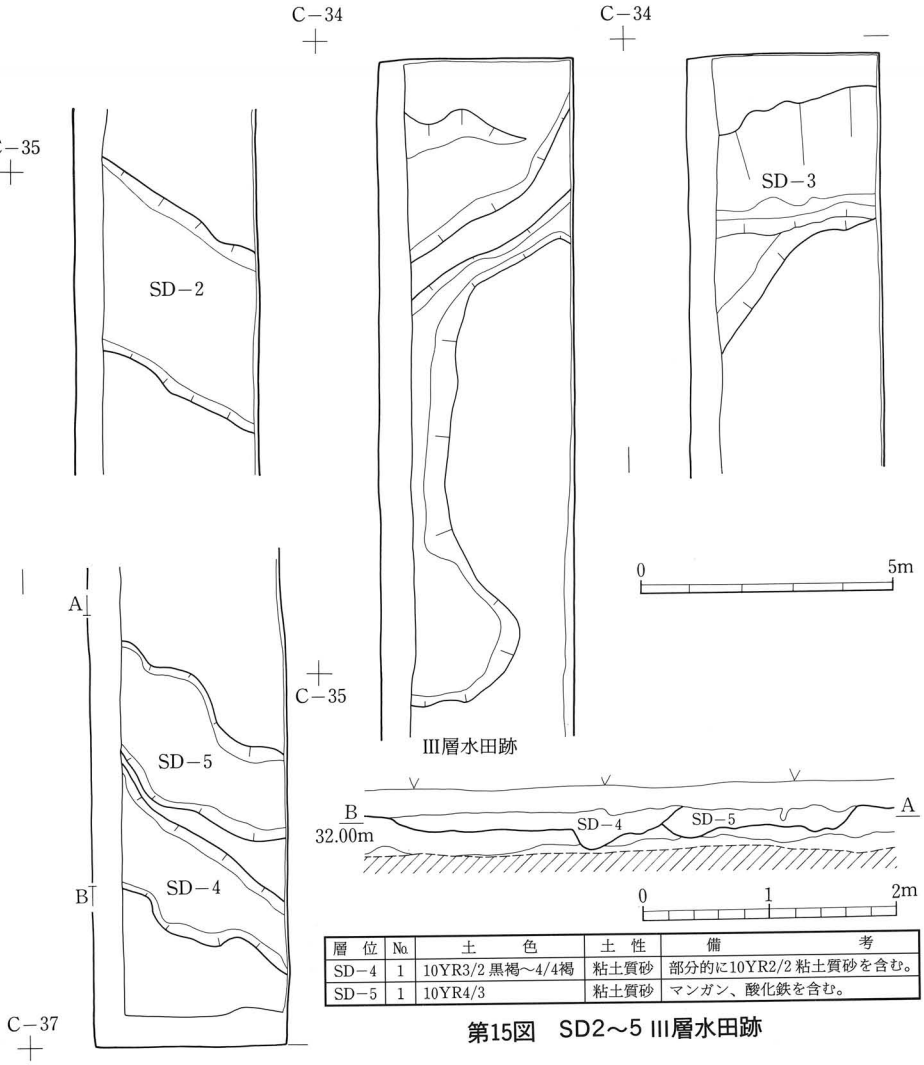
層位	No.	土色	土性	備考
Ⅵ	8	10YR4/3　にぶい黄褐色	粗砂	酸化鉄、風化砂礫を含む。
	9	2.5Y5/3　黄褐色	粘土質砂	酸化鉄を含み、下部はグライ。
	10	7.5GY3/1 暗緑灰色	粗砂・砂利	粗砂・砂利が混在。
	11	2.5GY5/1 オリーブ灰色	シルト	上部に10Y4/1～2/0粘土質シルトを含む。砂利～大礫まで含む。
	12	10YR5/6　黄褐色	粘土質砂	マンガン、酸化鉄を含む。マンガンは南側、酸化鉄は北側に多い。
SD－2	1	10YR4/1　褐灰色	粘土質シルト	粘性有り
SD－3	1	5Y4/1　灰色	シルト質粘土	2.5Y5/2 粗砂を下部に含む。

第14図　３・４・５・６区土層断面図

は2.5m前後、底面幅は２m前後である。断面形は浅い皿状で、深さは確認面から底面まで20cm前後である。底面は平坦で、底面レベルは地形の傾斜に沿って、若干西側に傾斜している。堆積土は単層で自然堆積と思われる。礫石器が出土している。

Ⅵ層検出遺構

Ⅲ層水田跡　４区・５区各々の北部で耕作土は検出されたが、畦畔などの遺構は検出されなかった。６区B－34グリッドで東西に延びる上幅40～60cm、下幅70～85cmの高まりを確認した。状況から擬似畦畔Bと考えられ、直上のⅢ層に畦畔が存在していたものと思われる。擬似畦畔は１条のみで、高さは４～12cmである。方向は、N－12°－Eである。耕作土は３層あり10～20cm程認められ、下面に凹凸が見られる。須恵器片、石器が出土している。１次調査の３層水田跡と同時期と考えられ、平安時代の水田跡と思われる。



層　位	No.	土　色	土　性	備　考
SD－4	1	10YR3/2 黒褐～4/4褐	粘土質砂	部分的に10YR2/2 粘土質砂を含む。
SD－5	1	10YR4/3	粘土質砂	マンガン、酸化鉄を含む。

第15図　SD2～5 Ⅲ層水田跡

SD－３溝跡　６区北側Ｂ－２グリッドに位置し、調査区を斜めに横切るように延びている。調査区外へ延びており、検出されたのはその一部である。調査区内での方向はＮ－48°－Ｅである。上幅は２ｍ前後、底面幅は30～45cmである。断面形は浅い皿形である。深さは確認面から底面まで20～30cm前後である。底面には緩やかな凹凸が見られ底面レベルは一定しないが、西側に傾斜している。堆積土は単層であり、自然堆積であると思われる。遺物はない。

SD－４、５溝跡　６区南側Ｂ－36グリッドに位置し、調査区を斜めに横切るように延びている。調査区外に延びており、検出されたのはその一部である。重複関係にあり、SD－４がSD－５を切っている。調査区内での方向は、SD－４がＮ－87°－E、SD－５はやや蛇行しているが、Ｎ－83°－Ｅである。規模は、SD－４が、上幅0.85～1.0m、底面幅0.5～1.2m、深さは10cm前後である。SD－５は，上幅1.5～1.7m、底面幅1.0～1.4m、深さは10～15cmである。断面形は共に浅い皿形である。底面は平坦であるが、SD－４の底面には凹みが見られる。底面レベルは若干東側に傾斜している。堆積土は単層で、それぞれ自然堆積であると思われる。共に遺物はない。

倒木痕　４区で２カ所、５区で６カ所の倒木痕を確認している。

(4)　まとめ

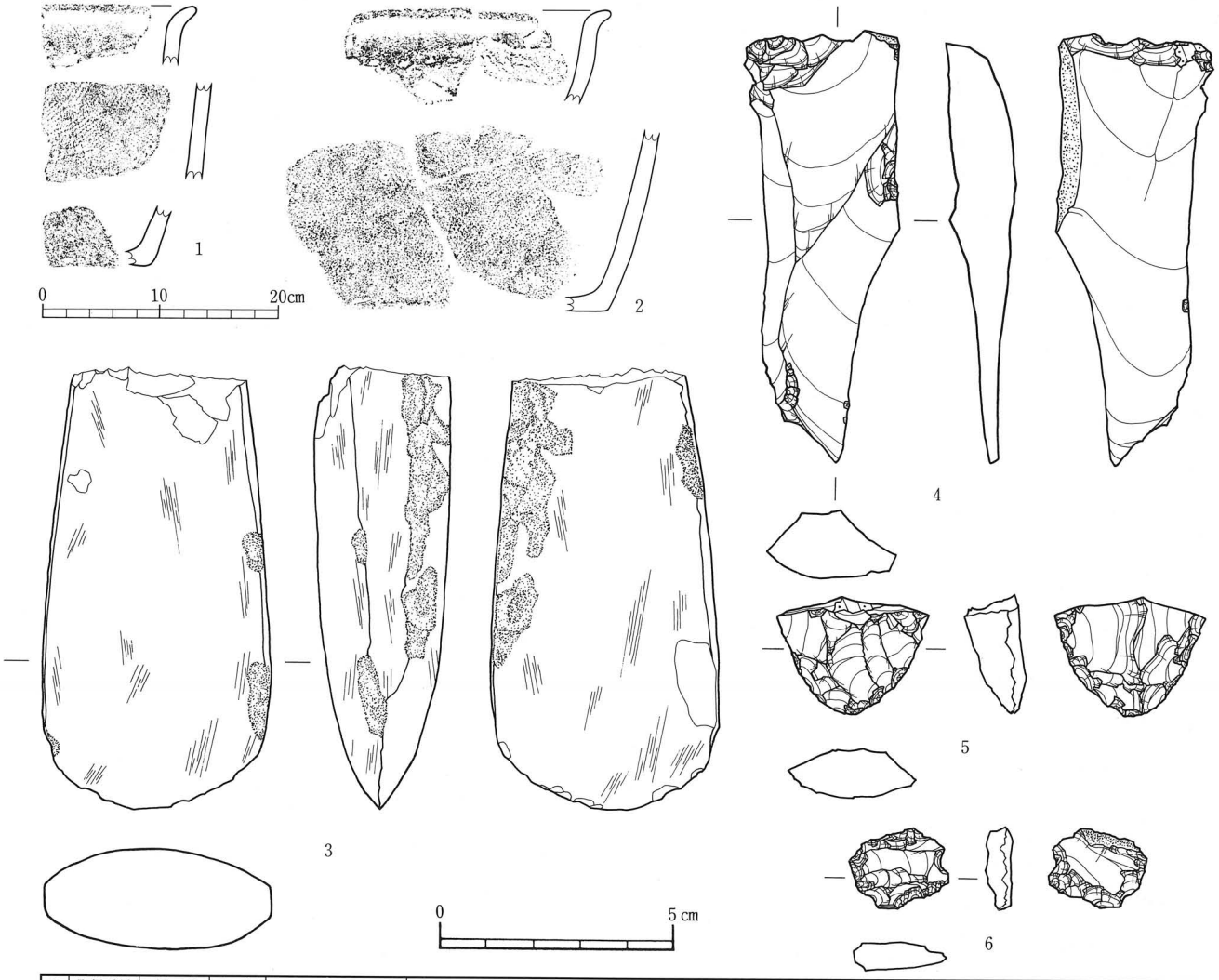
１．今回の調査区は遺跡中央部を北西から南東方向に横切っており、標高は１区で36.0m前後、６区で32.0m前後である。

２．近世～近代、平安時代の２時期の水田跡を確認した。畦畔、水路などの遺構はほとんど検出されず、水田跡の詳細は不明であり、「条里制」に関する痕跡も、わずかに東西方向（正方向）の段が見られるのみである。

３．その他の遺構として、土坑、溝跡、河川跡がある。遺物は極めて少ない。陶磁器、土師器、須恵器、弥生土器、縄文土器、石器がある。弥生土器はその特徴から、桝形囲式期のものであると考えられるが、縄文土器は時期を特定できる資料はなかった。遺構の時期は不明である。

参考文献

渡部・川名（1992）：「山田条里遺構略報」『仙台平野の遺跡群Ⅺ』仙台市文化財調査報告書第162集　仙台市教育委員会
渡部　弘美（1993）：「山田条里遺構発掘調査報告書」『仙台平野の遺跡群Ⅻ』仙台市文化財調査報告書第170集　仙台市教育委員会



No.	登録番号	種　別	器　種	出土地点	層位	特　　徴	備　　考	写真図版
1	028	弥生土器	甕	２区	Ⅳ層	LR 縄文		35－６
2	029	弥生土器	甕	２区倒木痕	Ⅳ層	口縁端部－縄文　頸部－ヨコナデ　体部－LR 縄文		35－７
		瓦質土器	擂　鉢	４区	Ⅰ層	播目６条		35－８
		須恵器	甕	６区	Ⅲ層	外面－平行叩き→ナデ　内面－当て具痕→ナデ	内面凹部に丁寧な擦痕、転用硯か。	35－９

No.	登録番号	種　別	出土地点	層位	長×幅×厚cm	重　量 g	石　材	備　　考	写真図版
3	041	磨製石斧	１区南拡張区	Ⅴ層	(9.4)×4.85×2.75	192.1	安山岩		35－13
4	068	剝　片	３区	Ⅴ層	9.2×3.25×1.6	45.3	玉髄		35－12
5	058	尖頭器	６区	Ⅲ層	(2.5)×3.2 ×1.1	8.0	頁岩		35－10
6	004	石　錘	１区	Ⅰ層	(1.7)×2.15×0.57	2.2	頁岩		35－11

第16図　３次調査出土遺物

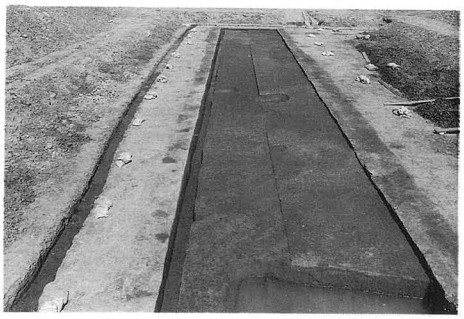


写真１　２次調査Ａ区Ⅲ層面全景（南西→）

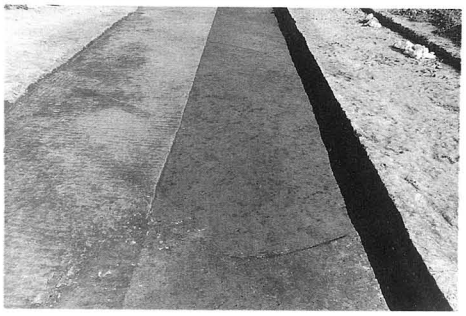


写真２　Ａ区Ⅲ層上面の段（北東→）

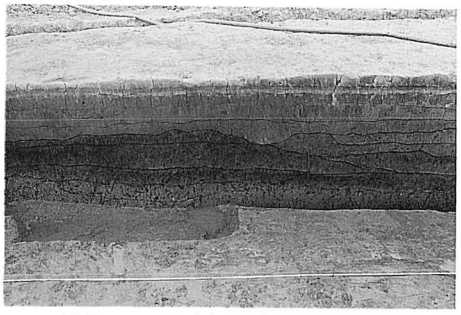


写真３　Ａ区南部土層断面（南東→）

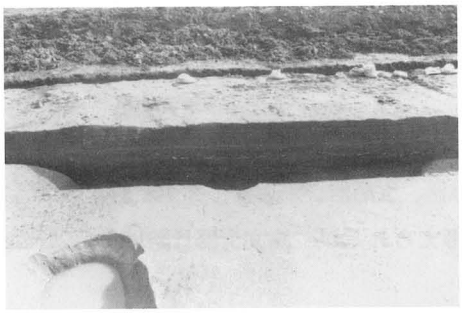


写真 4　A区中央部土層断面（南東→）

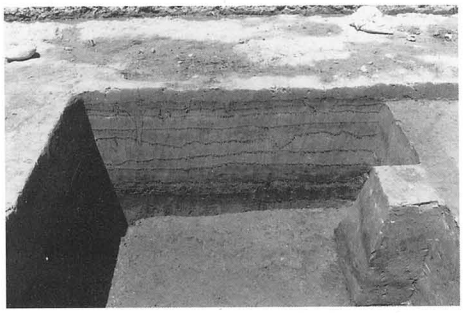


写真 5　A区北部土層断面（南西→）

写真 6　2次調査B区調査前の状況（西→）

写真 7　B区Ⅳ層面全景（北西→）

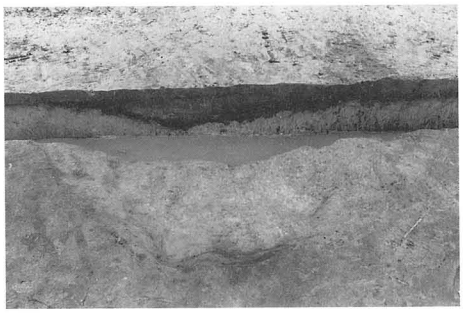


写真 8　SK-I 土坑（南西→）

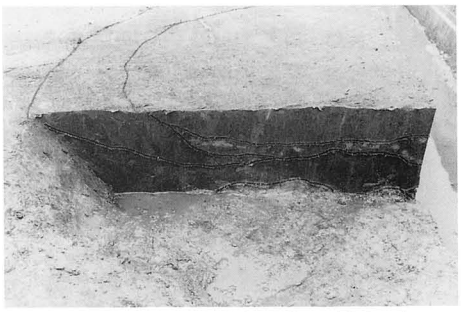


写真 9　SK-1 土坑土層断面（北東→）

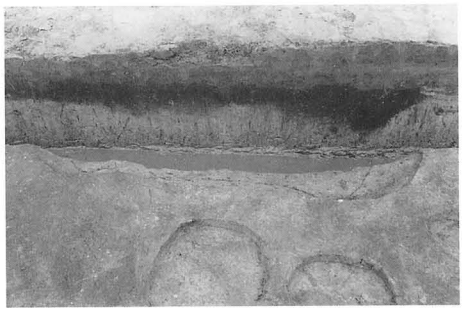


写真 10　SK-2 土坑（南西→）

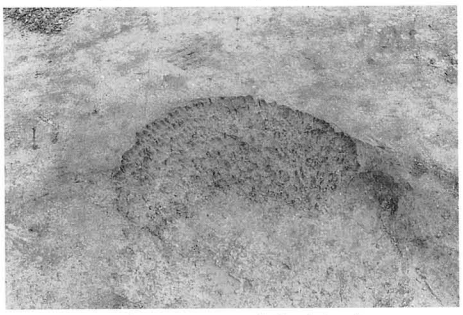


写真 11　SK-3 土杭（東→）

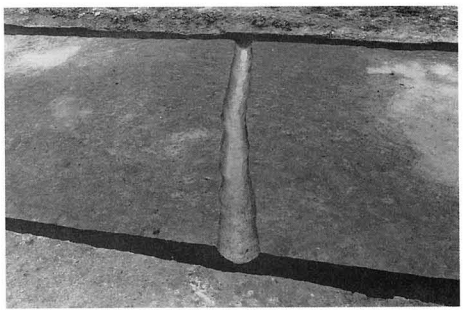


写真 12　SD-1 溝跡（南→）

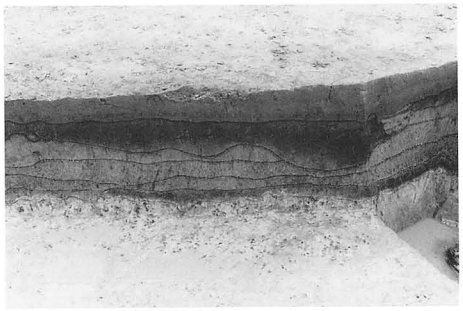


写真 13　B区土層断面（南東→）

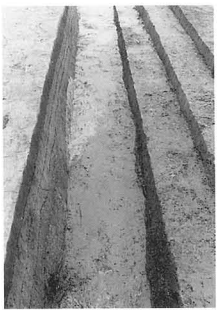


写真14　B区下層（南西→）

写真 15　3次調査Ⅰ区Ⅲ層面全景（北西→）

写真16　SD-1溝跡（南東→）

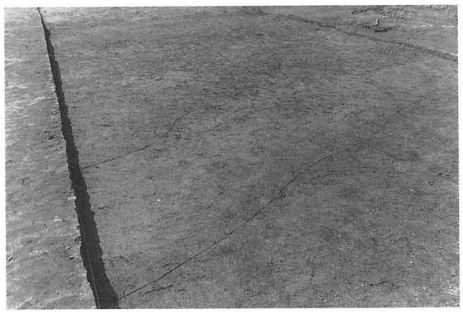


写真 17　Ⅲ層面の段（南→）

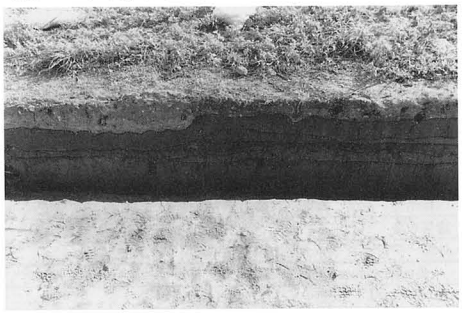


写真 18　Ⅰ区土層断面（北東→）

写真 19　2区Ⅲ層面北半部（南東→）

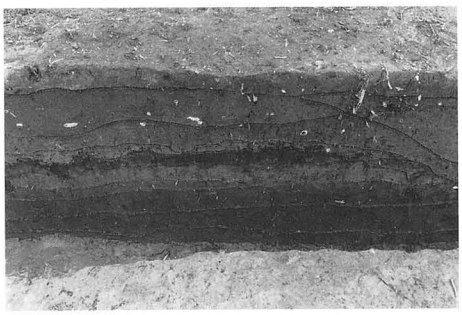


写真 20　2区土層断面（南西→）

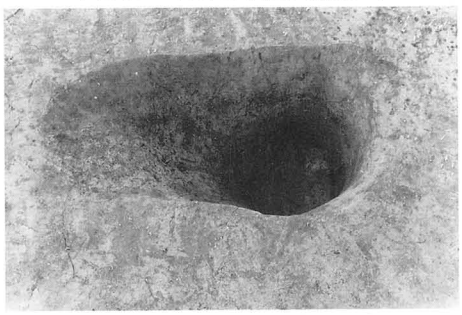


写真 21　SK-1 土坑（南東→）

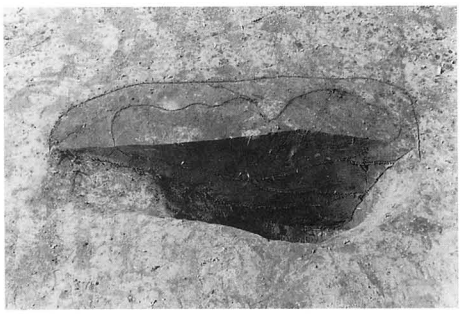


写真 22　SK-1 土坑土層断面（南東→）

写真23　3区表土排土、調査前の状況（北西→）

写真24　3区土層断面（南面→）

写真25　4区Ⅲ層面全景（南東→）

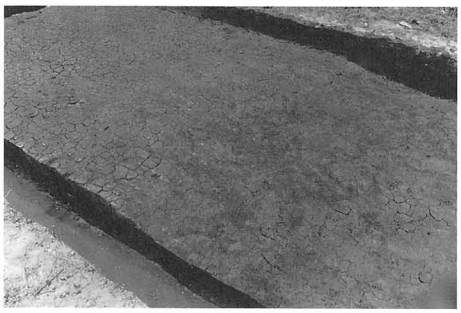


写真26　4区Ⅲ層面の段（南→）

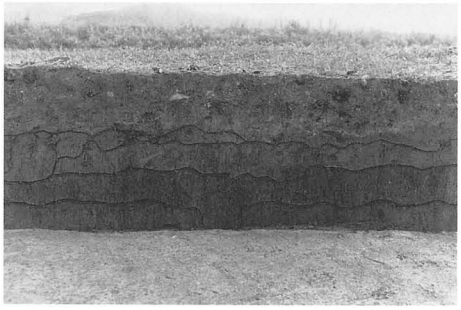


写真27　4区土層断面（北東→）

写真28　5区Ⅲ層面全景（北西→）

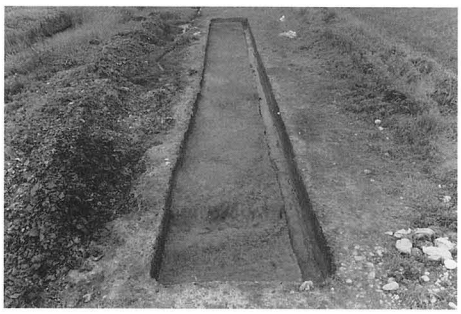


写真29　6区Ⅴ層面全景（北西→）

写真30　SD-2溝跡検出状況（西→）

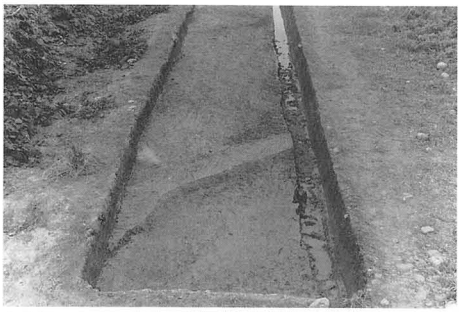


写真31　6区Ⅲ層水田跡、擬似畦畔（北西→）

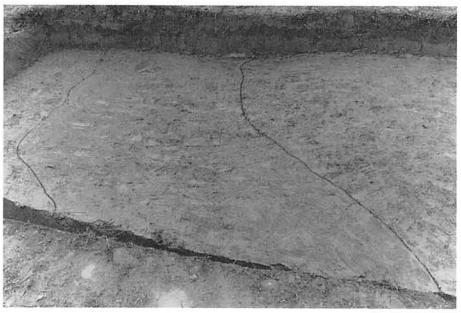


写真32　SD-3溝跡検出状況（南→）

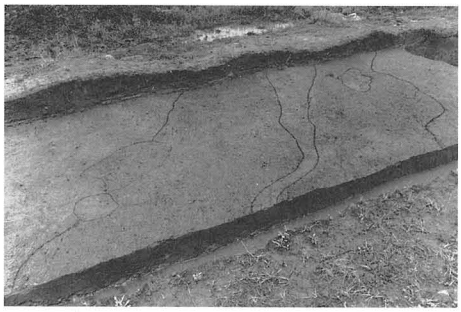


写真33　SD-4.5溝跡検出状況（西→）

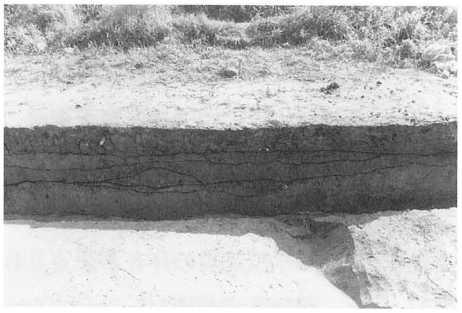


写真34　6区土層断面（北東→）

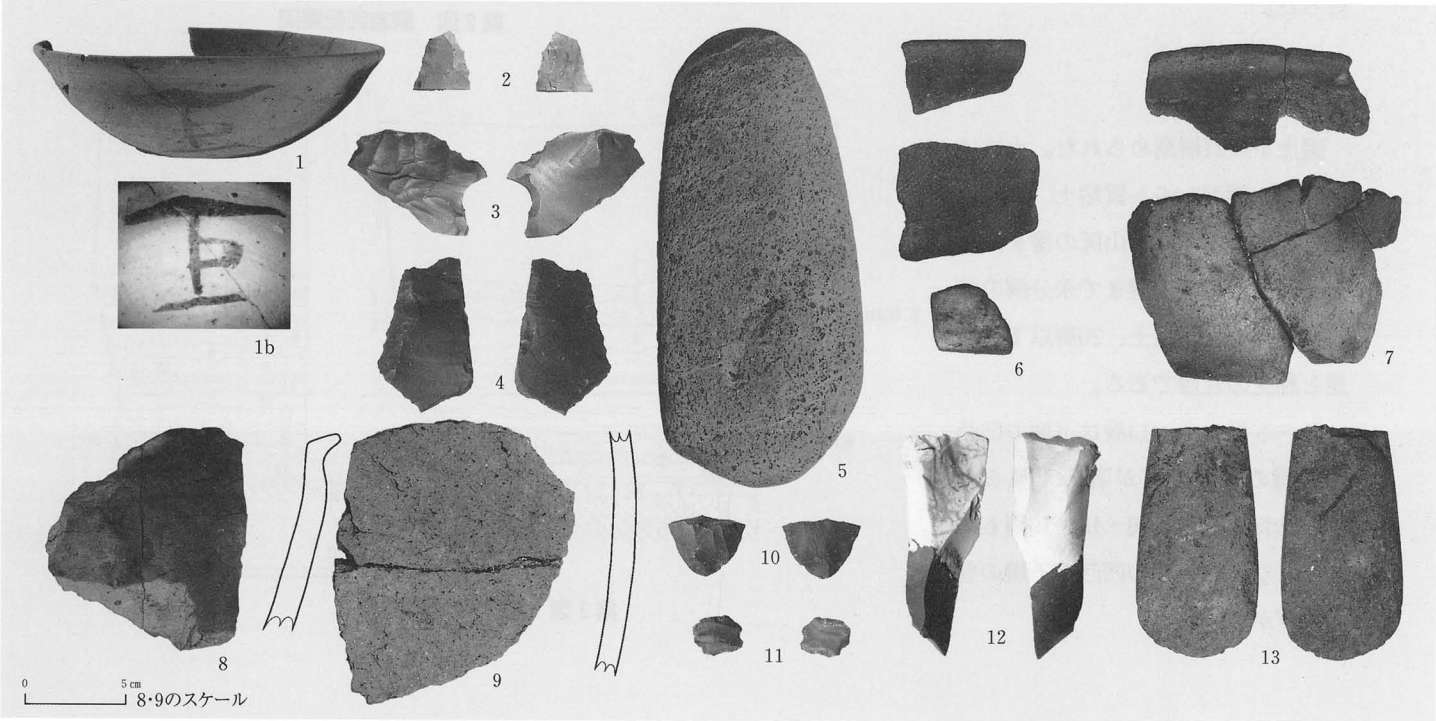
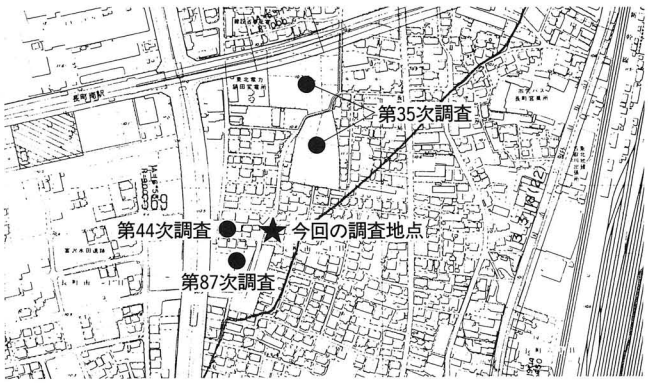


写真35　出土遺物

V　富沢遺跡（第110次調査）

1　調査要項

遺　跡　名	富沢遺跡（宮城県遺跡番号　01369）
調 査 地 点	仙台市太白区長町南一丁目188－15
調 査 原 因	RC 3階建事務所併用住宅建設
調査対象面積	111㎡
調 査 面 積	40㎡
調 査 期 間	平成10年5月18日～5月20日
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育委員会文化財課
担 当 職 員	篠原信彦　竹田幸司　豊村幸宏
調査参加者	青山諒子　伊藤房江　菅井民子　高橋勝恵　高橋美香
申　請　者	鈴木吉昭

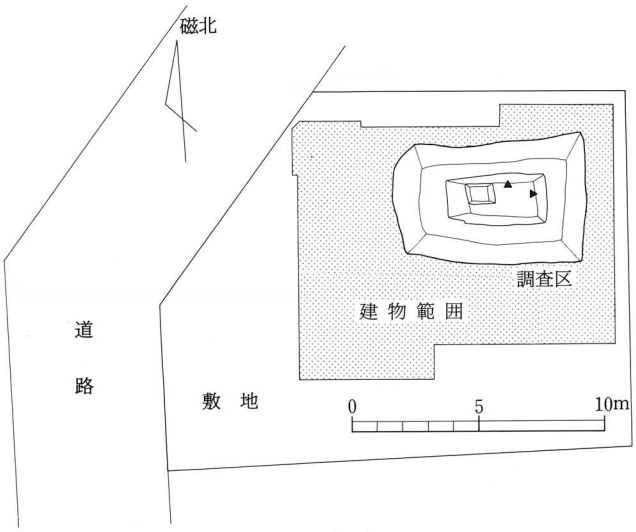


第1図　調査地点と周辺の地形

2　調査の経過と方法

遺跡の位置と環境については、これまで刊行されている発掘調査報告書を参照していただきたい。

平成10年3月20日付で、上記地内における重量鉄骨造3階建事務所併用住宅建設にともなう発掘届が提出された。この場所は、富沢遺跡の南東部に位置し、北方200mには35次調査区、西方約50mに44次調査区、南西方約80mには87次調査区があり、弥生時代から近代に至る水田遺構の存在が想定される地点である。調査は、建物予定範囲に5.3m×7.5mのトレンチを設定し行った。

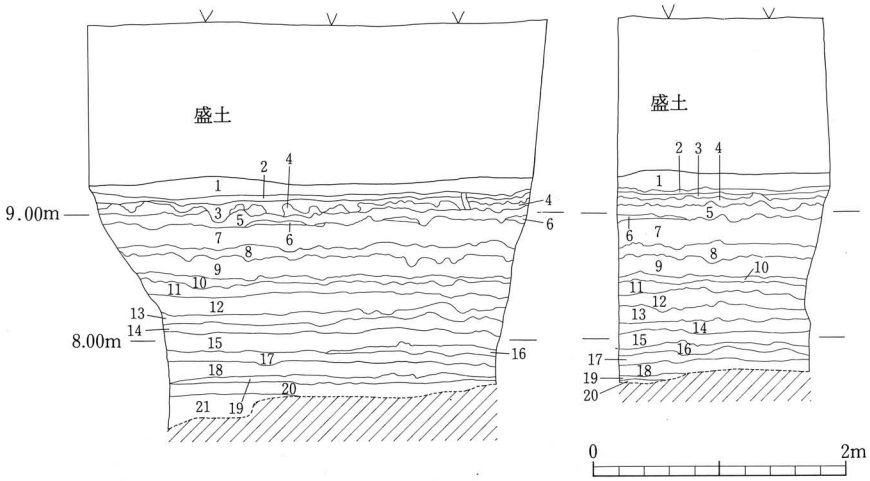


第2図　調査区配置図

3　基本層序

盛土下に21層認められた。土性は1層と2層がシルト質粘土、3層から16層まで6層の火山灰の層を除き粘土、17層から19層まで未分解の植物遺存体を含む粘土、20層以下は泥炭と粘土の互層である。

2～5層・7～13層は下面の凹凸や下層の巻き上げが著しく見られる。また1・15・16・18・19層も顕著ではないが下面の凹凸や下層の巻き上げが見られる。



第3図　北壁・東壁断面図

№	土　　色	土　性	備　　考
1	2.5GY4/1 暗オリーブ灰色	シルト質粘土	底面に酸化鉄の集積あり 現代の水田耕土
2	5GY5/1　オリーブ灰色	シルト質粘土	管状の酸化鉄を含む 底面に酸化鉄の集積あり 3層を粒状に含むシルト　水田作土
3	7.5GY4/1 暗緑灰色	粘土	管状の酸化鉄を含む 底面に酸化鉄の集積あり 4層を粒状に含むシルト　水田作土
4	2.5Y5/2　暗灰黄色	粘土	粒状に酸化鉄を含む 灰黄色シルト質粘土・黒褐色粘土のブロックを多量に含む　水田作土か?
5	5Y4/1　灰色	粘土	粒状に酸化鉄を含む 底面に灰白色火山灰を含む 7層をブロック状に含む　水田作土
6	10YR7/1　灰白色	火山灰	
7	2.5Y6/1　黄灰色	粘土	下部やや暗い 管状の酸化鉄を含む 8層をブロック状に含む　水田作土
8	2.5Y4/1　黄灰色	粘土	管状の酸化鉄を含む 9層を斑状に含む　水田作土
9	2.5Y6/3　にぶい黄色	粘土	管状の酸化鉄を含む 10層をブロック状に含む 水田作土か?
10	5Y5/1　灰色	粘土	管状の酸化鉄・炭化物を含む 11層を粒状に含む　水田作土
11	5Y6/2　灰オリーブ色	粘土	管状の酸化鉄・炭化物を含む 12層を粒状に含む　水田作土
12	5Y6/1　灰色	粘土	管状の酸化鉄・炭化物を含む 13層を粒状に含む　水田作土
13	2.5Y4/1　黄灰色	粘土	管状の酸化鉄・炭化物を含む 14層を粒状に含む　水田作土
14	7.5Y6/2　灰オリーブ色 7.5Y4/1　灰色	粘土 粘土	互層 炭化物を層状に含む　自然堆積
15	10Y5/1　灰色	粘土	灰オリーブ粘土のブロックを含む　水田作土か?
16	5Y3/1　オリーブ灰色 7.5Y4/1　灰色	粘土 粘土	17層のブロックを含む　水田作土か?
17	5Y2/1　黒色 5Y5/2　灰オリーブ色	粘土 粘土	互層 未分解の植物遺体を少量含む　自然堆積
18	5Y4/1　灰色	粘土	19層を斑状に含む 未分解の植物遺体を含む　水田作土
19	5Y5/2　灰オリーブ色	粘土	20層を斑状に含む 未分解の植物遺体を含む　水田作土か?
20	5Y2/1　黒色 5Y5/2　灰オリーブ色	泥炭 粘土	互層 未分解の植物遺体を多量に含む　自然堆積 しまりなし
21	5Y2/1　黒色 5Y5/2　灰オリーブ色 2.5Y4/2　暗灰黄色	泥炭 粘土 泥炭質粘土	互層 未分解の植物遺体を多量に含む　自然堆積 しまりなし

表１　土層註記表

4　まとめ

1）水田土壌

今回の調査で、現代の水田土壌である１層を除き、土層の状況から２・３・５・７・８・10～13・18層が水田土壌と考えられる。また４・９・15・16・19層もその可能性が考えられる。水田の時期は10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰が６層に堆積していることから、５層より上の層は10世紀前半以降近世以前、７層以下は10世紀前半以前の年代幅が考えられる。

次に当調査区の北側200m で行われた第35次調査区の層位の対応から年代を考えてみると表２のようになる。（註１）

第110次	2層	3層	4層	5層	7層	8層	9層	10層	11層	12層	13層	15層	16層	18層	19層
第35次	3層	5層	6層	9層	10層	13層	14層	15層	16層	16層	18層	22a 層	23a 層	24層	25層
年　代	近世	中世	中世	10c 中葉	9c	古墳～平安	自然堆積	古墳	古墳	古墳	天王山式期	十三塚式期	十三塚式期	桝形囲式期	桝形囲式期

表２　35次調査との層の対応

2）まとめ

・今回の調査は富沢遺跡の東部で行われた。

・現代の水田土壌である１層を除き、２・３・５・７・８・10～13・18層が水田土壌と考えられるまた、４・９・15・16・19層もその可能性が考えられる。

・水田の年代は第35次調査と対応し、弥生～近世にかけての連綿と続いた水田土壌であることが分かった。

（註１）　土層の様子及び灰白色火山灰・自然堆積層などの鍵層などから判断した。

参考文献

平間亮輔　1989「富沢遺跡第44次調査」『富沢・泉崎浦・山口』仙台市文化財調査報告書第 128集

平間亮輔　1991「富沢遺跡第35次調査」仙台市文化財調査報告書第150集

佐藤甲二　1994「富沢遺跡第87次調査」『富沢・泉崎浦・山口（７）』仙台市文化財調査報告書第184集

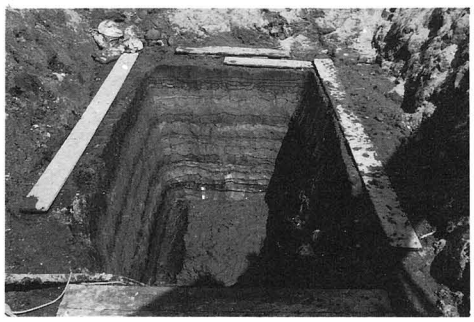


写真１　調査区全景

写真２　北壁断面

写真３　北壁アップ

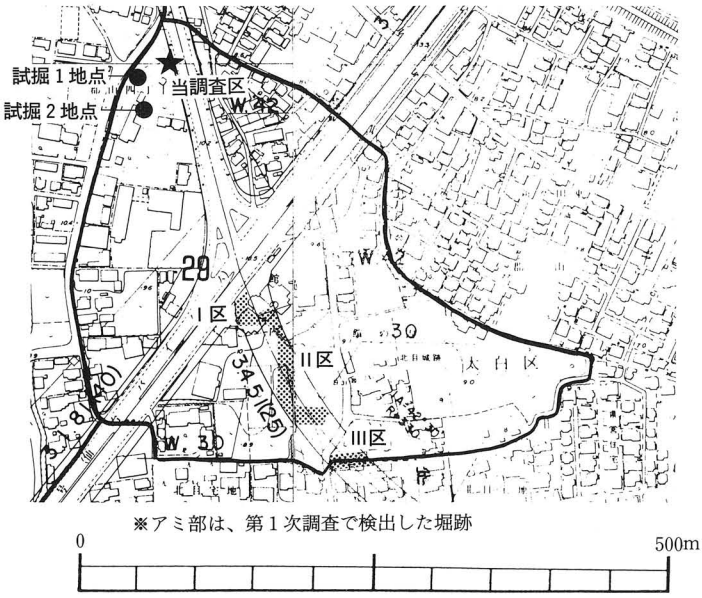
Ⅵ　北目城跡（第２次調査）

１　調査要項

遺　跡　名	北目城跡（宮城県遺跡番号　01029）
調 査 地 点	仙台市太白区郡山四丁目214－１
調 査 原 因	地中送電線設置工事
調査対象面積	117㎡
調 査 面 積	80㎡
調 査 期 間	平成10年11月９日～11月13日
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育委員会文化財課
担 当 職 員	竹田幸司
調査補助員	岩井レイ子　斎藤由美子　島津レチ子　蓮沼英子　蓮沼秀子
申　請　者	東北電力㈱　宮城支店

２　遺跡の位置と環境

JR長町駅の南東1.5kmに位置する平城跡である。名取川と広瀬川に囲まれた郡山低地の東部にあり、標高約９ｍ前後の自然堤防上に立地している。北目城は、伊達政宗が関ヶ原の戦い（1600年）の際に入城し、仙台城に移るまでの間、居住したことで知られている。平成４～５年度に実施した第１次調査では、陶磁器類や三引両紋が描かれた漆器椀、脇差、虹梁など豊富な遺物をともなう近世初頭の「障子堀」を検出している。『仙台領古城書上』（延宝年間：1677年頃）によれば、政宗入城以前の北目城は、粟野大膳が茂ケ崎城より移り天正年間（16世紀後葉）まで居城し、その後屋代勘解由兵衛が指置かれたという。



第１図　調査地点と周辺の地形

３　調査の方法

平成10年８月11日付で、東北電力株式会社宮城支店長より、上記地内における地中送電線敷設にともなう発掘届が提出された。この場所は、北目城跡の北西端に位置し、第１次調査試掘１・２地点の北側に位置し、外堀想定線上にあたる。このため申請者と協議の上、事前に発掘調査を実施することとした。調査は、堅坑予定範囲に9.5m×8.4mのトレンチを設定し、断面観察を中心に行った。

４　基本層序

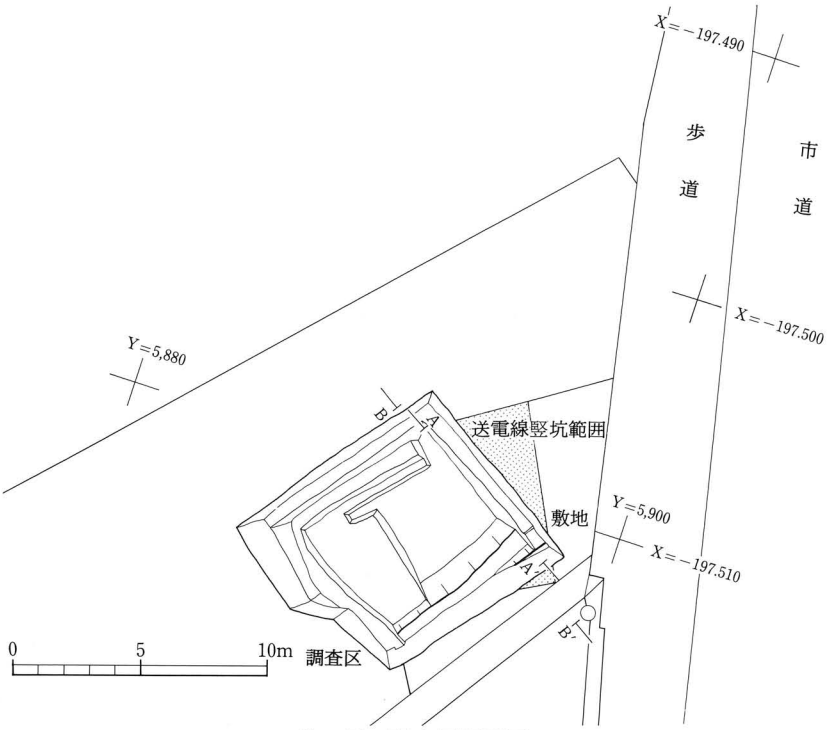
Ⅰ層は隣地からの崩落土あるいは盛土時の埋め戻しの土、Ⅱ層は近代～現代の水田土壌、Ⅲ層はSD－１堀跡の確認面である。以下Ⅶａ層を除き自然堆積と考えられる。Ⅶａ層は第１次調査１区SD－１堀跡北壁の基本層23層の縄文時代後期の遺物包含層に対応すると考えられる。遺物はⅡ層より19世紀以降の大堀相馬産の黒釉の陶器が出土し

ている。

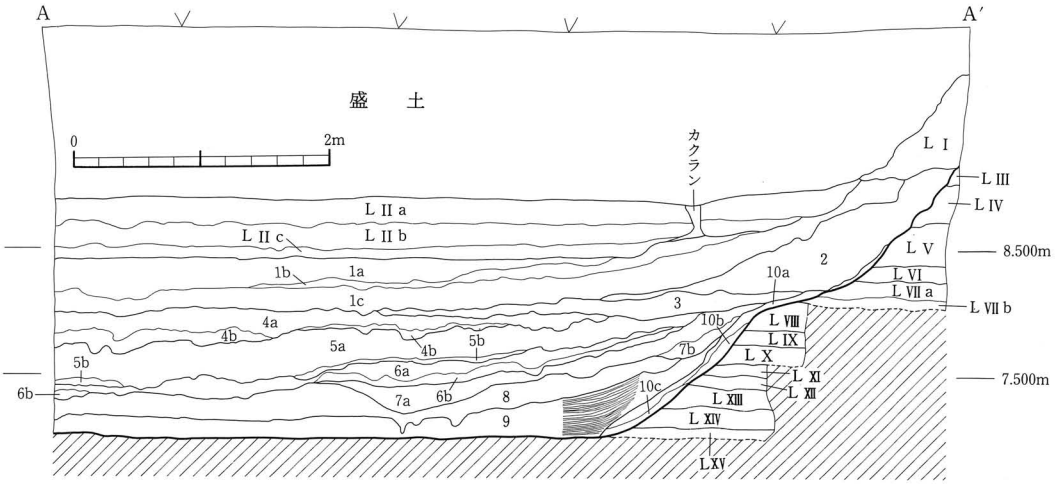
5　発見遺構と出土遺物

SD－１堀跡

東側の立上がり部分の確認であるため全体の規模は不明である。上幅６ｍ以上、下幅４ｍ以上、深さ確認面から２ｍ、東側の隣地からは4.8ｍを計る。底面は平坦であり、約40°の角度で膨らみを持って立上がり中央部でテラス状の段差を持つ。その段差からさらに約40°の角度で膨らみを持って立上がり上端に達する。底面標高は約７ｍである。方向は真北を基準にＮ－33°－Ｅである。堆積土は大別10層細別18層に分けられる。下から10層は壁ぎわの崩落土、８・９層は止水性の堆積土、７層から４層の各層は下部が自然堆積あるいは崩落土で上部が埋め戻しの土ととらえられる。４層上面でテラス状の段差と同じ高さになる。３層は自然堆積で、２層は埋め戻しの土である。１層は水成堆



第２図　調査区配置図



基本層

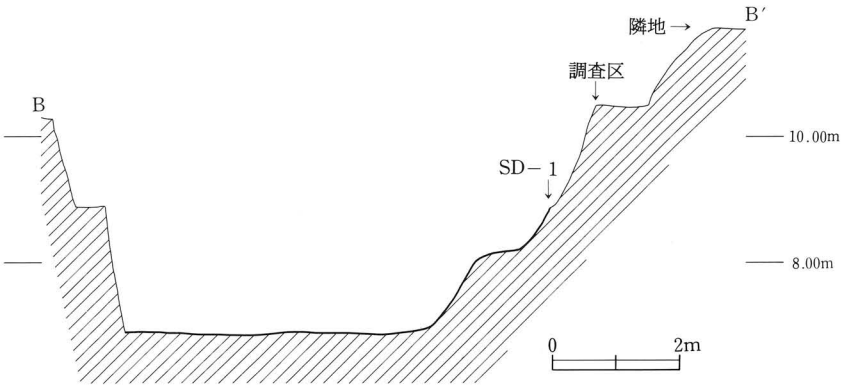
№.	土　色	土　性	備　考
I	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	盛土
II a	5GY3/1　暗オリーブ灰色	粘土	底面に酸化鉄の集積あり　水田耕作土
II b	2.5GY5/1 オリーブ灰色	シルト質粘土	底面に酸化鉄の集積あり　水田耕作土
II c	7.5GY5/1 緑灰色	粘土質シルト	底面に酸化鉄の集積あり　水田耕作土
III	10YR6/6　明黄褐色	シルト	旧表土、この層よりSD－1 堀跡を検出している
IV	10YR7/4　にぶい黄橙色	シルト質粘土	マンガン粒を多く含む
V	2.5Y7/3　浅黄色	粘土	マンガン粒を多く含む
VI	2.5Y6/2　灰黄色	粘土	しまり・粘性極めてあり
VII a	10YR4/1　褐灰色	粘土	
VII b	10YR4/1　褐灰色	粘土	VIII層を粒状に含む
VIII	2.5Y7/2　灰黄色	シルト質粘土	
IX	2.5Y5/2　暗灰黄色	粘土	
X	2.5Y4/1　黄灰色	粘土	
XI	2.5Y6/3　にぶい黄色	シルト質粘土	
XII	7.5Y2/1　黒色	粘土	
XIII	2.5GY5/1 オリーブ灰色	シルト質粘土	
XIV	5GY5/1　オリーブ灰色	砂	グライ化
XV	2.5Y6/3　にぶい黄色	砂	

SD－１堀跡

№.	土　色	土　性	備　考
1a	5Y4/1　灰色	粘土質シルト	酸化鉄の斑文を含む 灰オリーブ砂を筋状に含む 水成堆積
1b	2.5Y4/1　黄灰色	シルト質粘土	IV・V層を粒状に少量含む 水成堆積
1c	2.5Y5/1　黄灰色	シルト	IV・V層を粒状に少量含む 底面に酸化鉄の集積 水成堆積
2	10YR6/6　明黄褐色	シルト	III・IV・V・VI層をブロック状に含む　人為堆積
3	10YR5/1　褐灰色	シルト質粘土	酸化鉄の集積あり　水成堆積(止水)
4a	2.5Y5/1　黄灰色	シルト質粘土	IV・V層を粒状に含む　人為堆積
4b	2.5Y5/1　黄灰色	粘土	しまりなし　自然堆積
5a	2.5Y4/1　黄灰色	粘土質シルト	IV・V・VI・VII層を粒状に多く含む　人為堆積
5b	5Y5/1　灰色	粘土	しまりなし　自然堆積
6a	2.5Y4/2　暗灰黄色	粘土	IV・V層をブロック状に多く含む　人為堆積
6b	5Y5/1　灰色	粘土	底面にオリーブ黒粘土を層状に含む　自然堆積
7a	10YR5/2　灰黄褐色	シルト質粘土	IV～VIII層をブロック状に多く含む　人為堆積
7b	10YR5/1　褐灰色	シルト質粘土	VIII層を層状に含む　崩落土
8	5Y3/2　オリーブ黒色	粘土	未分解の植物遺体を多く含む　水成堆積
9	5Y5/1　灰色 5Y3/2　オリーブ黒色 5Y4/2　灰オリーブ色	粘土 泥炭 粘土	互層　多いところで26分層される。各層の底面に炭化物の層ある。水成堆積(止水)
10a	2.5Y4/2　暗灰黄色	シルト	IV層を粒状に含む　崩落土
10b	2.5Y5/2　暗灰黄色	シルト	VIII層を粒状に多量に含む　崩落土
10c	2.5Y5/2　オリーブ灰色	シルト質粘土	VIII層を層状に含む　崩落土

第３図　北壁断面図

積を示している。遺物は１層から19世紀代の陶器（第５図３・５）・弥生土器（第５図６）、５層から13世紀代？の龍泉窯系の青磁（第５図４）９層から16世紀以降の瓦質土器（第５図２）・須恵器・土師器・拳大の礫・かけや？（第５図１）が出土している。また自然遺物で８・９層からオニグルミ・ヒメグルミの核、ヒシの実、ミチヤナギ？（タデ科）・シソ科の種子などの植物遺存体が出土している。



第４図　隣地高まりからのエレベーション図

６　調査のまとめ

(1)　SD－１堀跡の変遷

掘削の時期は底面付近から16世紀以降の瓦質土器が出土していることから、16世紀以降ととらえられる。その後、10層の堆積状況から掘削後すぐに壁際に崩落があったことが分かる。８・９層からヒシの実などの水性の植物が出土すること、炭化物層がラミナ状に堆積することから、底浚いされずに水が溜まっていた（水堀）ことがわかる。７層から４層は４段階の埋め戻しがあったことが示唆されるが、各層の下部の自然堆積層が薄く時期的に短い期間の変遷で上部の埋め戻しの土も各層似通っているので作業工程の違いとみたい。次の３層段階でも水が溜まっており、２層段階でもう一度埋め戻しを行っていることがわかる。そして、１層段階でも開口しており、堀あるいは区画溝などの機能を有していたと考えられる。１層から19世紀代の陶器が出土しており、少なくともそのころまで開口していたことが分かる。明治初頭の「陸前国名取郡郡山村絵図」（宮城県図書館蔵）では、調査区を含む南北に延びる低地部分は水路になっていたことがわかる。（仙台市教育委員会：1993）

(2)　SD－１堀跡の形態

東側の立ち上り部分にテラス状の段差を有する。10層の堆積がこの段差よりも上位にきており、この段差の上まで水が張っていたと考えられる。よって、通路としての犬走りなどの防御施設ではなく、堀掘削時の作業能率を考えてのものととらえたい。

当調査区	1	2　3	4	5	6	7	8	9	10
第１次調査試掘２地点	3	4	5	6	7	8	9	10・11	12・13

表１　層対応表

本調査区の南側の第１次調査試掘１地点ではＶ字形の幅５ｍ以上の堀跡が、第１次調査試掘２地点では堀障子をもつ幅10ｍの堀跡が検出されている。第１次調査１・２区の内掘に対して２重あるいは時期違いの外堀ととらえられている。今回検出された堀跡は試掘２地点の延長線上のものであり、外堀の内側に当たる部分ととらえられる。試掘２地点では底面レベルが標高約６ｍなので、当調査区の方が高く、北から南の傾斜が想定される。

また、層の対応は凡そ表２のようになる。

第１次調査検出の内堀の掘削が16世紀後半から17世紀初頭ととらえられている（仙台市教育委員会：1993）。今回発見の堀跡が内堀に対する外堀と想定できうるので、掘削の時期も16世紀以降の中でも、内堀と同様16世紀後半から17世紀初頭の時期と考えられる。

(3)　まとめ

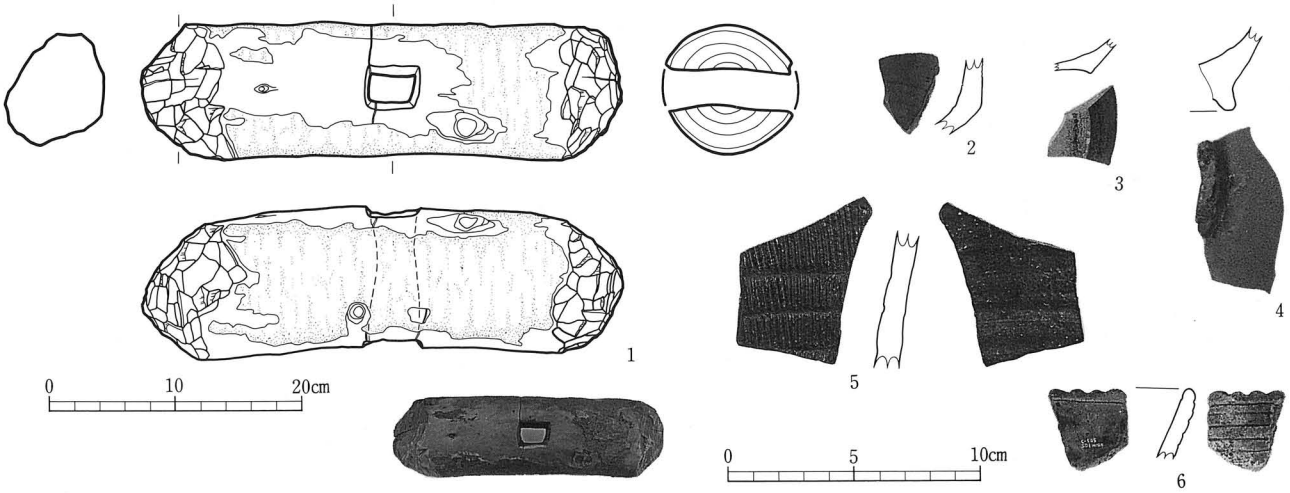
- 今回の調査で第１次調査試掘２地点で検出した水堀跡の延長部分の東側立上がり部分を検出した。16世紀後半から17世紀初頭の掘削で２回以上埋め戻しされているが、19世紀代以降まで、開口していたことがわかる。
- 第１次調査の縄文時代後期の遺物包含層と対応する層を検出した。

参考文献

仙台市教育委員会　1993　「北目城跡現地説明会資料」

小川淳一　1997　「近世　北目城跡」『仙台市史　特別編２考古資料』仙台市史編さん委員会

紫桃正隆　1973　「史料　仙台領内古城・館」



遺物番号	図	種　類	器　種	遺　構　層	産　地	時　期	備　考
1	5－2	瓦質土器	香炉	SD－1　9層	在地？	16c 以降	スタンプの渦巻文 光沢あり 瓦工人によるものか？
2	5－4	青磁	碗	5層	龍泉窯系	13c?	無文？ 釉薄い(2.5GY6/1 オリーブ灰) 畳付きに凹凸あり
3	5－3	陶器	土瓶	1層	大堀相馬	19c	外火を受け煤あり 底部内側に反る 内面透明釉
4	5－5	陶器	摺鉢	1層	岸窯？	19c	鉄釉(7.5R4/2 灰赤) 筋目の先端が揃う 播目12条１単位
5		陶器	小壷	基本層　II層	大堀相馬	19c 以降	黒釉(7.5R2/1 赤黒)
6		須恵器	甕？	SD－1　9層		古代	外面－平行タタキ木目直行 内面－同心円のアテ具痕
7	5－6	弥生土器	鉢	9層		桝形囲式期	波状口縁　外面－平行沈線 内面－ミガキ１条の沈線
8	5－1	木製品	かけや？	9層			両端加工 中央部四角形に穿孔 使用痕は観察されない

第５図　遺物実測図・写真

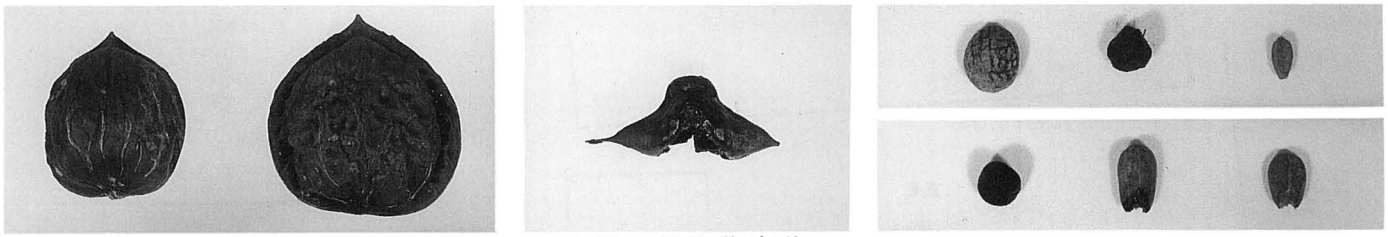


写真１　植物依存体

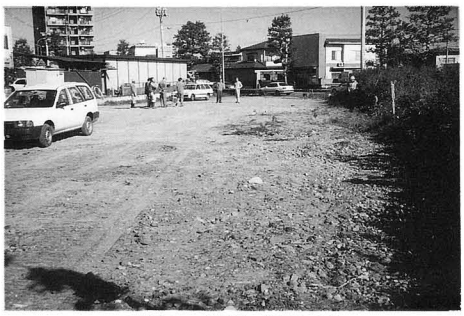


写真２　現況（南から）

写真３　調査区全景（南から）

写真４　基本層序及びSD－１立ち上がり部

写真５　基本層序下部

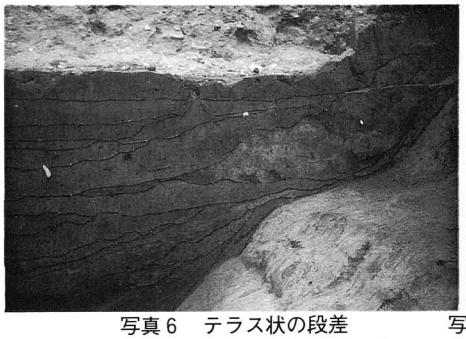


写真６　テラス状の段差

写真７　SD－１堆積状況

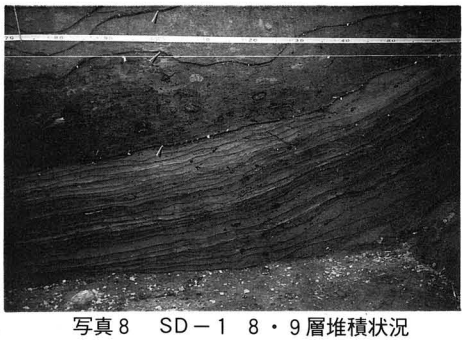
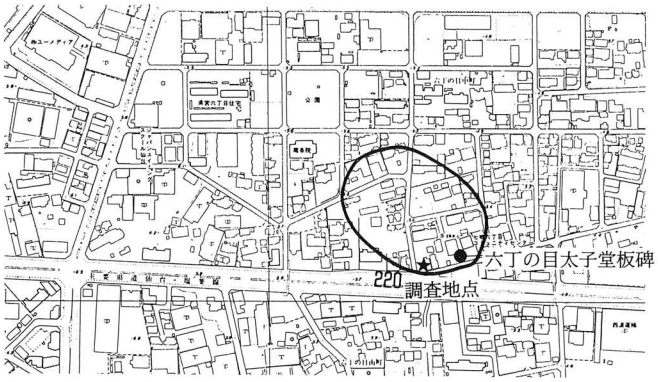


写真８　SD－１　８・９層堆積状況

Ⅶ　北屋敷遺跡（第２次調査）

１　調査要項

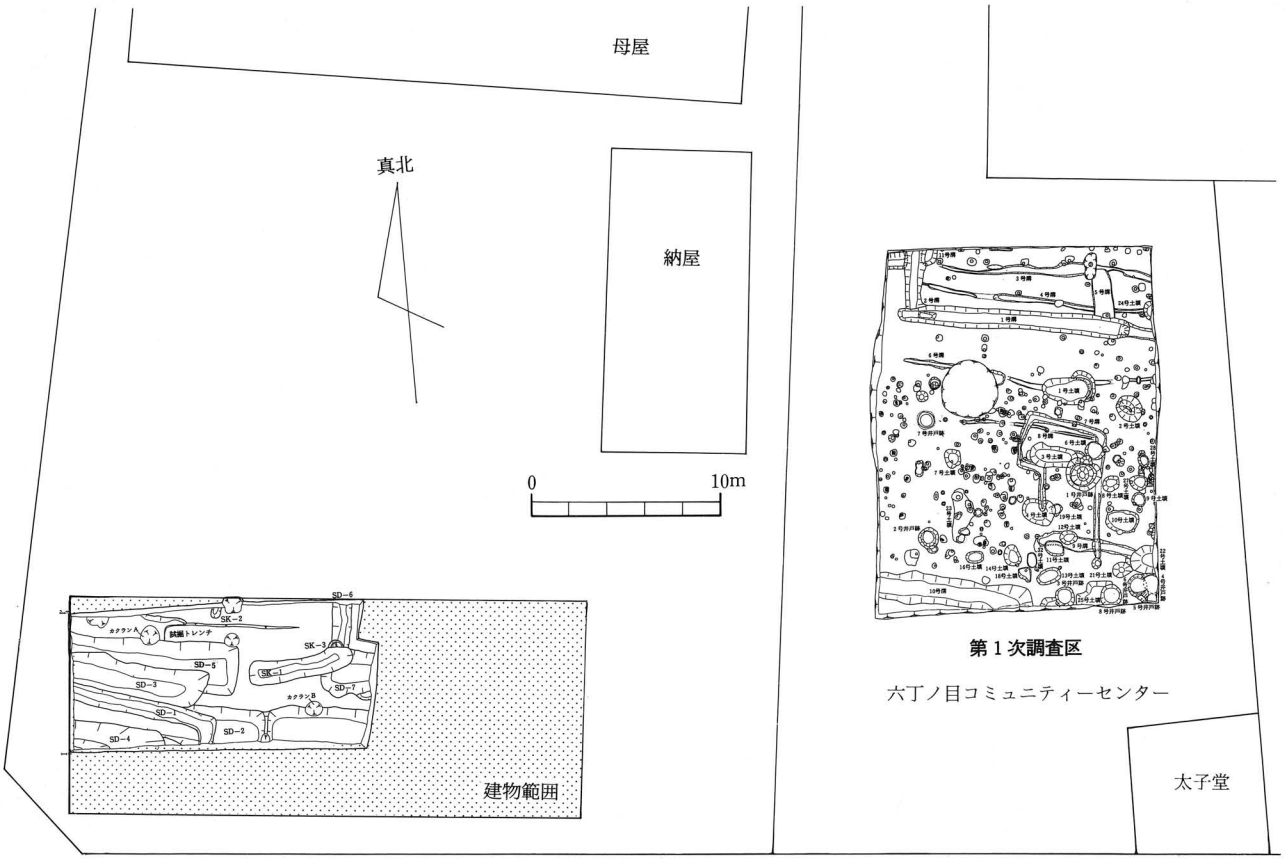
遺　跡　名　　北屋敷遺跡（宮城県遺跡番号　01220）
調 査 地 点　　仙台市若林区六丁の目中町14－１
調 査 原 因　　共同住宅建設
調査対象面積　　270㎡
調 査 面 積　　116㎡
調 査 期 間　　平成10年９月28日～10月９日
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育委員会文化財課
担 当 職 員　　工藤哲司　竹田幸司　結城慎一
調査参加者　　秋葉泰徳　阿部美香　板橋祝子　内田節子　大友とし子　奥山妙子　奥山祐子　佐竹志女子
　　佐藤愛子　佐藤すみ子　佐藤弘子　永野くみ子　鈴木美代子　水戸智　武藤季鷹　渡部純子
申　請　者　　（有）山寿



第１図　周辺の地形

２　遺跡の位置と環境

北屋敷遺跡は、仙台市の東部、県道仙台塩釜線沿いにあり、六丁の目交差点より東方約１km地点に位置している。標高は約５ｍで、七北田川と広瀬川の間に広がる沖積平野上の微高地に立地している。区画整理以前の小字名は、「六丁の目字北屋敷」である。それと同様近隣にも、東方0.3kmにある「明屋敷」を始め、「屋敷」「鹿子屋敷」「中

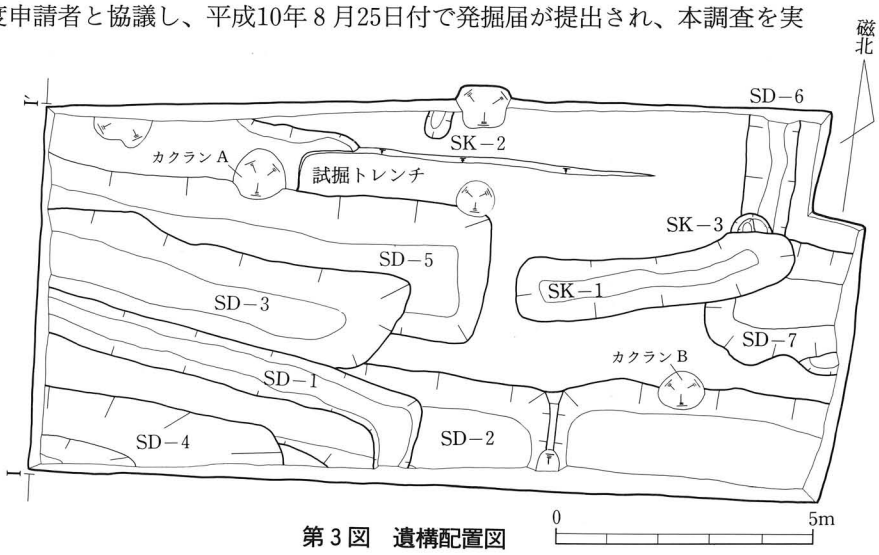


第２図　調査区配置図

屋敷」「札屋敷」など、屋敷の所在を示す小字名が多数見られる。また、区画整理以前は「居久根」と呼ばれる屋敷林もよく残り、古き農村集落の景観をとどめていた。昭和53年の第１次調査では、近世を主体とする掘立柱建物跡・溝跡・土坑・井戸跡などの遺構群が検出された。これらの遺構については、道路跡を挟んで二つの屋敷があった可能性も指摘されている（佐藤：1995）。また、出土遺物には平安時代までさかのぼるものも見られる。第１次調査地点の南東側には六丁の目太子堂板碑がある。

3　調査の方法

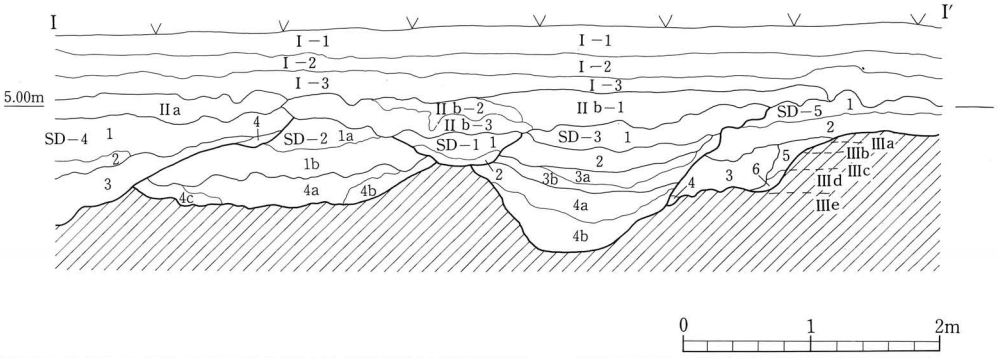
平成10年６月12日付で、有限会社山寿より、上記地内における鉄筋コンクリート３階建共同住宅建設にともなう協議書が提出された。この場所は北屋敷遺跡の南東部にあり、昭和53年度実施の第１次調査調査区の西方30m付近に位置していることから、仙台市教育委員会では、申請者と協議の上、建築部分について確認調査を行なった。その結果、溝跡などが確認されたので、再度申請者と協議し、平成10年８月25日付で発掘届が提出され、本調査を実施することとなった。調査は、建物予定範囲に16m×7.3mの調査区を設定し行った。



第３図　遺構配置図

4　基本層序

Ⅰ層は現代の畑の耕作土で西壁で３層に分かれる。南壁は現代の建物の基礎による撹乱である。遺物は17～19世紀の近世陶磁器・土師器20点（註１）・須恵器３点・燻瓦１点等の他、銅版転写の染付けや現代のガラス瓶が出土している。Ⅱ層は近代の整地層で、西壁で大別３層細別６層に分かれる。遺物は17～18世紀の近世陶磁器・土師質土器小皿・土師器10点・須恵器１点・古代瓦１点・明治23年の菊５銭白銅貨等が出土している。Ⅱ層上面からの撹乱から19世紀以降の近世陶磁器・土師



遺構	No.	土色	土性	備考
基本層	Ⅰ－1	10YR3/2　黒褐色	砂質シルト	下部に山砂分布。現代の耕作土
	Ⅰ－2	10YR2/2　黒褐色	シルト質砂	ビニールを含む。整地層
	Ⅰ－3	10YR2/1　黒色	シルト	褐色粘土を霜降り状に含む。ガラス・ビニール出土。旧耕作土
	Ⅱa	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	黒褐色粘土と暗褐色粘土のブロックを含む。人為堆積
	Ⅱb－1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	ほぼ均一な土質
	Ⅱb－2	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	にぶい黄橙色粘土と黒色粘土のブロックをまばらに含む。人為堆積
	Ⅱb－3	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	黒褐色粘土ブロックをまばらに含む。人為堆積。SD－1廃絶後の整地層
	Ⅲa	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂	遺構検出面
	Ⅲb	10YR5/6　黄褐色	砂	
	Ⅲc	10YR6/2　灰黄褐色	粘土	
	Ⅲd	10YR6/2 灰黄色 10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土 粘土	互層
	Ⅲe	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	灰オリーブ色砂を縞状に含む。植物遺体を筋状に含む。
SD－1	1	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色粘土（Ⅲ層）のブロックをわずかに含む。自然堆積
	2	10YR3/1　黒褐色	粘土	砂を少量含む。水成堆積
SD－4	1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	黒色粘土・黒褐色粘土のブロックとの混合層。人為堆積
	2	10YR2/1　黒色	粘土	Ⅲ層のブロックを多量に含む。人為堆積
	3	10YR2/2　黒褐色	粘土	植物遺体を含む。水成堆積（止水）
	4	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	Ⅲ層を粒状に含む。

遺構	No.	土色	土性	備考
SD－3	1	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	均一な堆積土
	2	10YR3/1　黒褐色	シルト質粘土	均一な堆積土。しまりあり
	3a	10YR3/1　黒褐色	粘土	しまりなし。水成堆積（止水）
	3b	10YR3/1　黒褐色	粘土	褐灰色の砂を縞状に含む。礫を含む。水成堆積（水流）
	4a	5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	植物遺体を含む。水成堆積（止水）
	4b	5Y2/1　黒色	粘土	灰色の粘土を霜降り状に含む。植物遺体を含む。水成堆積（止水）
SD－5	1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	Ⅲ層及び黒褐色粘土のブロックを多量に含む。人為堆積
	2	10YR4/1　褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層のブロックを少量含む。しまりあり。人為堆積
	3	10YR3/1　黒褐色	粘土	壁よりに灰黄褐色砂をまだらに含む。水成堆積
	4	10YR2/1　黒色	粘土	水成堆積
	5	10YR4/2　灰黄褐色	砂	Ⅲa・Ⅲb層主体。崩落土
	6	10YR4/4　褐色	砂	Ⅲa・Ⅲb層主体。Ⅲc・Ⅲd層の小ブロックを少量含む。崩落土
SD－2	1a	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層のブロックを少量含む。人為堆積?
	1b	10YR3/2　黒褐色	砂質粘土	Ⅲ層・黒褐色粘土のブロックを多量に含む。人為堆積
	4a	10YR3/1　黒褐色	粘土	水成堆積（止水）
	4b	10YR4/1　褐灰色	粘土	砂を縞状に含む。崩落土
	4c	10YR4/1　褐灰色	砂質粘土	Ⅲ層・黒褐色砂・黒色粘土をまだらに含む。崩落土

第４図　西壁断面図

器２点・燻瓦１点が出土している。Ⅲ層は遺構検出面で粘土と砂の自然堆積層である。Ⅲ層以下では遺物の出土はなかった。

5　発見遺構と出土遺物

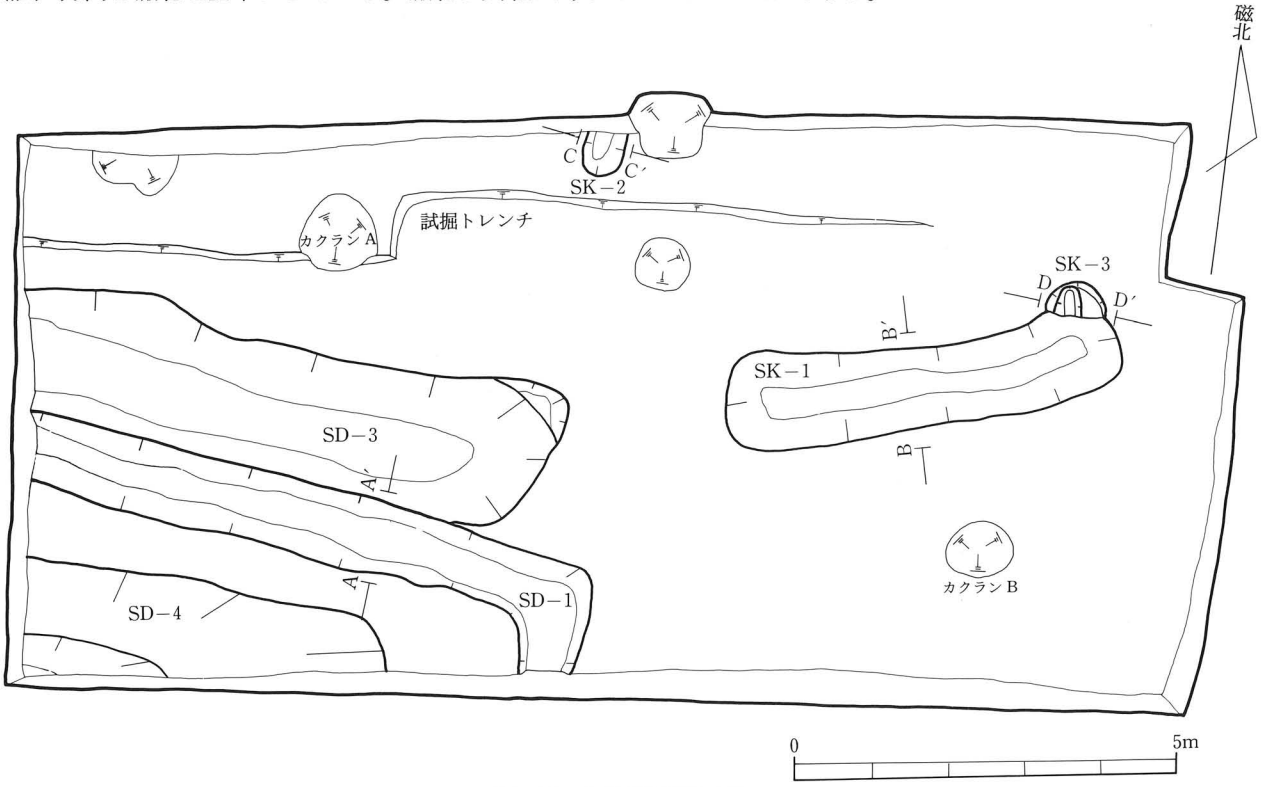
主な発見遺構としては溝跡７条・溝状土坑１基・土坑２基がある。切り合い関係及び遺物から便宜的に新しい方をＡ期（第５図）古い方をＢ期（第７図）とした。

(1)　Ａ期

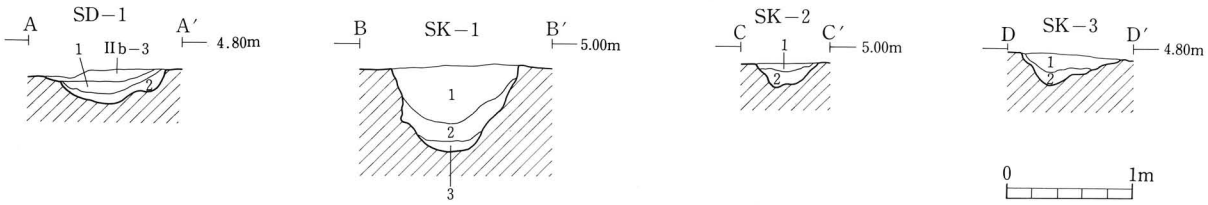
SD－１溝跡

調査区西側で検出した溝跡で、長さ９ｍ分を確認した。調査区を東西方向Ｗ－７°－Ｎ(註)に延び、調査区中央で南にＬ字状に折れ曲がる。SD－２・３を切っている。上幅80cm～100cm・底面幅40cm～50cm・深さ40cm～55cmを計る。底面はほぼ平坦で西に向かって緩やかに傾斜している。断面形は逆台形である。堆積土は、２層に分けられる。１層は黒褐色シルト質粘土の自然堆積層、２層は粘土を主体とした砂を含む水成堆積である。18～19世紀の近世陶磁器・土師器５点・漆器の漆膜が出土している。

（註）方向は磁北を基準にしている。磁北は真北に対してＮ－7.20°－Ｗである。



第５図　Ａ期遺構平面図



遺構	No.	土色	土性	備考
SK－1 溝状土坑	1	10YR4/2　灰黄褐色 10YR7/3　にぶい黄褐色	粘土 粘土質シルト	ブロック状に堆積。人為堆積(埋め戻し土)
	2	7.5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	灰色砂(Ⅲ層)を縞状に含む。粘性極めてあり。水成堆積
	3	7.5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	灰色砂(Ⅲ層)斑状に含む。水成堆積(止水)

遺構	No.	土色	土性	備考
SK－2	1	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層を斑状に少量含む。人為堆積(埋め戻し土)
	2	10YR4/1　褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層を斑状に多量に含む。人為堆積(埋め戻し土)
SK－3	1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層を斑状に含む。人為堆積(埋め戻し土)
	2	10YR3/1　黒褐色	粘土	炭化物を少量含む。人為堆積(埋め戻し土)

第６図　Ａ期遺構群断面図

SD－４溝跡

調査区西側で検出した溝跡で、長さ５ｍ分を確認した。調査区を東西方向Ｗ－７°－Ｎに延び調査区中央でとぎれるかＬ字状に折れ曲がる。SD－２を切っている。SD－１との切り合いは直接はないが、SD－１の上部にあるⅡｂ層に切られていることから、SD－１より古いと思われる。SD－３との関係は不明である。方向性からSD－３との関連性も考えられる。南側が調査区外のため全体の規模は不明であるが、上幅180cm以上・底面幅不明・深さ80cm以上を計る。断面形は逆台形と思われる。堆積土は、４層に分けられる。１・２層はブロック状に堆積する埋め戻しの土で、３・４層は植物遺体を含む水成堆積である。18世紀代の近世陶器と中世陶器・土師器１点・石臼？が出土している。

SD－３溝跡

調査区西側で検出した溝跡で、長さ７ｍ分を確認した。調査区を東西方向Ｗ－７°－Ｎに延び、調査区中央でとぎれる。SD－２・５を切り、SD－１に切られる。上幅180cm～200cm・底面幅70cm～90cm・深さ120cm～140cmを計る。底面はほぼ平坦で、西に向かって緩やかに傾斜している。断面形は逆台形である。堆積土は、大別４層細別６層に分けられる。１・２層は均一な土質の自然堆積層で、３層は砂を縞状に含む水の流れによる堆積で、４層は植物遺体を含む水成堆積である。17～19世紀の近世陶磁器・土師器４点・須恵器２点・燻瓦１点・古代瓦４点・砥石・漆器・木製品多数（下駄・桶樽類・横槌等）・板材が出土している。木製品Ｌ－28（第12図６）の下から拳大の礫が２個並ぶように出土している。(写真16・17)

SK－１溝状土坑

調査区東側で検出した調査区を東西方向Ｅ－15°－Ｎに延びる溝状の土坑である。SK－２・SD－６・７を切っている。規模は、長軸方向で5.5m、短軸方向で1.0mで、底面幅40cm～50cm・深さ70cmを計る。断面形はＵ字形である。堆積土は、３層に分けられる。１層はブロック状に堆積した埋め戻しの土で、２層は砂を縞状に含む水成堆積、３層は基本層ブロックを含む崩落土あるいは埋め戻しの土である。１層から中世陶器・土師器３点が出土している。

SK－２土坑

調査区中央の北壁際で部分的に検出した土坑である。調査区外へ延びるため長楕円形を呈するのか、溝状に延びるのか不明である。方向はＮ－７°－Ｅであり、SD－３の方向と直交する。規模は、長軸方向で55cm以上・短軸方向で50cm、底面幅20cm・深さ45cmを計る。断面形は偏平なＵ字形である。堆積土は、２層に分けられる。基本層Ⅲ層をブロック状に含むが自然堆積と考えられる。出土遺物はない。

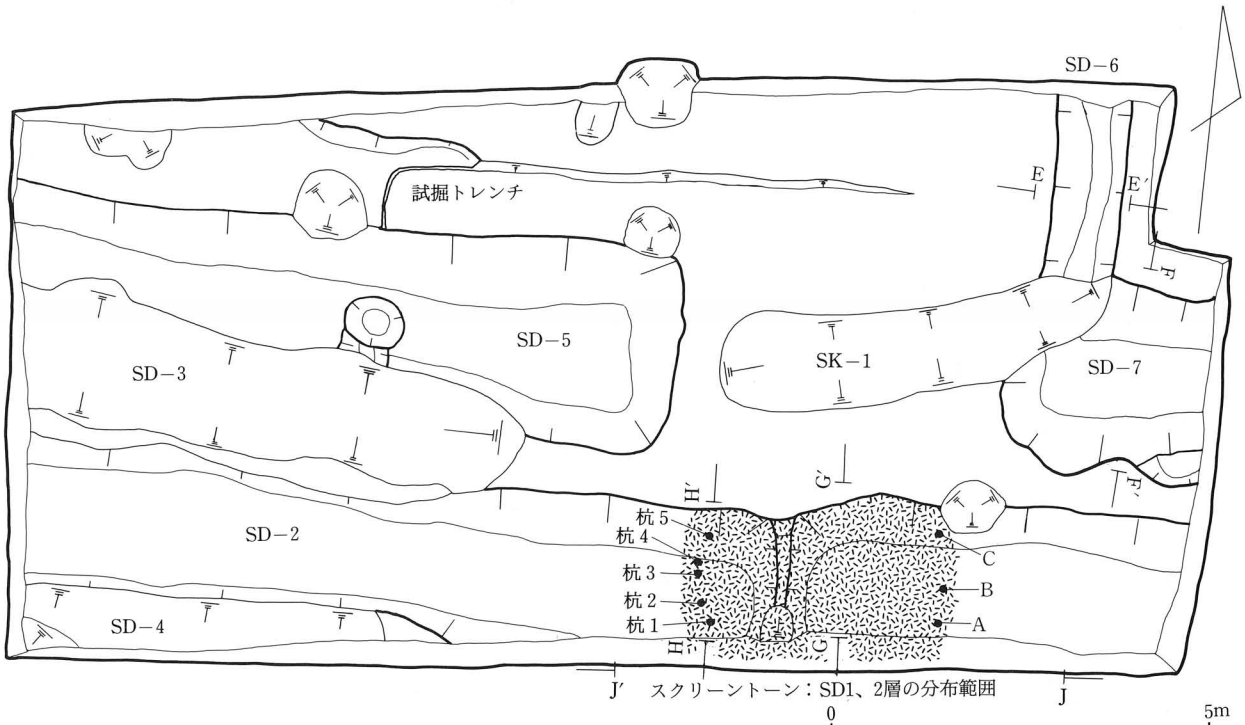
SK－３土坑

調査区東側で検出した土坑である。SK－１に切られSD－６を切っている。SK－１に切られているため形状は不明だが、円形を呈すると考えられる。規模は、長軸方向で80cm・短軸方向で50cm以上、深さ25cmを計る。断面形は偏平なＵ字形である。東側がテラス状になる。堆積土は、２層に分けられる。１層はブロック状に堆積した埋め戻しの土で、２層は炭化物を含む自然堆積の土である。遺物は土師器が１点出土している。

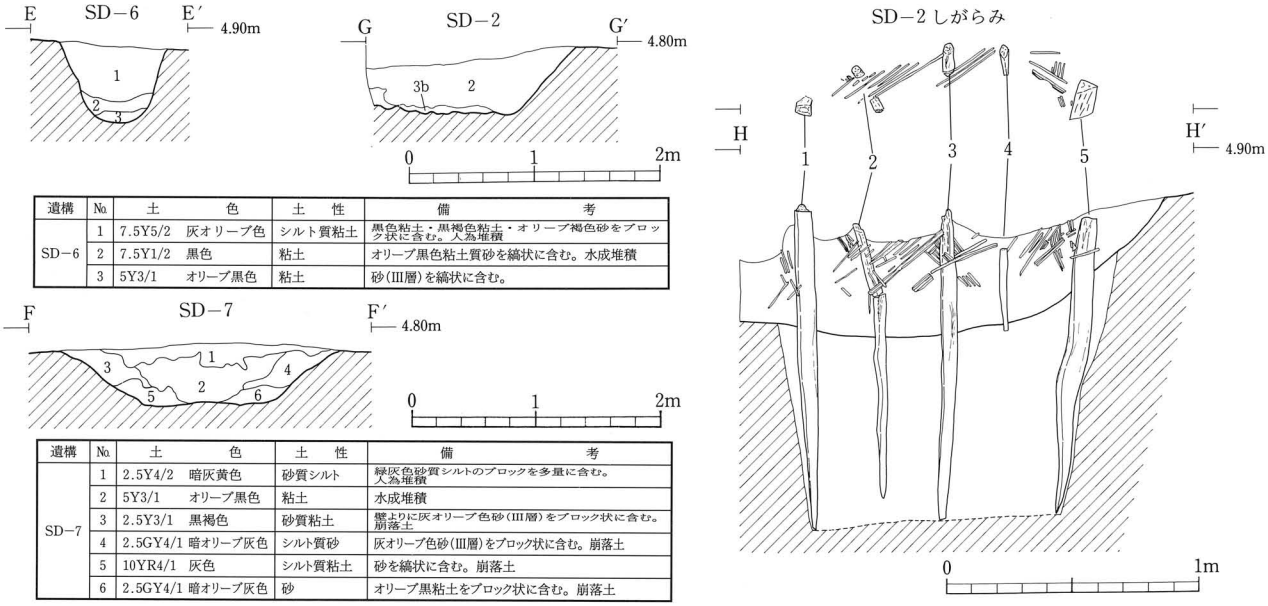
(2)　Ｂ期

SD－５溝跡

調査区西側で検出した溝跡で、長さ９ｍ分を確認した。調査区を東西方向Ｅ－０°－Ｎに延び、調査区中央でとぎれる。SD－３に切られる。上幅260cm・底面幅80cm～130cm・深さ90cmを計る。底面はほぼ平坦で西に向かって緩やかに傾斜している。中央付近にピット状の落ち込みがある。断面形は逆台形である。北側にテラス状の高まりがあり調査区外に立上がりがある。堆積土は、６層に分けられる。１・２層はブロック状に堆積する人為堆積層、３・４層は自然堆積層、５・６層は基本層ブロックを含む崩落土である。２層から中世陶器・土師器17点・古代瓦１点・木製品（下駄等）・板材が出土している。



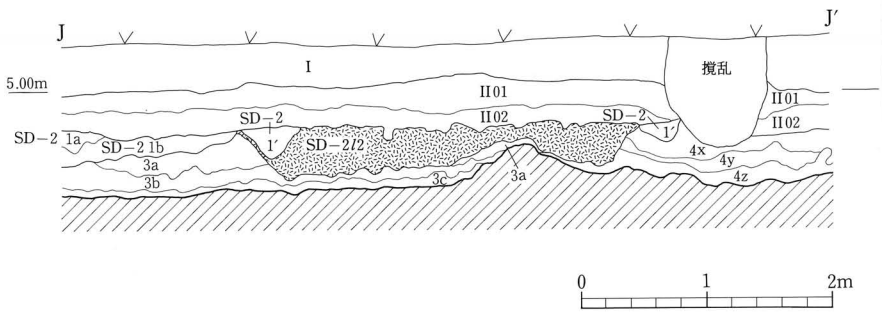
第７図　Ｂ期遺構平面図



遺構	No.	土　色	土　性	備　考
SD－6	1	7.5Y5/2　灰オリーブ色	シルト質粘土	黒色粘土・黒褐色粘土・オリーブ褐色砂をブロック状に含む。人為堆積
	2	7.5Y1/2　黒色	粘土	オリーブ黒色粘土質砂を縞状に含む。水成堆積
	3	5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	砂（Ⅲ層）を縞状に含む。

遺構	No.	土　色	土　性	備　考
SD－7	1	2.5Y4/2　暗灰黄色	砂質シルト	緑灰色砂質シルトのブロックを多量に含む。人為堆積
	2	5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	水成堆積
	3	2.5Y3/1　黒褐色	砂質粘土	壁よりに灰オリーブ色砂（Ⅲ層）をブロック状に含む。崩落土
	4	2.5GY4/1 暗オリーブ灰色	シルト質砂	灰オリーブ色砂（Ⅲ層）をブロック状に含む。崩落土
	5	10YR4/1　灰色	シルト質粘土	砂を縞状に含む。崩落土
	6	2.5GY4/1 暗オリーブ灰色	砂	オリーブ黒粘土をブロック状に含む。崩落土

第８図　Ｂ期遺構群断面図及びSD－２しがらみ平面図



第９図　南壁断面図

遺構	No.	土　色	土　性	備　考
SD－2	1′	10YR3/2　黒褐色	砂質粘土	Ⅲ層・黒褐色粘土のブロックを多量に含む。人為堆積Ⅱ層段階の耕作に関するもの
	1a	西壁と同じ		
	1b	西壁と同じ		
	2	10YR3/1　黒褐色	粘土	Ⅲ層のブロックを多量に含む。人為堆積
	3a	5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	灰色砂を縞状に含む。水成堆積（流水）
	3b	5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	植物遺体を含む。灰色砂を縞状に含む。粘性あり。水成堆積（止水）4a と対応
	3c	5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	灰白色粘土のブロックを多量に含む。崩落土。4c と対応
	4x	10YR3/2　黒褐色	粘土	にぶい黄橙色砂を縞状に含む。水成堆積（流水）
	4y	10YR3/1　黒褐色	粘土	水成堆積（止水）4a と対応
	4z	10YR4/1　褐灰色	砂質粘土	Ⅲ層・黒褐色砂・黒色粘土をまだらに含む。崩落土。4c と対応

遺構	No.	土　色	土　性	備　考
基本層	II01	5Y4/1　灰色	シルト	しまり極めてあり。中間に φ2～3 cmの小礫が敷かれている。その下はⅢ層・黒褐色土・暗褐色粘土がブロック状に堆積する。人為堆積（建物の基礎？）
	II02	5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	ほぼ均一な土質。炭化物を少量含む。耕作土南壁のⅠ－３層とⅡａ層の間に堆積

SD－７溝跡

調査区東側で検出した溝跡で、長さ2.5m分を確認した。調査区を東西方向E－0°－Nに延び調査区中央でとぎれる。SK－１に切られる。上幅250cm・底面幅80cm～100cm・深さ50cmを計る。底面はほぼ平坦で東に向かって緩やかに傾斜している。断面形は逆台形である。堆積土は、６層に分けられる。１層はブロック状に堆積する人為堆積層、２層は自然堆積層、３・４・５・６層は基本層ブロックを含む崩落土である。土師器７点・漆器・木製品（曲物等）・板材が出土している。SD－５と堆積土・方向が類似し、位置的にも一連のもので、中央部分が通路になると想定できる。

SD－６溝跡

調査区東側で検出した溝跡で、長さ2.6m分を確認した。調査区を南北方向N－0°－Eに延びる。SK－１・３に切られる。上幅90cm～100cm・底面幅40cm～50cm・深さ60cmを計る。底面はほぼ平坦で南に向かって緩やかに傾斜している。断面形はU字形である。堆積土は、３層に分けられる。１層はブロック状に堆積する人為堆積層で、３・２層は自然堆積層である。出土遺物はない。SD－７との切り合いは不明であるが、層が類似し、底面の標高もほぼ同じであることとSD－７の底面が直角に屈曲することから一連のものと考えられる。

SD－２溝跡

調査区南側で検出した溝跡で、長さ15m分を確認した。調査区を東西方向E－2°－Sに延びている。SD－１・３・４・５に切られる。南側が調査区外のため全体の規模は不明であるが、上幅210cm以上・底面幅100cm～110cm・深さ90cmを計る。底面はほぼ平坦で西に向かって緩やかに傾斜している。断面形は逆台形である。中央部に馬の背状の高まりが溝を横断している。堆積土は、大別４層細別10層に分けられる。１層は基本層をブロック状に含む人為堆積で、２層はブロック状に堆積した埋め戻しの土でしまりがあり、３・４層を切るような形で堆積している。３層は高まり部分の東側で確認された植物遺体を含む水成堆積で、４層は高まり部分の西側で確認された層で基本的に３層と同じである。17～18世紀の近世陶磁器・土師器27点・須恵器４点・古代瓦３点・砥石・石臼・古寛永銭・漆器・木製品（木錘等）・板材が出土している。特に３層は18世紀代の陶磁器が纏まって出土した。尚、中央部の高まり部分の西側で溝を塞止めるように設置された「しがらみ」が検出された。この遺構は杭を打ち付けて、直径１cm前後のササタケ類の茎で絡めている。高まりの反対の東側からも「しがらみ」に関係すると考えられる杭列が検出されている。この部分の北側がSD－５とSD－７の間の通路と想定される部分になる。杭は角材と丸材が交互に並ぶ。

６　調査のまとめ

(1)　遺構の切り合いと年代について

遺構の重複関係は表４のようになる。

SD－１の１層から19世紀（幕末）代の堤産の摺鉢（写真４－５　）、SD－３から19世紀代の瀬戸美濃産の染付蓋（写真４－８）等が出土しており、遺構の年代もその頃ととらえられる。SD－４から18世紀代の肥前系の陶器（写真４－22）、SK－１から中世陶器（写真５－１・２）が出土しているが、切り合い関係から19世紀代と考えられる。SD－

写真１　SD－２とSD－５、SD－７の間の通路

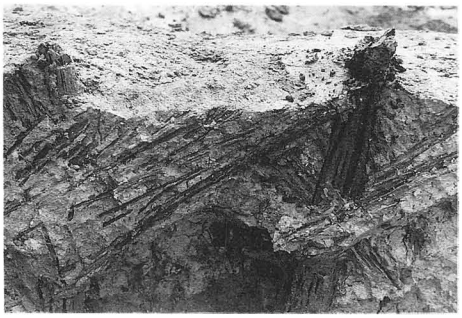


写真２　SD－２「しがらみ」アップ

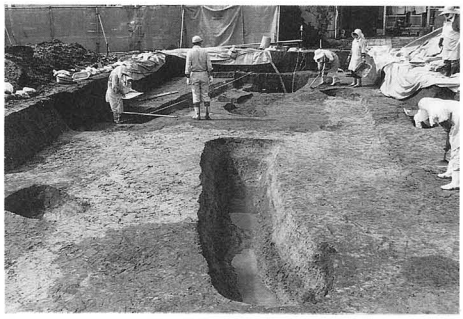
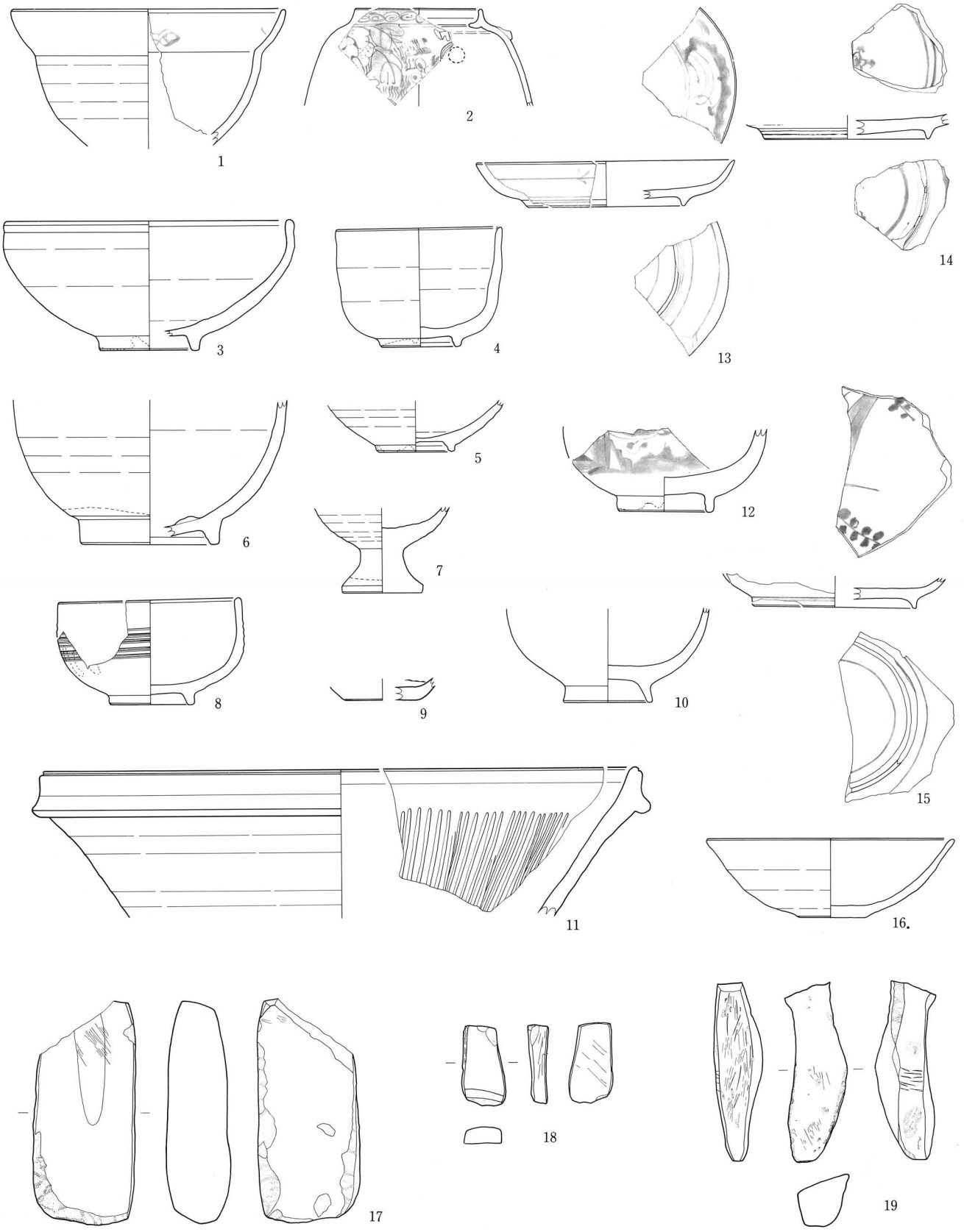


写真３　作業風景



石製品

遺構　層位	種類	特　　徴	遺構番号	図	写真
SD ３4b 層	砥石	方柱状　５面使用　１面線状痕　目がシルト質状　硬質　石英安山岩？　タール付着	33－１	10－17	５－21
SD ３4b 層	砥石	偏平状　４面使用　１面線状痕　目がシルト質状　軟質　石英安山岩質凝灰岩？	33－２	10－18	５－22
SD ２4a 層	砥石	不定形　２面使用　線状痕　目がシルト質状　軟質　石英安山岩質凝灰岩？	33－３	10－19	５－23
SD ４　２層	石臼？	下臼　平滑な面２面　安山岩	34－１		５－20
SD ２4a 層	石臼？	側面平滑　安山岩	34－２		５－19

第10図　出土遺物実測図（近世陶磁器・土師器・砥石）

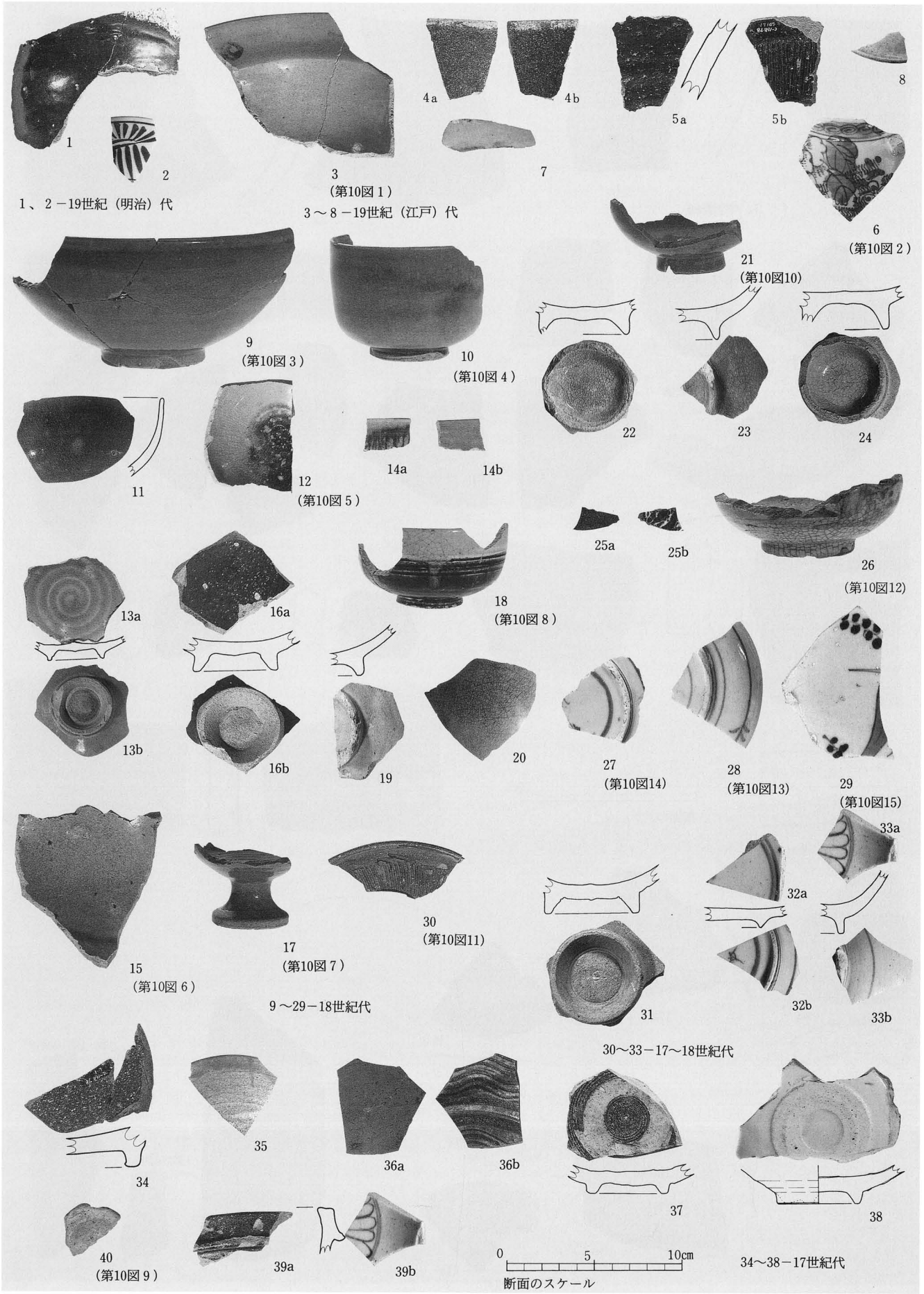

1
2
1、２－19世紀（明治）代
3
（第10図１）
4a
4b
7
5a
5b
8
3～８－19世紀（江戸）代
6
（第10図２）
21
（第10図10）
9
（第10図３）
10
（第10図４）
22
23
24
11
12
（第10図５）
14a
14b
25a
25b
26
（第10図12）
13a
16a
18
（第10図８）
13b
16b
19
20
27
（第10図14）
28
（第10図13）
29
（第10図15）
33a
15
（第10図６）
17
（第10図７）
30
（第10図11）
32a
31
32b
33b
9～29－18世紀代
30～33－17～18世紀代
34
35
36a
36b
37
38
40
（第10図９）
39a
39b
0
5
10cm
断面のスケール
34～38－17世紀代

写真４　近世陶磁器

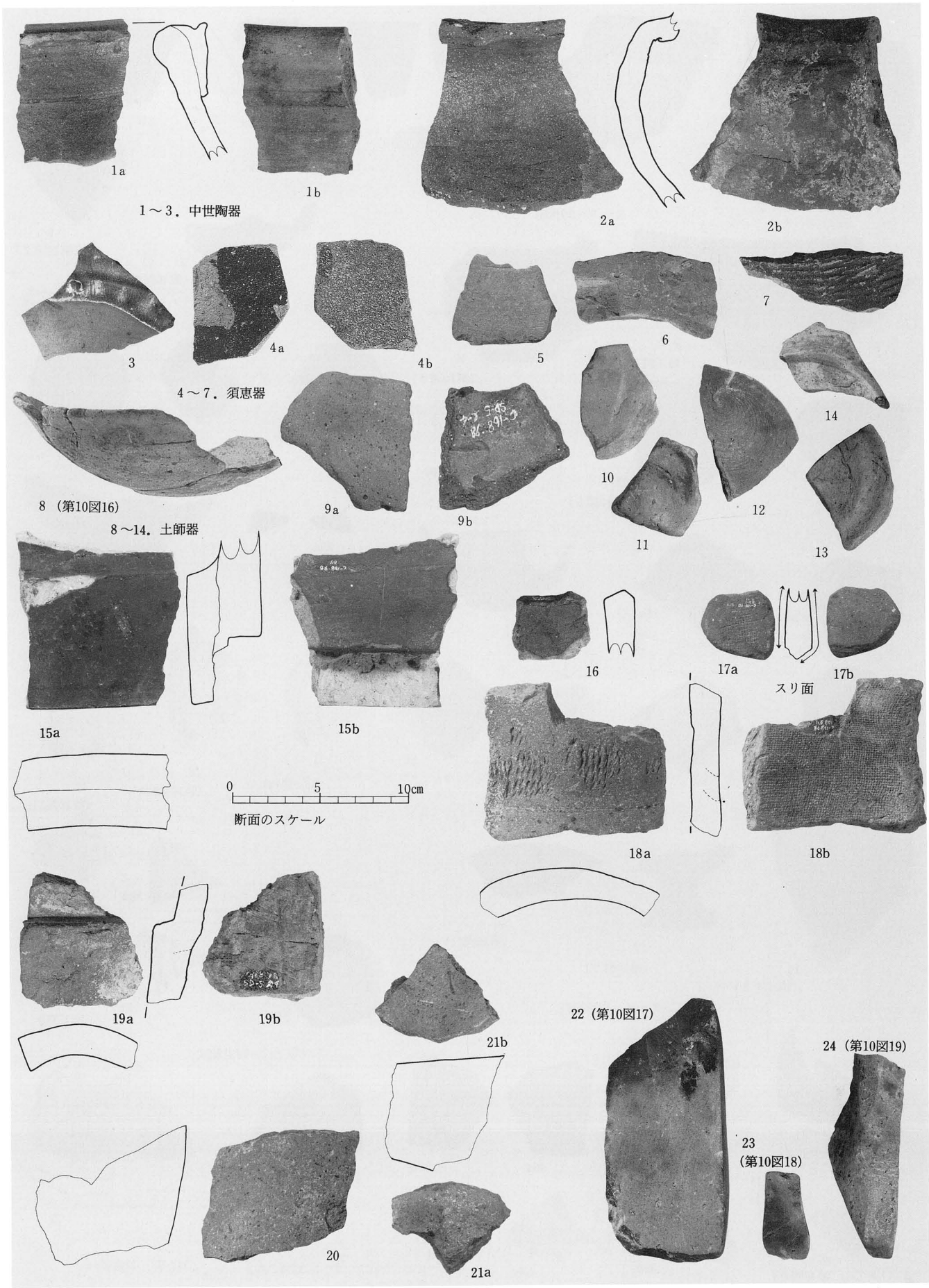


写真５　中世陶器・須恵器・土師器・瓦・石製品

表１　近世陶磁器遺構別観察表

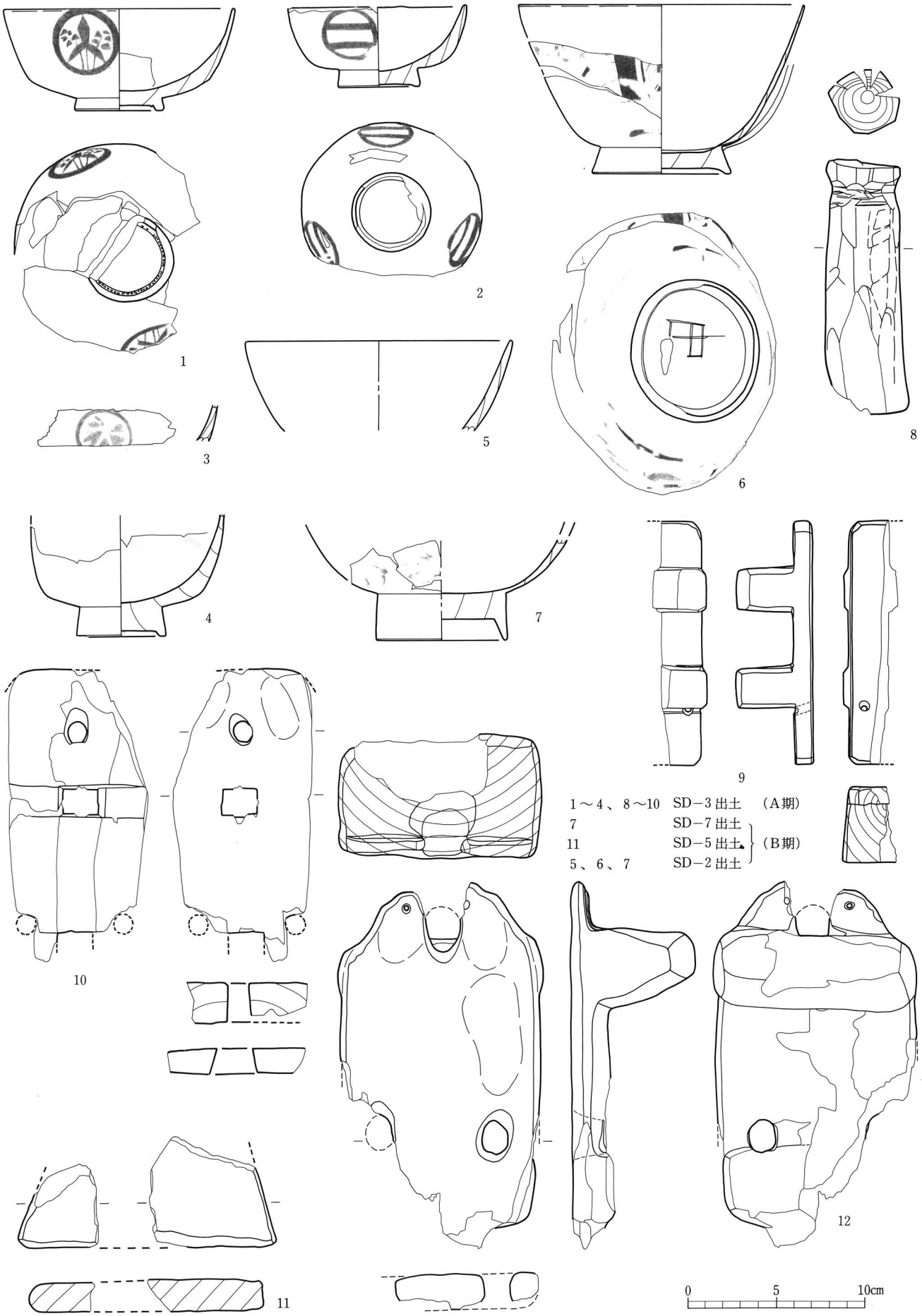
遺構	層	種類	器種	産地	時期	備考	遺物番号	図	写真
基本層	Ⅰ層	磁器染付	飯碗	瀬戸美濃？	19c 末以降	銅版転写	2－5		
		磁器染付	湯飲茶碗	瀬戸美濃	19c 末以降	銅版転写	2－6		
		陶器	鉢(丼)	大堀相馬	19c(幕末)	白濁気味の灰釉(10Y8/1 灰白)段の所に鉄絵(飴釉)	1－1	10－1	4－3
		磁器染付	土瓶(急須)	肥前	19c(幕末？)	注ぎ口の損跡 草花文	2－3	10－2	4－6
		磁器染付	瓶類	瀬戸美濃	19c 以降		3－3		
		磁器白磁	小坏	瀬戸美濃	19c 以降		3－5		
		陶器	碗？	大堀相馬	18c 以降	灰釉(5GY7/1 明オリーブ灰)	2－2		
		磁器染付	丸皿	肥前	17～18c (18c の可能性大)	目跡なし くらわんか手	3－1	10－13	4－28
		陶器	青緑釉皿	唐津	17c 後半	外面灰釉か長石釉(5Y8/1 灰白) 内面青緑釉(10G5/1 緑灰)	1－2		4－35
		陶器	鉢か甕	岸窯系	17c 代	鉄釉(2.5YR4/2 灰赤) 6－8 と接合	2－1		4－34
		磁器染付	瓶類	肥前	江戸時代	内面露胎	2－4		
基本層	Ⅱ層	陶器	大型碗	大堀相馬	18c 以降	灰釉(5G7/1 明緑灰、5GY7/1 明オリーブ灰) 茶器か？	5－1	10－3	4－9
		陶器	碗小振り	大堀相馬	18c	灰釉(5G7/1 明緑灰、5GY7/1 明オリーブ灰) 磁器に近い緻密な胎土 見込みにロクロ目	6－2		4－13
		陶器	碗	大堀相馬	18c 後半以降	白濁釉(10Y7/1 灰白) 畳付露胎	6－3		
		陶器	刷毛目碗	唐津	18c	透明釉 刷毛目文(白い化粧土)の一種 胎土(10R4/2 灰赤)	5－2		4－25
		磁器染付	皿	肥前	17～18c	高台内銘あり	6－5		4－32
		磁器染付	碗	肥前	17～18c	見込み菊花文	6－6		4－33
		陶器	碗	唐津系	17c 後半	鉄釉系飴釉(5YR4/4 にぶい赤褐) 見込み蛇ノ目釉ハギ 畳付すり面	6－1		4－37
		陶器	摺鉢	産地不明	江戸時代	鉄釉(2.5YR3/2 暗赤褐色) 胎土が白ぼく山砂(長石・石英)が入る	6－4		4－39
		磁器染付？碗？		肥前	江戸時代		6－7		
		磁器青磁？皿？		肥前	江戸時代	釉(10GY8/1 明緑灰)	5－3		
		土師質土器小皿			江戸時代	丸皿	6－9	10－9	4－40
カクランA		陶器	甕	堤	19c 以降	なまこ釉 胎土が黒く(7.5Y3/1 オリーブ黒)山砂(長石・石英)を含む	7－1		4－1
カクランB		磁器赤絵	碗	瀬戸美濃	19c 以降		8－1		4－2
		磁器	小型角皿	瀬戸美濃	19c 以降	文様あり 手塩皿	8－2		
SD 1	1層	陶器	摺鉢	堤	19c(江戸時代)	鉄釉(10R2/1 赤黒) 胎土に山砂を含む 櫛目が揃う	9－1		4－5
	2層	磁器染付	皿	肥前	18c	見込みコンニャク印判の五弁花 高台内銘(２文字)	9－2	10－14	4－27
SD 4	2層	陶器	碗	肥前系	18c	灰釉(10Y8/1 灰白)	16－1		4－22
SD 3	1層	陶器	碗	美濃	18c	灰釉(5Y8/3 浅黄)	10－1		4－19
	2層	陶器	仏飯器	小野相馬？	18c 以降	灰釉(藁灰混じりのため白っぽい) (5Y7/1・10YR7/1 灰白)	11－1	10－7	4－17
		陶器	碗か皿	小野相馬？	18c 以降	鉄釉(10R3/3 暗赤褐) 見込に目跡３つ 高台内トキン	11－2		4－16
		陶器	碗？	美濃	18c?	灰釉(5Y8/3 浅黄)	11－3		
	4a層	陶器	碗	肥前系	18c?	灰釉(5Y7/3 浅黄) 胎土は美濃に似るがより緻密	12－2		4－23
		陶器	碗	肥前系	18c	灰釉(7.5Y8/3 浅黄) 胎土は美濃に似るがより緻密	13－1		4－24
		陶胎染付	飯碗	肥前	18c	呉須 胎土緻密	12－1	10－12	4－26
		陶器	大鉢	唐津	17c 後半以降	刷毛目文飴釉(7.5Y4/3 暗オリーブ)流し	12－3		4－36
		磁器染付	皿	肥前	17c 後半	見込み蛇ノ目釉ハギ 畳付砂付着	12－4		4－38
	4b層	陶器	筒型碗	産地不明	19c(幕末)？	鉄釉(2.5YR4/2 灰赤)に藁灰釉(N8/1 灰白)の流し掛け 胎土(5Y8/3 浅黄)に植物繊維・長石を含む	15－2		4－4
		磁器色絵	瓶類	肥前	19c(幕末)？	赤絵 繋ぎ目あり	15－4		4－7
		磁器染付	瓶類	瀬戸美濃	19c	土瓶か急須	21－1		
		磁器染付	急須蓋	瀬戸美濃	19c		21－2		4－8
		陶器	摺鉢	産地不明	18c 以降	鉄釉(7.5YR4/6 褐) 釉薬が薄くむらがある 櫛目を揃えてない 単位７本 胎土に山砂が入る・礫？	15－1	10－11	4－30
		陶器	碗	唐津	17～18c	灰釉(10Y6/2 オリーブ灰) 高台内トキン	14－1		4－31
SD 2	2層	磁器染付	皿	肥前	18c?	草花文 古くなる可能性あり	18－1	10－15	4－29
	3層	陶器	筒茶碗	大堀相馬	18c	灰釉(2.5GY8/1 灰白、5GY7/1 明オリーブ灰)	17－1	10－4	4－10
		陶器	碗	大堀相馬	18c	灰釉(2.5GY8/1 灰白、5GY7/1 明オリーブ灰) 上物	17－6		4－11
		陶器	碗	大堀相馬	18c	灰釉(5GY7/1 明オリーブ灰) 飴釉(7.5Y5/3 灰オリーブ)流し掛け	17－10		4－14
		陶器	碗	小野相馬	18c 以降	淡青色釉(藁灰釉10BG6/1 青灰 10G7/1 明緑灰) 見込みに目跡	17－4	10－6	4－15
		陶器	碗	小野相馬	18c	淡青色釉(藁灰釉10G7/1 明緑灰)	17－8		
		陶器	碗	美濃	18c 中頃	灰釉(5Y8/2 灰白)鉄釉(2.5YR3/2 暗赤褐)掛分けいわゆる腰錆碗	17－2	10－8	4－18
		陶器	碗	美濃	18c	灰釉(5Y8/3 浅黄)	17－5		4－20
		陶器	碗	肥前系	18c	灰釉(5Y7/2 灰白) 胎土緻密 いわゆる呉器手	17－3	10－10	4－21
		陶器	碗	肥前系	18c	灰釉(5Y7/1 灰色) 胎土緻密 いわゆる呉器手		17－7	
		陶器	碗	肥前系	18c	灰釉(10YR8/3 浅黄橙) 胎土緻密	17－11		
		磁器染付	碗？	肥前	18c?	見込み菊花文	17－12		
	4b層	陶器	碗	大堀相馬	18c	灰釉(10Y6/2 オリーブ灰) 見込みに煤付着	19－1	10－5	4－12

表２　中世陶器・須恵器・土師器・瓦観察表

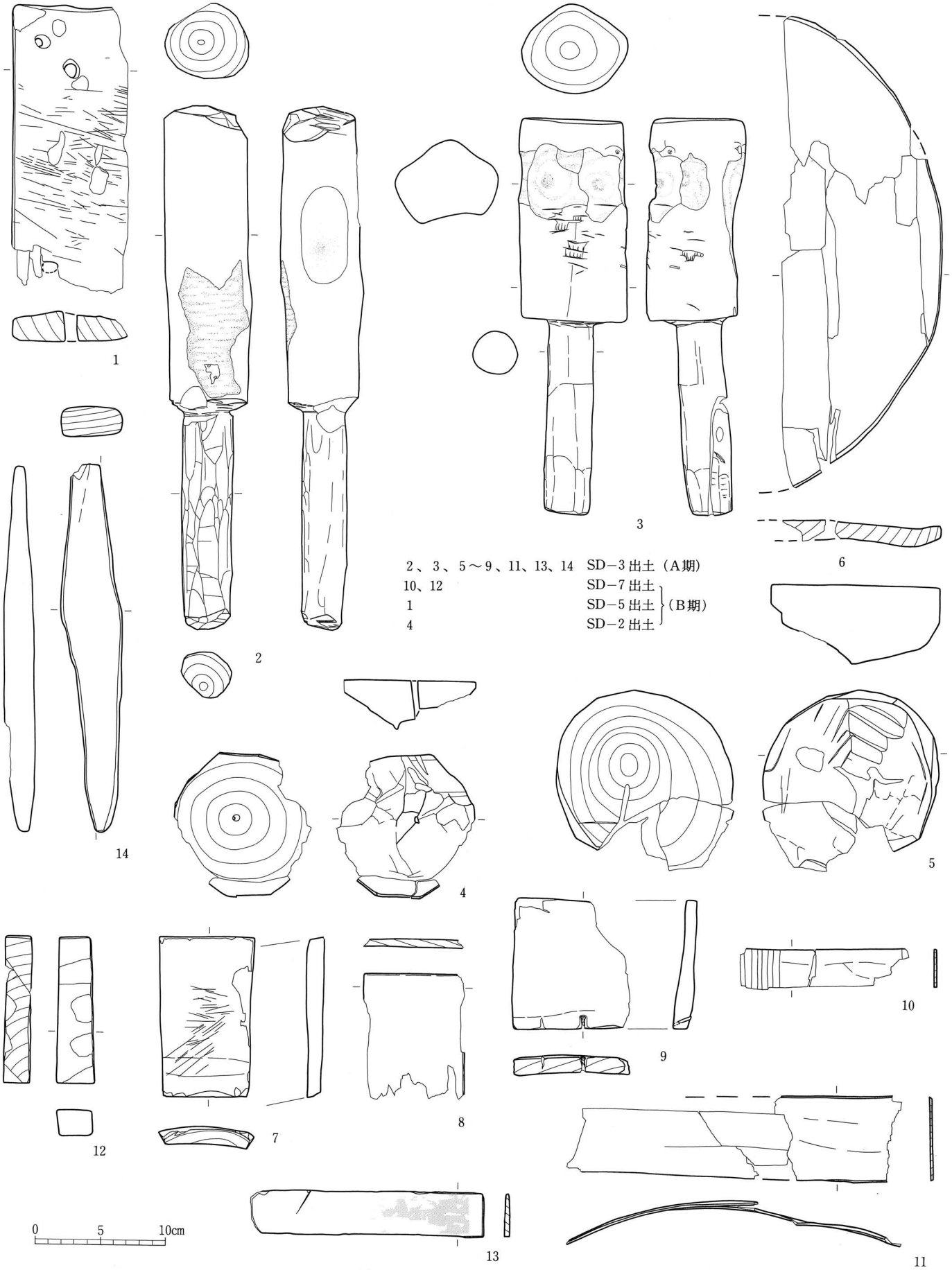
遺構	層	種類	器種	産地	時期	備考	遺物番号	図	写真
SK 1	1層	中世陶器	中型壺	白石窯	13c後半～14c前半	受け口状 長石混入	22－1		5－2
SK 1	1層	中世陶器	甕	常滑	15c 後半	折り返し口縁 赤土以前	22－2		5－1
SD 4	2層	中世陶器	盤	古瀬戸	14～15c	灰釉(5Y5/4 オリーブ・5Y7/4 浅黄)	16－2		5－3
SD 5	2層	中世陶器	瓶類	古瀬戸	中世	灰釉 内面露胎	20－1		
SD 2	3層	中世陶器	瓶類	古瀬戸？	中世	灰釉 内面露胎	17－9		
基本層	Ⅰ層	須恵器	甕？	産地不明	古代	自然釉 丁寧な仕上げ 在地以外	4－1		2－4
SD 5	4層	須恵器	甕？	大戸窯？	古代	ヘラナデ仕上げ	21－3		5－6
SD 4	4層	須恵器	壺？	東海地方？	平安	ロクロナデ 胎土白っぽい	25－3		5－5
SD 3	4層	須恵器	甕？	在地	古代	平行タタキ	24－1		5－7
SD 8	1層	ロクロ土師器	坏		平安	底部回転糸切り無調整	26－1	10－16	5－8
SD 5	4層	非ロクロ土師器	壺		古墳～奈良？	肩部 外ハケメ 内ナデ	53		5－9
SD 2	4b層	ロクロ土師器	坏		平安	底部切り離し不明 手持ちヘラケズリ再調整	40－1		5－10
基本層	Ⅱ層	ロクロ土師器	坏		平安	底部 磨滅のため切り離し技法不明	44		5－11
SD 5	3層	ロクロ土師器	坏		平安	底部回転糸切り 体部下半部再調整	50		5－12
SD 2	1a層	ロクロ土師器	高台付坏		平安	高台を貼り付けている 高台低い	26－2		5－13
SD 2	4層	ロクロ土師器	高台付坏		平安	三角状の高台を貼り付けている	45		5－14

瓦

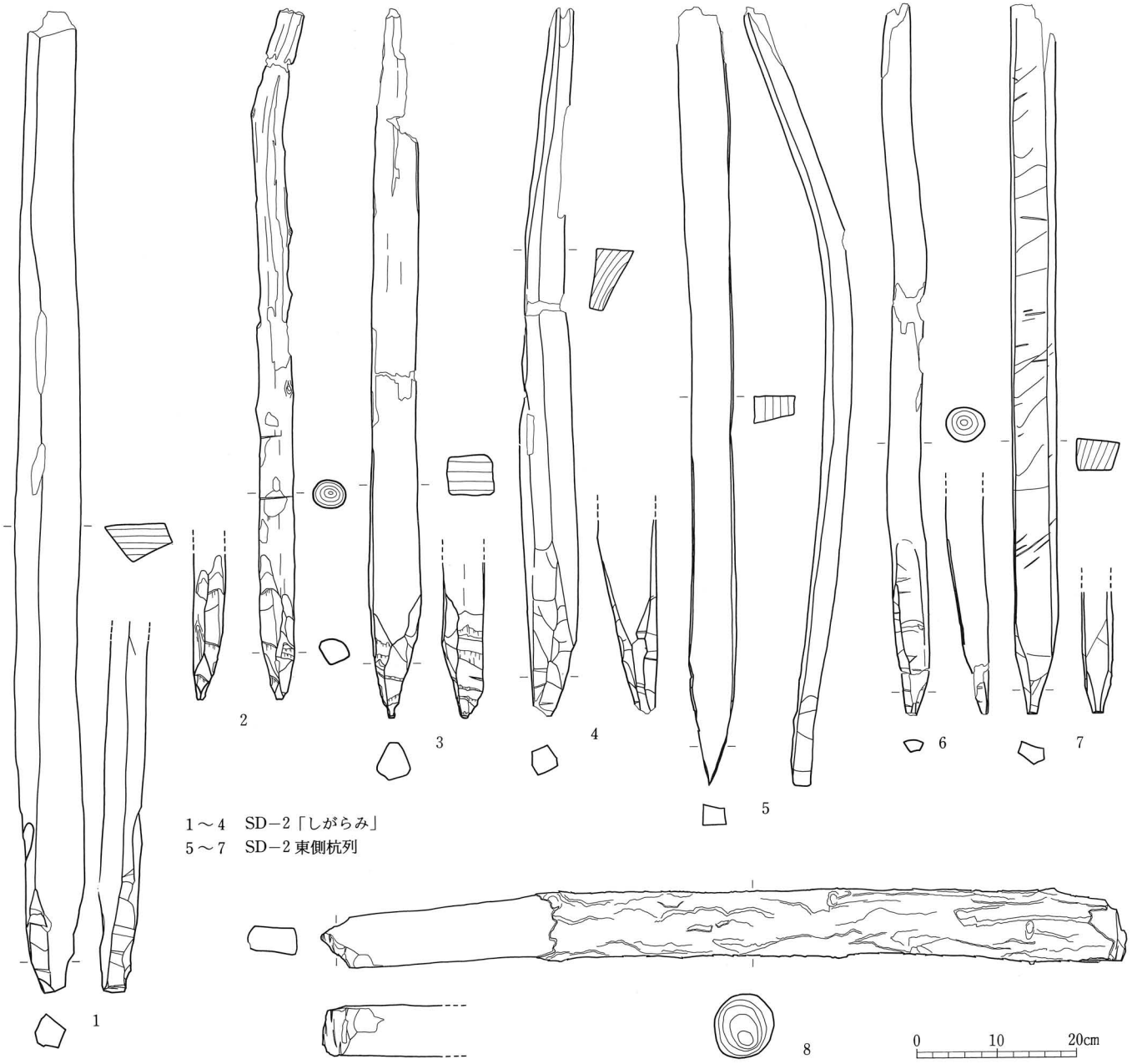
遺構	層	種類	器種	時期	備考	遺物番号	図	写真
カクランA		煉瓦	棟瓦	近世	凹面コビキB、凸面平滑なヘラナデ 繋ぎ目に沈線を施す	27－1		5－15
SD 3	1層	煉瓦	平瓦	近世	突出部あり	30－2		5－16
基本層	Ⅱ層	古代瓦	平瓦	奈良～平安	凹面布目、凸面・側面すり面 砥石に転用？ 胎土2.5YR3/2 暗赤褐	35－2		5－17
SD 3	4層	古代瓦	丸瓦	奈良～平安	凹面布目、凸面縄タタキのちナデ 沈線あり	30－1		5－18
SD 5	4層	古代瓦	丸瓦	奈良～平安	玉縁 凹面粗い布目 凸面縄タタキのちヘラケズリ 側面ヘラケズリ	32－3		5－19



第11図　漆器・木製品実測図（その１）



第12図　木製品実測図（その２）



第13図　杭実測図

表３　漆器・木製品観察表

遺構	層位	種別	特徴	登録番号	図	写真
SD－3	3層	漆器	椀？	外黒色漆に赤色漆で文(輪に植物)内黒色漆に赤色漆横木柾目？紋様の向きから蓋の可能性あり	L－1	11－3	6－3
SD－3	4b層	漆器	椀	外黒地に黒色漆 内黒地・黒色漆に赤色漆 高台高くロクロ挽き込みが浅い 横木柾目	L－2	11－4	6－4
SD－3	4b層	漆器	椀	外黒色漆に赤色漆文(横二引両)内黒地に赤色漆 高台低くロクロ挽き込みが極端に浅い 横木柾目	L－4	11－2	6－2
SD－3	4b層	漆器	椀	外黒色漆に赤色漆文(輪に立ち沢潟)内黒地に赤色漆 高台低い 内に気泡が連なっている稜あり 割れ目に焦げ 横木柾目 L－4と形態が類似し椀内に納まる	L－3/5	11－1	6－1
SD－2	3b層	漆器	椀	外黒地・黒色漆に赤色漆の文様？、内黒地・黒色漆に赤色漆 格子状の線状痕あり 横木柾目	L－6	11－5	
SD－2	3b層	漆器	椀	外黒色漆に赤色漆の文様(植物) 内黒地に赤色漆 高台低く 線刻(田・由？) 横木柾目？ 木地が薄い 菓子椀？	L－7	11－6	
SD－7	2層	漆器	椀	外黒地に黒色漆、赤色漆で文様 内黒地に黒色漆で赤色漆 高台が高い 横木柾目	L－10	11－7	
SD－1	2層	漆膜	黒色漆に赤色漆 墨書(井の繰り返し)				6－5
SD－3	3層	漆膜	外黒色漆に赤色漆 内黒色漆に金泥(桜花)				6－6
SD－3	3層	漆膜	内黒色漆に赤色漆 底部に墨書（○）				6－7
SD－2	3a層	木錘	上面を平滑 端部に抉り こけし形の形態 もじり編み用 芯持ち丸材	L－11	11－8	6－10
SD－3	4層	連歯下駄	後歯の後に横緒孔 子供用？ 芯持ち角材	L－15	11－9	
SD－3	4b層	差歯下駄	露卯 後歯の前に横緒孔 左足用？ 板目	L－13	11－10	6－9
SD－3	4b層	差歯下駄	歯 板目	L－20	11－11	
SD－5	4層	連歯下駄	後歯の前に横緒孔 左足用？前緒孔の両斜め前に木釘の穴あり補修痕跡か 板目	L－14	11－12	6－8

遺構	層位	種別	特徴	登録番号	図	写真
SD－5	4層	穿孔のある木製品	３か所に穿孔があり 刃痕多数 田下駄か 板目	L－16	12－１	
SD－3	4b層	横槌	工具として転用しているのか使用痕が著しい 芯持ち丸材	L－8	12－３	
SD－3	4b層	横槌	使用痕あり 樹皮残り 芯持ち丸材	L－9	12－２	６－11
SD－3	4層	独楽状木製品	上面を平滑に下面を三角錐状に削り出す 側面を削り六角形に成形 芯持ち丸材 独楽？燭台の台座？	L－17	12－５	６－14
SD－2	4b層	独楽状木製品	上面を平滑に下面を三角錐状に削り出す 中央部に斜めに穿孔 芯持ち丸材 独楽？燭台の台座？	L－18	12－４	６－13
SD－3	4層	桶 or 樽類	側板 板目	L－21	12－７	
SD－3	4層	桶 or 樽類	側板 板目	L－22	12－８	
SD－3	3層	桶 or 樽類	側板 底部近くに釘が差し込まれている 板目	L－23	12－９	
SD－3	4b層	桶 or 樽類	天板あるいは底板 板目	L－28	12－６	
SD－3	4b層	曲物	側板 柾目	L-25/26	12－11	
SD－7	2層	曲物	側板 繊維方向に３～５ｍの罫線 柾目	L－27	12－10	
SD－7	2層	角材	四角柱に平滑に成形 横木	L－19	12－12	
SD－3	4b層	板材	両面に黒漆の上に赤漆付着 柾目	L－24	12－13	
SD－3	4層	板材	中央部を厚く太く両端を薄く細く仕上げる 編み具の未製品？ 板目	L－12	12－14	６－12
SD－2	2層	角杭	杭１ ４面加工角材 １面をそのまま使用し４面先端下降 建築材の転用か 芯無分割材	L－29	13－１	
SD－2	2層	丸杭	杭２ 丸太材 先端２面加工	L－30	13－２	６－17
SD－2	2層	角杭	杭３ ４面加工角材 ５面先端加工 建築材の転用か 芯無分割材	L－31	13－３	
SD－2	2層	角杭	杭５ ４面加工角材 １面をそのまま使用し５面先端加工 建築材の転用か 芯無分割材	L－33	13－４	
SD－2	2層	角杭	杭Ａ ４面加工偏平な角材 ２面をそのまま使用し２面先端加工 建築材の転用か 芯無分割材	L－36	13－５	
SD－2	2層	丸杭	杭Ｂ 丸太材 先端２面加工	L－34	13－６	
SD－2	2層	角杭	杭Ｃ ４面加工角材 先端５面加工 建築材の転用か 芯無分割材	L－35	13－７	６－16
SD－3	4層	丸杭	丸太材 先端の樹皮を剝がし ２面加工	L－37	13－８	６－15

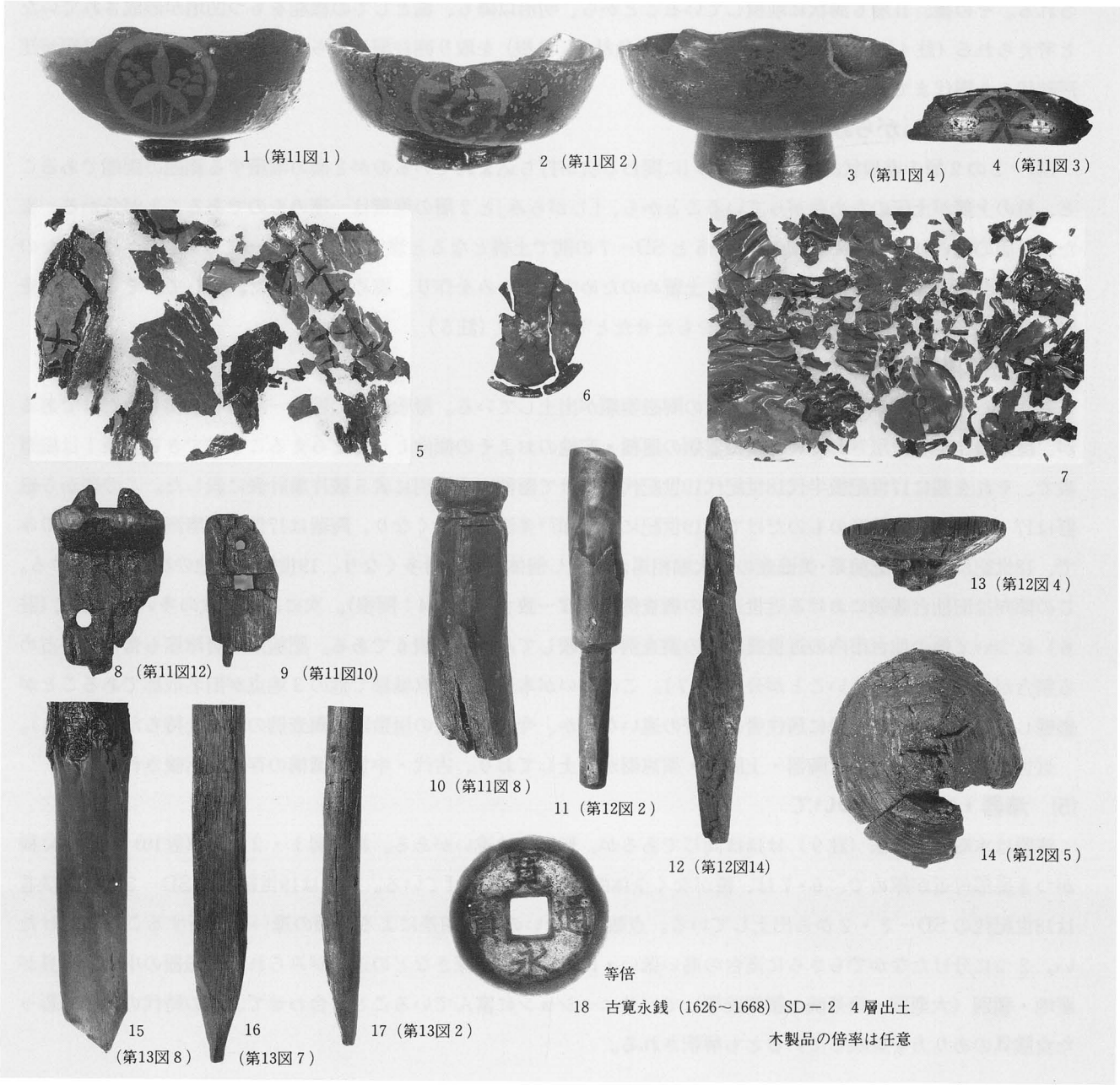


写真６　木製品写真　古銭Ｘ線写真

２からは19世紀代の遺物は出土しておらず、新しいものでも３層から18世紀中頃の美濃産の陶器（第10図－８）であることから遺構の年代もその頃ととらえられる。SD－５・６・７は時期を決定するような遺物の出土はないが切り合いからSD－２とSD－３の間の時期であり、遺構の様子からSD－２との関係が示唆されるので、ここでは18世紀代ととらえておきたい。よって、大まかにA期を18世紀後半代、B期を19世紀代（幕末頃）と考えその中での変遷ととらえたい。

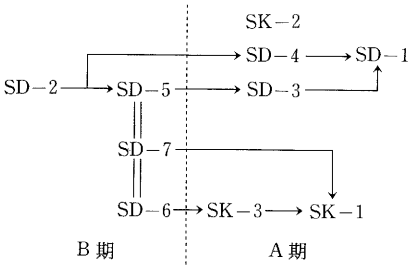


表４　遺構の切り合い関係

⑵　溝跡の性格について

明治初頭に作成された「宮城郡国分六町目村全圖」（写真７）よると当調査区が「ニシヤシキ」の南側の水路付近に、第１次調査区が隣の「新ヤシキ」の中枢部分に位置する。江戸時代のものが踏襲されている（註２）と考えられることから、検出した溝跡群が屋敷の南側を区画する堀跡であることが想定される。遺物の出土状況から18世紀代（註３）にSD－２が掘られ、その後３～４回の掘り直しがあり、最終的に幕末頃のSD－１に至ったものと推定される。その後、Ⅱ層も溝状に堆積していることから、明治以降も、堀としての機能をもつ凹地が形成されていたと考えられる（註４）。現代でも七郷地区では屋敷林（居久根）を取り囲む堀がみられ、それと同じような景観が江戸時代から現代まで連綿と存在したと思われる。

⑶　SD－２「しがらみ」について

SD－２の２層の堆積状況と、「しがらみ」に関わる杭が打ち込まれているのが２層の堆積する範囲の両端であること、杭の上部が土圧のため曲がっていることから、「しがらみ」と２層の堆積は一連のものであることが分かる。また、２層の施された部分の北側のSD－５とSD－７の間で土橋となると想定される。よって３・４層が溜まったのち、馬の背状の高まり付近を掘り直し、土留めのためのしがらみを作り、埋め戻しをした。そして、そこの部分をSD－５・７の時期に通路としての機能をもたせたと考えたい。（註５）

⑷　近世陶磁器について

基本層及び各遺構から17世紀～19世紀の陶磁器類が出土している。屋敷の中の堀の一部分を検出しただけであるが、屋敷のなかで使用されていた陶磁器類の器種・産地のおよその傾向としてとらえることができる。表１は観察表で、それを基に17世紀後半代18世紀代19世紀代に分けて器種別産地別に表５破片集計表に表した。この表から磁器は17・18世紀が肥前産のものだけで、19世紀になり瀬戸美濃産が多くなり、陶器は17世紀が唐津産・岸窯系のみで、18世紀になると肥前系・美濃産の他大堀相馬が出現し個体数が一番多くなり、19世紀に在地の堤産が出現する。この傾向は旧仙台藩領における近世遺跡の調査例とほぼ一致する（1994：関根）。次に、個体数の多い18世紀代（註６）について他の仙台市内の近世農村部の調査例と比較してみたのが表６である。肥前系（唐津産も含む）が占める割合が当調査では大きいことが分る（註７）。この違いが本遺跡が旧宮城郡で他の３地点が旧名取郡であることが影響しているのか、ただ単に居住者の嗜好の違いなのか、今後の近世の屋敷跡の調査例の増加を待ちたい（註８）。

近世陶磁器のほか、中世陶器・土師器・須恵器が出土しており、古代・中世の遺構の存在が示唆される。

⑸　漆器・木製品について

漆器は木取り・技法（註９）はほぼ同じであるが、形態では違いがある。第11図１・２・４（註10）が胴部に稜がつき底部付近が厚めで、６・７は、稜がなく全体的に薄めに仕上げている。前者は19世紀代のSD－３から、後者は18世紀代のSD－７・２から出土している。点数が少ないので時期差による形態の違いと即断することは避けたい。２つに分けたなかでもさらに高台の高い低い・口径に対する深さなどの違いがみられ、陶磁器の中の食膳具が産地・種別（大型碗・筒茶碗・腰錆碗等）でバリエーションに富んでいることと合わせて、この時代の食膳を彩った食膳具のあり方を反映しているとも解釈される。

樽・桶類や曲物が出土しているが、陶磁器のうち全体的にみて貯蔵具の数が少ないのと関連するものと考えられる。その他、横槌・木錘・田下駄などの農具も出土しており屋敷内居住者の農業従事を示唆する。

（註１）土師器・須恵器・瓦など観察表に載せない分が多数あるので、図示資料も含めて破片数を掲載した。

（註２）安永元年（1772）に書かれた「封内風土記」によれば「戸口凡二十九。」で絵図でも28軒描かれており江戸時代の屋敷が明治以降まで踏襲されていることが窺える。

（註３）17世紀代の陶磁器類が出土しているので屋敷の期限もそこまで遡る可能性はある。

（註４）申請者の山口氏の話によると昭和60年代の土地区画整理前まで、屋敷の回りに水路が巡っており、洗い場として使用したりしていたということである。

（註５）３・４層はしまりがなくそのままでは人の通行に難があるための掘り直しと考えられる。

（註６）六丁の目村の石高は、江戸時代の元禄郷帳（1699）によると 266石で天保郷帳（1883）によると約５倍の1514石になる。つまり、18世紀代に新田開発が進んだことが想定され、屋敷内の盛期であったことが遺物の出土量に反映しているのかもしれない。（七郷の今昔を記録する会：1993）

（註７）第１次調査でも大堀相馬産の他、瀬戸美濃産・肥前系の陶器が出土している。

（註８）山田条里遺跡では「絵図」に描かれている「ヤチヤシキ」の堀跡が検出され、この堀跡から幕末～明治初めの頃の一括廃棄資料が出土した。そのなかで18世紀後半～19世紀前半の陶磁器も出土しており、陶器の大半が大堀相馬産で占められている（渡部：1993）。この他、今泉遺跡でも、同様の傾向がある（佐藤：1983）。

（註９）技法は、下地や顔料の種類などの分析は今回できなかったので、肉眼による観察である。どれも黒色下地に黒色漆を塗り、さらに内面は赤色漆で仕上げ、外面は赤色漆で紋や図柄を入れていると推定される。

（註10）１・２はとくに形態が類似しており２は１の椀内に丁度納まる。

参考文献

太田昭夫　1995　「富沢遺跡第88次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（８）』仙台市文化財調査報告書第203集

大橋康二　1997　「伊万里染付の変遷」『別冊太陽骨董をたのしむ18　染付の粋』株式会社平凡社

工藤哲司・佐藤洋　1987　「柳生－土地区画整理事業に伴う柳生地区の遺跡分布調査と、松木遺跡の発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第95集

佐藤洋　1983　「今泉城跡」仙台市文化財調査報告書第58集

佐藤洋　1995　「近世　北屋敷遺跡」『仙台市史　特別編２考古資料』仙台市史編さん委員会

七郷の今昔を記録する会　1993　「ふるさと七郷－もうひとつの仙台－」仙台市七郷市民センター

関根達人　1994　「第３章仙台城二の丸跡第５地点調査成果の検討　２．陶磁器」『東北大学埋蔵文化財調査年報７』　東北大学埋蔵文化財調査委員会

関根達人　1998　「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報10』東北大学埋蔵文化財調査研究センター

竹田幸司・渡部弘美　1995　「四郎丸館跡」仙台市文化財調査報告書第 200集

渡部弘美　1993　「山田条里遺構発掘調査報告書」『仙台平野の遺跡群Ⅻ』仙台市文化財調査報告書第170集

渡部弘美　1979　「北屋敷遺跡」仙台市文化財調査報告書第17集

表５　近世陶磁器集計表（破片数）

時代	産地	器種	碗	皿	瓶類(土瓶・急須)他 本体	瓶類(土瓶・急須)他 蓋	摺鉢	鉢	甕	仏飯具	合計累計
江戸	陶器	産地不明					1				1
	磁器	肥前	1	1	1						3
	小計		1	1	1		1				4
17c	陶器	岸窯系						1			1
		唐津	2	1							3
	磁器	肥前		1							1　4
	小計		2	2				1			5　9
17c～18c	陶器	唐津	1								1　3
	磁器	肥前	1	1							2　6
	小計		2	1							3　12
18c	陶器	大堀相馬	8								8
		小野相馬	3							1	4
		美濃	4								4
		肥前系	6								6
		唐津	1								1　4
		産地不明					1				1　2
	陶質磁器	肥前	1								1
	磁器	肥前	2	3							5　11
	小計		25	3			1			1	30　42
19c	陶器	堤					1		1		1
		大堀相馬						1(丼)			1　9
		産地不明	1								1　3
	磁器	瀬戸美濃	1	1	2	1					5
		肥前			2						2　13
	小計		2	1	4	1	1	1	1		11　53
	合計		32	8	5	1	3	2	1	1	53

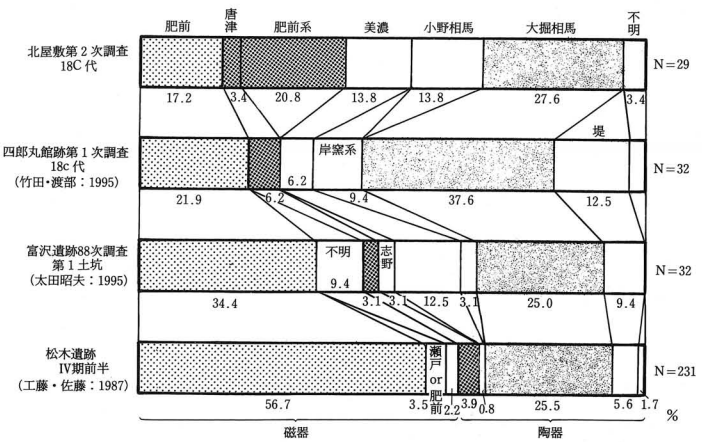


表６　産地別割合

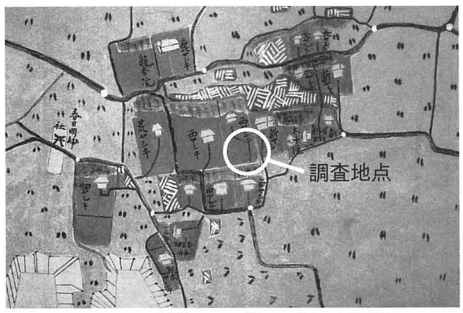


写真７.明治初頭の絵図（宮城県蔵）

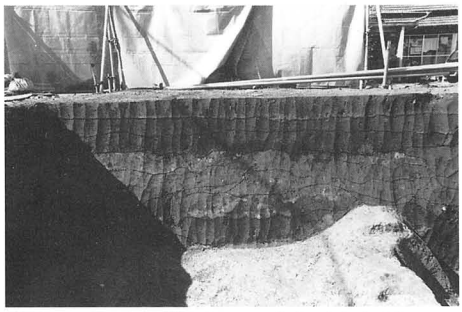


写真８.西壁断面SD-2中心（東より）

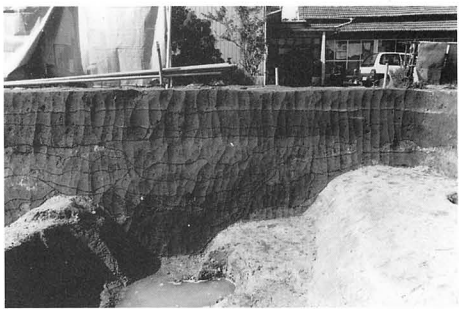


写真９.西壁断面SD-3中心（東より）

写真10.SD-1完掘（西より）

写真11.SD-4完掘（東より）

写真12.SD-3完掘（東より）

写真13.SK-1完掘（東より）

写真14.SK-3完掘（南より）

写真15.SD-2漆器L-7出土状況（東より）

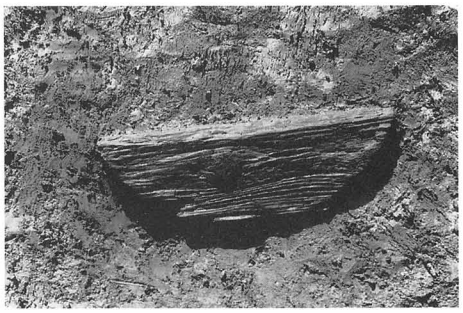


写真16.SD-3 L-28出土状況（北より）

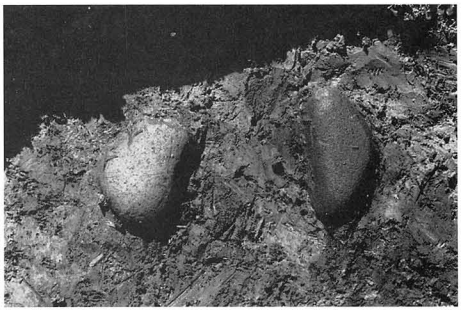


写真17.L-28下の敷石出土状況（北より）

写真18.B期完掘（西より）

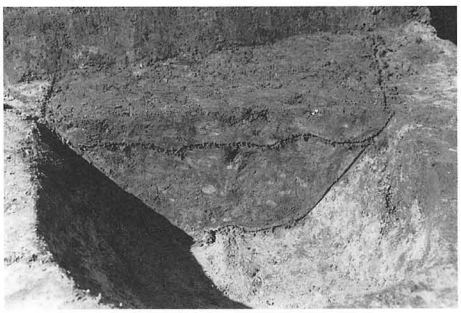


写真19.SK-2断面（南より）

写真20.SD-7断面（西より）

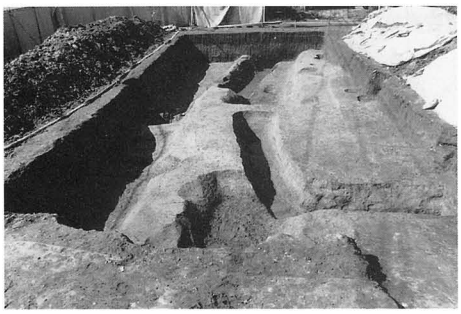


写真21.B期完掘（東より）

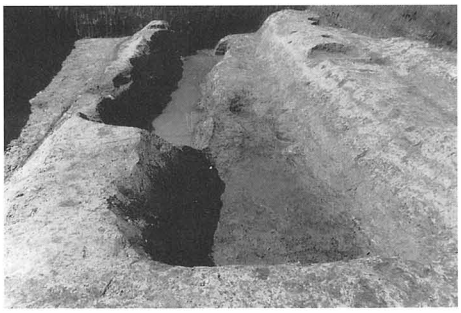


写真22.SD-5完掘（東より）

写真23.SD-6断面（南より）

写真24.南壁断面SD-2しがらみ周辺

写真25.SD-2しがらみ検出状況（東より）

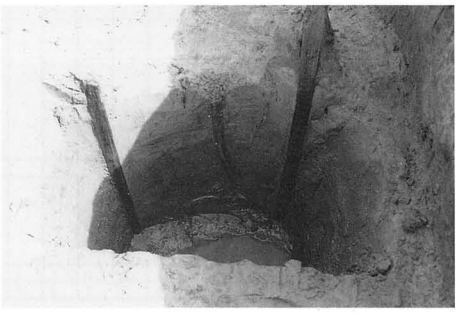


写真26.SD-2杭列検出状況（西より）

写真図版

報告書抄録

ふりがな	むつこくぶんにじあとほかはっくつちょうさほうこくしょ
書名	陸奥国分尼寺跡ほか発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第238集
編著者名	佐藤洋・主浜光朗・竹田幸司・伊東真文
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671　宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7番1号　☎022－214－8893～8894
発行年月日	1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
陸奥国分尼寺跡8次	仙台市宮城野区 宮千代一丁目	04100	01020	38°14′58″	140°54′21″	19980717～ 0810	120m²	マンション建設
王ノ壇遺跡 3次	仙台市太白区 大野田字王ノ壇	04100	01428	38°14′15″	140°52′53″	19980413～ 0609	205m²	マンンション建設
王ノ壇遺跡 4次				38°13′14″	140°52′51″	19981124～ 1216	160m²	地下倉庫付店舗建設
山田条里遺跡 2次	仙台市太白区 山田字田中前他	04100	01367	38°12′57″	140°49′21″	19980414～ 0612	450m²	区画整理
山田条里遺跡 3次				38°13′14″	140°52′51″	19980414～ 0714	1,835m²	市道建設
富沢遺跡 110次	仙台市太白区 長町南一丁目	04100	01369	38°13′14″	140°52′52″	19980518～ 0520	40m²	事務所兼住宅建設
北目城跡 2次	仙台市太白区 郡山四丁目	04100	01029	38°13′16″	140°53′43″	19981109～ 1113	80m²	地中送電線設置
北屋敷遺跡 2次	仙台市宮城野区 六丁の目中町	04100	01220	38°14′54″	140°55′31″	19980928～ 1009	116m²	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
陸奥国分尼寺跡	寺院跡	奈良・平安	竪穴住居跡 土坑	土師器・須恵器・赤焼土器・瓦・鉄製品・石製品	
王ノ壇遺跡	集落跡 屋敷跡	縄文後期 平安・中世・近世	溝跡・土坑・小溝跡（耕作痕）・古墳（周溝）・道路跡	陶器・磁器・瓦質土器・土師器・須恵器・縄文土器・石器	
山田条里遺跡	水田跡	古代・近世	溝跡・水田跡・土坑	陶器・磁器・土師器・須恵器・縄文土器・石器・瓦・鉄製品・銭貨	
富沢遺跡	水田跡	弥生・古墳・古代 中世・近世	水田作土		
北目城跡	城館跡	中世・近世	堀跡	陶器・磁器・須恵器・弥生土器・木製品	
北屋敷遺跡	集落跡	近世	堀跡・溝跡・土坑	陶器・磁器・中世陶器・土師器・須恵器・土師質土器・瓦・木製品・石製品・銭貨	

仙台市文化財調査報告書第238集

陸奥国分尼寺跡 ほか

発掘調査報告書

1999年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目7－1
文化財課 022(214)8893

印刷　株式会社 東北プリント
仙台市青葉区立町24－24
TEL 022(263)1166